

ポケットモンスター～カラフル～

高宮 新太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

人間ではない、けれど確かに意思のある生物。

これは、そんなポケモンがごく当たり前に社会に溶け込んでいるその世界で。

主人公「カラー」とその仲間たちによる冒険活劇であったり、ドタバタ劇でもあり、恋愛劇の側面も持ち合わせ、復讐劇でもある。

そんな物語。

「え？結局どんな物語かわからない？おいおいここに記しているのは僕の人生だぜ？それが一言及び千文字以内で説明できるかよ。気になるなら中を見ればいいんじゃないの？ま、僕は見ないけどね」

・・・そんな物語。

目次

カントー編

- 一話 「VSとVHってなんか似てるよねー」――1
- 2話 「義兄弟の盃ってあこがれる」――13
- 3話 「閉所恐怖症じゃなくて本当に良かった」――22
- 4話 「岩盤落石にご注意！」――33
- 5話 「潮騒のメモリー」――41
- 6話 「伝説って言っても案外大したことないね」――50
- 7話 「伝説って言っても所詮この程度さ」――59
- 八話 「過去のトラウマってやつは消したくないね僕は」――68
- 9話 「辛さを乗り越えてこそ」――78
- 10話 「知り合いの知り合いって微妙な関係だよね」――85
- 11話 「酒に酔ってたわけじゃない」――96
- 12話 「探し物はなんですか？」――105
- 13話 「あれ？僕の出番は？」――117
- 14話 「再登場はできればカツコよく」――126
- 15話 「ああ、どうして僕ってやつは」――135
- 16話 「最終決戦にふさわしく」――147
- 17話 「いや本当につらい戦いだっただ」――163
- 四天王編
- 18話 「凍らされて」――175
- 18・5話 「二年って案外短いもんだね」――188
- 19話 「行方不明、なんて主人公っぽいイベントだろう」――193
- 20話 「暑いのは嫌い。寒いのも嫌い。丁度いい日が好き」――

21話	「奇襲夜襲は僕のものだったのに」	211
22話	「明るい月夜に現れたるは」	218
23話	「すれ違いは恋愛だけにしてくれよ」	227
24話	「ようやく会えた本命」	236
25話	「人を探して三千里」	246
26話	「思い出はふとした瞬間に思い出すのが一番感慨深いの や」	252
27話	「君の姿」	261
28話	「ちよつとした再戦」	270
29話	「覚悟の違いってやつは」	280
30話	「お腹痛いで早退しまーす」	293
31話	「踊る阿呆に歌う阿呆」	302
32話	「サービス残業にご用心」	311
33話	「筋肉痛がすぐやってくるのは若い証拠ってことで」	321

ジョウト編

34話	「新たな旅路はいつまでも」	337
35話	「泥棒にはご用心！」	349
36話	「劇的な再会とかホントいらない」	360
37話	「勘違いと勘違いと勘違い」	369
38話	「仲間になりたそうにこちらを見ていた」	381
39話	「マジで無地で火事で」	389
40話	「観光名所とかある町はいろいろ楽」	402
41話	「綺麗なお姉さんは好きですが、綺麗なお兄さんには興味あ りません」	414

42話	「暴れん坊將軍」	423
43話	「スイクンとすいとんってちよつと似てる」	434
44話	「時間にルーズな奴にドロップキック」	444
45話	「真っ直ぐに」	455
46話	「いつだって不意打ちがいい」	464
47話	「探偵業は密かにやろう」	471
48話	「疑いをかけるとき人は最も無防備になる」	481
49話	「進まない停滞感」	491
50話	「身の内は黒焦げだ」	500

カントー編

一話 「VSとVHってなんか似てるよねー」

「いやー、ひっさびさに来たなー。マサラタウン」

ポケットモンスター。縮めてポケモン。

「相も変わらずなーんにもないや」

人ではない、けれど確かに人と暮らしている不思議な生き物。

「おいこら！カラー！何してる!?!とつとと」例のポケモン”を探せ
！」

い。
この世界ではそんなポケモンが時に、ペットとして人間に寄り添

「へいへーい。わかってますってー」

時に友として人間と生き。

「まったく、人使いが荒いんだから。とんだブラック会社だぜ」

時に競い合い、鍛え、名誉と富を得る。そんな世界で。

「で、例のポケモン名前なんでしたっけ?」

この男、長い黒髪を後ろで縛り飄々とした表情を携え黒い隊服に身を包んだその男。

「お前なあ！任務を適当に受けるな！いつも言ってるだろ！」

その名は、『カラー』。性別は男。年のころは15歳。

「僕もいつも言ってますよね。そんなに怒鳴るとまた白髪が増えちやいますよ?..」

これはそんな彼の物語。

「てめえ！俺が気にしてることを！」

そんな彼の、復讐の物語。

「てへっ」

さて、皆さんこんばんわ。こんにちわかな？おはようございますか
もしれないね。

僕が誰かって？やだなあ、さつき紹介があつたじゃあないか。人の
話はちゃんと聞いておくものだけ？

僕はカラー。年は15で性別は男。ほら、さつき言ったとおりで

しよ。

「おい！そつちはいたか!？」

「いえ！見つかりませんねー」

そんな僕が、一体全体何をしているかって？

「それはね、幻のポケモンつてやつを、あ、カメラこつちか。幻のポケモンつてやつを探しているのさ!!」

「誰に向けてしゃべってんだお前!？」

さつきからガミガミとうるさいこの人は僕の上司、黒い服に黒い帽子。服の真ん中に真っ赤な彩色でRと書かれた服に身を包んだ見るからに怪しいおじさんだ。

まあそんな僕ももれなく同じ服を着ているんだけど。

「いいからーさつきさと幻のポケモン」 ミユウ」を探すんだよ!!」

「はーい!」

「つたく、返事だけはいいんだ。返事だけはな」

わーい、褒められちゃった。僕、褒められると頑張れるタイプなんだよね。

というこでポケモン探し頑張りますか。

ああ、そういえばここがどこだかまだ言っていないかったね。

ここはカントー地方はマサラタウン。

自然がいつぱいあるだけのただの田舎さ。

そんな中でもここはとびつきり自然いつぱいだ。

なにせ、森の中だからね。

なんて言っただけかな、ここ森。もう名前忘れちゃったよ。

ま、忘れたつてことはたいして物語には重要じゃないから。思い出す必要ナツシングだ。

「あいたたた」

なんて言ってる今もさつきから草にかぶれちゃって所々が痛痒いんだけどね。これもそれも任務だからしょうがない。

そう、任務なのさ。

僕の周りにも同じ服を着た人たちが目を皿にして一匹のポケモンを捕まえようと躍起になっている。

そんな明らかに異質な集団だけど、不思議とクレームがこないのはここにほかの人がいないからで、加えてこの人たちの顔が恐ろしく怖いからだろう。

「ま、誰もこんな森の奥に好き好んで入ってこないんだけどー」

そんなことするのは強いポケモンが欲しい自信過剰なポケモントレーナーか、好奇心旺盛な研究者くらいのものだろうか。

さて、そろそろ僕も本格的に探すフリくらいはしなきゃ、またお叱りを食らうのは勘弁だ。

「おーい、ミュウちゃんやーい。お菓子あるよー。出ておいでー。ほらー、こんなに美味しそうなお菓子だよー」

「真面目にやれ」

おつとつと。低く鋭い声がしたと思ったら、こりや運が悪いことに先ほどの上司と遭遇しちゃった。

本当に怒っているようで、眉間にしわが寄せ合っておしくらまんじゅうをしている。暖かいといいけど。

「やー、やってますけどね。そもそもこんな田舎の森に幻のポケモンがいるんですかねー？だって幻ですよ？幻。それってつまり現実にはいないってことじゃないんですかー？僕はそれが疑問で」

「ボス直属の命令だ。お前みたいなたつ端は脳みそよりも手を動かせ」

「でもほら、嫌々やらされてるのと納得してやるのじゃ効率ってもんがね「いいからやれ」」

僕のセリフの途中で被せるほどに、上司はどうやらカンカンらしい。ここは僕もおとなしく引き下がることにしよう。

結構どうでもいいことだったし。

幻のポケモン。それはこの世にいるかどうかわからない。神話上のポケモンだったり、誰も見たことがなかったりするポケモンのことだ。

そんな眉唾物のポケモンが、どうやらこの森で見たという噂が流れたらしく僕らはこうやってボスの命令でそのポケモンを探している。

あーやだやだ。大の大人が噂に左右されるってそれどうよ。いい

大人なら話の分別くらいはつけてほしいよね、まじで。こっちだつて暇じゃないんだ。

という文句は全部心の中だけに留めておいて。僕は草むらを掻き分け、奥へ奥へと進む。

次目をつけられたら、容赦はないだろう。あれはそういう目だった。

「……ん？」

一ミリも期待していない僕に、なぜそれが現れたのか今でもとんとわからない。

別段一ミリも神にお祈りをささげたことなどないのだけど、それは少し神様の力のような気がした。

そして、誰でもない僕の目の前にそいつはやってきた。

神々しいような、でも暖かいようなそんな光をまとった……きつと、ポケモンだ。

いや、これでも一応そこいらの一般人よりはポケモンに詳しいと自負はしてるぜ？

だけど、そんな自負は一瞬で掻き消えるほどに目の前の生き物はなんなのかわからなかった。

まあポケモンだろうと予測はしてみるものの、自信はない。

見たことも聞いたこともない、白く眩いポケモン。

そんなポケモンは十中八九。

幻のポケモンだ。

「はあはあはあ……!!」

僕は森の中をひた走っていた。

顔の怖い、ついでにオーラも怖い妻子持ちの上司に報告することす

ら忘れ。

ただ、目先数メートル先を浮遊している光。幻のポケモンを追っかけていた。

正直、幻のポケモンなんぞに興味はなかったけれどこれはボスが夢中になるのもわかる気がする。

それほど魅力を持ったポケモンだった。

強いのか知らない。どんな姿をしているのかは見えない。そもそも本当にポケモンなのかすら怪しい。僕が見ている幻覚のほうがかまだ現実実がある。

「？」

そして、どれだけ走ったのかわからなくなったところ。その光の塊は止まった。

「あれは、人？」

どうやら僕は森の入り口へと逆走していたらしい。どうりで他の隊員に会わなかったわけだ。他の隊員はみーんな奥へ奥へと進んでいるわけだからね。

そんな僕を尻目に、光の塊はある一点で止まる。

多少開けたその場所には、首からペンダントを下げたどうやらトレーナーらしき人物が斜に構えていた。

そのトレーナーは横にポケモンを従えてその光の塊と戦うつもりみたいだ。

そのポケモンはしっぽの先に炎を揺らめかせ、「わっちちち」辺りなんてお構いなしに焼き払う。

おいおい。自然破壊もいいところだなー。環境保護団体から訴えられる。

真っ黒な隊服がさらに黒焦げる前に、炎の巻き添えを食らわないように遠くに避難したところで僕は考える。

とはいえ、これは運がいい。あのトレーナーと戦っているところをばっちり撮ってあわよくばゲット。が、できなくてもあれが本当に幻のポケモンなのか、そうならどれほどの強さなのか知ることができる。

僕は隊員が支給されている安物のカメラを構えて、茂みの中に隠れた。

「何を言っているのかはちよつと遠くて聞き取れないが、どうやら手こずっているらしいことは見て取れる。」

トレーナーのほうはあくまでクールに表情を崩しはしないけど。

「あーやだねー、何でも分かった風な顔しちゃって。僕の苦手なタイプだ。」

「あ、ポケモンを戻した。」

「どうやら諦めるらしい。」

「なんでえ。もつと弱らしてくんないと僕がゲットするの大変じゃん。」

「なにやってんだ！チャンスじゃねえか！勝てそうなのになんでやめちまうんだよー！」

その大きな声に思わず僕の体はびくりと震える。ああ、びつくりしたー。いつも怒鳴られてるからつい反射でびびっちゃったよ。

「いいや、それよりも。」

「あれは……。」

赤い帽子を後ろ向きに被った少年が、僕とは正反対の茂みから現れた。どうやらこの戦いを見ていたのは僕だけではなかったらしい。

「が、その少年もポケモンを手にしているということはわかった。」

「いけーニョロ!!」

うずまき型の模様がおなかにあるのが特徴的なポケモン。そのポケモンと共にどうやら戦いを挑むらしい。

「うわ!!」

「だが、光の塊。いやこれで確信したあれは確かにポケモンだ。」

そのポケモンに赤いトレーナーのポケモンはあっさりと一撃で倒される。

「ニョロ!!?」

「シヨックだったのか、血相を変えて自分のポケモンを支える赤い少年。」

「あもう、クールな方の少年はもつとこう大きな声ではきはきと喋れって親に教わらなかつたのかな。親の顔が見てみたいぜ。何しやべってるのかまったく全然聞き取れないや。」

もうちよつと近づこうか。そう思った瞬間。

「あ!!」

まさか僕が近づいたからじゃあないだろうが、そのポケモンは高速でどこかに飛んで行ってしまった。

「・・・やべー、逃がしたことばれたら殺されちゃうや」

冷や汗が頬を伝う。そんな僕のことなんてまるで気づかずにクルな方の少年は要は済んだとばかりにどこかへ立ち去って行ってしまった。まさかとはおもうけど、あれを目的にここにきたわけ？

「これは?」「どうしたんだ一面焼け野原だぞ!!」

どうやら騒ぎに気付いて隊員たちが集まってきたようだ。

なんて呑気に言っている場合じゃねえや。やべやべ、見つかったら絶対問いただされる。

そうなれば減給は免れない。ただでさえ最近謹慎を食らったつていうのに。それは勘弁だ。

ということで僕は他の隊員たちに気づかれないようにそつとその場を離れた。

「ま、手ぶらよかいくらかましっしょ」

手中に収めたカメラと先ほどのポケモンが映った写真を大事に抱えて。

「いやー、はっはっはっ！運が良かっただけですよー！ま、日ごろの行いが良いせいですかね！」

何の変哲もないただのビル。その地下深くに僕が所属している組織のアジトがある。

先日撮った写真を上に報告し、今日はその報酬としてたんまりお金をもらったところだ。

逃がしたことについては咎められなかったのでセーフ。

そしてここはそのビルの中の一室。暗い部屋に液晶モニターの明かりが毒々しい。

「それにしてもこれは貴重だよ。ここまではつきり写っている写真はね」

目の前にいるのは研究員のリーダー。カツラさんだ。サングラスにチョビ髭がよく似合っている。その手には先日撮った僕の写真をまるで恋人を見るかのごとく愛おしんでいる。

ちなみに、ハゲているけどカツラさんだ。被ってないけどカツラさんだ。

「はっはっは。私にそんなことを面と向かって言えるのは君くらいだよカラー」

「いやー、それほどでもー」

「褒めてないんだがね」

あれ？でも僕ってばほら、褒められると伸びるタイプですから。むしろ褒められてなくても褒められていると受けとれる人間ですから。

「それで、どうだった。ミュウは」

カツラさんは色々な精密機械があるこの部屋でいつもポケモンを研究している。

その研究を社会に貢献しようとしている大変偉い研究員さんなのだ。

「・・・馬鹿にしているのかね」

おっと。これは触れちゃならないブラックボックスだった。僕ってば未だに間違えるんだから。反省反省。

「そんな怖い顔しないでくださいよ。ちよつと浮かれてるってことで許してください」

「……………」

ヘラリと笑う僕の顔。そんな僕の誠心誠意込めた謝罪が伝わったのだろう。くるりとこちらに向けた体をカツラさんはまた青いライトが光る画面のほうへと向けなおした。

怒ると怖い人だということはちゃんと忘れないでおこうっと。

「怒らせたお詫びに、ちゃんと質問に答えるんですね。なーんかよくわかんないつてのが正直な感想です」

「ほう」

どうやらカツラさんもミュウの話は興味があるようで少し声が上ずっている。

よしよし、どうやら機嫌を直すことには成功したようだ。まったく現実つてのはギャルゲーより難解だぜ。

「幻？つていうんですか？まあ強いんでしょうけど、正直あれより強いポケモンなんて五万といるでしょう。価値としちゃ、高値で売りさばくくらいしかないと思うんですけどねー」

それは本当に正直な感想だった。怖さ、強さで言えばウチのボスとそのポケモンたちのほうがよっぽど怖いし強い。

「ふふ、まあ常人にはそうだろうね」

カツラさんはいかにも意味ありげなセリフで僕をけむに巻く。この人はいつだって肝心要のその真意を、こちらに伝えてはくれないのだ。

「例のトップシークレットの実験と、なんか関係あったりするんですかねー」

「さあね」

カツラさんのその声にはなんの感情も乗っていない。ただ機械的に発した「さあね」だった。

「あ、話変わりますけどタマムシシティのゲームセンター行きました？面白そうだなーって思つて、あそこ一度は行ってみたいんですねー」

「それくらい行けばいいさ。それくらいの金はもらったんだろ」

「ええ、まあ。でもほら、僕根がチキンだからあんまり大きなお金かけるとブルツちやうんですよー」

「失ったら、また取り返せばいい」

「……そうですね、取り返せばいいんですけど……」

「ん？」

「いやほら、取り返そうと躍起になって挙句破産なんて笑えないでしょう。」

「それは、そうだな」

なんてとりとめもない会話も、あつという間に時間が来てしまったようだ。

「おっと、僕これからオフなんですよ。町の女の子と遊びに行く約束してまして」

「そうかい。それは楽しんでくるといい」

「それじゃ、暇な時また来ますよ」

「いつでも来なさい。今度はお茶くらいだそう」

そういつて、僕はその部屋を後にする。

「まったく、食えないおっさんだぜ」

聞こえないように配慮してそう呟いた後に。

「まったく、食えない男だ」

おなじくカツラさんも同じ言葉を発していたことには気づかず。

さて、久々のオフだ。いつもの隊服を脱ぎ捨てて、私服で僕はある街へと向かっていた。

「やあ、レッド。久しぶり」

ある街、そうマサラタウンにね。

「え……ええ!?! 兄ちゃん!?!」

赤い帽子を後ろ向きに被り、生意気そうな面したこの少年。

名をレッドという。年はたぶん11とかだったと思う。

驚愕満面の表情で僕を見るその顔が面白くって笑ってしまう。

思えば明確な始まりというのをつけるのなら、僕の物語はここだろう。

ここから僕の歯車はゆっくりと遠回りしながら、けれど着実に噛み合っていくのだ。

ほら、こうすると一話つぽい締めくくりでしょ?

町の女の子とはちよつと違うけど、まあこれはこれで楽しいオフになりそうだ。

え?なんでこの少年を知っているかって?

それはほら、次の話でつてやつさ。

2話 「義兄弟の盃ってあこがれる」

「兄ちゃん!？」

驚くレッドに僕は満面の笑顔で返す。

久々のオフ、本当は僕だって街に繰り出して女の子と遊んだり、女の子と遊んだり、果てには女の子と遊んだりしちゃったりしたいんだけど。

でも、そんな魅惑の誘惑を振り切ってまでマサラタウンにわざわざ戻ってきたのにはちゃんとした理由がある。

「やあレッド久しぶりだね。何年ぶりかな?」

「ほ、本当にカラー兄ちゃんなのか!？」

「本当にカラー兄ちゃんですよー」

口をパクパクさせて、僕を見るレッドの顔は面白いからほおっおいてもいいんだけど。

「こら小僧!ちゃんと真剣に探さんか!」

「うおっと、探してますって!!」

レッドの傍にはなぜだか自転車に乗ってヒイヒイ肩を上下させたおじいさんが。

「レッド、こちらの人は?ていうか、何やってるの?」

まったく、感動の再会ってやつが台無しだ。僕の予定ではもっとう涙を流しながら抱き合っていたはずなんだけど。

「しねえよ!そんなこと!!」

「あら、声に出てた?」

ま、わざとですけど?」

真っ赤になって否定するレッドは相変わらずからがい甲斐がある。

「いつ帰ってきたんだよ。五年ぶりくらいか?」

「そうだね、ところでお兄さんの質問はガン無視かい?」

こういう小生意気なところも変わってないなー、ノスタルジックになっっちゃうや。

「だから!しゃべつとらんでさっさとお前さんが逃がしたポケモンを探さんか!」

カンカンに怒っているおじいさんの血圧はどうみても上がっている。

「まあまあおじいさん。そんなに怒ると白髪が……は、もう手遅れか」
頭のほうを見やって、僕は思わず目を伏せる。人が気にしていることは言わないと親に教わったはずなのにな。思わず口が開いちやうや。

「やかましいわい！それより誰じゃ！お主は!!」

「僕？僕はここ、マサラタウン出身のしがない旅のものですよ。全国を回って珍しいものを売り歩いていたりしてたらいいですよね」

「いや、結局願望じゃんそれ」

レッドの呆れたような瞳でそういわれ、僕は「そうとも言う」おどけてみせる。

そんなことよりも。

「逃がしたって?」

僕が肝心な話の核心に近寄ると、レッドはぼつが悪そうにほそりと話す。

「う、たまたま運悪くオーキド博士のポケモンを逃がしちゃって。それでその逃がしたポケモンを探しているんだ」

オーキド博士？ポケモンを逃がした？

ふーん。どうやら先ほどの質問はここで一気に提示されたらしい。うしろのおじいさん、オーキド博士は機嫌悪そうに鼻を鳴らした。

「でもこんなところまで？もうすぐトキワシティだぜ?」

そう、ここはマサラタウンの端も端。もう数分でトキワシティという隣町だ。

どこでポケモンを逃がしたのかは知らないが、こんなところまで来ているのなら二人じゃ見つからないだろう。

「あ、そうだ！兄ちゃんも一緒に探してくれよ!!」

なんて思ってたらレッドってば、僕の予定とか一切無視して頼んでくるんだから。

あ、先に行っておくけど別に僕はレッドに会いに来たわけじゃない。冒頭で言った理由ってのは別の理由だ。

が、まあ。急ぐものでもない。逃げるというわけでもないしね。ポケモンは逃げたけど。

強い瞳。僕に断られるなんてみじんも考えてない強い意志がこもった瞳だ。

ホントしようがないなー。

「はあ・・・いいよ。めんどいけど、久々に会ったんだ優しさのバーゲンセールくらいはしてもいい」

「は？何言ってるの？」

わー、ユーモアセンスないなこいつ。

先ほどとは打って変わって冷たい瞳に変わったレッドに僕は重い溜息をつく。

「なんでもいいが早く探さんと日が落ちるぞ」

ズイっと怖い顔をしているのはオーキド博士。この人怒ってばかりだなー。

なんにせよ。僕とレッドとオーキド博士の不思議な三人パーティーは逃がしたポケモンを捜索し隊を結成することになった。

「よーし、これであと一匹じゃー」

「ふいー」

額の汗をかくレッドとオーキド博士。僕？僕はほらどんなに働いても疲れない体質だったらしいのにねー。

あー、はいはい。また願望ですよー。普通に疲れましたよー。

「あとはフシギダネだけですよねー」

フシギダネ？ああ、ポケモンの名前か。

オーキド博士は博士ということはきつと研究者なのだろう。そしてこんなにもポケモンを所持している。

これはもう十中八九、ポケモンを研究しているのだろう。

・・・幻のポケモンについて何か知ってるかな？

「ねえねえ」

「なんじや。というかわし年上じやぞ」

「おっと、すいません。そういう細かいこと気にしてハゲないといいですね？」

「満面の笑みでそういうことをいうんじやない」

「ってそうじやなくて、あれ」

いつもの調子でスルーしそうになったが、思いとどまって指摘する。一度話すと止まらなくなっちゃうんだ僕って。

指摘というのも、フシギダネというポケモンっぽいのがいたから。ま、そのポケモンがどんな姿なのかは僕知らないんだけど。

「あー!!あれだ!」

レッドの大きな声でわかった。どうやら正解していたらしい。わーい。

なんて喜んでいる場合ではないらしい。そのフシギダネは僕らを見るや否や、すたこらと建物内に逃げてしまった。

「あっはっは、博士ー、人望なーい・・・ってあれ?」

僕が大笑いしているうちに、二人ともさっさと建物内に入って行ってしまった。

「人望なーいのはー、僕の方?」

悲しい歌ができました。

「おーい、置いていくなよー。寂しいとうさぎは死んじやうだつてー。一つ豆知識ー」

早速できた悲しい歌の二番を歌いながら建物内に入ると。

「コフー、コフー」

「あ、兄ちゃん！助けてくれ!!」

扉を開くとそこは今の僕より寂しいなんにもない広いだけの殺風景な部屋だった。

ただし、一匹のポケモンが緊張感を作り出している以外は。

ゴーリキー。マッチョな肉体と超人的なパワーが長所のポケモンだ。

どうやらここに迷い込んでしまったらしい。非常に興奮気味で今にも襲い掛かってきそうさ。

「.....」

そつと開いた扉を閉める僕。うん！あれは無理！勝てない戦はしない主義に今日からなろう！

「白状者ー!!」

閉めたはずの扉から確かに聞こえてきた絶叫に手を合わせて僕はマサラタウンへと帰った。

ごめんね。悪いとは思ってる。

さて、そんなレッドたちを見捨てて一体全体僕が何をしに来たかを話さないと嫌われちゃいそうだから話すね。

「うーん、流石に五年たつてるといんな所がボロっちなあ」

ここマサラタウンは僕の故郷だ。詳しいことはめんどくさいから省くけど僕はつい最近までマサラタウンはおろかカントー地方すら離れて生活していた。

だから久しぶりにきた僕の故郷のその家の様子を見に来たというわけだ。

「取り壊されてないだけマシかー」

小さい一軒家。壁の所々はヒビが入っていたり、錆びていたり、周りは雑草だらけ。

もう何年も人の手入れなんて届いていないことがわかる。

真正正銘、僕の家だ。

「お、ラッキー。まだ鍵使えんじゃん。さっきのレッドといい、やつぱ日頃の行いって大事」

レッドには会えばいいかなくらいに考えていたのであちらからばったり出くわしたのはラッキーといえる。

変な雑用は押し付けられちゃったけど。

」。

錆びて変な感触になった鍵穴を無理やり回して僕は自身の家へと五年ぶりに足を踏み入れた。

ギシギシと軋む床、蜘蛛の巣だらけの天井。埃のかぶったキッチン。

家には当然のように誰もおらずそこにはただ経過した年月だけがくつきりと映し出されていた。

「.....」

リビングには未だに懐かしいソファ、テレビ。

「ま、点かないよね」

電源ボタンを押してみるもテレビは反応しない。

そんなリビングを後にして、二階へと上がる。

二つの部屋、の内の一つ。「カラー」とつたない字で扉に直接書かれた僕の部屋を開ける。

五年前から変わらないベットと机。机の上には色んなポケモンが書いてある絵本がたくさん積まれたまま。

そこだけ時計の針が止まったような、まあこの部屋の時計は本当に止まっているんだけど三時四十分で。そうではなく、

そこだけ時間から切り離されたようなあの場所のままで、留まっている。

「さて、いつまでも感傷に浸る僕ではないぜ」

マサラにきたのは家の様子を見るとというのが理由の一つ。

一つというからには二つがあるのは自明の理でしょ。

「んー。あれ？ここにみるとおもったんだけど」

ガサゴソとなんの躊躇もなく僕は部屋を荒らす。僕の家であり僕の部屋であるから誰にも文句は言われない。

「やっぱりないや」

お気づきかとは思いますが理由の二つ目は探し物である。ちなみに三つ目はない。

「……あつちかな」

僕は隣の壁を見やる。この家の二階には部屋は二つある。その中の一つは当然僕のだ。

ではもう一つは？空き部屋ではないよ。答えはWEBで！

あ、ここがWEBでした！てへっ。

「おお、一人でやるこのノリはきついな」

うん。さっさと目的を果たして本当に町で女の子と遊んだりしようっと。

そう考えなおして僕は自分の部屋を出る。

そして同じ足で数歩先の隣の部屋へ。

僕の部屋と同じく扉に直接、こちらはもつと拙い字で「レイン」と書かれていた。

「お邪魔しますよー」

躊躇は同じくない。ギシギシいう扉を無理やりこじ開けて僕は一步を踏み出す。

「ゴホツゴホツ。すごい埃」

こっちはさつきよりもなお汚い。

まるで――。

「まるで、僕の心のようにだ。……とか言ってみたりして」

口元を手で覆いながら僕は同じく探し物を探す。

ピンクのベット、オレンジの机。赤い椅子。黄色い照明。

「五年たってもこの部屋は慣れねえな」

色とりどりなんていえばいい風に聞こえるが、実質はただ目がチカチカするだけでいいことなんて何も無い。

本当になぜこんな部屋にしたのか、問いただしてみたいぜ。寝るときなんて落ち着かないだろうに。

「お、あつたあつた」

ベッドの下。埃に埋もれたソレはそこにあつた。

ゴシゴシと埃をふき取り、ふーつと息を吹きかけようやくそのブツの姿が拝める。

「うん。良かった」写真はまだ死んでない」

そう探し物というのは写真だ。たった一枚の写真、これを見つげるために町の女の子と遊ぶのは我慢したのだ。

大したものじゃない。ただの“家族写真”さ。どこにでもある普通の。

これは皆でピクニックに行った時に偶々カメラを買ったばかりの父親が使いたがってとつた一枚だ。

だから母親はやれやれといった表情だし、“妹”は機嫌が悪い。僕は写真に映るのが嫌でそつぽを向いているし、笑っているのは父親だけ。

いい写真とも言えないし、別段いい思い出でもない。

でも、僕はこれが欲しかった。他のどんなものよりこれが。

「——さて、今度こそ遊びに行くとしますか」

長居するつもりはなかった。これさえ手に入ればあとはどうだっていいんだから。

と、せつかくのオフを満喫する気満々で僕は街に繰り出したのだ

が。

「よお、カラー。ちよつと手伝ってもらうぜ」

大きな体格に鋭い目つき。金髪に迷彩柄の服に身を包んだ大男。

「げ、マチスさん」

僕が所属している組織の上司のさらに上。幹部と呼ばれる役職についているマチスさんが僕の前に立ちふさがっている。

「なーんでこう僕はオフを満喫できないんだらう」

ニヤニヤと意地の悪い顔を浮かべているマチスさんをまえに、僕は盛大にため息を漏らす。

日頃の行いってやつはあんまり信じるものでもないらしい。

では、また続きは次のお話で。

3話 「閉所恐怖症じゃなくて本当に良かった」

「げ、マチスさん」

せつかくのオフ。もう半日も消費してしまっているのだからと遊びたい所なのに。

まったくどうして厄介な人に見つかってしまった。

「おいこらカラー。てめえ俺の連絡無視しやがってどうなるかわかってんだろいな」

連絡？あいにくと僕は連絡手段なんて持っていないけれど。

心当たりなんてまるでない。とぼけた顔と一緒に口が開く。

「やだなー、マチスさんつてばせつかつちですよ。それに連絡なんて僕受け取ってませんですしおすし」

「とぼけるなよ。俺はすっかり部下に伝えていた」

「はい？——がはっ」

有無を言わさぬ強烈な前蹴りが僕のみぞおちにクリーンヒット、肺から空気が一瞬にしてすべて吐き出される感覚。

まったくいつもいつも手が早いんだこの人は、あーやだやだ。こんな大人には死んでもなりたくないね。

どうやら僕は意地悪をされたらしい。大方その部下というやつは意図的に連絡を僕に伝えなかったのだろう。

うずくまっておなかを支えている僕に、上からマチスさんは言う。

「てめえがどれだけやれるのかは知らんがな。上司には逆らっていいことなんざ何もねえつてこと、教えといてやるよ。ガキ」

うむ、前々から思っただけはいたがナチスさんは絶対僕のこと嫌いだ。僕に対しての当たりが強すぎる。

へーんだ、いいもんねー。僕だつてマチスさんは苦手だし、それに僕の直の幹部上司はマチスさんではない。

まったく人気者にはアンチは憑き物とはいえ、腹が立たないほど僕はお人好しじゃあないぞ。

「それはありがたいですね。どんなこと教えてくれるんですか？軍曹。軍隊式飯の準備？それとも軍隊式キャンプファイヤーで好きな女の子と踊る方法ですか？」

「てめえ……その減らず口二度と叩けないようにしてやるよ」

おっと、どうやら火に油をめいっばい注いでしまったらしい。瞳の奥が轟々と燃え盛っている。

マチスさんはどうやらこの街中でおっぱじめる気らしく、その手にはスーパーボールが握られている。

さあ説明しよう！スーパーボールとはなんかスーパーにポケモンが捕まえやすくなるボールのことだ！ちなみに他にもハイパーボールやその他色々な種類のポケモンを伝えるためのボールがあるぞ！

うん、我ながら上出来な説明だろう。ちなみにうちの組織では幹部連中は皆このスーパーボールを持っている。

幹部になれば支給されるのか、それともスーパーボールを持っている実力があるから幹部になれるのかは知らないし興味もない。

「ほら、出せよ！お前も！ポケモンをよお!!」

どうやらよっほど頭に血が上っているらしい、その表情は鳥でも射殺しそうなほどに恐ろしい。

「あーあ、怖い顔しちやつて。そんなだから女の子にモテないんですよ」

ほら、僕を見習え。いつつもニコニコ笑顔を耐えささないから女の子にモテモテだ。きつと。

「うるせえー！いけー！ライチュウー！」

スーパーボールから繰り出したるはライチュウと呼ばれたポケモン。黄色い肌に覆われたネズミのようなポケモンだ。

さて、ここで一つポケモン講座を始めようではないか。大丈夫、受講料は0円さ。

このポケモンという生き物にはいくつか特徴がある。

その中の一つ。タイプについて今回は話そうか。

「電気ショック!!」

「うわつとと」

おーい、こつちはまだ講義の途中だつてのに。攻撃してきやがったよあの脳筋。そんなだから女の子に以下略。

「オラオラオラアー！ さっさとポケモンださねえと、黒焦げになつちまうぜ!!」

まったくこんな町のだ真ん中で、少しは周りの迷惑つてやつを考えたいもんだね。

ま、悪の組織の幹部に言うことじゃあないか。

さて、タイプの話の続きだ。

ポケモンにはそれぞれ特徴がある。その中の一つがタイプと呼ばれる相性だ。

例えば草タイプは水タイプに強く、炎タイプは草タイプに強い。水は炎に、といったようにだ。

はい、講義終わり。だつてこれ以上集中力そいだら確実にあの電撃にあたつてドリフヘアーになつちやう。

「で、一体全体僕なんか何の用です？ 今日僕、見ての通りオフなんですけど」

マチスさんの扱うポケモンは電気タイプばかり。

ガンガンと繰り返される電撃を避けながら僕はさっさと本題を片付ける。

こんな下っ端をわざわざ探しに来るほどの用なんて僕の頭じゃあ思いつかない。

「はっ!! 随分と余裕じゃねえか！ やってやれ！ ライチユウ!!」

「ヂュウ!!」

うわー、全然話聞いてくれない。なにあの人？ ジャンキー？ クスリでもやってんの？

なんて言っている場合ではどうやらなく、ライチユウは次の攻撃に最大の力を出すべく、その両ほつぺに電気をためている。

ライチユウ通称ねずみポケモン。その両ほつぺに電撃をため、その電撃は十万ボルトに達すると言われる。軽くインド象くらいは倒せそう。

そんな相手に生身の人間がかなうはずがない。

「・・・あーあもう、やんなっちゃうぜ」

周りの人間が騒がしく集まってくるものの、マチスさんは止める気はないらしい。

こりや、時間稼ぎしてても無駄かな。だれか警察に連絡しろよ。使えないな。

さて、そろそろ僕も覚悟を決めなければならぬらしい。

相手は幹部、たいして僕はしがない下っ端。結果は火を見るよりも明らかだが、まあ黙ってやられるのも癪だし、せいぜい嫌がらせして負けてやろう。

「なんだ！ようやく戦う気になりやがったのか！」

僕がモンスターボールを構えるのを見るや否や、マチスさんのテンションは急上昇だ。

「まったく気のりはしませんかねー」

「それでいい、前々からためえは気に食わなかったんだ。ここで一発力関係をわからせといてやる」

体育会系つてやつ？うわ、ますます僕の苦手なタイプじゃん。知れば知るほど嫌になってくるんですけれどー。

文系の僕とはまったくソリが合わなそうだ。唯一この人の部隊に派遣されなかったことだけは心の中で喜んでおこう。

さて、と。

「マチス様く〜!!」「やつと見つけた・・・!」「こんな所で何をやってるんですかー?」

「ケン、リヨウ、ハリー!?!」

とつとと、あれ?せつかくやる気になったつていうのに、いいところでお邪魔が入った。

うーん、相変わらずの空気読めなさというか間が悪いというか。

もみあげがチャーミングなちよつと老け顔、リヨウ。

長いスカーフがおしゃれな金髪、ハリー。

見た目やんちゃボーイ、ケン。

三人合わせて中隊長戦隊。下っ端の僕よりは断然偉い。

が、どこかそんな雰囲気はなくて言ってしまうえばポンコツなのさ。

「てめえら！なんでここにいやがる！」

そんな三人はどうやら僕を懲らしめに加勢しに来たわけではないらしくて。

「い、いえ！ボスの命令でマチス様を連れてくるようにと！」

「ああん？ボスの？」

マチスさんのあまりの迫力に多少ビビりながらリヨウ君が報告する。
・・・どうやら、時間稼ぎをした意味くらいはあったらしい。

僕は構えたポケモンを下げる。

「おいこら！戦いは「終わりですよ。ボスに歯向かうつもりじゃないでしょうに」

マチスさんの言葉をさえぎって僕は終了を宣言する。これがほかの誰でもないボスの命令とあればそれ以外選択肢はない。

「——チツ！次に会ったときは容赦しねえからな！」

うん？今もずいぶん容赦はなかったような？気のせい？

そのマチスさんの言葉にうげー、とげんなりしながら僕は肩を下した。絶対鉢合わせしないようにしないと。

「おら！行くぞ！お前ら!!」

「「へい!!」」

三人には悪いけど、たぶんあの怒りは三人で発散させられるんだろうなと考えると、うん。僕じゃなくてヨカツタヨネ。

「悪いな、カラー。うちのマチス様が」

「リヨウ君、別にいいさ。殺されそうな勢いではあったけど」

三人の中のリヨウ君が僕に申し訳なさそうに謝罪した。

別に気にしてはないけれど、謝罪されるのは悪くない。

「あー、でも今日僕せっかくのオフだったんだよねー」

リヨウ君の視線に、良心に訴えかけるように僕は声を漏らす。漏らすといたことが肝心だ。あくまで自然に、がキーワード。

「すまない。・・・ランチ、でどうだ？」

「あの、高級ホテルのビュッフェ。予約はしとくよ。よろしくね」

ぐぐぐ、と唇をかみしめているリヨウ君を見るのは愉快痛快だ。うん、楽しみだなブッフエ。

「おいこらー！ さっさとしろリヨウ!!」「は、はい！ マチス様!!」
ちんたら喋っていたせいだろう。盛大に怒られたリヨウ君は「じや
な」と、慌ててマチス様のもとへ。

うーん、大変そうだな。その点僕は上司には恵まれている。あんな
風にくき使われないし、肉体労働もさせられないし。基本的に任務は
ない。

ま、その代わり下っ端である僕は他の幹部たちの仕事を手伝わな
きやいけないんだけど。

あれ？ これって結局本末転倒？

ま、いつか。

これすべてこの世の理。ま、いつかですべては収まる。みんなも
使ってみるといい。人生がどうでもよくなってくるよ？

「と、すべて割り切れればいいんだけど」

どうやら僕はまだその境地には至っていないらしい。

あれから少ししかたっていないというのにまた新たな仕事。

東の間の休日、ゲームセンターと温泉とマッサージしか出来なかつ
た。本当はビリヤードもやりたかったのに。

「んーっと、ハナダシティはどこかな？」

新たな仕事というのはハナダのある洞窟を調査し、「月の石」という
アイテムをゲットすることだった。

うん。まさに下っ端っぽいね、やりがいあるある。

「お、どこかな」

『ここからハナダ』そう書かれてある看板が丁寧に置かれている。

親切なのはいいことだ。

「だけど、肝心の洞窟への行き先が何にも書かれていないところがマインナス五点だね」

うんうん、と一人勝手に格付けしておいて、わからないのなら現地の人に聞くのが一番手っ取り早いので手当たり次第に声をかけてみる。

「あ。ちよつとー、その勇猛果敢そうな子供たち！」

「物事を聞くには警戒心が低そうなやつに聞く、これ、鉄板ね。」

「ちつくしよー、なんだよあいつら。余所者のくせに」

「なにが」ロケット団だ、ダセーなんだよ！」

おやおや？なにかあつたようだぞ。めんどくさいから頼み事はほかの人にすることにしよう。なに、子供以外にもおばさんや井戸端会議中の奥様方なんかも聞きやすいしね。

僕的には奥様方がお勧めだよ。その後ほかにも進展があつたりしちゃつたらつて想像するだけで楽しいもんね。

「あ？なんだよ兄ちゃん。何見てんだよ」

こちらから、年上に向かってその口の利き方はないだろう？お兄さん泣いちゃうよ？いい年して路上で泣いちゃうよ？

「あ、こいつ！さっきの奴らと同じ服きてんぞ！」

「ほんとだ！ダッセー!!」

おおふ、子供つてのは的確に心を抉ってくるのが本当に上手だな。ここは大人の対応をしなければ。大丈夫、僕はもう立派な大人だ。

「……す、すいませんでした」

「は、反省してます……」

あれ？おかしいな、ちゃんと大人の対応をしたはずなのに、目の前の子供二人は涙目でこちらをガクブルと生まれたての小鹿のように震えながら見ている。

難しいなー、大人つて。どうやら僕はまだ子供だったらしい。

ま、それとこれとは話は別だけど。

「で、お兄ちゃんちよつと聞きたいんだけど。この服を着た人たち、ど

ここにいた？」

「ごほんごほん、んー、風邪かなー？なんか声がドス聞いている気がする。」

「え、えつと・・・」

「あ・・・お・・・」

「どつちっ？」

ああやっぱり風邪みたいだ。さつきより一段と声が低い。

プルプル震える指で、指さしたのはこのハナダのもつと奥。

どうやらそこが仕事の現場らしい。

「うん！ありがと！君たちきつと良い子になれるよ！」

あれ？風邪治ったかも。

ああ、よかった。どうやらあの子供たちはちゃんと素直に場所を教えに来てくれたらしい。

嘘つかれてたらどうしようかと思ったよ。

町の入り口から走って十分ほど、そこに黒い服を着た人たちがわらわらと集まっている。

「うわー、まるでありんこじやん」

ありはありでも働きアリのほうだなこれは。

「よし！全員そろったな！これより「月の石」搜索を開始する。各々気になるものは些細なものでも持ち帰るべし！」

現場の指揮官らしき人が大きな声でその他注意事項をまるで学校の引率の先生みたいに押し並べる。

「それと中は相当暗く出てくるポケモンも強力なものが多い。各員たいまつと戦闘の準備は怠るな」

早くしてくれないかなー。眠いんだけどー。
大きなあくびを噛み殺しながら、僕はぼーっと話を聞き流して
いた。

だから気づかなかったんだろう。別の入口から入っていく、一つの
赤い人影に。

「うわ、ホントに暗いや」

コウモリのような姿のポケモン、ズバットや、一見すると岩と間違
えそうなイシツブテ。ネズミみたいなコラツタ。

どうやらここは入口に近いためかそうレベルの高いポケモンはい
ないみたいだ。

「よし、絶対に奥には入らないようにしなきゃー！」

たいまつを大事に抱えて、僕は入口周辺をちまちま探していた。

「こら新入り!! 貴様なにをサボっとるか! さつさと奥のほうまで探し
にいかんか!!」

「いや、お言葉ですがね。灯台下暗しなんて言葉もあって」

「ええい! 言い訳はいらん! さつさといけ!!」

「ぐぎゃ」

ガンツと、思いつきりケツをけられて、僕は奥のほうへと転がり落
ちて行ってしまう。

「いてて・・・にやろー、ぜってえ顔覚えた」

こうなったら組織内にあることないこと吹いて居場所なくさせて
やる。

僕が卑劣な決意を下していると、あることに気づく。

「て、ああ! たいまつが!!」

やけに暗いと思ったら、どうやら転げ落ちた衝撃でたいまつが消え
てしまったらしい。あたりは真っ暗だ。

「あーもう! やめよつかない、この組織!!」

踏んだり蹴ったりとはまさにこのこと。戻れなくなったらどうし
てくれようか。

「しょうがねえ、照らすか」

まあ、方法が、ないわけではない。

「ズバット」

手持ちのポケモンをようやくお披露目できる時が来た。

僕はモンスターボールを近くに投げ、中にしまっているポケモンを呼び出した。

「さあ、ズバット。あやしいひかり、で照らしておくれ」

ズバットはこの組織の下っ端に支給されるポケモンでノーマルなものだが、まさかこんなところで役に立つとは。

あやしいひかりは本来相手に特殊な光を浴びせて混乱させる業だが、まあないよかマシ。

「お、案外見えんじゃん」

予想よりも効果は的中しており、洞窟を足元一メートルくらいは照らしてくれた。

なにもないよか数万倍マシになった。

「あれ？ズバット？」

と、思ったのだがズバットおよび光が移動しない。光が移動しないと僕も移動できないんだけど。

「キュ、キュウ」

「ん？」

やけに怯えているズバットはどうやら僕の後ろを見ているらしい。

んー、やな予感。

「ギャオオオオ!!」

「ああー、このパターンかー」

けたたましいほど恐ろしい雄たけびを上げているのはどう見ても凶暴なニドリーノ。その爪はギラリとひかり、獯猛な牙は人間の皮膚ごとき簡単に引き裂くだろう。

おいおい、どうした日頃の行い。最近仕事してないぞ。しっかりしろよもう。

「よしー逃げるぞーズバット!!」

判断は迅速に。速攻で身を翻して、僕は来た道に戻る。

「うわうわうわ!!なんで追いかけてくるのさー!あの子ー!」

なんだろう、うっかり巣とかにはいつちやっただろうか。だった

ら謝るから見逃してくれないかなー。ダメかー？ダメかー。

「あり!?まず」

ちやんとまつすぐ走ってきたのに、目の前にあるのは固そうな岩盤のみ。

ああそつか、僕ってば上から落ちたからここは行き止まりなんだね。

上を見上げると確かに先ほど僕が落ちたであろう穴が開いている。うん。あの高さは無理。梯子は、たぶんあるかもしれないけど。

その前に。

「グルルル！」

「待ってはくれないですよねー」

後ろにはすぐさま殺されそうなほど血走った眼をしたニドリーノ。まったく、これならマチスさんのほうがまだ優しげがあるってものだ。

「しゃーない、やるしかないねこれは」

別段、隠していたわけでもないけれど。ようやく僕の手持ちを披露する時が来たらしい。

「いくよ、〃カラカラ〃」

さあ、レディファイトの準備はできたよ。

けれどそれはまた次のお話で。

4話 「岩盤落石にご注意！」

暗い暗い洞窟の中で甯猛な唸り声と、怪しく光る両の目玉が不気味で思わず背を向けそうになる。

けど。

じりじりと後ずさりをしているとほら、ガツリと後ろの岩盤にぶつかってしまった。ので当然のように逃げ場はない。

あーやだよだ。ホント、逃げ場がないって人生の中で一番嫌いな状況だよ僕は。

目の前のポケモン、名前はニドリーノ。

洞窟内にこんな凶暴なポケモンがいるなんて僕聞いてないんですけどネー。また仲間はずれにされちゃったのかしらん？

「ま、いいですけどね。これくらい自分の力で切り抜けますから」顔もわからない意地悪な連中に気を取られている場合ではないのさ。今にも襲い掛かってきそうなニドリーノが目の前にいるんだから。

「さあ、行くよ。カラカラ」

僕は先手を取られる前にポケモンをモンスターボールから取り出す。

ボールから出現したのはカラカラ。

頭に骸骨を被り、手には骨棍棒を持ったなんとも不思議なポケモンだ。

まあポケモンは皆不思議なんだけど。

解明されていないことなどそれこそ万とあるだろう。

でも、それを調べるのは僕の仕事じゃあない。そこはほら、血気盛んな若者に任せようじゃないか。

僕が今やるべきなのは、ニドリーノを退けることで。

「うわっ」と

それは言うほど容易ではないみたい。

ニドリーノの強烈な”とっしん”が僕らの右横をかすめる。

こんな狭い洞窟じゃあ回避運動をとるのも限界がある。

つまりは、どうあがいても決着をつけなければならぬらしい。

「はあ、しょうがない。覚悟を決めるか。カラカラ」

僕の問いかけに、ヤレヤレといったように首を縦に振るカラカラ。うん。君はいつでもブレナイね。そういうところ好きだぜ。

僕？僕はほら、今でも逃げ道がないか探してますから。

なんて言っているとニドリーノが再度臨戦態勢に入ったようだ。

今度は外さないとばかりに、足元を二度、三度と蹴るニドリーノ。

「うわお、君。相当キレてるね。何か嫌なことでもあったのかい？ここで会ったのも何かの縁だ。相談くらいは乗るぜ」

「グルルル」

悲しいな、聞いてくれない。僕ってばポケモンにも嫌われちゃうわけ？

「カラカラ、”ホネこんぼう”」

言葉が通じないのならこれすなわち暴力に訴えかけるしかない。

僕の命令を聞いたカラカラは一直線にニドリーノへ。

ホネこんぼうとニドリーノの角がぶつかる音が洞窟内に響く。

「むむ、僕のカラカラの骨は岩をも砕くほど強固なものなだけけれど」

どうやらニドリーノの角も普通よりも強いらしい。

これはいよいよ本腰を入れて対戦せねばならなくなってしまった。

「カラカラ！」

ニドリーノの“つのでつく”をカラカラは右に左に避けていく。

ちっちゃい体でひよいひよいと避けていくカラカラは、不敵な笑みを零した。

おお、余裕を持つのはいいことだけど。それだと煽ってるように見えちゃうぞ？

ああほら、言わんこっちゃない。

「グルアアアア！」

ニドリーノは誰が見ても明らかにブチギレていた。

にしても煽り耐性無すぎんでしょ。切れやすい性格なのかな。

「ん？」

コツリ。嫌な音が僕の耳に届く。

「……あちゃー」

後ろを見なくてもわかっちゃう。そこが壁だつてことは。

「んーと。そうだね、そういう顔するよね」

ニドリーノは既に勝ちを確信したのか、残忍な笑みが20%増してひどい。

ザリザリと、力を溜めて僕らを木っ端微塵にすべく照準を合わせる。

「びもや」

僕の言葉なんて耳に届いていない。その眼はただ一点のみ。

僕らを殺すことにのみ注がれている。

ドンつと、爆発したような速度でその重そうな体重を全部乗つけて僕らをめがけ猛進してくるニドリーノ。

「油断はナンセンスだぜ」

それを間一髪でかわしながら僕は言う。

「躲したところで。そう思ってるんだろ？でも違うんだなー、その場所が特別だからさ」

特別、誰もが好きな言葉でしょ？もちろん、僕だつて好きさ。

「だって、こんな場面でも助かつちやうんだからね」

僕がギリギリで躲した為か、ニドリーノは急な方向転換が出来ずに壁にぶつかつてしまう。

そこまでは普通だ。ニドリーノはすぐに起き上がつてまた僕らを狙うだろう。

だけど先も言った通り、そこは特別な場所なのさ。

「気づいていたかい？僕が壁の音を調べていたことにさ」

先ほどの岩盤よりも、軽い音がしたことにさ。

つまりは、そういうこと。

「グルギヤア!!」

思いっきりとっしんしたからね、薄い岩盤はたちまち崩れてそれはいわなだれとなりニドリーノに降り注ぐ。

「うわー、痛そう」

大きな岩が何個も直撃するのを見送つて、確実にニドリーノは戦闘

不能になった。

「ふー、危ない危ない。危うく死んじやうとこだったぜ」

だって岩盤崩しって洞窟でのタブーでしょ。この空間そのものが崩れてなくなる可能性だってあったわけで。

「そんな中、生き残っちゃう僕は特別なのかな？」

もしくは、日頃の行いとも言うよね。

「・・・チィ」

さて、まあこんなことは慣れっこだから人間ができてる僕は一々、目くじらは立てない。

誰かに仕組まれたことだとしてもね。

「おお？なんだか開けた場所に出たぞ」

ニドリーノを退けて、ついでに道もできたということ。僕はとりあえずまっすぐと洞窟内を進んでいた。

先ほどと違って洞窟内は明るく、どうやらここが本来の探索地らしい。両の壁にご丁寧に灯りを灯してあるところを見ると、やっぱり僕は全然違うところに追いやられたらしい。

「うーん、人間関係って難しいね。カラカラ」

引っ込めるのも面倒なので、また野生のポケモンに襲われたくもなしカラカラは常時ボールから出しておくことにした。

そんな彼は僕の言葉には耳を向けていないようでっーん、と先のほうを歩いている。

「うわー、つれないなー」

こんな洞窟で置き去りにされここまで戻ってきたことだけでも上の人は評価してくれないだろうか。

してくれないんだろうなー、きつと。

なんて思っているのと、どうやら組織の仲間たちと近づいてきたよう
で話し声やらが響いてくる。

こういう時は洞窟でよかったよね。知ってる人がいると安心する
よ。

まあ、今日の集合を見た感じ知ってる人はいなかったんだけど。

そこはほら、隊服が同じだとみんな顔一緒に見えるじゃない？そんな
感じで親近感はあるんだよね。

「うおつとと」

なんて感じで歩いてっていると、突然のグラつき。地面が揺れる音と、
誰かの言い争いが聞こえてくる。

うん？なんか仲間内で内部紛争でもしてらっしやるのかな？

基本的に内の組織はボス万歳、ボスが最高。のボス独裁体制なんだ
けどその中でも細かい派閥みたいなのはある。

幹部と呼ばれるスパー強い人たちがそれだ。

一人目にマチス様。

電撃使いのエキスパートで噂によればジムリーダーもやっていた
とかなんとかかんとか。

そして二人目がナツメ様。

クールビューティーなお姉さま。な見た目に惑わされてはいけな
い。

エスパ―使いでありながら自身も超能力を操るサイキックガール
である。

・・・ガールって歳ではないかもしれないけど。

そして最後が。

「我らがキョウ様、なんですけど」

うーむ。困った。何が困ったって。

「なぜだかあそこにいるのがキョウ様なんです」

僕が歩いてきたたちようど真ん前にキョウ様は部下を引き連れて誰
かと対峙している。

まあここまではいい、なんでここにキョウ様がいるの、とか。直の

部下の僕がはぶかれてるとか。そんなことは今は置いておいて。

あ、勿論後で取りに行くけどね。

大事なのはその対峙している奴。

「うーわ、一番会いたくないタイピングで君が一番会いたくないやつだよ。レッド」

なぜだかレッドはキョウ様と対峙している。今にも一触即発、バトリのような雰囲気だ。

隣にいるのは彼女かな？後姿だけじゃよく見えない。短髪で短パンおなかを丸出しの格好は快活さを思わせる。

不幸中の幸いをあげるなら、レッドたちから見て背中側に今僕はいるので彼に気づかれる可能性は低いということくらいだろう。

「あらら、本当に始めちゃったよ」

読み通り、キョウ様のサイホーンとレッドのピカチュウが戦闘を繰り広げる。

サイホーンのタイプは地面。対してピカチュウは電気。相性は悪いと言わざるを得ない。

のだが。

「へへっ、俺のピカチュウは聞き分けは悪いが強いぜ」

レッドの自信も伊達じゃなく、タイプ相性の不利をよくピカチュウはカバーしている。

だけど、それもここまでだろう。

「まったく、しょうがないガキどもだな……」

キョウ様はしびれを切らしたように何かを取り出す。

(注射針……?)

「ロケット団に歯向かうとどうなることになるか……」

「ひねりつぶせ!!」

「グルアアア!!」

キョウ様は手に持っていた注射針をサイホーンに刺すとたちまち体がメキメキと成長し始め、やがてサイホーンはサイドンへと進化した。

それはあまりにも不自然で人工的な何かだった。見ればサイドン

の目は血走り、体に相当な負荷がかかっていると見える。

(ははーん。なるほど、さっきのはそういうことか)

優れた洞察力、及び観察力を持つ僕の手にかかれば先ほどの謎も
ちよちよいのちよいだ。

つまりどういうことかというのと、キョウ様は僕らと同じように「月
の石」を探しに来たのではなく、先ほどの薬の実験をしに来たのだ。

野生のポケモンを使って。

「実験はそこら中でやっていたからな。いちいち覚えちゃおれん」

「ゆ、許せない・・・!」

ほら、ビンゴ。会話の内容がモロそれじゃん。

そしてさっきのニドリーノは大方失敗したのだろう。で、野生にポ
イしたところに運悪く僕が出くわしたのだ。

それが意図的かどうかは今はさておいておこう。

傍らの女の子はわなわなと体を震わせている。ヒトデマンを繰り
出して、水でつぼうでサイドンに攻撃。

じりじりと詰め寄っている女の子、優勢なのは彼女のほうだが。

簡単にやられるほど内の上司はやわじゃない。

例えそれが自分のポケモンじゃなくても、だ。

「“っのドリル”だ!!」

サイドンは自身の額の一本の角を高速に回転させて水の対流を逆
流させる。

完全に力を利用されたヒトデマン with 女の子は見事に壁にた
たきつけられ気を失った。

「負けてたまるか!!」

そのままの勢いでサイドンはピカチュウも潰しにかかる。

「ワハハハーどこを狙っている!!」

ピカチュウは必死に電撃を頭上高くに打ち上げているものの、戦力
差は埋まらない。

一見すれば。

「うわうわ、黙ってみてる場合じゃないなこれは」

それに気づけたのはさっき僕が似たようなことをやっていたから

だろう。

「ん？・・・!!」

電撃で磁力を操り、頭上の大きな岩盤を落とした。方法は違えど、さきほど岩盤を崩した僕と発想は同じ。

「がぺぺ。やるなー、レッド」

大きな音と周りに舞う砂埃で状況がよく見えない。

口に入った砂を吐き出しながら僕は感心した。

本気ではないとはいえ、あの状態でキョウ様を退けたのは素直にすごい。

「でも一歩違えば自分だって危険だっただろう今のは」

レッドのさらに後方にいた僕だって被害を受けそうになったのだ。自分が巻き込まれてちゃ世話ない。

「それとも・・・自分は巻き込まない自信があったのか」

けどそれはともすれば過信だ。

過信は自分を見失うぜ。

「なーんて、伝えるわけもないんですけどー」

さてさてここで柵から牡丹餅が一つ。

「へっへー、ゲットしちやっただもんね」

月の石。先ほど岩盤が崩れたおかげで見つけられた。

これでまた幹部候補に前進ゲットだぜ！

区切りがいいから今日はここまで、続きはほら、次の話でね。

5話 「潮騒のメモリー」

「うーわ、こりやダメかもね」

レッドとキョウ様の戦いで崩れた岩盤は大きな大きな岩でそれはもう人なんて軽くペシャンコにするくらいの重さは十二分にある。

そんな岩が落石してきたんだ。それも不意打ちで。

生きてる保障なんて、ない。

「なにがダメなんだ？・カラー」

「えーっと、勿論この洞窟が、って意味ですよ？キョウ様」

うえーい、当然のように涼しい顔で姿を現したキョウ様の顔はまだまだ余裕だ。

そのキョウ様のそばには自身のポケモンであるベトベターが。

どうやらそのベトベターで防御していたらしい。

「流石の判断力ですね。キョウ様」

「ふふ、お前的には死んでいたほうがよかったか？」

意味ありげに笑うその声は相変わらず渋いなあ。

「いえいえ、生きてて心底うれしいです」

「そうは見えんがね」

「感情が出づらいです。ほら、ちゃんと笑顔でしょ？」

キョウ様の後ろには部下たちが倒れているものの、どうやら全員無事らしい。

重傷なのは見る限りではおらず、そろそろ意識を取り戻すだろう。

「怒っているのか。お前を連れて行かなかったことに」

「ええ、プリンですよ」

「くく、お前は手元に置いておくより手放していたほうがよく使えるのでな。こんな雑用は押し付けんよ」

すいませんキョウ様。他の部隊ではガンガン押し付けられています。雑用。

「それより、わかっているだろうな」

「はいはい、”他の幹部の動向チェック”は良好です。今のところ、

ナツメ様。マチス様双方共に伝説のポケモンとの接触はありません」
そう、僕だけが他の隊員たちと違ってフリーに動ける理由。

マチス様とナツメ様の動向を常にチェックしておきキョウ様に報告する。そのためだ。

重要なのはボスではなくキョウ様という点。

「くつくつく。そうかまだか。これでこの俺が、いの一番に手に入ればサカキ様の右腕としての地位も堅いというもの」

さつきから笑みが絶えないなあーキョウ様は。

まあいいことだよ。笑う門には福来るってね。

というわけで、僕は他の幹部の皆々様方の動向を監視するという危険を冒す代わりに自由行動を許可されているわけだ。

そのせいでマチス様には疑われて嫌われて、他の隊員には「なんだあいつ部隊にも入らずフラフラしやがって」とやつかまれるわけですけど。

さつきのニドリーノは大方そこで伸びている隊員の内の誰かがけしかけたんだろう。

大丈夫！傷ついてない！だって日常茶飯事だから!!

それに、それもしようがないよね。なにせ僕まだ入隊して半年ってとこだし。

異例のスピード出世ですよ。いやあ、才能あるものは恨まれるってこれ世の常な。

「とはいえ、悠長に事を構えていられないのも事実。こちらはまだ伝説のポケモンについての情報はロクにないのだからな」

言葉の最後に「これからもよろしく頼むぞ」と釘を刺されて「もちろん」と僕は調子よく返事を返す。

その言葉の裏はいくら何でも簡単だ。

それは言い換えればつまりは「裏切るなよ」。そう言っているようにしか聞こえない。

ははは。この僕ほど忠誠心という言葉がびったりな奴もそうはおるまい。僕の忠誠心を見ればハチ公も真っ青だぜ。

「そうか、ならいい。次はマチスのところに行け。なにやらサントア

ンヌ号を使い企てているらしい」

「はい。もし伝説のポケモンを捕まえそうになったら阻止する。でいいんですよね？」

「ああ」

再度任務内容を確認して、僕は洞窟を後にした。いつまでも埃っぽ
いところにはいられない。

報告連絡相談。これが社会人のモットーですから。

「おお、思ったよりも大きいな」

洞窟を後にしてから数日後、僕はサントアンヌ号が停泊しているク
チバシテイへとやってきていた。

クチバシテイは港町。その大きな海に面しているこの町はなんと
も爽やかで。

「すっごくくべたつく」

潮風がものつすごい。物凄い髪とかべたつく。

マチス様はいるのかな？こんなところに。

なんて心配は実はあまりしていない。

マチス様が元ジムリーダーだという話は前にしたと思うけど、何を
隠そうそのジムがあるのがここ、クチバシテイだ。

「愛着があるのかは知らないけれど、部下にやらせるだけ。つて線は
薄いよね」

自分のジムがある町というのは地元のようなものだろうし。

マチス様の性格上自身が出張ってくる確率が高い。

「どうもー。お邪魔しまーす」

サントアンヌ号に乗り込み、僕は誰に言うでもなく一人声を出す。礼儀はちゃんとしろってお母さんに教わったからね。

サントアンヌ号の中はいたって普通の船。外で見た通り流石の広さではあるが特に変わった点はない。

企てているとキヨウ様は言っていたが、いつも通りその中身は僕が調べるということでしょうか。うん、わかってた！

見立て普通の船のここでいったい何をしようとしているのか。

「伝説のポケモンにつながる何か、とかだったら荷が重いなあ」

一応任務ではあるのでそこら辺も調べなきゃいけないんだけど、ああ肩が重い。

大体なんだよ伝説って、いち下つ端であるところの僕に頼むような出来事じゃあないだろう。

気が重いつたらありやしないが、任務なら仕方がない。

そろそろキヨウ様の我慢も限界にきてそうだし、ここらでいっちょ成果をあげないと僕の立ち位置だって危うい。

じゃなきゃあんな風に釘を刺してこないだろう。

「どうか何も出てきませんように」

キヨウ様が聞いたら怒りそうな願掛けしながら僕は直も船を探索する。

船の構造も部屋にも特別なことは何も無い。

「おっと」

そう気を抜いていると罠に陥るのが人の常。

何個目かの部屋を探索していると不意にその部屋から獰猛な唸り声。

「あれは・・・エレベーター？」

エレベーターという電気タイプのポケモン、見るからに凶暴な顔のポケモンがその部屋には鎖でつながれていた。

まあ察するに狂暴すぎて言うことを聞かないのだろう。ああして繋いでおくことで安全性を確保しているんだ。

「よーし、近づかない」

こう言ってしまうとフラグっぽいけどあそこには間違っても近づ

かないようにしないと。

よくよく見ると、エレブーのほかにもモンスターボールに入れられていないポケモンたちがいる。

後ろにいる他のポケモンはどうにも怪しいけれど今はどうでもいいね。

さて、でもそれじゃあ任務が達成できない。

ここには企てているらしいことの欠片どころか船員が人っ子一人いない。

当然マチス様だつていない。

これはどういうことだろう。

「まさか、ついにキョウ様からもはぶかれだしたのかしらん？」

それはマズい。ひっじょーにマズい。

キョウ様に見放されると今の僕じゃゲームオーバーだ。

なにせ、僕には他の有象無象とは違って、ちゃんとした“目的”つてやつがあるんだから。

「なにを独り言くっちゃべってやがる？」

「・・・わ、マチス様だ」

ちょうど船の詮索が終わったときでよかった。真後ろですごんでいるマチス様が怖すぎることを除けば概ね順調だ。

僕の作戦ではマチス様に見つかるまではなるべく隠れて情報を探ろうと思っていたけど、うーん、こんなに早く見つかるとは思ってたなかったや。

「なぜここにお前がいる？」

当然の質問は、当然のように答えを用意している。

「いやー、ほら。僕ってばフリーでしょ？ちよつとそろそろ落ち着こうと思ひまして、そんでマチス様の隊に入れてもらおうと思ひまして」

僕はキョウ様の従順なる手下だけど、それは表立ってはいない。

表立っては僕はなぜだかフリーで動く下っ端でそれをとがめられることもない奴ということだ。

ほら、ムカつくでしょ？

誰だってそりゃこんな不透明で組織を乱す奴がいればムカつ腹が立つのも当たり前前ということである。

「ああ!!」

とはいえ。マチス様はちよつと怒りすぎだとは思うけどね。

カルシウム？カルシウムが足りないのかな？

「てめえ前回のことを忘れてるわけじゃあねえよな」

前回？なんだろう。もう随分と前のことなのですつかりと忘れてしまった。

記憶力には何がいいのだろう。とりあえずカルシウムじゃないことは確かだ。

「次に会ったときは容赦しない。そう言ったはずだぜ」

ああ、そういえばそんなこともあったようなかったような。正直覚えていない。

なにせこちとら過去は振り返らない主義ですから。明日を見据えて生きる主義ですから。

「・・・フン。まあそれを踏まえてなお、俺の所に来たってんならそこだけは評価してやる」

ただ黙っていたただけなのにどうやらいいようにとつてくれたらしい。案外いい人かもしれないこの人。

それでは、何もしていないのに勝手に僕の株が上がったところで早速本題に入ろう。

「で？一体全体僕はここで何をすればよろしいんですか？ていうか、ここはいつたい何をする場所なんです？」

あくまでさらつと、まるで世間話のように。僕は尋ねた。

「ああ、そうだな。ここサントアンヌ号はただの船じゃあねえ」

まるで新しいおもちゃを買ってもらった子供のようにマチス様はニヤニヤと自慢げに話す。

この船で伝説のポケモンを捕まえに行くのか、それともそれに繋が

るなにかを探しに行くのか。

その答えを聞くべく、マチス様の言葉に耳を傾ける。

「いいか。ここの平和ポケしちまつてるかわいそーなポケモンたちをとっ捕まえて、各地に売りさばくのさ。勿論、表向きはグレン島に荷物運ぶためつてなってるがな。ウワハハハハ！」

全然違ったー。全然伝説関係なかったー。全然ただの金儲けだったー。

すごい上機嫌で語るマチス様の表情はこれ以上ないくらいの笑みをしている。

なるほど先ほどエレブーの後ろにいたポケモンたちはそういう目的か。

よかった。これだったら多少の自由は許してくれそうだ。

伝説のポケモンについてマチス様は探っていなかった。ならここでするべきもう一つのこと集中するべきだ。

多少の自由。それがあるとないのでは調査の進み具合が違う。

「そこで、だ。カラー。お前にはしてもらったことがある」

・・・あれ？

これは嫌な予感。

ニヤリと上から見下ろすその笑顔は笑っちゃやうほどに怪しすぎる。まさに悪の組織の幹部って感じだ。

「よっこらせ」

あーあ、やつぱりこうなるんだなー。

肩やら腰やらを揉んで一息つく。大きな木箱を抱えて船に向かう僕はああいった何をやっているんだろうか。

「おらー、さっさと運べ」

「あいあいさー」

THE、雑用。

マチス様に見つかって早数日。予想した通りに僕は雑用を押し付けられていた。

表向きにはグレン島に荷物を運ぶという理由がある以上、見かけだけでも荷物を運んでいるところを見せなきゃいけないということ。僕はそのお仕事を手伝っている。

そのため当然ここにきた本来の目的は達せられていない。どころか一ミリも進んですらいらない。

なにせ休みもなくずっと働かせられているのだから。なにせずと重労働な肉体労働だから。

これをマチス様が計算してやっているのならお手上げだが。

きつとただの嫌がらせだ。きつとただ僕のことを嫌いなだけだ。

「おーい、お前。マチス様と呼んでいるぞ」

ずっと一緒に働いてきた名も知らない海兵Aが僕を呼ぶ。

マチス様が僕を呼んでいる？なんだろう？ついにクビかな？

もしや適度にサボっていたのがバレてしまったのだろうか。

まあそれはそれでいいか。キョウ様にはまたなんの成果もあげられませんでしたって言えば許してくれるでしょ。

それでも一応はヒヤヒヤしながらマチス様がいる船長室に行く。

「失礼します」

「おお、来たか」

船長室でふんぞり返ってるマチス様は気に食わないと言いたそうな顔で僕に告げる。

「てめえよく仕事しているようだな」

「ありがとうございます」

おお、まさかこの人から褒められるとは思わなかったけど。

「そうだな。そろそろてめえもこっちに加われ」

「はあ、こっち・・・とは？」

「当然。ポケモンたちの強奪!!」

ふう。ようやく来たな。

ま、肉体労働よりも大分マシだな。

なぜかって？そりやそうさ。

マチス様は伝説のポケモンについてはなんの策も講じていなかった。

これは事実だから仕方ない。キョウ様に嘘は報告できないからね。とはいえ、前も言った通り何の成果も無しじゃあ僕が切られちゃう。

そこで僕が成果をあげられる一つの策がここ、クチバシティにある。

クチバは港町だ。ということは他の町よりも色んな人間が集まるということだ。

必然、他の町より情報が集まりやすい。

今までの肉体労働じゃあ町に出ることも一苦労だが、この仕事なら何の不自然さもなく町に出て情報を得られる。

つまり“伝説のポケモン”たちの情報を、だ。

「あいあいさー」

「…………お前その挨拶なんなんだ」

決して心情を悟られないように返事をしたつもりだったが、意外なところに疑問を持たれた。

「えー？海の船員っていったらこれじゃないですか？」

「どんなイメージだ！いいからいつて来い！」

あれ？マチス様から振ってきたのに最終的に僕が怒られてるよ？おかしいね。

とはいえようやくキョウ様の任務に取り掛かれる。

それじゃあまた次の話で。

6話 「伝説って言っても案外大したことないね」

「いやー、そうなんですよ。まだこっち来たばかりであんまり町のことわからなくて。え？案内してくれる？それはそれは、この町の人には親切だなあ」

「え？いや、ちよつと忙しいんですけど」

「まあまあまあ」

クチバの町は港町。町に闊歩している人のほとんどがこの町の人間じゃない。

だから、こうやって旅人を装うのも難しくないのだ。

そして僕が旅人としてトレーナーの注意を引き付けているうちに。

(ほら、今だよ。ズバット)

予めボールから出していたズバットに目配せで指示を出して、遠くからズバットはポケモンに“あやしいひかり”をかける。

ロケット団に入団した時に団員は全員このズバットやコラツタなどを支給されるんだけど。

僕はいらなくて断った、カラカラがいれば十分だと思ったし、手持ちを増やす気はなかったのさ。

それが原因で下っ端の分際で組織を乱すなど怒られたのはいい記憶にはならないんだろうなー。

それで半ば無理やりてきにもらったこのズバット。中々どうして使い勝手がいい。なにより従順だ。

うん、流石に手持ちが一匹つてのはつらいもんね。

普通人からもらったポケモンは結構上から目線になったり、元のご主人の言うことしか聞かない。みたいな理由で手懐けるのが一苦勞なわけだが。

「ああー、なるほど。へえー。ここがああなつてそうなつてここになるんだー。ふーん。あ、どうもありがとうございました」

ズバットの仕込みが終わったのを見計らつて僕はトレーナーを解放する。

「一体なんだったんだ……」

一瞬ポカンとなつていているトレーナーだったが、変な人に絡まれたとでも思ったのだろう。すぐに自分の日常へと戻っていく。

「これで十人目。ま、そろそろ仕事はいいでしょ。よくやったねズバット」

僕は近くを飛んでいたズバットを褒め称える。

僕にポケモンの気持ちはわからないけれど、なんだか誇らしげには見えた。

まったく、人懐っこすぎだぜ君は。

だからこうやって悪の組織なんかに使われるんだ。

「さて、それじゃ本題に入りますか」

そんなズバットをボールにしまいながら僕はそう呟いた。

クチバの港町にはもう一つ特色がある。

特色、といえるほどその町に根付いているわけでも観光の目的となるわけでもないが。

それでも僕にとっては十分行く価値のある場所だ。

「あ、ご老人、ご老人。少し道を尋ねたいんですけど」

先ほどよりも強引さを引つ込めて自分の中の優しい声色で老人に声をかける。

一つ、その町を詳しく知りたいなら原住民と思しき人物に声をかけるべし。それが一人にいる老人なら尚更よし。

なぜなら。

「おお、おおー！」

ほら、老人つてのは会話に飢えているからね。結構すんなり話をしてくれるのさ。

今だって、僕の教訓が当たったようでも紳士的な小さな老人はサングラスの奥の目を光らせて見るからに喜んでいた。

「あの、ポケモンだいすきクラブって——」「えいえい！」
僕が楽勝ムードで頼みごとをする前に、それを遮って老人は勝手に僕のモンスターボールを投げる。

当然開閉スイッチは押されており、僕のズバットとカラカラは意味もなく外に出されてしまった。

「おおー!!これは素晴らしい！」

勝手にボールから出されて困惑している二匹を見て、老人は目を輝かせながら賞賛を送っている。

おいおい、なんだいこのクレイジーなお爺さんは。これは僕の見立が失敗したと言っているようなものじゃないか。

まったくこれだからポケたじいさんは。

当の僕だって困惑している。だということに、空気を読まずにその老人は続けざまにこう言った。

「ふむ！君をポケモンだいすきクラブの名誉会員に認定する!!」

と、そう言った老人の言葉で僕の中の不快感は一気に消滅したけど。

人生の先輩には尊敬と優しさをもって接しないとネ！

「いやー、本当に運がいい！まさか探していたポケモンだいすきクラブの会長があなただったなんて！」

「それはこちらのセリフじゃよ！こんなに若い立派なトレーナーがウチに入りたいたいと言ってくれるなんて願ったり叶ったりじゃ！」

ガツチリと固い握手を交わす僕らはまるで無二の親友を見つけたかのように盛り上がる。

ポケモンだいすきクラブ。そのクラブは知名度こそ薄い nationwide

地に点々とあるその名の通りのクラブだ。

小さいクラブハウスにポケモンだいきクラブと書かれた看板がなければ、わからないようなそんな場所。

ポケモンを愛し、ポケモンに愛される人たちがただ自分たちの愛を語り合う。そんな居場所となっている。

「オホホ、うちのコラツタちゃんか」「いやいや、僕のキャタピーのほうか」

といった具合に。

本当にただそれだけのクラブだ。

「いやー、しかし本当に可愛いですな。このズバットとカラカラは」
会長がわちやわちやと触っているのを、ズバットは照れ臭そうに、カラカラは鬱陶しそうに振り払っている。

「あはー、このツンデレ具合がまたたまりませんの！」

そんな仕草に萌え萌えしている会長の姿はどう頑張っても引いてしまう。

「あれ？新会員？」

「会長が連れてきたんですって」

そんな会長の騒ぎを他の会員が無視するはずもなく、わらわらと集まってきたは僕のポケモンを撫でまわしていく。

めちやくちや不満そうにこちらを見るのはカラカラ。

「ごめん。と片手で謝ってから僕は会長だけを引っぺがす。

「ムム、どうしたのかね。ええと・・・」

そういえば、自己紹介をしていなかった。

「アラです。アラ」

普通になんの迷いもなく、僕は息を吐くように嘘をついた。

当然、僕の名前はカラーですよ？だけどほら、こういう時ってなんか本名を名乗りたくないじゃない？

「よろしくアラ君！」

当然会長だって、ここで偽名を使われるとは思っていないだろうし素直に信じる姿は見ていて心が・・・。

あり？別に痛まなーい。

「それです。ね。会長」

挨拶もそこそこに、僕はようやくと本題を切り出す。

「僕、あるポケモンを探すために旅をしているんです。そのポケモンに一目会いたくて、遙々マサラタウンからここまで来ました」

「マサラ!? それはそれは大変な旅じゃったろう」

「ええ、お金もなく色々な（主に悪事）仕事をしながら今日ここまでできました。このポケモンだいきクラブなら、なにか情報が得られるんじゃないかって」

いつの間にか、会長だけに話していたつもりが、会員全員が聞き入っていた。

まあ、そうしてくれないと困るわけですけど。

「ナントエライ! して、そのポケモンの名前は!?!」

ハンカチで目を抑える会長が僕の望み通りに食いついてくれる。

「そのポケモンは伝説のポケモン。名をファイヤー、サンダー、フリーザー」

「で、伝説……」

ちよつとばかりその名前に気おされたのか、会長はわざわざ家の中で後ずさりをする。

「……やつぱり、無理ですよ。いくらポケモンを愛しているポケモンだいきクラブとはいえ、流石に伝説のポケモンまでは好きじゃないですよ。一目でもいいから、ポケモンを愛するものとしてみただけなんですけど」

しおらしい態度、残念さを匂わせながら、ほんの少しスパイスのように悔しさを仄めかす。

はい、これでシチュエーションは完璧。

「そんなことはないぞ! うちのクラブはポケモンを愛し、差別などないのじゃ!」

そうだそうだ、と勝手に盛り上がってくれる皆に僕は。

「本当ですか！ありがとうございます！この人数がいれば誰か一人くらい知ってますよね!？」

僕の言葉に、皆、顔を見合わせる。

「誰か！誰か知っておるものはおらぬのか！」

必死に声を荒げる会長に、答える者はおらず。

それもそうだろう。なんせ相手は伝説だ。こんなしがないうクラブに知っているものがいるとは思えない。

が、何度も言っているがここは港町だ。情報の数は他の追隨を許さない。

それ故に、一人じゃあ情報を集めると言っても限度がある。

このクラブ、人の多さだけは評価できるからね。利用しない手はない。

「つて、言われてもなあ」

「伝説なんて、僕らには縁がないよお」

困ったように頭を悩ませている会員たち。

おいおい、こんだけいて一人も知らないの？

なんてね。元々君たち自身に期待なんてこれっぽっちもしていないから安心してよ。

君たちにしてほしいことはもつと別のことさ。

「そう・・・ですか。いえ、いいんです。今までも町の人たちに聞いて回っても駄目だったし。ああ、でもここは港町だから他よりは情報が集まってくるのかな」

諦めたような声色と少しのヒント。さあ会長、あなたの権力を使う時が来ましたよ。

「ムムーそうじゃー皆、アラ君を手伝うのじゃー！伝説のポケモンについて情報を聞いてこようではないか!!」

明暗を思いついた、そんな表情で告げる快調だが会員たちの顔は渋い。

あり？会長思ったより人望無い？

僕の計画が崩れ去ったかと思いきや。

「アラ君はこの年でカントー中を探し回るほどポケモンを愛しておるのじゃぞ！ポケモンだいすきクラブの会員として一肌脱きたいと思わんのかね!!」

小さな体をびよんぴよこと動かして必死に訴えかけるその姿に心を動かされたのか、顔を見合わせて「じゃあ」といった風に会員たちは承諾した。

名ばかりの会長ではないということに、今は素直に喜んでおこうかな。

「それではみなさん！よろしくお願いしますね！」

もう演技の必要はないので、僕は先ほどまでと一転、快活な笑顔でそう言った。

「さて、と」

クラブの家を出て、一つ大きな伸びをする。

クラブの皆の協力を取り付けられたのは大きい。なにせ、クチバに訪れる人全員に一人で聞き込みをするなんて不可能なのだから。

とはいえ、僕が何もしくなくていいというわけでもこれまたない。

先ほどまでにズバットを使って混乱させたポケモンは丁度十匹、仕事をしている風を装うために十匹はちよつとずつ効き目を遅らせてある。

僕のズバットは少し特殊だね。というか、そういう風にした。

何をしたかといえ、混乱の度合いを調整することができる、というここと。

つまり、ボールに戻しても混乱が解けなくすることだって可能だし、逆にボールから出した瞬間に混乱状態にすることだって可能だ。

普通はボールに戻せば治っちゃうんだけどね、これをするるとポケモンセンターに行かなければ治らない。

逆に言えばポケモンセンターに行っちゃうえば速攻で治っちゃう。

でもそれで十分。

先ほどの十匹はボールから出したとたん混乱状態になり、わけもわからず自分からサントアンヌ号に乗り込んでいくだろう。

これこそ完全犯罪。アシが付かないって最高だね。

「だからと言つてのんびりもしてられないんだよね。ま、猶予は一週間てどこか」

それを過ぎると流石にマチス様に怪しまれる。

「でも一週間あればなんかの情報くらい手に入るよね？」

傍にいるカラカラに僕は同意を求めたけれど、彼は目も合わせてくれない。

「どうやら先ほどのことをまだ怒っているらしい。まったく、そんなんじゃ女の子にモテないぞ。」

なんていうと、手にしたホネこんぼうが飛んできそうなので僕は情報を聞きに町へと出た。

そして、ちょうど一週間後。

「伝説のポケモンの情報持ってきました!!!」

「おお!!」

「でかした!!」

チマチマと人海戦術で粘った甲斐あって会員のうちの一人が見事にヒット。

他の会員はなんだか日に日にやつれて行ってたし、これで収穫ゼロだったらきつと僕は名誉会員を剥奪されていたことだろう。

危ない危ない。

「それで、情報は？」

走ってきたのか、息が乱れたその男は息を整えてから口を開く。

「それは――」

「あ、ハロハロ。キョウ様？ええ、ええ、見つかりましたよ。——
急かさないうで下さい。ええ、マチス様も、ましてやナツメ様もまだ知
りません」

ポケモンセンターのパソコンで通話中の相手は焦るように僕の次
の言葉を待つ。

「はいはい、わかってますよ。情報の扱いには細心の注意を払います。
それじゃあ落ち合いましょ。後で」

「ファイアー、サンダー、フリーザーの居場所について、ね」

そしてまた次の話に続いていく。

7話 「伝説って言っても所詮この程度さ」

「いやはやまさか、こんなところに伝説のポケモンがいるなんて。灯台下暗しとはよく言うね」

僕がただ今いる場所。そこはチャンピオンロードの真っ只中だ。チャンピオンロード。名前からも分かるようにチャンピオンになるための道だ。ジムリーダーからバッジを頂き、八個集めた猛者だけがそこに挑戦することができる。

勿論、僕はバッジを八個も集めてないし、集める気もない。

「ホントにこんなところにいんのかよ……」

「いいじゃねえか。どうせいなくなたってアイツの首が飛ぶだけだ」

「それもそうか」

おいおいおい、後ろの団員が訝しげに僕に視線を送っていることに気づかないほど、僕はバカじゃないぞ。

まったく、これだから僕はリーダーなんてのに向いてないんだけど。

話を戻そう。チャンピオンロードは洞窟となっていて僕らは今そこを懸命に搜索している最中だ。

チャンピオンロードという名前に相応しく、出てくるポケモン出てくるポケモンがやたら強い。

洞窟という閉鎖空間。僕へのヘイト。そして野生のポケモンに対応して溜まっていく疲労。

不幸中の幸いと言えば、そんなチャンピオンロードに人が大勢いるはずもなく搜索は地道だが順調に進んでいる点だろうか。

「カラカラ」

後ろから襲い掛かってきたゴローニヤを打ち取りながら僕らは進んでいく。

「隊長！A班見つかりませんでした！」

「同じく！B班影も形も見当たりません！」

「C班！二階への梯子を見つけたものの、やはりいません！」

うーん、やたらと嬉しそうなのが気がかりだけどそうか。一階には

いなかったか。

このチャンピオンロード、構造はそう広くはない。階数だって全部で二階までしかない。

となると一階にいなかったのだから、必然的に上の階ということになるが。

(これでいなかったら、マジで首が飛ぶかもなあ)

絶対にいる、なんて言えない不安と闘いながら僕らは進んだ。

そんな伝説のポケモンを探しに行く数日後前。

「昇進おめでとう」

「ありがとうございます、これも日頃の行いですかね」

暗い研究室でカツラさんはお祝いの言葉を僕にくれる。

そう、僕はこれまでの数々の貢献により異例のスピード出世を手に入れた。

具体的に言えば伝説のポケモン捜索隊、隊長の座を手に入れたのだ。

これまでの労働が正当に評価されるといえるのは気持ちのいいものでやる気も上がるといふまさにいいこと尽くし。

「まずはどこから行くんだ？」

「いやー、決めてないですけど。一番近いのはふたご島かな？」

ふたご島のフリーザー。無人発電所のサンダー、そしてチャンピオンロードにいるファイヤー。

これが一週間ほどクチバで情報収集した成果だった。

いやー、案外楽に事が運んでくれてるのはやっぱり日頃の行いつてやつ? いいことはするもんだよね。

「ふふ、そうか……」

なんだか僕の昇進を祝ってくれているはずなのに、カツラさんはあまり元気がない。

「なんですか？研究が上手くいってないんですか？」

それとも単純にカツラさんも僕の昇進を実は気に入らないとか？
そうだったら泣けるなー。

「……そんなところだ」

そう言ったカツラさんの表情は暗い部屋でより一層暗く見えるけど、僕に慰めの言葉は見つからない。

何の研究をしているのか、昇進した今なら教えてくれそうなものだけど。

ほら、人つて弱つてるとポロツと口が滑ることあるもんね。

と、思っただけけど。案外言葉が出てこない。

これでも一応は気を使つてるといふことなのだろうか？自分でもよくわからない。

僕が黙っていると、カツラさんは思い出したように口を開く。

「そうだ。フリーザーと戦うというならコイツを連れていくといい」

そう言つて手渡されたのは一つのスーパーボール。手に持った感触からどうやらポケモンを渡されたらしい。

「私のガーディだ。君は炎タイプは持つていなかったらう？きつと、戦力になってくれる」

おお、確かにカツラさんはこう見えて元ジムリーダーだ。そのジムリーダーのお墨付きというなら確かに戦力になってくれそうだ。

手持ちを増やす気は一ミリもないんだけど、確かにズバットとカラカラだけじゃあ心配だったのも事実で。

「ま、くれるってんならもらつておきましょうか」

なんでもタダより高いものはないらしいけど、大丈夫。僕お金だけは持つてるんだ。

そして現在、チャンピオンロード。

「うわあああああ!!!」

「逃げる逃げる逃げる逃げる!!」

いやいや本当もう笑っちゃうくらいピンチに直面していた。過去の回想してる場合じゃあないよ本当に。

端的に言えばファイヤーはいた。本当に伝説かっつてくらい普通にそこにいた。

が、放つオーラは凄まじくとりあえず偽物ではないことは確定だ。

「ガアアアアア!!」

「うわああああ!!!」

そのファイヤーの戦闘力は流石の一言で。繰り出すかえんほうしゃも、つばさでうつもそこらの野生のポケモンとはワンランクもツーランクも上であることがわかる。

「おいおいおい!なーんの為にこんな大勢でぞろぞろ来たと思ってるんだよ!」

後ろを振り向くと、既に隊員の半分以上が逃げ出しており残っているのは気絶しているものやら、逃げることにすらできない下っ端オンリー。

詰んだ、二重の意味で詰んだ。

「ああ、もう。どうせなら華々しく散ってやろうじゃんか。ねえ、ガーデー」

最後の抵抗と、なし崩し的に僕はガーデーをスーパーボールから出す。

ふたご島のフリーザー用にもらったものだが、ここまで出番がなかったもんね。

どういうことかっつて?そりゃ簡単、ふたご島にも、ましてや無人発電所にもフリーザーとサンダーはいなかったから。

だからここでファイヤーを見つけられたのは救いだっただけど、どうせここで倒されるのなら詰みだ。

二重の意味とはそういうこと。

「.....」

ファイヤーはこちらが戦闘態勢に入ったとみるや、出方を伺うように睨みつけている。

「ふむふむ、慎重なのはいいことだ」

「だけど、そうしてくれるのは好都合。力押しでこられたらどうしようもないからね。」

様子見してくれるならまだ勝算はあるってもんだ。

「かげぶんしん!」

その間に僕はガーディに指示をする。まだまだ何回か戦闘をこなしただけで、扱いなれていないのはご愛嬌。

それでも流石はジムリーダーのポケモンだ。よく訓練されているのか、僕の指示をちゃんとこなしている。

「これで、とりあえず時間稼ぎくらいはできるかな」

“かげぶんしん”で数体が増えたガーディはファイヤーを取り囲んでいる。

ふはは。これでどれが本物かわかるまい!

「くうーん!」

と、高笑いも束の間。僕の足元から鳴き声が聞こえる。

「あれ?なんでここにガーディが?」

こんなところに隠れていたらこの一体が本物だと言っているようなものじゃないか。

「ああ!?!」

案の定、ファイヤーはこちらに照準を合わせてかえんほうしやで焼き尽くそうとしてくる。

「あっつっつっつ!!」

お尻が丸焦げになりそうになりながら僕は岩陰に隠れた。

「もう!なにやってるんだい?君がここにいちや意味ないでしょ?」

「くうーん!!」

甘い声を出してもだめだよ。少しくらい戦力になってくれなくちゃ。

まったくとんだ臆病者を掴まされたもんだぜ。さてはカツラさん、厄介払いをしたかっただけだったりして。

「.....」

チラとガーディを見ると、明らかに落ち込んでいる。

自覚しているんだろう。自分が役に立っていないことに。そしてそれはどんな攻撃よりも自らをえぐる。

「はあ」

大きくため息をついて、僕はガーディを抱き寄せた。

「まったく、君は臆病者なんだから。臆病者には、臆病者らしい戦い方ってもんがあるってこと君は知ったほうがいいよ」

どんな経緯であれ、もう君は僕のポケモンなのだから。嫌だといっても従ってもらうぜ。

「よしーいまだー！」

コソコソとガーディに耳打ちしてから、僕は合図を出した。

岩陰から勢いよく飛び出したガーディは全部で七体。

ニヤリと、ファイヤーは思わずその口角が上がった。また性懲りもなく“かげぶんしん”で惑わそうと言うのか。僕にポケモンの言葉はわからないけど、そう言っている気がした。

「！！」

コオオオ、と大気の空気を吸い込んで力をためている。

くる。大技が。

一気にカタをつけようと、ファイヤーは自身の一番の大技を放った。

「“だいもんじ”か！！」

炎技の中でもトップクラスの大技でケリをつけようとするファイヤー。

ガーディにそれに対抗できる技なんてあるわけなく。

「きやうんー！」

“かげぶんしん”はその大技で一気に消されてしまった。

残った本体は辛うじて逃げることにしか出来ずに、逃走した。

「ギャアアアスー！」

勝ち誇ったように雄叫びを上げるファイヤー。

そこに、勝機があった。

「確かに君は強いよ。隙なんて全くなかった」

けれど、勝利を確信したその瞬間。少しだけ警戒が緩むのは仕方な

いことだ。

人間の知恵の勝利ってやつだね。

僕はガーディの現れた逆の岩場からホネこんぼうの先っぽにハイパーボールを括り付けた特性のホネブーメランを投げる。

この瞬間、この速度、捕らえた!!

「つてあれ?!うそん!」

躲されちゃった!!?なんでえ!?

フツと、嘲笑うように僕のほうを睨むファイヤー。

どうやら、勝利の前に油断していたのは僕のほうだったみたい。

「・・・うん、降参。諦めようこれは」

両手を挙げてせめて命だけは、と伝わるのかなこれ?

まあでも別に伝わらなくてもねえ。

「後ろに注意が向かなければどうだっていいや」

「?・・・っ!!」

スコーンと、小気味の良い音が洞窟内に響き渡る。

その音の発信源。つまりはファイヤーの後頭部にぶつかったのは。

「ブーメランってさ、相手に当たらなかつたら帰ってくるってのが楽

しいところだよね」

完全に死角、完全に意識の外へ外しておいてその特性ブーメランはハイパーボールをファイヤーに当てるべく弧を描いて旋回してきた。

ガーディの“かげぶんしん”からの会心の一撃を一度外しておいて何重にも重ねた撒き餌を綺麗に食べてくれたこの瞬間のこの感動は。

何においても代えがたい代物だろうよ。

「!!」

その咆哮はすでに声にならない。ハイパーボールの中に吸い込まれてブーメランは僕の手元へとちゃんと帰ってきた。

よしよし、いい子だ。

正直、一度目で本気で捕まえに行っても良かったんだけど、ほら、臆病なガーディに合わせて僕も慎重になった結果がこれだからね。

「臆病者も悪くないだろ?ガーディ」

「ガウー！」

いつの間にか僕の足元へと隠れていたガーディ。うん、返事だけは立派だ。

「さて、これでキョウ様にいい報告ができそうだ」

正直、フリーザーとサンダーを捕まえられなかった時点で僕の立場は相当危ういからね。

手に持ったハイパーボールがいつもより重く感じられるよ。

隊員のみんなが一目散に逃げて行ってしまったから帰りは一人で野生のポケモンと対峙しなければならなかったけれど。

無事、太陽をもう一度拝むことができた。
のだが。

僕のことだ、一筋縄ではいかぬこの人生。

「ん？ユンゲラー？」

おかしいな、明らかに今までの野生のポケモンとは毛並みが違う。

あ、もちろん物理的な意味じゃないよ？

「ユンゲラー、”さいみんじゅつ”」

「ぐっ!？」

どこからか澄み渡る女の子の声があった。

「フフ、ご苦労。見事、ファイヤーを捕まえたみたいね」

「あ、あなたは……」

もろにユンゲラーの”さいみんじゅつ”を食らって意識が朦朧とする中で、後ろから近づいてくる足音に目を向ける。

「あう……」

足に力も入らなくなって、無様に地面に伏せる僕。

対照的に上から見下ろしていたのは。

「な、ナツメ様……」

「フフ、ゆっくりおやすみなさい」
こうしてすっきりと終わらないのが僕の性。
それではまた次の話で。

八話 「過去のトラウマってやつは消したくないね僕は」

「ん……」

暗い部屋で目が覚めた。

勿論、僕が寝泊まりしている部屋ではない。

寝ぼけた頭で考える。

僕は毎回組織のお金でホテルに泊まっているはず。ちよつと昨日の記憶があやふやだけど。

ああ、瞼が重い。思考が鈍い。昨日はなにをしたっけ？お酒を飲んではいないと思うんだけど。

うーんうーん、と頭をひねってあ！と一つ思い出した。

「ファイヤー」

「……ナツメ様」

ピシッとよく通るお姉さまの声。そうそう、確かナツメ様に、正確に言うとナツメ様のウンゲラーに眠らされたんだっけ。

そんなナツメ様の横には僕が捕まえたはずのファイヤーが。

なんでこうなっているかの説明くらいは、あるんだろうね。

「ええと、何か用です？こんなところじゃなんだから、オシヤレなカフェとか行きませんか？」

だからほら、僕の両手を縛ってるこれ。この縄をほどいて下さい。

「フッフ、相変わらずふざけた男」

そんな僕の提案も思案するまでもなく却下だったようだ。

余裕のある笑みは相も変わらず素敵だけど、こんな状況だからあまり素直に喜べない。

「ねえ、取引しましょうか」

スツと僕の顔にナツメ様の手が伸び、その綺麗な指が頬に触れる。

早速本題に入ってきた。取引？いったい何の？寝起きにはきつい

よ。

なーんて、大体予想はつくけれどね。

「このファイヤー、私に譲ってくれない？」

ほーらみる。こういうことだ。

組織が全力で捕まえようとしたポケモンだ。手にすればこうなることは目に見えていた。

だからただ手をこまねいて指加えて見てたわけじゃあないんだぜ？

「いいですよ？」

「……なに？」

僕の答えに、多少面食らった様子のナツメ様。どうやら人間つてのは、想像よりも物事がスムーズにいくと疑う習性があるらしい。

ああいいね、クールな表情も好きだけどそういう顔も嫌いじゃないぜ。

だけど今は、トキめいている場合じゃなくて。

「いいですよって言ったんですよ」

こういう時の僕の顔は今一体どんな表情なんだろうなあ。

きっと、いつもと変わらない笑顔で笑ってるんだろうけど。

「お前の目的がわからない」

先ほどのような余裕のある表情は既に無く、訝しむような視線を隠そうともしない。

「目的なんて、ただ、一つ頼まれて欲しいだけですよ」

「……？」

キョウ様についていたのも、ここまで組織のために頑張ってきたのも、このためだ。

「ファイヤーは差し上げます。手柄も全部ナツメ様一人のものでいい」

だから。

「だからその代わり、僕を組織の研究室に入れてください」

「研究室？」

「ええ、タマムシシティのゲームセンター、その地下にある研究室ですよ」

下っ端には明かされていないはずのその情報に、ナツメ様は余計警戒心を強めたけれど。

「あそこに、ナツメ様の権力で僕を配属させてくださいよ。それがファイヤーを譲る条件です」

ナツメ様の隣にいるファイヤーは、どうやらまだ僕らしい。

それはまあナツメ様が取引を持ち掛けてきた時点でわかっちゃいるけど、なんとなく感覚でまだ僕の手持ちなのだと実感する。

曲がりなりにも一応はトレーナーだからね。

“さいみんじゅつ”で無理やり交換という形にすればいいのにと、思ったけれどそんなリスクを冒さずとも手にできると踏んでいるだろう。

なにせ僕は得体の知れないスーパーパーラーキーですから。得体の知れなさで言ったら一、二を争うまでである。

「……お前の目的はなんだ？」

先ほど一度した質問を、もう一度口にするナツメ様はよっぽど僕を警戒しているらしい。

「キョウを裏切ることになんの躊躇いもないのか？」

「いやー、申し訳ないなーって思いますよ。でもほら、自分の命のほうに大事じゃないっすかー」

「いいや、嘘だな」

ナツメ様はエスパータイプのエキスパートなのと同時に自身も超能力を扱うサイキックガールだ。

が、それが一体どんな超能力なのかを僕は知らない。

もしかしたら、人の心を覗けるようなそんなものだったら。

「お前は、他人の事などどうでもいいのだろう。自分の事しか考えていない。サカキ様への忠誠心など皆無だ」

そんな僕が、なぜファイヤーを捕まえることができたのか。そう言いたげな顔だなあ。

散々な言われようだけど、まあ概ね当たっているので反論できない。

「教えろ。お前の本当の目的を」

「・・・別に。隠すほどのものでもないんですけどねえ」

いやむしろ、積極的に開示していきたいまでであるが。

「ナツメ様はそれを知ってどうするんです?」

「勿論、この組織に害あると思えばお前を排除する」

うーわー、ほーらほらほら。

だから安易に喋らんないんだよこの人には。

ナツメ様が言った通り、僕はこの組織に一ミリだって忠誠心などないし一ミリだって愛着もないけれど。

だけど、それでも辞めるわけにはいかないんだよ。それだけは絶対に。

少なくとも、ゲーセンの地下の施設を調べるまではね。

「本当に大したことないですよ。まあ、そうですね・・・」

このままダンマリだと勢いで断罪されそうなので、かといって真実を言う気にもなれず僕はフワツと伝えることにした。

だって、なんか癪じゃん。そう思う気持ちは僕にだってある。

「個人的な恨みですよ」

「なに?」

別に?は言っていない。本当に個人的な恨みだ。

それを晴らすために、僕はこの組織に入った。

「つまりは憂さ晴らしですね」

「・・・」

あーあ、考え込んじゃった。

変なところで真面目だなあこの人。

僕の言葉に?偽りはないか、それを吟味している間に僕は言葉を重ねる。

「詳しくいってもいいんですけど、それをやるならその前に一つ質問

「していいですか？」

「この組織に入った目的は色々あるけど、その中の一つにナツメ様にこの質問をすることは含まれている。」

「ナツメ様の超能力つて一体どこまでの超能力なんでしょう？ スプーン曲げ？ 物体浮遊？ もしかして、予知能力とか？」

「そこで、僕は一旦言葉を区切る。」

「より、重みを増すために。」

「より、重要だというように。」

「神通力とか、あつたりして」

神通力、つまりは人の心を読める能力。テレパシーともいうかな。

「もしも、もしもナツメ様にその能力があるのなら。僕はあなたの忠実な部下になっていい。僕が握っている、他二匹のポケモンの情報だつて差し上げましょう」

「.....」

かつてない真剣な表情の僕にナツメ様はまた考え込む姿勢を見せる。

「考える、ということとはそこに入り込む余地があるということだ。」

「なぜそこまでする？ キョウを裏切り私の庇護下に来ないというのならお前はどの道長くいられない。例えば研究室が特別な場所で逃げ場になるとしてもだ」

「別に、逃げ場としてあそこに行きたいわけじゃないです」

「それもこれも、全部話すのは答えを得てからだ。」

神通力が、テレパシーが、ナツメ様にあるのかどうか。

「.....率直に言えば、ない」

その言葉に、僕の心は多少さざ波たったけど。

「そうですか」

返事を返すくらいはできた。まあ元よりそこまで期待もしていなかった、というのほ？ だけど。

あー、案外シヨックだな。

自分の心にビツクリだ。僕はもつとクールな奴だと思つてたぜ。

「だが、似たような事はできる。私のユンゲラーでな」

「………なんです、揺さぶりのつもりですか？」

僕の言い回しが気に食わなかったのか、ナツメ様の表情は嗜虐的だ。

「そうではない。私のユンゲラーは少々特殊でね。『さいみんじゅつ』で本人の記憶を揺さぶることができる」

記憶を揺さぶる？

「そう。本人が忘れていた記憶。思い出したくない記憶。それをエスパーの念で映し出す。それがこのユンゲラーの『さいみんじゅつ』よ」

「ははは」

いつけない、思わず笑いが出ちゃったよ。だつてさ。

「一番欲しいものが、ここで手に入っちゃったよ」

ああなんて、なんていい日だろうか今日という日は。

これもあれもそれも、日頃の行いつてやつ？

「お願いします。それ、僕にかけてください」

「私が言うのもなんだが、本当にいいのか？ 忘れた、思い出したくない記憶というのは大抵ロクなものじゃない」

ああ、知ってるよ。そのロクでもない記憶を僕は揺り起こしたいのさ。

「………フン」

僕の表情が一ミリも変わらなかったことに不満げなナツメ様のパチン！という指鳴らしと共に景色は一瞬で変化する。

劇的に、そんな言葉が頭に浮かんだ。

「うん？ 家、か？」

ナツメ様はもつとおどろおどろしい場所だと勝手に思っていたのか、ちよつと面食らっているが。

そんなの僕にはどうでもいい。今の僕には一ミリもそつちに関心を抱けない。

「ハア……ハア……」

動悸が、段々と早くなる。意識していないのに、心臓が早い。苦しい。

痛い。

見たくない。

これから起こる光景を、僕は知っている。

何があつて、結末はどうなるのか。

それを僕は嫌というほどに、知っている。

ナツメ様が、今どんな表情で僕を見ているのか。それを確かめる余

裕は、無かつた。

「お帰りなさい！お父さん！」

小さな、少女の声。

「ただいま」

大柄な、男の声。

「今日はシチューだよ」

細身でスラリとした女の声。

「おお、お前の好物だな。＼カラー＼」

そして。

そして。

「うん!!今日ね!僕の誕生日だから!!」

元気に、快活に、幸せを幸せだと感じることにすらできない。

小さな、僕の声。

「ねえ、これがお前の見たかった光景?」

あれから、数時間が経った。

依然として風景は変わらず、リビングで小さな僕らは遊んでいた。

お父さんもお母さんもそれを微笑ましく見守っている。幸せだ。幸せだろう。これのどこにも歪さなんて感じない。ナツメ様はどうに飽きて枝毛をいじっている。

僕は、未だ動悸が収まらずにただただその光景を見やるばかりだ。

「じゃあ、そろそろ寝ましようね」

お母さんが優しい声色で僕らを諭す。

ああ、こんな声だった。こんな感じだった。

そして僕は。

「ええー、まだ眠くない！」

そうやって反抗する。いつも通り元気が有り余って。

そういえば、この日はマサラの子供たちとポケモンバトルをして負けたんだけ。

ぶーぶーと文句を言う僕を宥め、目をこする妹と共に寝室へと移動させられた。

みんな川の字になって寝た。

そして、皆が寝静まった頃に僕は。

行ってしまったんだ。外に。

二階にあるモンスターボールを、カラカラが眠っているモンスターボールを持ち出して。

秘密の特訓だと言って、僕は外に出た。

何度後悔しただろう。何度時を戻せればと、思っただろう。

この時のことを、僕はきつと一生忘れないんだ。

「じゃあ、お前は何を見たいのだ」

どこからだろう。いつの間にか、声に出していたらしい。ナツメ様が問いかける。

何を？

「そんなの決まってる。この先をだ」

背中では脂汗で気持ち悪いし、体の中はしっちゃんかめっちゃんかき乱されたように気分が悪い。

吐き気がする。頭痛がする。関節が痛い。体が重い。

見なければいけないけれど、見たくない気持ちのほうが百億倍強

い。

一回だけ、これつきりだ。

そう、自分を奮い立たせなければ今にも逃げ出しそうだ。

そーっと、抜き足差し足で外に出ていく小さな僕を見送って、場面は転換する。

「これはお前の記憶を再生しているにすぎないから、お前が知らない、見ていることまでここで知ることができない」

補足するようにナツメ様が言う。大丈夫、僕が見たいのは、この先なんだから。

突然に、視界が真っ赤に染まった。

轟々と、燃え盛る炎。

黒々と朽ちていく家。

匂いは感じないし、熱も感じないのがこれが現実ではないと知らせる。

「な、なにこれ・・・？」

そして、僕は戻ってきた。

息は切れ、瞳は大きく見開かれている。

信じられない。そんな言葉が突き刺さるように発せられていた。

「お母さん！お父さん！レイン！！」

妹の名前を叫んでも、両親のことを呼んでも。

帰ってくるのは、炎の燃える音で。灰の舞う景色だけだった。

「は」

現実の僕の呼吸ができない。でも、ここで意識を手放すわけにはいかないんだ。

本当に見たいのはこれじゃない。この一步先なんだから。

一步、その一步を踏み出すように僕は苦し紛れに手を伸ばした。

「ああ」

そうして、ようやく見つけた。

真っ赤な景色に佇む。

“真っ黒いポケモンを”。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

9話 「辛さを乗り越えてこそ」

「黒いポケモン・・・あれが、貴様の見たかった光景か？」

ナツメ様のその質問に、僕は答えることができない。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

先程見た光景に、心臓が飛び出るのではないかと錯覚するくらいには動揺していたからだ。

言葉はおろか、呼吸をするので精一杯で考える余裕すらない。

ひどいなあ。今の自分を人に見られていると思うと寒気がするね。

黒歴史確定だよ。

でも、それでも。この年で黒歴史を作った甲斐ってやつくらいはあつたかな。

「・・・ええ、そうですよ。あれが、僕が欲していた情報であり、あれこそが僕がこの組織に入った理由だ」

呼吸を整えるまで待つてもらって、ようやく僕は口を開くことができました。

あの光景。家が火事になって、僕だけが助かって、そしてその中心にいたポケモンのこと。

それが僕は知れたかった。この十余年ほどずっと。

「まだわからないな」

ナツメ様の声からとげとげしきはなくなったけど、それでもまだ聞きたいことがあるらしい。

「あの火事は確かにお前のトラウマだろう。だが、それとあのポケモンに因果関係があると、どうして断言できる？」

「ああ、そうですね」

ナツメ様の指摘はもつともだ。確かに、あの光景だけじゃあ断言はできない。

偶々、偶然、何かの拍子で見知らぬポケモンが迷いこんで来た時に火事が起こった可能性だってゼロじゃない。

天文学的確率だけど、なにせ僕は知らない。真実を知らない。

真実を知らないということは、どんな可能性だってあり得るということだ。

とはいえ。

無論、僕だって最初からあのポケモンを犯人だと思っていたわけじゃあない。

「二階がね。燃えてないんですよ」

僕の家は火事で燃えた。

でも、跡形もなく全焼したわけではない。

一戸建ての二階、つまり僕と妹のレインの部屋だけはなんの火も移っていなかったんだ。

それっておかしい話だろうか？

「勿論、確実に100%あの黒いポケモンが僕の家を焼いて、僕の家族を奪った。とは言えません。でも、何か関係がある。そう思うには状況証拠が揃いすぎでしょう？」

なぜ突然火事が起きたのか、なぜあの場所に、炎のど真ん中に見知らぬポケモンが立っていたのか。そもそもどこから入ってきたのか。これらの疑問を解決するにはあのポケモンに会うしかない。

まあ、会ったら何するかわからないけど。

「だから、それを知るためにも僕は会いたいです。あのポケモンに」
そして、もし犯人だったら。

きっと僕は。

殺してしまうんだろう。

「だが、問題が一つある」

「お、奇遇ですね。僕もです」

ナツメ様、やけに親身になってくれるなあ。同情でもしてくれたのかしらん？

まあでも、僕よりもよっぽどつらい目に合ってるのはナツメ様のほうだろう。勘だけど。

人と違うというのは、それだけでもう茨の道なのだということ。僕は知っている。

「あのポケモンの、姿形がわからない」

おお、ハモった。

なんてどうでもいいことに喜んでいると、そんな顔が気に食わなかったのだろう。お腹にキックを食らった。

「いやー、まさか自分の視界があそこまでぼやけているとは思いませんでしたよ」

てつきり、そのポケモンの姿がくつきりはつきりきつちりと、映し出されるものとはばかり思っていたが。

「もう、ちゃんと精度上げといて下さいよー」

「なぜ私のせいになっている？殺されたいのか？」

冗談が通じないんだこの人。

虎でも狩るのかと言わんばかりの眼光に僕は首をすぼめる。

「いいか、言っただけだがこれは知らないことを知るような便利な代物じゃない。あくまで忘れていることを思い出させるだけだ。強制的にな。だから、お前が知らないことまで知れるわけではない」

よっぽど自分のユンゲラーを馬鹿にされたのが悔しかったのか、事細かに説明してくれる。

なるほど、つまりは幼いころの僕はちゃんとあのポケモンを視認し

ていなかったわけだ。

まあ、ちっちゃかったしなあ。ああいう年頃ってなんか世界の境界線が曖昧じゃん？僕も多分にもれずそうだったわけだ。

余りの高熱とショックで直ぐに気絶したつてもあるかな。にしては、家族の死体だけはきっちり見えたけど。

.....

「そっか、それじゃあ僕の用事もうないんで。帰してもらっていいです？」

さあ帰ろ帰ろ。帰ってお風呂入って寝よう。あ、ここで寝たから寝なくていいかな？

「フン、貴様。タダでこのナツメ様を使う度胸があるのか？」

わあ、その凄みっぷりはファイヤーと対峙したときよりも怖い。

「はいはい、わかってますよ。ファイヤーですよね。あげますあげます。交換という形ではなく、差し上げます」

縄を解いてもらい、空の、つまりはファイヤーが入っていたスーパールールを投げてよこす。

「フフ、これで私が一番乗り」

その顔は邪悪そのものといった表情で。それでも絵になってしまいうのだから凄い。

「それで？ナツメ様はどうしてそこまでこの組織に忠誠を誓ってるんです？」

僕だけ過去を暴露するのはなんだか割に合わない。まあ、好きでやったことではあるけど。

「決まっている。サカキ様のためだ」

へえ、そこまであの人のこと好きなんだ。

顔を見ればわかる。恋する乙女の顔になってるもの。

そのあと延々とサカキ様の魅力について語られそうになったので、僕は早々にその場を後にしようとした。

のに。

「さて」

首根っこをムンズつとつかまれて、僕は借りてきた猫のようだ。

「なんです?」

「まだ、フリーザーとサンダー。その二匹の情報を渡してないだろう
お前は」

かーっ。めぎといなあ。

低く冷たい声で僕に催促してくるナツメ様に僕は両手を上げるこ
としかできない。

「はいはいわかったよわかりましたよー、渡せばいいんでしよう渡せ
ばー」

正直、今日のナツメ様のおかげで一步前進、とはいかないまでも半
歩くらいは前進した。

一つ、確実に僕が追っかけているポケモンが存在したこと。

一つ、そのポケモンが黒いということ。

二つ目はあるかどうか怪しい小さなのだがおまけとして入れ
てもいいでしょう。

少なくとも、手がかりもくそもない今までよりは百億倍マシだ。

特に僕が作り出した幻想ではなく、ちゃんと実在していたつてとこ
ろが大きい。

これがあるのとないのじゃ、モチベーションの差に月とスツポンの
ウンコくらい違うもんね。

「フリーザーはふたご島に、サンダーは無人発電所を根城にしている。
らしいっすよ」

「らしい?」

「ええ、僕が行った時には拝めませんでした、運が良ければいるん
じゃないですかね?」

少なくとも、ファイヤーはいたのだ。信憑性は割と高いとみていい
だろう。

もう僕は行く気もないし、必要もなくなつたから。後はキョウ様の
報復に気を付けて早々に組織を抜ければ万事大丈夫。

「……そう簡単に抜けられればいいけれどね」

確かになあ。ナツメ様の言う通り、次なる僕の心配事はそれだ。

その為にも、できればフリーザーとサンダーの情報は取っておきた

かったけど。ま、なくてもいいや。そんなに支障はない。

早々に見切りをつける、これ物事を進める上に重要だから覚えておくように。

「いいわ、アナタの事。毛の先っぽほどは気に入ったから。抜けるときのバックアップくらいはしてあげ・る」

ほっぺたを撫でられ、いい匂いがする。

わあ！なんだいなんだい！いいことはするもんだなあ！もしかしてナツメ様って僕のこと好きなの!? ナツメちゃんって呼んでいい!?

なーんて、僕これなんていうか知ってるよ。

強者の余裕。上から目線って言うんだ。僕がこの世の中で嫌いなことベストオブザイヤード堂々とたる一位だね。

「ええ!? ホントですか!?! いいんですか!?! 頼んじやって！僕絶対忘れませんから！拷問とか受けたらいいの一番にナツメ様の名前を出しますね！」

でも僕はそんなこと言ってもらえない状況だってわかってる。嫌いなことでも甘んじて受け入れなきゃね。

「やっぱりやめようかしら」

僕の反応をみて、ゲツソリとした顔つきになったナツメ様。

はは、ざんねーん。もう引き戻せませーん。ここまできたら死ねばもろともデース。

「それじゃあナツメちゃん。研究室の件。よろしくね」

「なんでちよっと距離を縮めているの? 殺すわよ」

アツハツハと大笑いしながら、僕は殺気溢れるその部屋から出ていった。

「あ……ぐう」

視界が歪む。体がよろける。上手く立てない。

壁に手をつけて、嗚咽する口を無理やり塞ぐ。

あー、情けない。たがが過去のトラウマを見たくらいでこんなにグロッキーになるだなんて。

天国の家族に泣いて笑われちまうや。

「キユウ？」

「はは、心配してるのかい？」

いつの間にかボールからでたズバット達が心配そうに見つめている。

「大丈夫、すぐ、元に戻るからさ」

乱れた呼吸は未だ戻らず、崩れた体調は回復の兆しすら見せないけど。

それでも、心配してくれる。その事実だけ。それだけを今は噛みしめよう。

そして僕はようやく念願の、研究室へと配属されることになった。

ではまた。次のお話で。

10話 「知り合いの知り合いって微妙な関係だね」

「あそこの数値が少し高いな」

「今度はこっちを投入してみよう」

なんでこう研究者つてのは暗いところが好きなんだろうね。

光がさすことがない地下室を、薄暗い空気と、いかにも目に悪そうなブルーライトが照らしている。

やっとのこさで、ここに配属された僕は黒い隊服に身を包んだ仲間と一緒に楽しくお仕事に精を出している。

ナツメ様には感謝しなくっちゃね。

「おい！そっちにいったか!？」

「いえ!?!こちらにはきてません!！」

「くそ！なんとしてでも見つけろ！逃がすな!！」

ん？なんだか研究室らしくないな。バタバタと騒がしい。

研究室つてのはもつとこう敵かな雰囲気で、物静かなところだろ？

それがどうだいこの喧騒は。

複数人の足音と怒号がここまで響き渡ってくる。

パソコンと研究員しかいないこの部屋には僕しか黒い服を着ている人間はいない。

ので、何が起こっているのか知るすべがないのだが。

「術がないなら、こちらから行けばいいじゃない」

持ち場を離れるということになるけど、しようがないよね。人手が足りなさそうだもん。

空気を読んで颯爽と行動に移すのが日本人の良い所さ。

幸いにも研究員たちは自分の研究に集中している。僕一人いなくなったところで気づきやしないだろう。

そそくさと抜き足差し足でその部屋から飛び出た僕は、とりあえず何が起こったかを知るべく、人を探る。

「・・・ほーんと、こういう時に限って捕まらないんだから」

あるよねこういうの、いらなくときにはうざったいほどいるくせに必要な時にはいないんだ。まったく、何のために数そろえてんだよ。

ああいや、数はいないのか。

僕は僕の愚痴に首を振る。

ここタムシシティのゲームセンターにある地下施設は一般的に秘匿されている。それは組織の中でも然りで。

知っているのはごくわずか、それこそ幹部連中並の力を持った人達だ。

ということは当然、人員をそんなに割けるわけではないということになる。

え？そんな秘匿されてる情報を、なぜ下っ端である僕が知っているかって？

「それは、カツラさんに聞いたのさ」

会話の途中でポロツとね。あの人、おつちよこちよいなとこあるから。

おじさんのおつちよこちよいがどこかに需要があるといいんだけど、結婚できるのかなあの人。

「きゃー」

「つと、ん？」

なんてことを思いながら歩いていると、ふと廊下の角で女の子とぶつかる。

・・・女の子？

「どうしたのかな？道に迷っちゃった？良ければこの僕が案内してあげるよ？」

即効即決即英断。美人にやさしくしろって死んだばあちゃんも言ってたよ。

手を取って最大級のスマイルを浮かべながら、僕はその美人に優しくした。

「はあ!?なにアナタ!?悪いけどねえ!こっちは急いでるの!」

バチツと握った手を跳ね除けられ、女の子はこっちを見向きもせず

に走り去って行ってしまった。

長髪に石のイヤリングが印象的な女の子だったなあ。ちよつと小悪魔っぽかった。

優しくしたのに。

「さて、これはなんだろう」

そんな女の子が大事に隠し持っていたのは何かのフロツピーデイスク。

僕ってば手癖悪いからさあ、すぐ女の子に手を出しちゃうんだよね。こうやってさ。

フロツピーってことは、何かのデータだろう。

この組織に女の子がいるのは見たことがない。確率としてあの女の子は部外者の可能性が高い。

僕ってば組織に従順だなあ。こんなに貢献してるんだからそろそろ下っ端扱いは卒業でいいんじゃないかしらん？

せっかく伝説の三匹を捕まえるリーダーになれたのに、結局成果上げられずに下っ端に逆戻りだもんな。ま、興味ないからいいけど。

さて、おあつらえ向きにここは研究所。パソコンなんてそこらに小石のように転がっている。

「ああー、僕ってば運が良すぎて困っちゃおう♡」

これも、やっぱり日頃の行いってやつだよな？

「.....」

よし、結論から簡潔に言おう。

フロツピーの中身はミュウの情報が目一杯に詰まったものだった。

そこには僕がマサラで撮った写真から始まり、ミュウの目撃情報や捕獲手段の候補など、まさに攻略情報サイトだ。

「つまんねえの」

てつきり僕は、彼女が知られたくない彼女の秘密的なものが入っているのだとルンルン気分であけてみたらこれですよ。人生そう上手くはいきませんね。

上がったテンションは行き場を失い、空中に霧散する。

大体なんでミュウの情報が詰まったこのフロツピーを持ってたんだろう。

大方、先ほどの騒ぎは彼女によるものだろう。ミュウの情報といえば、この研究室の存在とともに組織の中の二大タブーだ。取扱いには十分注意している。

それをあんな少女にとられるんだからこの組織の警備体制は疑う余地しかないね。

「おい！そっちに行ったぞ!!」「追え！逃がすな!!」

お、どうやら見つけたらしい。さすがに捕まるのも時間の問題だろう。

さて、この研究室に来た目的ってやつを今のうちに果たすとしてもかね。

「まったく駄目だぜ。敵が外にしかないなんて言う固定観念は」

研究室の一番奥。いかにも秘密が眠ってますよー、な雰囲気のある場所に僕の目的のものはあった。

「これが、人工的に作られたポケモンか」

特殊な培養液に浸かっているのはポケモン、と呼んでいいのかはわからない。

なにせそのポケモンは“体が半分しかできていない”のだから。

「えー、なにになに。人工的にミュウの遺伝子から作り出したポケモン。我々は名前を『ミュウツー』と名付けることにする」

はー、安直だな。

ま、名前なんぞはどうでもいい。重要なのはこいつがどんな能力を持っているか。それ一点につきる。
が。

「わずかな遺伝子サンプルから完全体を作るのは不可能だと思われる……」

研究レポートには最後にそう書かれており、どうやら完成はしないらしい。

ふーん。

今現在、ポケモンの総数は150種だと言われている。そのポケモンたちのどれもが僕の復讐の相手を探すような、役立つような技を覚えていたり、はたまた復讐の相手そのものだったり。

は、していない。

つまり今現在、僕がほしいと思うポケモンはいないわけだ。

ポケモンを探すんだ。ポケモンのことも少しは知っておかなくっちゃやね。

が、それは今現在の話。

もし、新たに発見されたポケモンがいたとしたら。

僕としては、調べないわけにはいかないんだ。例えば望みなんかなくたって。

復讐が、僕の生きる術なんだから。

「けど、どうやら君は僕の望んでいたポケモンじゃなかったわけだ」

自分が具体的にどんなポケモンを望んでいるか、それすらわからないけれどね。

この分だと、多分ミュウも似たようなものだろう。幻だろうが、僕の役に立たないのならいい。

さて、これで早くもこの研究所にいる意味もこの組織にいる意味もなくなってしまった。

「おい！こつちだ!!総員で囲め!!」
「……仕方ない。最後に一つくらい仕事をこなしてから行くとしますか。」

「あーら、こんなか弱い少女一人に随分と大げさなことね」
「やっぱり、さっきの美少女だ。」

大勢で囲んでいるのは先ほどぶつかった少女。人ばかりでよく見えなけれど、雰囲気でわかるよ。美少女はね。

「さあ！渡してもらおうか！ミュウの情報が入ったディスクを！」

「それはダメよ……だってミュウちゃんは」

美少女は一旦そこで言葉を区切ると。

「アタシが捕まえるんだもーん♡」

「ああ!？」

大事な大事なフロッピーディスクを、手持ちのポケモンに啞えさせた。
「……あれ？」

「オホホー！あんまり強力な攻撃だと、ディスクが壊れちゃうかもね」
「いやいや、それ偽物ですよん。」

僕のポツケに入っているディスクは紛れもない本物だ。ちゃんと今もある。

となると、あれは偽物ということになる。

ハツタリをかましているわけだ。この人数の大人相手に。
(ヒュ、やるね)

口笛を吹きながら僕は感心する。その胆力に。

「うぬうーと、とにかくディスクを傷つけないように攻撃するんだ！」
リーダー格の男はそう自身のカイリキーに指示をする。

が。

「フフッ！ディスクを気にして本気を出せないのかしら。悪いわあ」
困惑しているカイリキーを嘲笑うかのように少女のポケモンは攻撃をかわしていく。

ものすごく楽しそうに少女はからかう。

「でも、トレーナーバッジを二つも持っているあたしに挑もうなんてちよつと身の程知らずってこともあるわね」

キラリと光るイヤリング。ああ、あれトレーナーバッジだったんだ。綺麗な石だと思ってた。

意外な事実が詳らかにされたところで。

「ぐ、ぬ。手加減していれば付け上がりやがって・・・」

どうやら怒りが頂点に達したらしい。リーダーは新たにポケモンを呼び出す。

パシリ、パシリ。と尻尾が揺れているそのケンタロス。

「フフフ、こいつはサファリゾーンのリーダーだったポケモンだ。尻尾の指揮で複数のポケモンを操れる群れの長よ」

リーダーの言う通り、ケンタロスが出てきてから他のポケモンの顔つきが違う。

「ああっ！」

多勢に無勢。さすがに一匹じゃ切り切れなかったようで、少女のポケモン、カメールはディスクを手放してしまう。

まあ、偽物なんですけどね。

「よしー！」

だからー、喜んでるところ悪いですけどー、それ偽物なんですってばー。

口にはしないけれどね。心の中で静かにツツコムだけ。

「や、やばー！選手交代!!」

少女はカメールを引っ込めて。

「フハハ！なんだそのポケモンは」

おお、これはこれは珍しい。メタモンを繰り出した。

けど、メタモンといえば相手のポケモンに変身することができるだ

けのポケモンだ。

能力や技をコピーすることができると、この大勢の中それが果たして役に立つのか。

「踏みつぶせー！」

ケンタロスは思い切り助走をつけてタツクルしてくる。

「大変だ!!」

「ん？」

そんな少女のピンチになぜだが、僕の隣にいた隊員が飛び出していった。

おいおい、なにになに？あの女の子に惚れでもしたの？

なんて思ったけど違った。

(レッド!!?)

よくよく顔を見てみると、それは黒い隊服を着たレッドだった。紛れもなく。

いつの間に組織に入ったんだろう。

「あらーあなた！助けに来てくれたの？嬉しいわ！」

「冗談言ってる場合か！お前のポケモン落ちちまったぞ！」

ほお、どうやら二人は知り合いらしい。レッドめ、ポケモンバトルにしか興味ないとばかり思ってたけど中々どうして隅に置けないじゃないか。

さて、そろそろ潮時かな。

この人数、この状況。この戦闘力の差。

一人味方になったからってどうこうなるもんでもない。

数つてのは絶対の力だからね。

もうその戦場に興味がなくなった僕はぐるりと回転してその戦場を後にした。

「あそこだな。ヤツラのアジトは」

草葉の陰に隠れる人影が二つ。一つはレッド。もう一つは少女のものだった。

「しっかし、せつかく逃げたのになんだってまたヤツラのアジトなんか」

「しっ！静かに！いい？さつきロケット団に取られたのはニセモノなの」

「ええ？またあ？」

呆れたように返す言葉には、言外に一度その現場を見たかのようなニュアンスが含まれている。

「じゃあ、本物は？」

「・・・無いの」

「はあ？」

今度は訳が分からないというような呆れの言葉。

「きつとあそこで落としたんだわ」

「落としたって何をだい？」

「だから！本物のミュウが映ったディスク・・・ってきやあ！」

やあ。呼ばれてないのにジャジャジャジャーン。カラーだよ？

「カラー兄ちゃん!？」

レッド、さつきから驚いてばっかだね。

「そうさ。カラー兄ちゃんですよ」

「ああ！アンタさつスキの！」

おや、どうやらぶつかった時のことをまだ覚えているらしい。些細な事を覚えているとは細かいお嬢さんだ。

「さつき？ブルー、兄ちゃんのこと知ってんの？」

おっと、まずい。

さつきはゴリゴリ隊服を着ているときに出会っちゃってるからな。それにアジト内だったから言い訳ができない。

レッドにバレると色々めんどいからな。ここはごまかさないと。

「それより、探し物ってのはこれかい？」

僕はより重要なことで塗りつぶすようにフロツピーディスクを掲げた。

「ああ！やっぱりアンタが盗んだのね!？」

「言い方気を付けてよ。盗んだんじゃないやなくて拾ったの。わざわざ返しに来たことに感謝こそされ、非難される言われはないなあ」

敵対心剥き出しの少女、名前はブルーっていうんだね。

そんなブルーをいさめながら、僕は善良な市民らしく拾ったものを持ち主に届けた。勿論、黒い隊服は脱いでるよ。

「はい、じゃあちゃんと返したからね。あ、データは無事だよ。頑張つて」

かつこよく颯爽とその場を去ろうとしたのに、なんでかブルーに呼び止められた。

「ちよっと待った！目的はなによ!？」

最近そればかり聞かれるなあ。

「目的なんざないよ。拾ったものを届けるのに理由なんかいるかい?」

どうやら僕の答えじゃ不服だったらしい。訝しむ視線が変わることはない。

まあ、あの危機的状況から見事脱出せしめて見せたそのアイデアに敬意を表するかな。

「そうさなあ。強いて言うなら嫌がらせ?」

「嫌がらせ?」

今度はレッドが不思議がる。

「そうさ、ロケット団には皆迷惑してるからね」

「・・・そう」

一応の納得はしてくれたいらしい。相変わらず敵対心?き出しの顔

は変わってないけど。

悲しいなあ。僕にも色目使つてよ。

「まあ本物があるならこっちのものだわ！ほら！さっさと行くわよ！？」

「ちよー！引つ張るなって」

ブルーが引つ張り、レッドが連れてかれる。案外お似合いだったりして。

「ま、僕には関係ないけれどね」

そう呟いて、僕は言葉を続ける。

「ねえ、君もそう思うだろう？」「ミュウ」

「、」

後ろで輝きを放っているポケモンに向けて。

なぜノコノコ捕まる危険性を負ってまでここに来たのか、とか、なぜ僕の目の前に再び現れたのか、とか。

聞きたいことは山ほどあるけど、聞かない。

だって、君。人間の言葉しゃべれないもんね。

「そしてこれで確信したよ。やっぱり君は僕には必要ないってね」

組織にいれば捕まえるチャンスはめぐってくるかもしれないけれど、その必要性もなくなった。

「、」

僕から伝えることはもう何もない。

それを悟ったのか、一声も発することなくミュウは空高くへと飛び立った。

「ホント、何し来たんだか。心なんてわかりやしないね」

そうして、また次のお話へと続いていくのだ。

11話 「酒に酔ってたわけじゃない」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

息も絶え絶え、体はボロボロ。

まったくもって僕らしくもない始まりだ。もっとスマートに始めたいもんだけどね。

「まったく、マチス様だったら手加減って言葉を知らないんだから」

黒焦げになった自分の体を見て、そう一人つぶやく。

まともに電気技を食らったからな。いまなら僕、電磁波くらいなら出せる気がするよ。

タママシの街を、なんとか壁伝いに歩いていく僕の姿は夜中ということもあつてまだ見つかっていない。

見つからない。どういふことかと聞かれれば、僕は今日をもって組織を抜け出したのだ。

今現在、組織の追つてから逃走中。これが僕の現状。

ナツメ様の力、研究室のポケモン。僕が組織にいた目的は概ねこの二つ。

黒いポケモンの正体を、それでなくても何か一つくらいの情報をあわよくばゲットしたかったがその願いは叶わなかった。

組織にいれば全国各地のポケモンの情報が集まってくるものと思つていたが、それも結局空振り。

何一つ、入る前から進展していない。これじゃ何のために悪事に身を染めたのか、あーあ、後悔つてのはこういうことをいうのかね。

「はは、ムカツクからちよつと反抗してやっただぜ」

一つのモンスターボールを手に持ち、僕は不敵に笑う。ちよいと遅めの反抗期だ。

「・・・チツ」

やばい、体力が尽きた。

ついに自分の体重を支えることすらできなくなって、ドサリと僕は道端に倒れこむ。

くそ、こんな最期は望んじやいねえんだよ。

「せめて、キミくらいは、逃げておくれよ」

本当に、最後の力を振り絞って僕はモンスターボールを開けた。

「――、」

ボールから出たポケモンは怯えながら僕のほうを見る。

「おいおい、僕の、心配かい？随分と余裕だな」

こんな実験体に心配されるくらい、今の僕はヤバイらしい。自覚はあるよ。

「さっさといけ。組織の追ってだって、君を狙ってるんだ・・・から」

ああ、なんだか緊張の糸が解けた。キミを逃がすことが、どうやら僕の意識を保つセーフティとなっていたらしい。存外、僕にもいいところがあるもんだ。

僕の言葉に、怯えは相変わらず消えていないけれどそれでもそのポケモンは脱兎のごとく走り去っていった。

「・・・あー、せめて温めてもらえばよかった」

この時期に、この格好で夜空の下は寒いや――。

目が覚めた。

毎朝同じように、朝が来たことを知らせるアラームが鳴るわけでもなく。自然と目が覚めた。

「いっつ・・・」

体全体が痛い。寝ぼけた頭で記憶を揺り起こす。

えーと、確か昨日は組織を抜け出そうとしたらマチス様に見つかつ

て。

そんで一方的にやられて、ボロボロにさせられたんだった。

「・・・嫌なこと思い出しちゃったよ」

朝から気分が悪い。さて、良いことを考えよう。

・

なーい！いいこと一個もなかった!!

よし、つらい現実から逃げるべく現状把握に努めよう。

どうやらここは僕の知らない家であるらしい。

こういう時は、純然たる事実のみを把握したほうがいい。

まず、家は確実に豪邸だ。僕が寝ているのは和室の一室だが、布団のフカフカ具合と畳の匂いでわかる。

伊達に組織の金で豪遊してきてないぞ。

他にも理由がある。

僕の体だ。

昨日あんなにボロボロだったのに、丁寧でかつ正確な治療が行われていることがわかる。あのままあそこで野垂れ死にできる状態から体を動かせるまでに回復しているのだから。

優秀な医者に診てもらったのだろう。

痛いのはほら、我慢すればいいだけだからさ。

さて、事実確認終わり。

流石にこの一室だけじゃわかる情報などたかが知れている。

「あら、起きましたの?」

「ええ、そりやもうぼっちし」

襖から零れる光に、眩しさに目を細めながら僕は口を開く。

まるで後光がさしているかのような登場。女の子、ということだけが辛うじてわかる。

「ええと?知り合い、じゃ、ないですよね」

「ええ。あなたが私の家の前で倒れていたのを、家の者が発見しましたの」

これ見よがしなお嬢様口調。なるほど、所作からも育ちの良さがにじみ出ている。

というか、そうか。人様の家の前でぶっ倒れていたわけかい僕は。「それはお手数おかけして。申し訳ないです」

「ええ、本当に」

わー、この人オブラートって言葉知らないのかしらん？

まあいい。見知らぬ人の家にこれ以上長居するのも悪いしね。

「それにしても、助かりました。あなたは命の恩人です。一生忘れませんよ」

よっこらせ、と痛む体に顔をしかめながらも僕は帰る支度をするべく服を探す。

あれ、そういえば僕なんの服着てたつけ？

「お探しの物はこれでしょうか？」

ようやく光に目も慣れてきたところで、僕より年下っぽい少女の声に振り向く。

手に持っているのは間違いなく僕の隊服。

あら、美人。そして、その美人には見覚えがあった。

「ねえ、〃ロケット団さん〃」

「これはこれは、誰かと思えばタمامシシティのジムリーダーさんじゃありませんか」

無論、面識はない。ただ、ロケット団という組織の都合上、〃正義のジムリーダー〃の顔くらいは目を通してしている。

目の前の少女、名前は、確か――。

「エリカです。タمامシシティの正義のジムリーダー。キャッチコピーは『しぜんをあいするおじょうさま』ですわ」

その表情は笑顔そのものだが、残念だ。敵意を隠そうともしていない。

仲良くなることは、難しそうだな。

「なぜ私の家の前で倒れていたのか、何を企んでいるのか。お話しで

きますよね?」

「どうやらその為にわざわざ敵である僕を手当てしたらしいが。」

「残念無念また来年ってね。悪いけど、君の家の前で倒れていたのは偶然だし、企みもなにもないよ」

この状況、完全に敵地ど真ん中。

なのは、ロケット団だった頃の話だ。

「そんな言い訳が「通用するんだなこれが」

エリカお嬢様の言葉をさえぎって僕は口を開き続ける。

「だって、僕。ロケット団抜けてきたばっかだもん」

ニコニコと言つてのける僕に、多少面食らうエリカお嬢様。いいね、優位性を保てるつてのは。

僕女の子には乗られるより乗るほうが趣味なんだ。

「それを、信じろ。というのですか?」

まあ、すんなりとはいかないよね。

「でもしょうがない。事実だ」

「……」

譲らない僕に、多少考え込む仕草をみせるエリカお嬢様。

「ここぞとばかりに僕は畳み掛ける。」

「大体、おかしいだろ?なんで敵地ど真ん中でこんな下つ端崩れが倒れこんでいるのさ。僕なんて、悪・即・斬で切り捨てられるよ」

「それは、そうですが……」

「どうやら何かの確信があつて言ってるわけではないようで。僕の言葉に揺れているのが丸見えだ。」

「はは、勝てるな。この僕相手に口喧嘩しようなんざ百億光年早いんだよ!」

「光年つてのは時間じゃなくて距離の話つてのは、勿論知ってるよね。」

「なーんて思っていたら。」

「……わかりました。一つギブアンドテイクと行きましょう」

「……んん?」

なんでか優位性が奪い取られていた。マウント奪い返された。

「ちよいちよい、僕は別に君らと敵対する気はないんだって」

こんな丸腰の元下っ端を掴まえて、ジムリーダーさんも暇なんですね。

「あなたにはなくても、あなたの組織にはあります」

そこで、とエリカお嬢様は言葉を続ける。

「あなたが本当に組織を抜け出してきて、我々と敵対するつもりがないというのなら証拠を見せていただきます」

「で、その証拠を見せたら一体全体僕にどんな利益があるっていうんだい？」

大した器の大きさだ。鼠一匹から搾り取ろうとしてるんだから。

「身の安全と、怪我の回復をお約束いたしましょう」

・・・これは痛いところをついてくる。

「確かに、魅力的だ。特に身の安全ってのがデカイ」

組織の追ってから身を守る場所が必要だったのは確かだ。

加えてこのケガじゃあ追ってから逃げるのも一苦労だろう。逃げ切れないとは言わないけれど。

「では、交渉成立ということだ」

「・・・たまには踊らされるのも悪かない」

なーんて掌で躍らすのなんて女の子くらいのものですが。

「それで？証拠って、いったい何を出せばいいのかな？ボスの正体？」

幹部三人の使うポケモン？それとも、本部の居場所とか？」

「――、」

はは、あからさまに動揺してる。顔に出やすいんだねえ。

別にロケット団に温情なんてないし、ていうか最後にマチス様に殺されかけたせいではぼぼ恨み一色だ。

だから知ってる情報は全部教えてあげてもいいんだけど。

「そうだなあ。面白いから一個だけ質問に答えてあげる」

「なっ！一個だけですか!？」

思わず大きな声を荒げてエリカお嬢様は立ち上がった。

「そうだよ。一個だけ。よく考えて質問してね」

「・・・あなたは！ロケット団の悪事に我慢ならなくなって抜け出したんじゃないのですか!？」

思うところがあつたのか、エリカお嬢様の音量は下がるところか上がっている。

ていうか、人の気持ちを勝手に決めつけないでほしいもんだね。

「悪事に我慢ならなくなって抜け出した、ねえ」

「なんです?」

「いいや、もとよりそんなものに興味はなかったなって思つてさ」

「悪事に興味がないのなら、どうしてロケット団なんかにお入りになつたので?」

大きな声を出したのが恥ずかしくなつたのか、少々しおらしげにエリカお嬢様は尋ねた。

「最近よく聞かれるなあ。それ」

どうしてどうしてって、皆そんなに他人に興味があるのかね。

僕は一ミリだつてないっていうのに。

「とある目的があつたのさ。でも達成できそうもないんで今時の若者らしくさつさと辞めたんだ」

いいだろ?今僕は自由の身だぜ?

「まあなんだつていいのさ僕の理由なんぞは。で?質問は決まつたかい?」

「・・・ええ。決まりました」

あら。案外すんなりと決まつたもんだ。それとも最初から決めていたのかな。

「実験体のポケモンのこと。それを聞きたいのです」

まつすぐと、芯の強いものの目だ。

レッドと同じ。まつすぐに痛いほどこちらを見ている。

「それでいいのかい?ボスの正体でも、アジトの本部のことでもなく?地下の隠しアジトのことだつて教えてあげられるぜ?」

「ならば、教えてください。あなたの正義で」

一ミリも歪んでいないその背筋が。

僕には威圧感にしか感じない。

僕の一個だけ質問に答えると言った回答がそれか。
曲げる気は、ないらしい。

「オーケー。僕の正義なんてものはちり紙にくるんで捨てるとして、その質問にはちゃんと答えよう」

凜としたエリカお嬢様の姿勢に感化など絶対にされないけれど、それでも約束くらいは守ろう。

「――以上が、僕が知ってる実験体となっているポケモンたちだよ」

「ありがとうございます。助かりました」

和室の大広間、畳何畳分だこれ？な、所で朝食を食べながら僕は情報を渡す。

こんなに広いのに、僕とエリカお嬢様の二人だけ。寂しいねえ。実験体、つまりは組織の研究室であれやこれやと体をいじくりまわされているポケモンたちは大勢いる。

その大半が失敗作なわけで、その失敗作の末路まで僕はちゃんと話してやったさ。

「……」

流石は正義のジムリーダー様。大変思うところあるらしい。

「エリカお嬢様」

「なんです？」

そんな二人っきりの朝食に、エリカお嬢様のお付きと思しき女性がおすまから顔を出す。

「例のポケモン。『イーブイ』の情報が手に入りました」

「なんですって!?!それで、どこに!?!」

どうやら緊急の件らしい、客人を無視してまで話を進めている。あ、客人と思われてない説のほうに濃厚かな。

「それが、この近所です」

「はあ!?!」

素っ頓狂な声、今朝から何回か聞いてるので慣れたもんだ。

なんて、?気にお味噌汁をすすっていると。

「っ!!」

「ん?」

ガバリ!と、勢い良く振り返ったお嬢様は。

「貴方!何か知りませんか!?!」

「えー」

すごい勢いで迫られて悪い気はしないけどねえ。

「知・り・ま・せ・ん・か!!」

わー、押しがすごい。

何が彼女をそこまでさせるのか、なーんてことも本当は興味ない。

だから、さらっと僕は答えた。

「知ってるよ。だって、それここら辺で逃がしたの僕だもん」

「はっ!?!」

そしてどうやらまた、次の話に進むらしい。

12話 「探し物はなんですか？」

「どういうことか、説明してもらいましょうか」

「おー、怖い顔しちやって、美人が台無しだぜ？」

「なっ／＼び——、ふざけないでください！」

あら、意外と顔真つ赤だ。男慣れしてないのかな。

耳まで真つ赤に染まったその顔は可愛い女の子そのものだ。

照れてる女の子ってええやん？

「いいですか。あのイーブイは私達も計画書などから知っています。最優先で保護すべきポケモンです」

んんっ、と咳払いで空気を切り替えてエリカお嬢様は真剣な表情だ。

計画書？

ああ、実験体だというのなら研究員たちがつけてるレポートがあるはずだろうから、それが。

なんでそんなものが流出してるんだろうねえ。前にも言った気がするけどずさんだなあ。

失敗作だから、とか？

「加えて、あのイーブイは実験で酷く衰弱していると聞いてます」

「そうだね。今にも死にそうだったもん」

「アナタという人は!!」

わー、怒られた。

なんて言ったら火に油を注ぐのは明白なので、ここは黙っておこう。

「どんな神経してるんですか！瀕死のポケモンを野に放つなんて」

「うるさいなあ。別に僕がどうしようと僕の勝手だろ。あの暗い研究室から逃がしてやったことを評価してほしいね」

そっから先は知らないよ。僕だって死にかけだったんだ。自分のことでいっぱいじゃいさ。

その後のことなんてあとはあの子次第でしょ、生き残るのか、抹消されるのかなんてさ。

「・・・そうですか。あなたが逃がしたことを評価するというのなら、最後まで責任をもってもらいますよ」

「はあ?」

この野郎。いつまでも僕が下っ端に甘んじていると思っただら大間違いないからな。

「あのねえ、僕がそこまで君の言うことを聞く義理なんて――」

「ロケット団」

氷のような表情で、エリカお嬢様は口を開く。

「今、通報したらいつたいたいどうなるんでしょうかね」

「きったねー」

自分の頬がヒクヒクと動くのを自覚する。

正義のジムリーダー? いやいや、眠れる森の悪女とかでいいんじゃないですかね?

ほんと、聞いてあきれれるぜ。

と、いうことで。

僕は怪我をしているにも関わらずエリカお嬢様の親衛隊と共にイーブイを探すことになってしまった。それも林の中を。

「親衛隊ではない。エリカお嬢様と同じようにこの町を守るためにロケット団と対抗するべく集った同志だ」

屈強なガタイのいい男が、僕の思考をトレースしてくる。話しかけてないんだけどな。

「へー、やっぱりロケット団って嫌われてんねー」

「嫌われてる、という表現が正しいのかはわからないが」

いかにも堅物っぽい喋り方、僕とはウマがあいそうにない。

ま、ウマがあいそうだと思った人も人生の中でいないけど。

「ロケット団は許せない。皆、その思いでエリカお嬢様と共にしてい

る」

その男の声には、悲壮感が含まれている。きっと、何か特別な思いがあるのだろう。

「そ。頑張つてねー」

「君は頑張らないのか？その為にロケット団を裏切ったのだろうか？」

「だーかーら、なんだつてそー皆勝手に決めつけるのかな。道德の授業もう一回受けてくれば？」

僕は草むらの辺りを探しつつ、言葉をつづけた。

「みんながみんな、できた人間だと思わないことだ。そんなだこの先辛いよ？僕みたいな人間に会うとさ」

うーん、と腰をトントンたたく。あ、やばい。傷口が開きそう。ビリビリする。

まったくもー、重症患者の僕にこんな労働させるなんていったいこのブラックな組織なんでしょうかね。

「……ていうか、なんで僕はこんなに真面目に働いてるんだ」

ボソリと、聞こえないように僕は呟く。

一応、救ってもらったわけだし？恩義を感じないほど心がないわけではない。

けどなあ。ぶっちゃけもうめんどいしな。イーブイだって案外親切な人に拾ってもらっていい生活してるかもだし。

「あー僕思い出した！確かあつちらへんでイーブイを逃がしてあげたんだつた!!」

一際大きな声で、わざわざ聞こえるように言う僕。

「なに？本当か？」

やрийー！案の定、餌に食いついてくれましたよ。

「そうなんだ！もしかしたらまだいるかもしれないし、今から行くてくるね!!」

「そうか、ならば皆に連絡して」

「ああー！いい！大丈夫！僕一人で！そんなに広くないし、君とみんなは他の場所探しておいてよ」

「わかった」

いいね。聞き分けのいい人は好きだよ。

真面目なのはいいことさ。なによりもね。

そんな真面目君から背を背けて、傷が痛む体を引きずりながら僕はこの林からの離脱を図る。

「……………」

ある程度行ったところで、僕はエリカお嬢様の家のある方向を見やった。

なんとなく、大した意味もなく振り返る。

「あー、くそ」

ガリガリと頭をかいて、吐き捨てるように口を開いた僕はその流れでモンスターボールを開いた。

「―――、よし。ズバット。悪いけど、これあの家まで届けてくれ」

「キユウー」

命令を受けたズバットは、バサバサと勢いよく飛んでいく。

こういうところが、中途半端な僕のダメなところだ。イーブイといい、大した意味もない善意を振りかざしてる。

エリカみたいな、信念も行動力もないくせに。

「それでも、それでも果たしたい願いがあんだ。それを果たすまでは―――、」

止まらない。

「そう、でも残念。ここが貴様の行き止まりだ」

「っ!?!」

この声。冷酷で、それでいてスツと通った綺麗な声。

「ナツメ様……………」

思ったよりも早かった。もうちよつと猶予をもらえればかり

思っていたのが、仇となったか。

「ふふ、組織を抜けるなんてそう簡単じゃないのはわかっていただろう?」

不敵な笑みを携えるナツメ様に僕も不敵に笑って返す。

「まあね。でもちよいと早いんじゃない? 僕を追ってまで得られるものなんてもうないでしょ?」

伝説の三匹の情報は渡したし、こんな何もない下っ端を捕まえるのに幹部が出てくるなんてよっぽどだ。

「イーブイ」

だから、ナツメ様がその単語を発した瞬間、ああそうか。と自分がしでかした事の重大さに気が付いた。

気が付いて、自分に嫌気がさす。中途半端は何よりも罪だと知っているのに。

「でも、あの子は失敗作のはずでしょう? そりゃ世間にばれる恐れはあれど、ナツメ様が出向くほどの問題じゃあないはずだ」

だからこそ、僕は多少の八つ当たりと嫌がらせのつもりでイーブイを逃がしたのだ。

「あのポケモンは、特別なのさ。ミュウツーと同時に進めていた計画、伝説の三匹とも通じる計画の柱だからな」

これだから、資料はよく読んでおいたほうがいいんだ。僕は今回で身に染みて痛感したよ。中途半端ってのはこうやって自分に返ってくるってみんなも知っておこうね。

あーあ、せめてあの時エリカお嬢様に見せてもらっておくべきだった。

だからといってこの結果を覆せたとは思えないけれど。

「僕ってば運がいいのか悪いのか」

これから人に嫌がらせする時は知識も重要だよってことだね。一つ賢くなれたよ。

「で、どうするの? 大人しく戻ってくる? それとも」

そういつて好戦的なその瞳は訴えかけてくる。

というか、スーパーボール握ってる時点でそれしか選択肢ないん

じゃないですかー。やだー。

「その続きはWEBで!とは、いかないんでしょう?」

「わかってるじゃない」

「しゃーない。」

僕はボボン!と、手持ちの二匹を出し臨戦態勢万全だ。

「ふふ、そうこなくちゃね」

ユンゲラーとともに、ユラユラ浮いているナツメ様に勝てるとは思えないけど。

「ま、たまに善戦しとかないとか」

こんな時でもクールなカラカラとここぞとばかりに怯えきっているガーディを見て、不安にはなるけど。

「あそこに戻る時間は、僕にはないからな」

精々やれるだけやりますよ。

「あら?このズバットは」

誰もいなくなった自身の家で一人報告を待つエリカのもとに、一匹のズバットが。

「キュウー」

「?何か、足についていますわね」

それに気付いてほしそうにズバットは足を差し出す。

エリカは不審に思いながらも、静々とそれを手に取った。

「あー」

しかと受け取ったことを確認したズバットは、早く御主人様のもとへと帰りたいのか、バサバサと慌てて飛び立った。

「・・・いったいなんですか?」

困った顔のエリカお嬢様。だが、受け取った“文”はしかと目を通

さねばいけないだろうと、律儀に聞く。

『はい！カラーだよ！わかる？そういうえば名乗ってなかったもんね！君の剣幕がそれどころじゃなかったし！とはいえ泊めてくれたこと、怪我の治療をしてくれたことには感謝するよ！ありがとう！感謝するって言って結局言わないやつとかいるけど僕は違うから！ちゃんとうりありがとうって言うことにしてるんだ！ありがとう！じゃ！そういうことだからイーブイ探し頑張っ！僕は傷が開くのが怖いのでこちらでお暇させてもらいます！お疲れ〜！』

途中まで真剣に読んでいた自分が馬鹿馬鹿しくなるほどふざけた文面、ふざけた中身だった。

「あの男は〜!!」

であって数時間、その数時間でこうもインパクトを残せるものなのだろうか人とは。

「カラー。忘れませんわよその名前」

ぐしやりと、普段のお淑やかはどこへやら。文を握りつぶしたそのエリカの顔は鬼のようだった。

「ぐっ——」

「フハハ！どうした防戦一方ではないか！」

無茶言わないでよ。ジムリーダー相手によくやってるほうだつたの。

それを口に出す余裕が、今の僕にはないけれど。

「ユンゲラー、”サイコキネシス”！」

「チツ、避けて!!」

相手はエスパー使いのエキスパート。対してこちらは、カラカラとガーデイの二匹。

二対一の構図であるはずなのに、押されているのは僕のほうだ。

あのユンゲラー、相当鍛えられているな。ずっと外にだして連れ歩いてるし一番お気に入りポケモンなのかも。

「おっとー！」

なんて悠長に考えている暇も、実はない。

“サイコキネシス”で飛んでくる岩々をよけながら、なんとか二匹に指示を送る。

「カラカラ、懐に潜り込めるかい？」

僕のささやきにコクリと頷くカラカラ。君はいつだって頼もしいね。

「さて、ガーディ。君はカラカラの援護だ。バッチシ頼むよ」

「……」

うーん。これはガーディさんビビッて完全に戦意喪失すわー。あんまり期待しないでいこう。

「――！」

「余所見なんて随分と余裕だな」

さつきから、遠距離でエスパー技を繰り出してくるナツメ様。その意図はわかっている。

エスパーは格闘タイプに弱い。力でごり押しすれば勝機がないわけではないのだ。

問題は、その力でごり押しが果たしてカラカラで押し切れるかってこと。

どっちかっていうと、カラカラさん奇襲夜襲が得意だからね。

どこかで不意をつければ、こっちにも望みはある。

つまり、不意を突く逆転の一手。それをひねり出せるかどうかがこの戦いの鍵ってわけ。

逆に言えばナツメ様は是が非でもその一手を防ぎたいわけだ。だから、遠距離から安全に仕留めたい。

「と。分析はそろそろ終わりにしないとねん」

ギリギリで敵の攻撃を躲している間がいい。だが、これだって満身創痍のこの体で何時迄もは持たないのは明白だ。

「ほらー！ガーディ!!覚悟決めろ！男だろ!!」

「なにをそんなに焦っている？お前の目的は急ぐものでもないだろう」

ナツメ様は問いかける。かー、余裕綽々って感じ？鼻につくわー。ここで捕まるわけにはいかない。僕にはやることがあるんだっての。

復讐なんて、とつとと終わらせたほうがいいに決まってるんだろ。

「行くぞガーディ！」

「うん？もう逃げ回るのは終わりか？」

なら、とナツメ様はゴゴゴと地響きが聞こえてきそうなほどのオーラを隠そうともしない。

くっそ、やっぱ本気じゃなかったなあの人。

「かえんほうしゃ！」

「ひかりのかべ！」

特殊技を防御するひかりのかべで、かえんほうしゃはユンゲラーまで届かない。

「フハハ！どうした！これではただのヒーターだぞ！」

「うっさいなあ！そっちだっけどうした！ひかりのかべなんてユンゲラーは使わないはずだけど!？」

「私はエスパー使いのエキスパートであると同時にエスパーの申し子だ」

だから!?!だからエスパー技は全部使えるとか言い出すんじゃないでしょうねこの人！

まったくもって規格外ってホントヤダ！ちゃんと規格通してから来てよね！

「変わらずかえんほうしゃ」だよ。ガーディ

「はん！思考停止か」

どうやら僕が戦闘を放棄したと思っただけらしいナツメ様は冷たい表情がより一層冷徹になる。

「それとも、そのガーディなら私のユンゲラーの“ひかりのかべ”を破れるとでも？」

「このガーディはさ、最近人にもらったばかりなんだ」

「急になんだ」

怪訝そうな顔をするナツメ様に「まあ聞いてよ」と言葉を続ける。「人と仲良くなりたい時には名前を呼ぶのが手っ取り早いんだって、いつかテレビで言ってたんだ。ニックネームを付けるとなお良くてね」

「本当に何の話かしら？やけにでもなった？」

「まあ、ニックネームなんて恥ずかしくて付けてないんだけどさ。それでも、ここいらで結構呼んだよ。ガーディって」

「……」

不穏な空気を察知したのだろう。ナツメ様は僕の言葉に黙って耳を傾ける。

「さつき、人にもらったっていったけど、それカツラさんなんだ。ジムリーダーのポケモンだから、育つのも早い」

「……!!まさか!!」

頭をフル回転させたナツメ様、どうやら僕の答えと同じ答えを得たらしい。

「だからわかつちやうんだよね!名前が変わるこの瞬間がさ!!」

本当に、ここでこのタイミングで“これ”がやってきたのは偶然だ。そろそろだとは思っていたけれど、流石カツラさん。ここぞというところで力になってくれる。

「さあ!!新しい力を見せてやろうぜ!!」ウインディ“!!!”

「ガウウウウオオオオオ!」

雄叫びをあげて、ガーディは体をブルブルと振るわせるとメキメキと体が急激に成長していく。

進化。

ポケモンが戦闘を繰り返して、自身の中に蓄えた経験値から新たな姿を得ること。

それが、今ガーディに。否、ウインディ”に起こっている全てだ。

「行くぞ！ウインディ！！”だいもんじ”！！」

「うぐう！！」

新たな姿、新たな技を身に着け、頼もしい姿になったウエンディから繰り出される大技に流石のナツメ様もピンチの様子。

「ぐうう！なめるな！！」

ドン！！と大きな爆発音とともに、“だいもんじ”は消滅する。

「説得して無傷で返そうとおもったが、予定変更だ。貴様は一度矯正する」

「はは、怒らせただけだったりして」

「キャウウン」

おいおい、そんな凶体になってウインディ、キミまだおくびょうなのかい。

最後の特技もはねのけられて、もう打つ手がない。

半ば諦めたように、僕はナツメ様のほうを向いた。

「はっ！！」

ユンゲラーとともに、僕の首を狙ったスプーンが飛んでくる。

「フッ」

「なに!?!」

あーあ、我慢しようと思ってたのに。思わず笑っちゃったや。

僕の首を貫くよりも先に、飛んできたのは一本の骨こんぼう。

見事に、ユンゲラーの頭部を打ち抜いている。

「ユンゲラー!?!」

ぐらりと、体が揺れたユンゲラーはそのまま地面にうつ伏せに。

「いやー、秘策つてのは最後まで秘めてたほうの勝利つてね」

人つてのは、勝利を確信した時に一番油断するんだそうさ。これもテレビで言ってた。人生何が起こるかわからないから侮れないよね。

「さて、どうする? 形成逆転だね」

三対一。流石のサイキックガールもこれはお手上げだろう。

「そうでもないさ」

「な、んで？」

メキメキと、体が軋む音が耳に響く。

骨が折れて、お腹が熱い。ドクドクと全身が脈打つ。

ちらりと、お腹を見れば。

「ふあ、ファイヤー」

ああ、ここで返ってくるんだ。本当、人生何が起こるかわからないから、侮れないよね。

僕のおなかにはファイヤーのくちばしがこれでもかというくらいにぶっ刺さっている。

“ドリルクチバシ”。人間に放つ技じゃあないよね。

ドサリと倒れ、ポケモンたちの鳴き声が聞こえるところで僕の意識はぶつつりと途切れた。

そして、次のお話へと続くのだ。

・・・続くよね？ここでデッドエンドとか、ないよね？

13話 「あれ？僕の出番は？」

「おい！待てよ！グリーン！」

「敵はどこだ!？」

グリーンと呼ばれた少年、鋭い目つきと凜とした風貌が特徴的な少年は、“何か”を探しながら走っている。

「一人で突破したような顔すんなよな！」

もう一人の少年、レッドはそんなグリーンを追いかけながらぶーたれる。

ここはヤマブキシティ。二人の少年は、故郷であるマサラタウンを荒らされ攫われたオーキド博士を助けるべくロケット団のアジトがあるこの街へと赴いていた。

つまり、『何か』とはロケット団のアジトそのものを指していたわけだ。

「な、なんか立派なビルだな。本当にここであってんのか!？」

「ゴルダックがバリヤードの位置を最初に発見した時にいたのがこのビルの前だ。四方を通路に囲まれた街の中央のビル。間違いない！」

先ほどまで、このヤマブキの街は出ることはおろか入ることすらできなかつた。

それはなぜか。問いの答えはロケット団の幹部の一人であるナツメが自身のポケモン、バリヤードを使って街全体を覆うほどのバリアを張っていたからに他ならない。

二人はそれを破ってここに来ているのだ。

「うわあー！」

ビルの二階までやけにすんなりと入れたと思っていた瞬間、レッドの足場が急に無くなる。まるで落とし穴のように、予めそこに来るところがわかっていたかのように。

「レッドー！」

「グリーンー！」

二人は手を伸ばす。が、咄嗟のこと過ぎてその手は無情にも空をつかむだけだ。

「くっ！」

すぐにレッドの安否を確認しようと穴を覗き込むグリーンだったが。

「クク・・・バリアを破ったところまではほめてやるがそこまでだ」
足元に飛んできたのは手裏剣。

今まで確かにその大部屋には人がいなかったはずなのに、どこからともなく現れたその人影に。

「ストライク！ きりさく！」

一瞬の躊躇いもなくグリーンは人影に攻撃した。

「相当な素早さだ。敵とみるや先制攻撃。クク・・・ククク」

「肩に、ベトベター・・・！」

ストライクはその鋭利に尖った右腕を突き刺したものの、肩にくっついていたベトベターが防御となり致命傷は与えられていない。

「お前は、シオンタウンポケモンタワーの！」

シオンタウンという町で、一度この男。キョウとグリーンは対峙している。

その時の軍配は、グリーン機の機転で勝利といった結果だった。

ベトベターに捕まっているストライクを見て、グリーンは次なるポケモンを出そうとその手を腰に伸ばすがその前に。

「しまっ！」

いつの間にか、自身の背後にまでベトベターの触手が伸びていたことに気づかず拘束されてしまう。

「ポケモントレーナーも、ポケモンを取り出せなければどうということはない」

「ん、んん・・・」

キョウの勝ち誇ったような顔と、グリーンの苦しそうな表情は過去の勝敗など関係ないと示していた。

一方、その頃。穴に落ちたレッドは。

「いてて・・・くっそー」

自分が落ちてきた穴を見て、悔しがるレッド。

辺りをキョロキョロと見まわして、どうやら自分は一階に落ちてしまったらしいと当たりをつける。

が、どうやら先ほど通ってきた場所とは違うらしい。これではすぐに二階に戻ることができなそうだ。

とにかく、上につながる階段を見つけなければ。そう思った矢先に。

「うわっつっ!」

振り返ると、唐突な肌への痛み。まるで冬場に起こる静電気のような唐突さとそれとは比較にならないほどの鈍い痛みがレッドを襲った。

「な、なんだあ?この壁」

冷静になってもう一度みてみるとどうやらこの部屋の壁全体に電気が通っているらしい。

それもきつと高電圧のものがなんの保護もなしにむき出しになっている。

バチバチと焼ける音が、レッドの心拍数を自然に上げる。

「そういえば、この電気。どこかで・・・」

ピリピリとした嫌な感じを文字通り肌を感じながらレッドはどこか見覚えがあるこの電撃のことを思い出そうと記憶を探っていた。

「っとうわあっ!」

なんて思案しているとどこからともなく大量かつ猛スピードで飛んでくるマルマインとビリリダマがレッドを襲う。

「く、くそっ!」

そんなマルマインたちを避けながら、レッドはようやく頭の中の点と点が結ばれる。

「思い出した!クチバのポケモン密輸事件!犯人は電気系ポケモン使

いのジムリーダー！」

「そうだ！オレ様だ！」

柱の陰から現れたのは、ロケット団幹部の一人、マチスだった。

「あんときゃあよくも邪魔してくれたな！」

クチバのポケモン密輸事件。サントアンヌ号を使って、町のポケモンを攫い金儲けをしていたマチスを阻止したのが、紛れもないレッドだった。

「お前も、ロケット団！」

その時はマチスがロケット団だなんて微塵も思っていなかったが、思い返してみればレッドがこれまで敵対してきた悪はすべからずロケット団という一つの組織に集約されている。

マサラも、ニビもハナダもシオンもタママシも。勿論、クチバだってそうだ。

「なんでだ！ジムリーダーのくせになんでロケット団なんか味方する！」

それは心からの疑問で、心からの断罪だった。

ジムリーダーは皆の憧れで、街を守るのがその仕事だ。

それなのに、マチスも、キョウもナツメも皆を困らせて、悲しませている。

そのことが、レッドにはどうしても我慢ならなかった。

「ん？ジムリーダー？」

マチスは、レッドの言葉に耳を差し出し明らかに馬鹿にしていた。

「ああ、そんなことをしていた時もあった」

マチスの言葉は徐々に嫌気を含んでいく。

「つまらねえジム暮らし・・・真面目にポケモン鍛えて戦って・・・そんなもん何になるってんだえええ！」

嫌気は怒気に代わり、レッドを威圧する。

「そうさ！力だ！でつけえ力があれば色んな事ができるんだぜ」

その一つがこれさ！と、両肩に乗っているランチャーを見せびらか

すマチス。

「マルマインは素早さが最高な分、パワー不足。だが！このランチャーならスピードに加えて力も高まる」

レッドはごくり、と生唾を飲み込んでその威力を想像してしまう。

「両肩のレアコイルが作り出す“ソニックブーム”はそのまま防壁壁ってわけだ」

わざわざ説明したのは恐怖を煽るためだろうか。マチスの勝気かつ上から目線の言葉にレッドは睨み付ける。

「加えて！」

「ぐああー！」

マルマインの弾丸がレッドを打ち抜き、レッドはそのまま壁に激突する。

だけならまだよかった。

「どうだ？この部屋は？電流を張り巡らされた特別室だ！こいつらの攻撃が二倍、三倍になる」

どうやらこの部屋は既にレッドを迎え撃つべく万全の準備が施されていたらしい。その全てがマチスが有利になるように作られている。

張り巡らされた電流により、服だけでなく肌まで焦げているレッド。

この様子じゃ上も相当厳しい戦いを強いられているはずだ。

「それもこれもすべて！ロケット団の科学技術さまさまよおー！」

ガハハハッ、と勝利を確信して揺るぎない豪快な笑いに隠れて、レッドは自身のポケモン、ピカチュウに指示を出す。

「どうやらこの絶望的ともいえる状況で、その瞳はまだ諦めていないらしい。」

「いまだー！」

「ぐああああー！」

電流が張り巡らされた部屋、ということとは電気ポケモンは例外なく威力が上がるということだ。

つまり、ピカチュウの攻撃も普段より威力が上がるということだ。

「やった！ザマアミロ！」

作戦がうまくいき、レッドは上機嫌でマチスを見る。

「なーんちゃって」

「っ!!」

が、しかし。

当の本人であるマチスに、傷は一つもついていない。

その事実にも多少なりとも動揺したレッドは、いつの間にかコイル達に両手を塞がれていた。

「ゴム製アンダーブーツ！電気地獄の中でオレ様だけは無事なんだよ
ワハハハハ！」

正に死角なし。入念に、かつ知的に張り巡らされた策はレッドを追い詰める。

「オラオラオラア！」

「ぐああああ！」

飛んでくるマルマインの弾丸を避けるすべもなく直撃しつつ、レッドは思う。

（なぜだ!?・・・最初からパワー全開の連続攻撃。どうしてエネルギーがなくならないんだ!?)

「ワハハハ！知りたいか!?こいつらの攻撃が、そしてオレ様の鎧がどうして底なしのエネルギーなのか知りたいか！」

そんなレッドの疑問を見透かすようにマチスは大きな口を開く。

無論、マチスの底無しのパワーには理由がある。万物に因果があるように、理由がないものなどないのだ。

一つは『エネルギー変換器』これにより、より効率的に、より素早く電力をエネルギーへと変えられる。

そして、もう一つ。裏から出てきたのは。

「伝説のポケモンの一匹！サンダー!!」

「そ、そんな・・・」

そのポケモンの登場に、少なからず動揺が走っているレッド。

「無人発電所で捕まえた奴だ。こいつの電力は無尽蔵だからな。」アイツの情報は間違つて無かつたつてワケだ！まあ、いい気味だがな！！」

(アイツ・・・?)

なんの話かわからないレッドには、そんなことよりも目の前の敵だ。

「フハハハハ！どんなに強力な電撃でも！苦しいのはお前らだけ！俺はなーんともない！」

「ぐ・・・」

首筋をつかみ、電撃を垂れ流すだけ。それだけでレッドの体には無数の裂傷と火傷が刻まれる。

「フン。うらあ！」

つかむだけの状況に飽きたのか、マチスはレッドの体を投げ飛ばし壁に激突させる。

「くそ、なんとか反撃を・・・フッシー！」

相当の電撃だったはずだが、すぐさま立ち上がりレッドはフシギソウを戦闘に出す。

が。

「ムダだ！サンダー！」でんきシヨック！」

「ああ！フッシー！」

電気技の中でも威力が高いとはいえないでんきシヨック”できえ、フッシーをノックアウトさせるには十分だった。

これが、伝説のポケモンの底力。

「ワハハハ！自慢の背中の葉っぱがほとんど散っちゃったな！」

「くっそお！」

「無駄だつってんだろーがよお！」

マチスの言葉に反抗でもしたつもりなのか、弱弱しく”はっぱカッター”が繰り出されるもサンダーに蹴散らされる。

「そういう往生際の悪いやつには、最大の一撃で敗北を知らせてやらねえとな」

そうマチスが告げると、指を天高く上げゆっくり口が動く。

「か・・・み・・・な・・・り・・・」

その指に電流が集まってくるのを察知して、レッドは動いた。

「最大の攻撃！この時を待ってたぜフッシー！」

先ほど散った葉っぱ。それが遠隔操作でマチスの周りに浮かび上がり鋭利な刃物として飛んでくる。

「よし！コードを切った！これで行き場のなくなった電気がお前の体に！」

レッドの狙いはこれだった。サンダーから変換器へとつながれているコードさえ切ってしまうれば無敵のマチスの牙城は崩れる。

「そうかな？」

だが、対してマチスはコードが切れたというのに冷静だ。

「ハハハハハ！無駄だったなあ！オレがこのアンダースーツを着ている限り感電は——」

そこまで言って、マチスは自分の体の異変に気付く。

「ん？うおお！？」

パラパラパリ、と、ズボンやスーツが裂けているということに。

「あががががが！！」

アンダースーツが裂けているということは、直で電流が流れてくるということ。ここにマチスの無敵の牙城は崩れ去った。

「バカ・・・な」

変換器も流石に許容オーバーらしく、爆発。もはや守るつてくれるものは無くなったマチスの体はプスプスと黒焦げだ。

流石に最大の一撃のためにためていた電撃を食らっては大人のでさえも一瞬で意識が刈り取られる。

「はっばカッター」が切っていたのはコードだけじゃあなかったんだよ」

マチスの意識が完全に無くなったのを見て、レッドは口を開いた。「ふう。オレの考えていることをよくわかって助かったよフッシー」

ポンポンと頭を撫でて労うレッドは、肝心なことを忘れる前に行動することにした。

「んーと・・・あった!」

ゴソゴソと爆発し壊れた変換器の中を漁り、目的のものを見つける。

オレンジバッジ。ジムリーダーであるマチスが所持しているバッジである。

「それから・・・これももらっていくよ」

ゴム製アンダースーツの切れ端も、ついでに手に嵌めていくレッド。

「・・・いつくら強いポケモンを連れてたって、いつくら力があつたつて。ポケモンと仲良くできなきや、楽しくないのに」

そう呟いたレッドの言葉は、意識を失っているマチスには届いていない。

マチスの戦い方は、ポケモンを正に道具として、武器としてしか見ていない戦い方だった。

そんな戦いをするマチスを、レッドは物悲しい瞳で見つめて。

「・・・行こう」

振り返ることなく、上の階へと進んで行った。

そして物語は最終決戦へと続いていく――

14話 「再登場はできればカツコよく」

レッドが二階へと上がると、グリーンはすでにキョウの前に敗れ去っているかのような局面に出くわす。

レッドはそんな仲間の姿を見て、無謀にもキョウに突っ込んでいくがグリーンをとらえていたベトベターが既に動かなくなったグリーンの代わりにレッドをとらえる。

「くっ——、グリーン起きてくれ！」

「無駄よーこいつは今、”かまいたち”の一撃をくらったばかり。すでに動けぬ！」

ぐりぐりと、キョウの足はグリーンを弄ぶ。

「あとは首をはねるのみよー！」

なんの躊躇もなく、なんの躊躇いもなく。

ギラリと、ゴルバットの鋭い羽が輝グリーン首を映した。

「!!」

「今度こそ死ねええええ!!」

何度も邪魔をされたフラストレーションと、これで終わりだという高揚感でキョウの手元は加速する。

が、しかし。

「あ……!!」

レッドは、驚いたように口から声が漏れる。

その視線の先、メキリ、と肋骨の折れた音が鈍く響き、キョウの顔は苦悶に歪んでいた。

「よくやった。ピジョット」

気を失っていたはずのグリーンの手には、開閉されたモンスターボールが。

そして、そこから放たれたであろうピジョットは今日の腹部にそのくちばしを突き立てている。

「か、かはっ……ば、ばかな。なぜあの”かまいたち”を心臓に受け、動いていられる……!!」

その問いにグリーンは答える。手に持ったボロボロのペンダントを掲げて。

「このペンダントは『リフレクター』と同じ効力を持つ防衛道具だ。バリアアイトム旅に出るとき、おじいちゃんが持たせてくれた」

そのおかげで、どうやらグリーンは助かったらしい。そして、倒れたふりをしてベトベターを引込め込めるのを待っていたということだろう。

「お、おのれえええーいでよ！フリーザー!!」

その事実には、キョウはわなわなと両手を振るわせる。怒り心頭といった様子だ。

そして、ついに伝説の一匹『フリーザー』を召喚するキョウ。

「ふぶき!!」

辺り一帯を凍らせるほどの強力な「ふぶき」。

「調子に乗るなガキ共め！こちらが有利なのは依然変わらぬ!!」

流石はロケット団の幹部。伊達にその地位まで登り詰めたわけではない。

すぐさま冷静になると、キョウは捕らえていたもう一人。レッドを人質にグリーンに相對する。

これ以上齒向かうならば、言葉にせずともその意図は明白だった。「レッド、とか言ったな。クク、このフリーザーはふたご島でわが部下が捕獲したもの。覚えておろう?」

ふたご島。カラーが得た情報により何度もその地に足を運んでいたロケット団はたまたまその地に降り立った裏切り者のカツラを始末すると共にこのレッドと敵対している。

「捕獲には手間取ったがな。もう一步で取り逃がしてしまうところを捕まえることができたのは、クク・・・お前のおかげなのだ」

「・・・そ、そんな」

キョウの言葉に少なからずレッドは動揺する。

あの時、ピンチを助けてくれたのはフリーザーだった。そんなフリーザーが自分のせいで悪の組織に捕まり、悪事に利用されているなんてレッドには耐えられない事実だ。

「フリーザー……」

呼びかけたところで、今のフリーザーには届かない。敵となつてしまった、今のフリーザーには。

「あのときお前を救ったフリーザーが、今度はお前を倒す！クッククツクツク！気の毒な運命だなあ！」

高らかに、それでいてスキを見せずにキョウは笑う。どう転んでも勝利はすでに我が手の中にある。と確信しているようだった。

「やれ!!フリーザー!グリーンもろとも吹き飛ばせ!!」

声高々に宣言されたフリーザーは部屋の中央に飛び立ち。

「れいとうビーム!!!」

「くっ」

「レッド!!」

捕らえられているレッドのほうが幾分か攻撃の対象になりやすく、その身はパキパキと凍っていく。

その威力は、流石の一言だ。

だが、グリーンには一つ、疑問があった。

(なぜこいつはこんなにも伝説のポケモンを自在に操れているんだ……!?)

「どうだ!これもロケット団の力ぞ!」

そして、その問いに対する答えはキョウの右手に込められていた。

「あれはピンクバッジ!」

「フフフ、今頃気づいたか」

キョウは勝ち誇つたようにジムバッジについて高説を垂れる。

「お前たち、バッジにはポケモンを操る力があることを忘れているようだな」

キョウが喋っている間にも、どんどんと氷は部屋を侵食していく。

「これらのバッジは単なるジム戦に勝った証ではない！それぞれにポケモンの能力を高める力がある！」

そして、とキョウの言葉は続く。

「今、このフリーザーは幹部の三人とボスのバッジ。四つのバッジの影響下にある！」

だからこそ、きつと幹部の三人はジムリーダーを辞めロケット団に所属しているわけだ。力が得られるというマチスの言葉の通りに。

「それ！次はお前だ！」

「逃げろ！グリーン！」

お喋りは終わりだと言うようにキョウはフリーザーを操る。レッドとグリーンはその強大な力の前に成す術がない。

「しまった！壁が！」

レッドに言われるまでもなく逃げるグリーンだったが、どうやら先に建物の方にガタがきてしまったらしい。

崩れ、飛んでくる壁の破片を避けた拍子で運悪くフリーザーの氷に捕まってしまう。

「勝った!!」

最後の攻防が今終わり、勝利の天秤は大きく傾く。

「クックック。トレーナーの氷漬けが二体完成だ」

勢いと激しさを増したフリーザーの攻撃はポケモンだけでなくトレーナーも巻き込み、部屋全体を凍てつかせ凍らせた。

これが、伝説のポケモンの、そしてそれを操るバッジの威力。

凄まじく、そして凄まじい。

「馬鹿なガキ共だ」

キョウは最早一人になったその戦場で呟く。

大人しくしておけば部下にしておきたいものだった。それほどの逸材だと感じていた。

歯向かってきたのが運の尽きだ。そう心の中で呟くと、用のなくなった戦場を去ろうと歩を進める。

「ふう……ん？」

それにしても、楽な戦闘ではなかった。三幹部ともあろうものが子

供二人にここまで苦しめられるとは思わなかった。

だがそれも致し方なからう。レッドが上に上がってきたということは、それすなわちマクスがやられたことを意味するのだから。

だからだろうか、少し暑いと感じるのは。戦いで汗でもかいたのか。

そう思った矢先だった。

「……な、なにい!？」

背中に加わる急な衝撃。折れた骨が砕ける音に顔をしかめずにはいられない。

「ば、バカなあー！完全に凍っていたはず……！」

しかめたその面で後ろを振り返る。すると、そこには凍っていたはずの、命を奪ったはずの二人の人影が。

「ま、まさか……」

そこで、キョウの頭に一つの可能性が浮かぶ。ありえない、大胆不敵なその作戦が。

「リザードン!!」

己のその可能性を確かめるようにキョウは建物の外を見た。

そこにはグリーンの手持ちであるリザードンが外から建物を炙っている。

道理で熱いはずだ。フリーザーが凍らせていなければ、とつくにこの部屋は灼熱地獄と化していただろう。

いや、逆か。

キョウは自らの考えを否定する。

きっとフリーザーを出した時点で既にこの作戦は実行されていたのだ。でなければ、こんな迅速な対応ができるはずがない。

「レッドー！」

「おうー！」

二人は、息を合わせるように掛け声をかけて。

「トライアタック！」

「でんきショック！」

「ぐああああ！」

同時にキョウ自身に技を食らわせる。トライアタックもでんきショックも威力でいえば大したことはないが、二つ同時、それも生身で食らえばしばらくは動けないだろう。

ドサリと力なく倒れるキョウに二人はほつと息をつく。

「おい！グリーン！」

と、同時にレッドの大きな抗議の声が響く。

「もう！建物ごと火炙りなんて無茶するよな！あー、暑かった！」

レッドの体には凍傷、ではなく、火傷による裂傷が主だった。

控えめに言ってもボロボロである。

「ちえ、派手にやられやがって」

そんなレッドを見ながら口角が吊り上がるグリーンの体も、どうやら限界のようで。ふらついている。

「ゴルダック・・・やはり無理か」

ふらついた体で試しているのはゴルダックの念写。この町を覆っていたバリアの主、バリエードを見つけた時のようにオーキド博士を念写で見つけようとしたのだが、どうやら失敗したらしい。

と、なると。

「おじいちゃんの居場所はこれで探すしかない」

ガサゴソと、倒れたキョウの体を探り、目的のものを見つける。

「さあ、ゴルバット。教えてくれ。俺のおじいちゃん、オーキド博士が捕らえられているのはどこだ？」

キョウと共に気絶しているゴルバット。このゴルバットも特殊な超音波で目的のものを映し出すことができる。

ゴルダックでは無理でも、キョウの手持ちならどこにいるかくらい知っているだろう。

そして案の定、グリーンの「あて」は当たる。

「おじいちゃん！」

「ここは地下か!?行こうグリーン！」

ゴルバットにより映し出されたのは縄で縛られ、痛めつけられた痕跡のあるオーキド博士だった。

見たところ、荷物やら大きな箱やらで埋まっている部屋のようで、地下のような雰囲気を感じた。

「きゃあああああー！」

「上の階から女の子の悲鳴？・・・ブルーか!？」

突如響き渡ったその悲鳴に、レッドは聞き覚えがあった。

思い返してみれば、このヤマブキシティに入ろうと四苦八苦していた時、助言をくれたのは彼女だ。

彼女もまた、この町のこのビルに侵入していたのだろう。

気になる。今の悲鳴から察するにブルーは、レッド達を迎え撃つために用意周到に計画されたこのビルの餌食になっているのではないかと。

「行けよ、レッド」

「!!」

そんなレッドの心情を察したのだろう。グリーンはいつの間にか拾っていたのか、ピンクバッジと共に言葉を投げつける。

先ほどのキョウの話の聞けば、持っていないわけにはいかないだろう。

相手は、また伝説のポケモンになるのは必至なのだから。

「また後で、必ず会おう」

普段感情を表に出さないグリーンの、それは珍しい言葉であり表現だった。

その言葉に、レッドは言葉を返さない。

言葉を返さずとも態度で示すように、レッドは足早に上の階を目指した。

「くそ、どの部屋だ!？」

上の階に上る階段は案外早く見つかった。

と、いうよりも隠されていなかったのだ。きつと三階に上がることもなどないと驕っていたのだろう。

「・・・?暗いな」

とにかく手あたり次第に部屋を開けていったレッドは、一つ奇妙な部屋にぶち当たる。

その部屋には明かりがなく、レッドは暗闇に慣れていない目を細めた。

「ピカー!」

目を慣らすよりも照らしたほうが早い。そう判断したレッドはピカに命ずる。

照らした光に、今度は視界が奪われる。加減を間違ったことを反省しながら、徐々にやがて視界はクリアになっていった。

「・・・敵!？」

かろうじて、人がいることがわかる。

中央に椅子、その椅子に座っている人影。どう見てもブルーではないのは確かだ。

「やあ、レッド。こんな所までできてしまったんだね」

「・・・その声、まさか・・・!？」

驚愕に目を見開いていくレッドに、畳み掛けるように声の主は告げる。

「そう、僕だ。カラー兄ちゃんだよ。レッド」

そして、因縁は結ばれ。次の話へと繋がる。

15話 「ああ、どうして僕ってやつは」

「な、なんで兄ちゃんがここに・・・？」

驚愕に目を染めるレッドに対して、カラーの顔は対照的に冷静だ。いや冷静という表現が正しいのか、それというよりはまるで“何も無い”といったほうがよりしっくりとくる。

「ああ。そんなわかりきったことを質問するなんて、愚か者のすることだぜ？レッド」

ケラケラと笑うその人物は確かにカラーで間違いない。

が、どこかがおかしいような。

元々おかしい人物だった気もするが。

「そして加えて、君は愚か者だ。ロケット団に、そして“ナツメ様”に歯向かおうなどと考えること。それ自体が愚かとしか言えない」

ロケット団。その言葉をカラーが口にした瞬間、レッドは確信する。

そもそも、この場所でこうもゆとりをもって佇んでいることがおかしいのだ。

そんなことができるのは、ロケット団の味方。つまり、レッドの敵であることに他ならない。

「そんな・・・？だろ兄ちゃん！」

「嘘？何が嘘だというんだ。ナツメ様に尽くすことこそが僕の至高だというのに」

目の前の事実を認めたくなくて、レッドは大きな声で否定を求めた。

が、返ってきたのはそんなレッドの希望を打ち崩すような賛美の声。

(いや、ちょっと待てよ)

レッドはカラーの言葉に疑問を感じる。

前々から変な人で、いつも飄々とした人ではあったけれどこれほどまでに誰かに依存するような人だっただろうか。

レッドとカラーが過ごしていたのは幼少期のほんの数年だ。

その後、すぐに引越してしまったカラーのことをなぜだかレッドは忘れられなかった。

それほどまでに印象に残る人だったし、再開した時も雰囲気は変われど根本的なものは変わらないと感じた。

だからこそ、目の前の人物に違和感を感じる。

そう、まるでシオンタウンで操られていたグリーンのように。

「まさかー！」

そこまで思考が及んで、レッドははたと気づく。

まさか、カラーもまた操られているのではないかと。と。

「うっ……」

「さあ、始めようレッド。ロケット団にたてついたことを後悔させてやる！」

急激に部屋の照明がオンになり、まぶしさに視界が奪われる。

部屋の中央に仁王立ちしているカラーは、全身真っ黒で。この旅で見慣れた隊服を着用していた。

“R”と、胸の真ん中に刻印されたその服を。

真っ黒な帽子をクイ、と指で押し上げるその瞳はやはりどこか変だ。

「操られてるってんなら、俺が元に戻してやる！」

決意して決断したレッドに、やってみるとばかりにヘラヘラ笑うのはカラー。

「フッシーー！」

モンスターボールから飛び出してきたのは、フシギソウ。

「ならこちらはウインディだ」

タイプ相性を考えれば、当然の選択が。

「ん？」

「……」

実際にモンスターボールから出てきたのは、ウインディではなくカラカラだった。

「あ、あれ？おかしいな、確かにウインディのボールを開けたはず……」
当の本人すら困惑している。どうやらボールを間違えたらしいのだが、これはただ間違えただけなのか。

カラカラはジト目でカラーを睨む。「間違えんなよ」と言いたいか。

「ま、まあいいや。カラカラ、やつつけちゃってよ」

プライドからなのか自らのミスを認めずに、どうやらそのままカラカラでいくらしい。

そのカラカラは幼いころからいたカラカラで、レッドもよく知っている。

クールで感情を見せないそのポケモンに一種の恐怖めいたものも感じていた。

「……………」

今だって、カラカラはカラーの命令を遂行しようという気配はなく、逆にそれが不気味だった。

ごくり、とレッドもフツシーも異様な緊張感に襲われる。

「ん？どうしたカラカラ？」

カラーの命令にカラカラはただじつと見つめ返してくるだけで、一向にレッド達に立ち向かおうとはしない。

びびってるわけではないし、カラーはただただ困惑するばかりだ。すると。

ガコン!!

なんの躊躇もなく、なんの前兆もなく。カラカラは持っていたその骨こんぼうで主であるはずのカラーの頭を振りぬいた。

当然、カラーは意識を失い膝から崩れ落ちる。

「ええええええええ!!」

ポカンと、状況を把握できていないのはレッドだ。

てつきり戦闘になると思っていたのに、実際は仲間割れ？

「ちよ、えっど、どうすればいいんだこれ？」

あまりにも想定外すぎたため、戦闘という空気でもない。あわあわと泡を食っている。

「……………まったく。何をそんなに慌ててるんだい君は」

倒れたその体から聞こえる声は、いつもの軽薄さを取り戻したように。

「……カラー兄ちゃん？」

ムクリと起き上がったその顔は、まるで今までのことを感じさせない笑顔で。

「呼んだかい？」

ドクドクと、血の洪水が額から流れていた。

「つて、ちよつと!?カラカラさん!?君、強くたたきすぎじゃありません!?ちよつと記憶飛んでんだけど!」

案外強く叩かれたのだろう。カラカラに講義をするカラーは、どうやら正気を取り戻したらしい。

「んんっ。さあ、気を取り直してバトル宣言といこうか」

僕がナツメ様に負けて、おめおめと指をくわえて時が流れるのを黙ってみているなんてことを許容するわけがない。

なんてことを、ちゃんと僕のポケモンたちは理解してくれていた。あの時、ズバットをエリカの元へやって正解だったね。あれがなければ、今頃本当に僕はナツメ様に洗脳されていただろう。

ズバットを忍ばせ、この部屋へと連れられたとき、隙を見て“きゅうけつ”させたんだ。

僕自身にね。

それで意識を取り戻したのは良かったけど、案の定グルグル巻きにさせられていたし。どうせ洗脳されるのだろうという予感があった。まだ説得しようなどと甘い考えがない組織だったのは僕が一番わかっている。

だからカラカラに頼んだのさ。

もしも誰かと戦闘になった時に君が僕を殴って正気に戻してくれてね。

で、僕の予感は大当たり。カラカラもちゃんと仕事をしてくれた。し過ぎだぜってくらいには。

どうやら洗脳中の僕はウインディを出そうとしてたみたいだけど、なんとなくボールの位置をシャツフルしといて正解だったぜ。

「で、何があったか、聞きたいかい？レッド」

仕切り直して、やり直して、ようやく空気は元の緊張感を取り戻す。

まさかその相手がレッドだとは・・・なんとなく思ってたよ。

君ならきつとここまで辿り着くってね。

どうやらレッドも、正気に戻ったとはいえ仲良くする気はない僕の気持ちを受け取ってくれたらしい。

大事だよな。そういうの。

「ああ、聞きたいさ。なんでロケット団なんかにいるんだよ」

その声は、多少の怒気すら含まれている。ロケット団がどういう存在なのかレッドにはよくわかってているみたいだね。

「ロケット団にいるのは、その方が都合がよかったからに他ならない」

黒いポケモン、当時は黒いのかどうかすら。というか本当に実在するかも怪しかったけれど、そのポケモンを探るために、ロケット団は隠れ蓑に丁度よかった。

伝説のポケモンを追っているらしいという情報と、僕の目的のポケモンが一致しているかもしれない。ロケット団にいれば、色んなポケモンの情報が集まるかもしれない。

そんなかもしれないが、僕はロケット団に入った。

ナツメ様の噂を聞いたのは、入った後だったけどね。結果的には柵から牡丹餅的に情報が手に入ったわけだ。

「なんでもそうだけど、考えるよりも行動しろってね。おかげで僕の人生はより明確にルールが現れたよ」

「ロケット団のしてることに関わっていたのかよ?」

きつと、レッドは否定してほしいんだろうな。ありありと表情に出すぎだぜ。

敵に送るには、そいつはちよつと豪華すぎる。塩どころか、砂糖に米までついてきたようなもんだ。大盤振る舞いつてやつだよそれは。「そうだ。と言ったらどうするんだい?最初のマサラタウンのミユウ搜索から始まり、カナダの洞窟での実験。クチバのサントアンヌ号事件なんてものもあつたね。他にもまああるけれど、さて。レッド」
僕はそこでいったん言葉を区切って。

「君はどれのことを言っている?」

「・・・そっか、本当にロケット団なんだな。 “ カラー ” !!」

明確な敵意と、激しく燃える激情を荒々しくレッドはぶつける。

「悲しいなあ、もう兄ちゃんとは呼んでくれないのか」

言葉よりも先に、攻撃が来る。

フッシーの “ はっぱカッター ” が容赦なく僕の懐に向かって飛んできた。

「!!」

が、しかし。

これを読んでいたのか、僕のカラカラは何事もなかったかのようにその全てを弾き返す。

「よいしょ。うん、これで頭の血は心配しなくてよさそうだ」

ビリビリと隊服を裂いて、頭に巻き付ける。少々不格好だが無いよかマシつてもんだらう。

「さて、急がないと上のブルーがやられちゃうかもよ？」

「やっぱり！さっきの声はブルーか!?!」

ダメだなあ。レッド。学校で教わっただろう？

敵の前で、動揺なんかしちやダメだつて。

「ぐっ——！」

まんまと僕の話術にひっかつかつてレッドは後手に回るしかない。

「“とっしん”で、カラカラが懐に潜れば」

そこから先は、彼の独壇場だ。

突進した衝撃でフツシーのお腹はガラ空きだ。

「突き刺せカラカラ！」

持っているのはホネこんぼう。お腹にグサツと、それで勝負は決する。

「あら。お早い決断で」

「・・・休んでてくれ。フツシー」

すんでのところで、モンスタールボールへと戻されるフツシーに僕のカラカラの真下。つまり先ほどまでフツシーがいた場所にはきれいなクレーターが。

「頼むピカ！」

お次に出したるはピカチュウ。可愛いお耳としっぽがチャームポイントかな？

「じゃあこっちも、ズバット」

カラカラを手元に戻して、僕も次なるポケモンに切り替える。

(なんだ？タイプ相性じゃ、こっちの有利だぞ)

うぷぷ。迷ってる迷ってる。

僕のことを知っているとこのなら、こちらだつてレッドのことは知っている。

もちろん、この十年で変わったこともあるだろう。もしかしたら再

開いたあの日から今日までの間ですら変わったかもしれない。

が、人間の性根はそうそう変わらない。僕がお調子者であるのから逃れられないように、真面目な子が真面目であることから逃げないように。

レッドも例外ではなく。

僕のことを知っているからこそ、そこには裏があるのだと彼なら絶対に探る。どこかで用心深く、こと戦闘に関してははずば抜けたセンスを持っていた彼だからこそ。

「ピカーン ほうでん」だ！

だからこそ近づいてこない。何かあるのではないかと、勘ぐっている間は。

その間に、こちらは準備を終わらす。

「くっ！」

当たらない電撃に、苛立ちを隠せないレッド。

「変わらないなあレッド」

そのすぐに感情的になる性格も、用心深くせにどこかで思慮が浅いその短慮も。

だから君は、彼女ができないのさ。

「変わらなくて、安心しましたよ僕は」

言うが早いのか、僕の右手はまっすぐとこの部屋の照明へと伸びる。

「なんだ!？」

「あはっ。見たね。見てしまったね」

だから思慮が浅いんだよ君は。せっかくの警戒心が宝の持ち腐れだぜ。

「その名も」あやしいひかり」

「しまっ！」

「いいや！もう遅いね!!」

レッドが気づくよりも早く、それは発動する。

カット！と、一際大きな光量が視界を奪う。

蛍光灯にあやしいひかりを紛らせ、ここぞという場面で使う。これが作戦ってやつだよ。わかった？

「.....」

完璧に、そして確実にひかりを見たレッドとピカは言葉を失い。自由を失う。

前にも言った通り、このズバットのあやしいひかりはただ混乱させるだけじゃあない。

精神を奪い、精神を支配する。といっても簡単な命令しかできないけどね。

どこそこに行けとか、誰それを倒せってなほどに。

「まあでも、これで僕の勝利だ。案外呆気なかったけれど」

それでも、こうして実力が拮抗してる時には十分すぎる能力だ。

つつい年上の意地ってやつを見せちまったよ。やれやれ、僕もまだまだ大人じゃあないね。

とはいえ、流石に反則過ぎたかな？

だってあつちはまともに真正面からバトる気満々なんですよ。

そんな血気盛んな若者に付き合ってもらえるほど、暇じゃないのよお兄さんは。

「さてと、君を洗脳状態にしたのにはもう一つ、目的がある」

一歩一歩、レッドに近づく。

「つと、ん？なにどうしたのウインデイ？」

ガタガタと、珍しくモンスターボールの中で暴れているウインデイ。

今回出番がなかったからって反抗してんのかい？大丈夫だよ、君の出番はもつと後にあるんじゃないかな？たぶん。

「がっ!!？」

衝撃。

腰から胸にかけて、強烈な衝撃が僕の体を襲う。

「っ！」

足は地上から浮いており、逃すことなくしつかりと捕らえられた拳はそのまま降りぬかれた。

当然、その反動で僕の体は簡単に吹っ飛ぶ。まるでゴムボールみたいに、ぐにやりと曲がって壁に激突する。

「・・・ふう」

ズバットは、今の衝撃で戦闘不能になってしまった。ので、レッドの洗脳も程よく解ける。

「ば、バカな・・・！」

完全に勝利したはずだった。あの状況下で出来ることなどないはずだ。

崩れる壁の瓦礫を避ける体力もなく、成す術なく痛みに耐えるしかない。

そんな中、目線だけを動かすと僕を殴り飛ばした怪力の持ち主が目飛び込んできた。

「助かったぜ。ニョロ」

「ニョロ、ボン・・・？」

確かに僕を殴り飛ばしたのがニョロボンだというのなら納得はできる。人一人くらい軽くペシヤンコにできる力はあるだろう。

が、依然としてわからないのは。

「いつだ・・・？いつ、ニョロボンを出せた？」

そう、そんなタイミングなんかなかった。なまじあったとしてもこの僕が見逃すはずが――。

「いつだって聞いたか？答えるなら、“はっぱカッター”の時だな」

なんだって・・・？

そう言われて、ようやく僕は僕の立っていた位置を見やった。

正確にはその後ろを。

「そうか。なるほどね」

肺が痛い。これは肋骨が何本か逝ったな。

それでも口にせずにはいられない。あまりにも自分が愚かすぎて。僕がいた後ろの壁に突き刺さっているはっぱカッター。その中の一枚は不自然に真ん中がぼっかりと空いている。

つまり、あそこにモンスターボールを装着して、攻撃するフリをして僕の死角に潜り込ませたんだ。

思慮が浅いのは僕のほうだった。

変わっていないと決めつけて、すでに勝利したと驕ってしまった。ロケット団にいてどうやら僕にも力が手に入ったと知らず知らずのうちに錯覚してしまっただけ。

あー、やだやだ。一番嫌なタイプの人間に自分がなっちまった。

マチス様を笑えねえや。

「なあ、本当にロケット団に共感してるのか？あの理不尽な横暴を、皆を傷つける行為を、本当にアンタはよしとしたのか？」

まだ言ってるよ。それはもう終わった話だつてのに。

いつまでも過去にすがってちゃ、前に進めないぜ。

ま、僕が言うなって話なんだけど。

「あーあー！うるさいなあ！オカンかよ。いいから行けつて。君は勝ったんだ。勝者が敗者にしてやることなんざ一つだろ」

黙ってその場を立ち去る。

それが礼儀つてもんだ。

「……………」

「しけた面してんなよ」

あんまりにも笑っちゃまう顔だったんで、思わず笑みがこぼれた。

「そうだな、じゃあ行きやすいように情報を一つ。最上階の左奥の部屋。そこにいいもんがある。立ち寄ってみなよ」

ああ、しゃべりすぎた。二重の意味で。

咳き込むと血が出てくる。全身が痛すぎて、もう何もできない。

チラとみると、レッドは何も言わず僕の言った通りに立ち去った。

きつと、レッドは勝つだろう。ナツメ様にも、三匹の伝説にだって。

そして、ボスでさえいずれば越えていく。

そんな人間に勝負できたことは、誇りに――。

「ならねえよバカ」

そう呟いて、僕は瞳を閉じた。

それにしても、皮肉だねえ。結局最後にやられたのは、あの頃と同じように成長したニヨロだっただけだから。

幼少の頃の、僕がまだ絶望を知らず楽しく人生を送っていたほんの僅かな時間。

もう、思い出すことはないのだと思っていたけれど。

脳裏にフラッシュバックする思い出を垣間見ながら僕は――

「ふっふっ」

静かに笑っていた。

やがて、物語は収束に向かう。

それはまた、次のお話で。

16話 「最終決戦にふさわしく」

レッドがカラーを破ってから数分後。

「ぜえ、はあ・・・まったく、なんて無駄に高いんだこのビル」

レッドは、素直にもカラーの言う通りに最上階の左奥の部屋へと向かっていった。

カラーの今わの際の言葉を信じる程度にはまだ、彼への信頼がなくなつたわけではないらしい。

カラー、その人物のことを大してレッドは知らない。

昔、近所に住んでいてよくポケモンバトルの相手をした大勢の中の一人で。

その中では一番の年長者だった癖に、それを感じさせないほど彼は、いや、彼等は子供だった。

いつもケラケラと笑って、イタズラっ子で、妹思いで、それなりに家族と仲が良く、たまに駄々をコネては周囲を困らせる。

そんな普通の子供だった。

だから、彼の家が火事になつたと聞いた時は子供心に心配したものだ。

直接火事になつた所を見てはいないけれど、その後の悲惨な家の状態はあまりにもショックで。

他人の家でさえそうなのだ。きっと自分の家ならレッドは耐えられていないだろう。

そんな耐えられない状況下になつてしまったカラーは、どれだけの傷を負つたのか。そう考えると心根の優しいレッドには胸が痛い。

火事になつてすぐに、カラーは遠くの土地にある孤児院が受け入れてくれたらしく引越してしまいそれ以降なんの接点もなかった。

そう、なかつたんだ。

「はあ・・・はあ・・・ここ、か？」

最上階の左奥にある部屋。

ここが、カラーの言つていた「いいもん」がある場所。

「つて、いないじゃないか。ブルー」

てつきり「いいもん」ってのはブルーのことだとばかり思っていた。カラーだつて彼女がここにきていたことに気づいていたし、それを撒き餌にまで使ってきたのだから。

「……結局、また嘘かよ」

子供の頃から数えて何度目だろうか、これで騙されたのは。

その度に見えていたあの人を小ばかにするような、それでいてどこか怒る気を無くさせるようなケラケラと底抜けな笑顔は、もう無い。そんなことを考えながら、それでもなぜかその場を離れる気にはならず。

レッドは足を動かす。

「うん？なんだこれ」

動かしてみると、ふと違和感に気付いた。

その部屋はやけにただっ広いくせに真ん中にある不思議な円盤のようなものしか置いておらず。

「おっとと」

それは持つていみるとやけに重く、両手で持ち抱えるのがやつとなくらいだった。

ここがロケット団のアジトだということ、加えてカラーの言葉の意味。

それらを考えるにこれがその「いいもの」であることは、どうやら疑いようがないらしい。

「いたか？」

「いや」

ふと、声が聞こえてきた。

当然だろう、先程言った通りここは敵のアジトだ。先の戦いで派手にやらかしてしまったわけで、本来ならロケット団の戦闘員がうじやうじやいてもおかしくないのだ。

「マチス様だけでなく、キョウ様も倒された。おまけに……ビルに炎を放ったようだ！」

信じられないといったニュアンスが多分に含まれたその会話に、レッドはコソコソと円盤が置いてあった縦長のショーケースの陰に

隠れる。

「早くあのガキ共を探さなければ！……だが、トレーナーバッジのエネルギー増幅器のそばを離れるわけには」

(トレーナーバッジのエネルギー増幅器……?)

自らの手元にある円盤の、きつとその名前にレッドは疑問を浮かべる。

その名前の、意味について。

幸いにして、この部屋は暗がりであるために外からはよく見えな
い。

「――、!!」

「ハハッ！」「ナツメ」様！」

トレーナーバッジの増幅器を眺めたり小突いたりしていると、声が聞こえ、二人のロケット団員が慌てたようにその場を去っていった。

なんだなんだ、と入口の方をコツソリ見ると。

「あ、あいつは……！」

気づかれないように、けれどそれを防げずレッドはあつ、と声が漏れる。

そもそもの発端。レッドがこのヤマブキに来ることになった元凶。マサラタウンの研究所を襲った奴。

確か、ナツメと先程呼ばれていたその女。

モデルのようなスリムな体型に、切れ長な瞳と長い黒髪がよく映える。

そして、同時に。

カラーが口に使っていたその名前。

(――！入ってきた……！)

コツコツと、何かを探す風にキョロキョロとナツメはその部屋に入ってきた。

何をどう楽観的に考えても、これを探しているのは明白で。

ドツクン、ドツクン。

と、予期しない幹部の登場に心臓が痛いほど跳ねる。

今までだって予期はしていなかったけれど、今は状況が違う。なにせ、レッドが胸に持っているそれは間違いない。ロケット団にとって大事なもので。

円盤にぽっかりと空いている穴は全部で七つ。

そのどれもに見覚えがあつて。

(トレーナーバッジ。俺が持っているのは六つ)

自身が持っているトレーナーバッジの形とそっくりだ。

が、旅の途中でゲットしてきたバッジは六つ。

あと一つ。そう、ナツメのバッジが足りない。

(七つの穴を埋めるのに、あと一つ！)

逆に言えば、そのあと一つを埋めれば完成なのである。

コツ。

「ム？誰だ！」

しまった。

と、思った時にはもう遅い。

地面と接触しないように持っていたのが仇になった。重さに知らず知らずのうちに耐えきれなくなり、ついに小さな。けれど自分の存在を知らせるには十分な音が響いた。

「こ、こうなりや攻撃だ！ピカ!!」

先手必勝。焦ったレッドは、ピカを出し攻撃の指示を出す。が。

「!?ど、どうしたピカ!?!」

ピカは攻撃することはなく、スタリ。と優雅に床に着地した。

まさか、今の一瞬でピカも洗脳にかかってしまったのか。

そう焦ったレッドを、嘲笑うかのようにナツメはピカに手を出す。

「かわいい子だこと。私が攻撃すべき相手ではないと知っている。おや？その機械を発見したか」

言うが早いのか、ナツメは変わらぬ足取りで敵とは思えないほど距離を詰めてくる。

「ねえレッド?」

「うわああああ!」

「敵が怖くて叫びをあげたのではない。」

「叫びをあげたのはもつと本能的な部分。」

ドロリと、人の顔が溶けていくその怪奇現象についてだ。

「なんてね♪アタシよーレッド。変装の名人だって知らなかった？」

「ブルー!?!」

ドロリと溶けたその顔からは、今まで心配して探していたはずの顔が。

「そうか、ピカは最初からブルーだってわかっていたのか。」

「ねえ、レッド。これを見て」

服を着替え、時間がないと言いたげに早速ブルーは口を開く。

「ゴールドバッジ。さっき超能力お姐さんからもらっちゃった。ウフフ」

「どうやら既にナツメと戦闘を終えた後らしい。軽くコテンパンにしてきたとはブルー談。」

「ああーく、くれよブルーー!」

思いがけず最後の一個が目の前に現れて、思わずレッドはおもちやを欲しがる子供のような声を上げてしまう。

ブルーもそれを分かっている、バッジを出したのだろう。

「が、それを簡単に、そしてタダでくれるほど目の前の少女は何も考えてないわけじゃない。」

「私の性格知ってるでしょ?取引よ。月の石と交換でね」

月の石。ハナダの洞窟でカスミと探しに行き偶然見つけたアイテムだ。なんでもポケモンに対して特別な力を発揮するらしい。

それをなぜ目の前のブルーが知っているのかはこの際置いておいて。

「なあ、ブルーそんな取引しなくても力を合わせて戦えば」

「きっとブルーはその石で自分のポケモンを強化させたいのだろう。」

レッドだってせっかかく手に入れた石だ。惜しいという気持ちもある。

「勘違いしないで、レッド」

「だがブルーはそんなレッドの思いを見透かすように釘を刺す。」

「アナタとアタシは別の目的でここにきたのよ。大丈夫、これでお互いの目的が達成されると思うわ」

「信じて、いいんだな？」

「当たり前でしょ？」

レッドの訝しげな視線に間髪入れずに答えるブルー。

そんなブルーをどうやらレッドは信用したらしい。

ここに、取引は成立した。

(ホホホー♪やったわこれで計画通り！)

当然、心の中でしてやったり顔のブルーにレッドは気づかない。

「ねえレッド。ついでだから教えてあげる」

つつつ、とすり寄ってきたブルーが口を開く。

「その機械は奴らの切り札よ。七つ揃ったバッジはポケモンの力を上げるエネルギーを生むんだって」

そして、当然のようにこれもまたブルーの嘘であるのだが。

「そっか、サンキュー！」

これまた当然のようにレッドは彼女の言葉を信じてしまうのだ。

本当は新ポケモンが誕生する。と、彼女は聞かされている。

ブルーの目的はその新ポケモンを頂くということにあっただけから。

「そこまでわかっているのなら、なおのこと生かしておくわけにはいかないな！」

二人の体がビクツと震える。

その凜と一つ通った声の主は。

「ほ、本物のナツメ・・・」

「さあ、その機械を渡せ!!」

今度はブルーの偽物なんかじゃない。正真正銘、本物のロケット団幹部。

ナツメだった。

なぜかひどく怒っているが。

「くっ。ブルー、下がってる！」

仮にも女の子に戦わせるわけにはいかないとレッドは男の子の矜持で前に立つ。

「はい♪」

猫なで声で答えるブルーはいそいそと逃げる準備。

「さあこれで七つ目だ！」

そんなブルーを気に留めず、ナツメを迎えることができたのはこの機械がまだ自分の手元にあるからに他ならない。

が。

「あ、あれ？」

七つ、しっかりとめ込んだのに。周りにはなんの影響もない。しん、と静まり返ったままである。

考えらるの是一つ。

「レッド、ごめんね。この前返したバッジは、ニセモノだったの」

ぺろりと小さな舌を出して、一ミリも謝罪の気持ちも籠っていない「ごめんね」を吐き出して、ブルーは機械と共にすたこらとその場を逃げ去っていった。

依然、バッジを奪われた時にちゃんと返してもらっていたと思っていたのに。だからこそ、どこかで信用していたのに。

「あ、あ、あいつく〜く〜!!」

してやられたのは、もうこれで何度目か。顔を真っ赤にしたレッドがブルーを追うよりも早く、ナツメの攻撃はレッドを襲う。

「フン、仲間割れか」

しよせんはガキ。マチスもキョウも油断していたからやられたのだ。

そして、自分が洗脳したアイツも。

「まったく、もっと頭のいいヤツだと思っていたが」

洗脳したことにより、たった一つのいい点が消えたか。なんて、考ええることはやめた。

まずは目の前のガキを排除することだ。と。

「いでよーファイヤー」

そして、サンダーとフリーザーをユンゲラーの力でこの場所へと呼び戻す。

他人のポケモンであるはずなのにそんなことができるのは、ロケット団という組織の異常性とナツメの力だろう。

ただでさえ不利なレッドは、これで勝ちの目が著しく低下する。

「!!来たな!」

「な、なんだこれ!」

レッドが絶望的状况に冷や汗をたらしていると、唐突に後ろから光の球体。いや、エネルギー体が飛び込んできた。

「きゃあああ!」

「ぶ、ブルー!」

球体を追っかけてきたのだろう。部屋に入っすぐブルーはあまりの迫力に気を失ってしまった。

「フフ、さきほど、その機械のことを何やら言っていたようだが、その全ては的外れだ」

「なにい!」

「機械から発したエネルギーは、この伝説の三匹のためにある!」

そうこわ高々に宣言したナツメは、三匹に同時に指示を出す。

ほのおのうず
「炎!」

氷
「氷!」

かみなり
「電気!」

あまりの迫力に、技が出る前に回避行動をとるレッド。

おかげで、どうやら塵とならずには済んだらしい。

代わりに後ろの壁が塵となったが。

「三鳥一体攻撃が可能になるのだ」

その威力は、最早言うまでもない。

「三つのタイプを合成する研究は前から行っていた」

「ブイ!」

ドサリと、ナツメは弱々しく力のないイーブイを物のように扱う。

「それも、この時のための実験だった。言うなればプロトタイプと
いったところか」

その言葉に、レッドの中のなにかが切れた。

イーブイを物のように扱ったことに。また酷いことをされたのだと、何も言われずともわかる。

イーブイを実験なんかに利用したことに。それにどれほどイーブイが苦しんだか、レッドには手に取るまでもなくわかる。

イーブイをプロトタイプと呼んだことに。イーブイを勝手に失敗作と断じたことに。イーブイをまた勝手に苦しめたことに。

「最終調整が必要だったので取り返したが、ウフフ。もう用なしだ。まったく、アイツが余計なことをしなければ面倒なことをせずに済んだものを」

「ふ、ふざけるな———!!」

最後の言葉の意味すら考えられないほどに、レッドは激昂する。怒りに任せ、フツシーのつるが飛ぶ。

「無駄だといったはずだ!」

「ああ!」

「ウワーハハハ!」

呼吸を合わせた三匹の前には、しかしそれも無力でありフツシーは簡単にそして無常にも先程空いた穴から外に落ちていった。

「気分がいい! ついにこの力を手に入れた」

正義のジムリーダーからバツジを巻き上げようと画策していたことも、中々上手くいかなかったことも今となってはもうどうでもいい。

「お前たちがバツジを集めてくれるのを待っていた。ご苦労だったな。もう用済みだ」

結果として、望んだ力は手に入れ。これで敵はいなくなったも同然だから。

始末しようと思えばいつでもできたが、放っておいたのもこれでおしまいだ。

「さあ、虫けらのように死ね!!」

三匹の強烈な猛攻がレッドを襲う。目を開けていることすらでき

ない中で、ナツメの声だけが耳に届く。

「マサラの地は我が利用させてもらう！お前たちはそういう運命なのだ！」

猛攻に耐えながら、頭の中でいつかグリーンがいった言葉が反芻していた。

『マサラとは世界で一番ポケモンが汚されていない場所。マサラとは白。穢れなき白。という意味だ』

「く、くそー！俺たちの街を汚されてたまるか!!」

最後の最後、無駄も無駄。

だが、そんな些細な抵抗がどこかで歯車を動かすことがある。

「よく言ったレッド！諦めるのは、まだ早いぜ！」

「グリーン!?!」

外からリザードンに乗ってきたのはグリーン。どうやらオーキド博士の救出に成功したらしい。

「こしやくな、無駄だと言っているのがわからないのか!!」

が、そんな状況の変化も有無を言わせぬ力でねじ伏せようとするナツメ。

「くらえ!ゞ かせおこしゞ」

外で飛んでいたリザードンですら、中に引き込まれるほどのかせおこし。

(なにか、何かないか)

この絶望的状况をひっくり返す、なにかが。

レッドが、薄れゆく意識の中で必死に考えていた時。

それは目に飛び込んできた。

そう、月の石が。

(グリーンが敵の攻撃を耐えてくれているその隙に・・・よし)

どうやら一応の策くらいは思いついたらしい。

「じよ、冗談じゃねえぜー！とんでもねえクソガキどもだっ！」

「ビルの炎が広がってきやがった！早く街から逃げろ！」

けたたましく鳴る非常用のサイレンとわらわらと蜘蛛の子のように散り散りになる黒い集団が、この街を占拠していた。

「イワーク、たいあたり！」

ロケット団のアジトから出てくる出てくる。まるでゴキブリだ。

そんな害虫を駆除するかのように、一人の男が立ちはだかる。

抵抗する力もない害虫は、イワークの重みにただただグロツキ状態。

「レッド、お前に一度は倒されたこのイワーク。復活して今度は助太刀しにきたぞ」

その男の名前はタケシ。ニビシティのジムリーダー。

正義を名乗るジムリーダーである。

「もしもし？こちらタケシ。南側通用門はまかせる」

そして電話の向こう側にはもう一人。

「こちらカスミ。北側は封じたわ」

ジムリーダー、一人で封じられてしまうロケット団の下っ端どもの頼りなさを嘆くべきか、たった一人で逃がさないジムリーダーたちに驚愕すべきか。

「こちらエリカ、西側も万全ですわ」

残る東側はタマムシの精鋭たち、つまりエリカが直々に鍛えた精鋭たちが総出で抑え込んでいる。

まさに、一網打尽とはこのことだった。

「そ、それで・・・ですねっ」

これで、あとは仕掛けた網に魚を追い込むだけの、はずだが。

「?どうした、お嬢」

「エリカ？」

三人に通じている電話の向こう。エリカは逡巡したような素振りを見せ、数秒の沈黙の後、口を開く。

「ロケット団の中に、こう、飄々とした。ふざけた軽い感じの男はいませんか？」

逡巡したわりにはスラスラと、そして力強い言葉たちにカスミもタケシもはてなを浮かべる。

「あ、あの！こう、なんていうかいつもニヤニヤヘラヘラ顔がくつついたような。こちらの全てを茶化してくるような、そんな腹の立つ男はいませんか？」

言葉を重ねるもそれはあまり意味を持たず。

「さあ、こちらには来てない。と、思うが」

「まあ、私も全員を一々見てないけどね。こんな切羽詰まった状況でいくらなんでも目立つよね。そんな奴いたら」

「そう・・・ですか」

当然といえば当然の、その二人の言葉に電話越しでさえわかるほどに落胆するエリカ。

「えー？ナニナニ？男？」

だから、そんなわかりやすいリアクションをする彼女に、カスミがこう返すのは自然だろう。

「ちつ、違いますわ！ただワタクシはあの男が勝手にいなくなるから！一言文句を言ってやろうと!!」

「あーはいはい。なるほどねー、そいつから聞いたんだ。アジトの場所。で、なに？密偵か何か？」

そんな予想通りの親友の反応に、カスミは勝手に合点がいく。

よもや、本当にロケット団の団員だとは思ってもよらないだろうが。

そしてそのカスミの考え通り。このアジトの場所を、教えてくれたのはカラーだった。

正確に言えば、カラーのズバットだが。

ズバットがエリカの元を尋ねた瞬間に、エリカは精鋭を一人尾行させた。

結果、そのエリカの選択は正しかったわけだ。

「違います！ええ、違いますとも！ちゃんと！自力で！見つけましたから！」

自分のとこの精鋭たちはともかく、急な招集なのに二人ともよく駆けつけてくれた。

それはきつと、レッドの人徳の成せる業なのだろう。

「あの、俺も聞いてるってこと思い出してくれよう？」

「あっ……」

どうやら本当に失念していたらしい。

小さく声を漏らすと、誰にも気づかれずに一人で顔を真っ赤にするエリカ。

「と、とにかく！このままレッドたちのサポートに尽くします！いいですね！」

「も、勿論」

「おーけー」

その有無を言わせぬ迫力とともに、電話を切る。

尾行からの情報は当然、アジトのビルの居場所だけではない。

対象がナツメと戦闘になったこと。負けたこと。気を失いビルに連れ込まれたこと。

その全てを優秀な尾行はエリカに報告していた。

「カラー……」

その眩きが、届かないと知りながら。

エリカは一人、ビルを見上げる。

「なにい!？」

外でレッドたちのサポートとしてジムリーダーが踏ん張っている間。

こちらの戦局は、わずかに傾いていた。
どちらに傾いたのかは。

「れんぞくパンチ！」みだれひっかき！」はかいこうせん！」

「ぐうっ！」

ブルーのポケモン、ピッピが月の石で進化してピクシーとなった今。“ゆびをふる”でランダムに出る技に、ナツメは応戦しきれていない。

「よし！突破口は開けた！次は・・・！」

「させるか！」

ようやく兆しが見えてきた。が、それもやはり強大な力で閉じられる。

一度は冷静さを欠いたナツメだが、一度それを取り戻してしまえばあとはたやすい。

「ゴッドバード！」

ただでさえ強力な技を、伝説と呼ばれるポケモンが。それも三匹同時に放てばどうなるか。

答えは、ビルのほうがもたない。だ。

「ぐう、ううう、うわああああ！」

依然、意識が戻らなかったブルーは当然としてグリーンもレッドでさえ。その圧力にあらがうことができずにビルの屋上から外に放り出される。

「ふう、この高さから落ちればまず命はないだろう」

もはや壁の意味をなさなくなったビルの崩壊した部分から吹き込む風に髪を抑える。

「一瞬、ヒヤリとした・・・ん？」

確信するまでもなく勝利だ。その余韻に浸ろうと、最後にレッドたちの無残な死体を拝めようと地面をのぞき込んだ。

「!？」

が、ナツメが期待した結果は得られない。

そこにいたのはフシギソウのツルをネット状にして空中に佇んで

いる三人だったからだ。

どうやら今の衝撃でブルーも目覚めたらしい。

「いっけええええ!!」

「ええい!もう一度“ゴットバード”だ!”

度重なる衝撃で、ビルはもはやその形を保つすべを失い、崩壊の力
ウントダウンを始める。

が、ビルが崩れるその前に、などという不安はどうやら杞憂らしい。
力の拮抗は、フシギソウの花が開くことで決着に沈んでいく――

「ぷはーっ!」

そんな決着から数分後。

まだ、その場にレッドたちが勝利の余韻に浸っているころ。

崩れたビルの一角で、少しばかりの砂埃がおこる。

「まったく、派手にやってくれちゃって。いやはやまさか、ビルまで潰
すとは」

そこにいたのは、ボロボロになったビルに合わすようにボロボロの
カラー。

そう、僕だよ。

「レッドめ、ロケット団を潰すだろうとは思ってたけど。ここまで僕の
期待を裏切らなくていいんだけど」

いやほんと、予め脱出できるように空洞を探しといてよかった。そ
れでもこうして、瓦礫の餌食にはなっちゃったけど。

あの戦いで僕が勝ったら、レッドにロケット団を潰してもらおう予定
だった。ズバットの“あやしいひかり”で命令してね。

ま、結局負けちゃったんだけど。それでも、こうして結果は僕の予
定通りってわけ。試合に負けて勝負に勝つってね。僕の好きな言葉
さ。

「さて、これで心置きなくロケット団を抜けられる。なーんでだか知らないけどジムリーダーなんて厄介極まりない人種の人達までいるし」

「ここはさっさとトンズラするに限るね。」

「なんせ、もう追手にビクビクしなくてよくなった。これで今日からよく眠れる。」

「……。」

「あー、ま。少しくらい情報はもらいましたしね」

「受けた恩はちゃんと返せっていう、昔のお母さんの教えでも久々に思い出しますか。」

「瓦礫の塊をきっちり三つ。カラカラが砕いて。」

「そこから現れた人影三つは、流星というべきかなんというべきか。致命傷には至っていないかった。流星に意識を保っていた人はいなかったけど。」

「ま、俺ができんのは精々これくらいですよ。これで、今まで世話になつた恩は返しましたんで」

「後は、見つからないうちに目が覚めるのが先か。目が覚めた場所が留置場か。運試しですね。」

「つと、本当に早くしないと僕が見つかってちゃあ世話ないぜ。」

「くるりと、最後に人が大勢で賑わっているストリートを見て。」

「じゃあね。レッド」

「なんて、柄にもない挨拶を試してみたりした。」

「なにが、じゃあね。なんでしようね。カラー」

「……んんん？」

「はあ……。どうやら神様はタダで許すなんてそんな聖人君子ではないらしい。」

「やっぱ嫌いだ。」

「それも次のお話で。」

「蛇足だけだね。」

17話 「いや本当につらい戦いだった」

一言で言って、僕は縛られるのが苦手だ。

勿論物理的な意味でも、そして精神的な意味でもだ。

僕の生きる目的を度外視してもやっぱり束縛つてのはあまり好きではなくて。

だからこの状況は本当に厄介で、また、相当に疲弊するだろうことは想像に難くない。

「ですから、あなたには人の道徳が何たるかをしっかりと教えて差し上げなければなりません」

「だーかーらー、いいって言ってんじやん。僕それよりもやらなくちやいけないことがあるんだよね」

「なんです？…また悪事を働こうとでも？」

先程から話はループして堂々巡り。僕的にはさっさとこの現場から離れないと見つかったらマズイ人間が、“二人も”いるんだから。

「そんなことをしようなどともう思わないように、そして今までのことを反省してもらおう為にも、やはり教養というのは必要です」

さっつきからエリカちゃんの言い分はこうだ。

ロケット団などという悪の組織で働いた悪事は消えない。だけど、これからの罪を重ねることを阻止することはできる。

もう二度と道を踏み外さないように。

立派な考えだ。それこそ正義のジムリーダーの名にふさわしく。

だけどそんなのは、僕にとっては余計なお節介以上のものはない。「つてさっつきから言ってるのに、とんと聞いてくれないんだもんなあ」

このままだと力づくで連れてかれそうだ。

「ええ、勿論です。そんな言い訳を聞くわけにはいきません」

この子は難くなに僕を矯正させたいらしい。

「どうしてそこまでこだわるのさ、君と僕なんてまだ会ったばかりじゃないか」

「会ったばかりだからこそです。ここまで人のことを危ないと思ったのは初めてですよ」

「えー、僕そんなにヤバイ顔してるかなあ」

なんておどけて見せても、エリカちゃんの眉間から皺が取れることはなく。

「・・・あーあ」

じつと見つめる視線に耐え切れず、空を仰ぎ見る。

もうすっかり赤く染まった夕焼けは雲一つない。

「ま、ここで問答していてもしょうがないし」

「ようやく決心しましたか」

ああ、エリカちゃんの言う通り。決心はした。

ここで時間を無駄に浪費してレッド達に見つかるほうがヤバイ。

「?なぜ、ウインディを?」

「なぜって、そりゃ、こうするためさ」

“しんそく”。それは超スピードで相手にアタックする技。逃げるには最適な技といえよう。

「アーツハツハツハ！」

作戦の成功は、相手の不意を衝くかどうかで決まる。

その点でいえば僕の作戦は完全に完璧だった。

人の道徳やら正義やらについて、コンコンと説教されるなんて拷問、僕には受けてる暇はないんだよね。

なにせ、すぐに次の指針を打ち立てなければならぬんだから。

「~~~~っ!!か、カラー!!」

風に流されて聞き取りづらいけど、なんか名前を呼ばれた気がする。

当然そんなんで立ち止まるほど、僕はバカじゃあないっての。

「つて、ウインディ!?」

僕は馬鹿じゃないけど、でも僕のポケモンはどうやらバカだったらしい。

律儀に急ブレーキをかけたウインディに僕は振り落とされないうにしがみつくので精一杯。

「こらこのバカ!臆病者め!いいからさっさとトンスラするんだよ

!!

ペシペシとウインディを叩いて先を促していると、どうやらウインディは名前を呼ばれたので立ち止まったわけではないらしいことがわかった。

「ん?」

なぜって?そりや、目の前にガシャコンとこちらを向いている砲台が目に入ったからさ。

「や、やあブルー。久しぶりだね」

目の前の砲台。カメックスの両の肩に支えられたそれは寸分狂わず僕に向いている。

見つかつてはいけないもう一人。

ブルーが、目の前にいた。

「ハイドロポンプ」

「ぐぎやうー」

その砲台が、砲台の役割を果たしたのはそれから数秒と経たなかった。

「よくもウソの情報を渡してくれたわね!」

ビシヨビシヨの僕を気遣うこともなくブルーの鬼のような形相に凄まれる。

「ウソ?なんの話?」

「とぼけんじやないわよ!トレーナーバッジの増幅器、新しいポケモ

ンなんて生まれなかった！それどころか・・・」

言葉が詰まるブルー、まるで思い出さたくないことを思い出しているように顔が真っ青だ。

「どころか？」

だから、話しやすいように僕は先を促してあげる。

「伝説の三匹をパワーアップさせるだけだった!!」

そんな僕の思惑などお見通しだろうが、それでもブルーは言わずにはいられない。

「・・・そつか。たか、それだけの代物か。」

だから、きつと。

僕の呟いた言葉の意味なんて、その一割も理解できないだろう。

「なに言ってる——！」

「いやー、ごつめーん。勘違いしてたみたいだ」

だから、怒りの矛先がそっちに向く前に僕はあっさりと謝る。

それが意外だったのか、拍子抜けしたようにブルーはきよんとした。

うーん、僕が謝るのってそんなに意外かなあ。

なんて。

「あの時、アンタがイーブイを探していた時に言ったわよね！ロケット団のアジト、そんなでもってその最たる秘密！」

そう、実を言えば、エリカちゃんの家で療養していた時。ブルーに一度だけ会っていた。

ブルーはどこから調べてきたのか、僕をロケット団だと最初の一言で看破して。ついでに今は逃亡中だということも突き止められていた。

まったくもってその無駄な執念は尊敬、しないけど。

とにかく僕はこれ僥倖と、保険を打っておいたわけだ。もしレッドがダメでもブルーと一緒にロケット団を倒してくれるんじゃないかって。

「うん、言ったよ。だから謝ってるじゃないか。ごめんって」

嘘を相手に信じ込ませるコツは、ほんのちよつとの真実で本当に隠

したことをくりりと、包んでしまうことだ。

それだけで、信憑性がぐっと増す。

「ウソね」

だから、ブルーにそういわれたときは、僕もきよんとしていたことだろう。

「私の目的を、アンタは察していたんでしよう？その上で、あんなに都合のいい情報を提供できるなんておかしいわ」

おっと、以外と冷静。こういう時は感情に任せるタイプだと思ってたけど。

それに真っ先に気づかなかったなんて、ホント悔しいけど。

そう、小声で付け足してブルーは歯噛みする。

「・・・そこまでわかってるなら、もういいじゃないか。ちよいと社会勉強になったろ？」

「そうね。二度と同じ過ちは繰り返さないわ」

そう言つて、僕の目の前の景色が開ける。

ずっと馬乗り状態だったから、ブルーの顔しか景色がなかったんだよ。

にしても、わざわざそれを言うためだけに僕をぶっ飛ばしたのか、この子。

肝が据わっているというか、怒りそのままぶつけましたって感じ？

やっぱり僕の分析は間違ってたかな。

「はっ・・・はっ・・・待ちなさい、カラー・・・」

なんてことをしてる間に、どうやら追いつかれてしまったらしい。

息も絶え絶えにエリカちゃんが僕の名前を弱々しく呼ぶ。

らしくないその姿に笑ってしまいそうになる。もう、同じ手は使えないよね。

ブルーはそんな光景を見て。

「フーンじゃあねーもう二度と私を騙そうとか考えないこと!!」

そこで、交渉もなにもなく、ただ願うだけなのはまだまだだねえ。それでも。

「あはは。それは考えとくよ」

それでもここで分かったと言っていれば、ことは済んだのに。やっぱり素直な僕ってのは三分持たないや。ウルトラマンのほうがよっぽど我慢強いね。

「く~~~~見てなさいよ!」

本当に悔しいんだろう、地団駄を踏みながらブルーはさっさとどこかに去ってしまった。

まるでこれ以上ここにいたら厄介なことでも起こるかのよう。

「・・・誰ですの?あの子」

「うん?」

まさか、ブルーについて追求するとは思ってなかったので、僕は咄嗟に言葉が出ない。

「あー、ほら。レッドたちと一緒にロケット団を潰した一人だよ」

「・・・そうですの」

あれ?なんか、機嫌悪い?

えーっと、女の子の扱いは心得ているつもりだけど。あーいや、そもそも機嫌を悪くさせるようなことしたことないし、そこまで深い関係にもなったことないや。

「ほら僕ってば適当だから、昔適当に流した情報が?だったんで怒り心頭で不満をぶつけられたんだよ」

って、なーんで僕はこんな言い訳じみたことエリカちゃんに言ってるんだ?

これじゃまるで、彼女に誤解を解く彼氏みたいじゃないか。

なんて、笑えない冗談だ。

「別に他意はありませんが、いったいどういう関係で?」

ここで、頬の一つでも赤らめて、口ごもったりでもしてくれればまーだわかりやすいんだけど。

口を動かすエリカちゃんはそんなことは一切なく、どころか冷え切った表情だ。

「どういうって、うーん?強いて言うなら泥棒仲間?」

「はあ?」

まあ、この説明じゃわかるはずがないか。ていうか、そのつもりで言ったわけだし。

サントアンヌ号でのあれが、泥棒というのかはさておき。

だって、僕はただ指示しただけだもん。悪いのはゼーンぶマチスさまってことで。

「ま、なんでもいいじゃん。ほら、行こうよ」

「ちよ、待って。押さないで・・・ってどこにです?」

どこって、君が言ったんじゃないか。僕に教養を叩き込むと。

これ以上はマジでまずい。もうここにいられるのは限界というやつだ。

「その代わり、衣食住を提供してもらおう。なにせこちとら勤務している会社をつぶされたんだからそれくらいの失業手当はつくよね?」

「・・・ま、まあ。それくらいなら、いいでしょう」

お、口ごもった。

なんて、考える暇もなく。僕は押さないでと慌てるエリカちゃんの背中を押して先をせかすのだ。

こうして、一連にわたるカントー地方を脅かした事件は終息した。

三人の子供が、元凶であるロケット団をビルごと潰すという。

これ以上ないほど痛快で。これ以上ないくらいの武雄伝で。

こうして僕は、ほんの少しの道の先と、まだまだ見えない目標を追いかけながら日々を過ごしていくのである。

「それで、だからこそポケモンと人間は手を取り合って生きていかなければいけないのです」

「……ぐー」

「狸寝入りはやめなさい」

エリカちゃんの大豪邸、そこはもうすでに僕の根城と同化していた。

あれから早一月。本当にエリカちゃんは僕を矯正させるつもりのように、こうして飽きもせず毎日毎日教鞭をとっている。

「まったく、一度でも真面目に聞いてみたらどうですか？」

「あつはつは、面白い冗談だ」

だから、こうして呆れて僕に説教を始めるのも毎日毎日欠かさない。

「さて、そろそろ時間だし行くよ」

「ええ。行ってらっしゃい」

そして、エリカちゃんの説教が終わるタイミングで僕が出かけるのもそんな僕にエリカちゃんが見送るのもこれまた毎日同じ。

飽きることもなくよくもまあと感心半分呆れ半分なんだけど、なにせ美人に見送られるのはそう悪い気はしない。

今日もまたそんな中途半端な気持ちで外に出る。明確な目的も何もなく。ただ、あやふやでふんわりとした日々を過ごすために。

「……ちゃんとしているんでしょうね。オーキド博士のところには「はい。今日も偵察部隊が確認しております」

エリカちゃんの側近がそうして報告しているのも、これまた変わらぬ日常だ。

なぜ僕がオーキド博士のところにこんなに真面目に通っているの

か、気になる人ー！

はいー！正解は通っていません、でしたー！

なんて無理矢理にテンションを上げながらなら、僕はオーキド博士と連絡を取るべくポケモンセンターへと向かう。

だって、そうでもしないとこれしきの事でさえサボりたくなってくるからね。

エリカちゃんには悪いけど、わざわざマサラまでいくほど僕はバカじゃないんだ。

だって、これでも忙しい身なんだ。ロケット団を抜けたつてのに報われないけどさ。

「あー、ハロハロ。オーキド博士？」

「相変わらず、いい加減な挨拶じやのう。カラー」

一応、エリカちゃんの中では僕はマサラまで毎日オーキド博士のお手伝いをしていることになっている。

なんでもこれまでの罪を清算させるとのことで、エリカちゃんが勝手に頼み込んで承諾されてしまった。

オカンじゃないんだからさー、過干渉はやめてほしいねまったく。

「そんでまあ、早速なんですがね。学会内にいる知的でビューティフルなお姐さんの連絡先ゲットできました？」

「そんな約束はしておらん！」

そうだったっけ？でもそんな人はおらんって言わないあたり、ワンチャンあるかな。

「ブルーの件。ちゃんと調査しとるんじやろうな」

この人の呆れたような声を聴くのももう飽きた。

「あーはいはい、ったく。ちよつとしたジョークじやんか」

「それで、連絡をしてきたということは何かしらの進展があつたと思っついていいんじゃない」

ついに博士は僕の言葉を無視し、かってに本題を進め始める。

「・・・へいへい。確かに、ブルーの調査は終わりましたよ」

じやなきや誰が好き好んでこんなお爺さんに電話なんかするもんですか。

博士の言葉に僕は肯定して話を進める。

「六年前に起こった、少年少女誘拐事件。『大きな鳥ポケモン』に各地の子供が連れ去られた事件でマサラの子供も連れ去られた。つてどこまでいいですよね？」

「うむ。よく覚えているよ。グリーンと近い年くらいの子が行方不明になったと聞いて、連日捜索したものじゃ」

「その連れ去られた少女と、オーキド博士の研究所の防犯カメラに写っていた、ゼニガメを盗み出した少女が同一人物だと一致しました」

あくまで淡々と僕の感情はどこにも入れずに、ただ事実だけを報告する。

「それが・・・」

「ええ、ブルーですよ」

小悪魔的な笑みを浮かべる女の子。何かを腹に抱えているだろうということにはわかっていたが、想像以上に予想外だ。

ま、どれもこれも僕には関係がないんだけどさ。

「そうか・・・」

僕は関係ないからどうでもいいけど、オーキド博士にとっちゃそうではない。

なにせ、自分の研究していたポケモンを盗られたんだから。

「で、どうするんです？一応、ブルーの現在地くらいはわかりますけど」

仕事である以上、僕はある程度は働く。だからそんなオプシオンとも呼べるそれを、オーキド博士に提示した。

「いや。もう、十分じゃよ」

だが博士はまるで用意していたかのように僕の提案を断る。

「さいですか。じゃ、これで依頼は完了ということ。報酬の方、よろしくお願ひしますね」

博士のその言葉にどれだけの意味があるのかとか、そんなことを思う暇すらなく僕も事務的な定型文を返すのみだ。

「わかっておるよ。その、黒いポケモンとやらを見つけた時には一番

にお主に連絡しよう」

そう、これこそがわざわざこんな何の得にもならない仕事を文句も言わずに引き受けたわけ。

黒いポケモンを自分で探すことにこそ、意味がある。だなんてそんなことは思わない。

なんだっていい。どんな手を使っても僕はそのポケモンを見つけないならならんんだから。

じゃないと、何のためにロケット団なんぞに入ったのかすら、その意味すらあやふやになってしまっただろう。

「・・・カラー。老人の戯言じゃが、例えそのポケモンを見つけたとして、それでも。きつとその感情が消えることは——」

「あー、なんか電波が悪いな。すいません、それじゃ」
ブツツ。

電波が切れた液晶モニターに、自分の顔が映り込む。

その顔が一体どんな表情をしてるのかなんて、確認するまでもないよね。

まったく口八丁手八丁の僕が聞いてあきれれるぜ。こんな？丸出しの方便を使うなんぞ。

まあいいや。どうせ、もう連絡することもないだろうし。

頼んでおいてなんだが、僕は期待なんてしていなかった。ただ、やれることは全部やっておかないと。

蜘蛛の糸が垂れてきたときに、ちゃんと掴めるように。そしてちゃんと手放さないように。

「・・・さて、もういいよズバット」

甘いゼエリカちゃん。偵察するんだったら僕が知らない人間を使うべきだ。あんなに屋敷に入り浸ってたら、いくらなんでも精鋭部隊の顔くらい覚えちゃうよ。

“あやしいひかり”で洗脳状態にした偵察に「何も問題はなかった」そう言わせるのはお箸を握るくらい簡単だ。

「感情が消えることはない？知ってらそんなこと」

それでも、消えないんだからしょうがないじゃないか。この感情と

向き合って、消化していかなければならないんだからどうしようもないじゃないか。

「いて。なんだよカラカラ」

勝手にモンスターボールから出てきたカラカラに小突かれ、僕は不機嫌そうに声を出す。

相変わらず、クールとかなんというかそっぽを向いたままだったけど。

その背中は、まだやることがあるだろうとそう言っているような気がした。

ああ、その通り。なにせ、まだ何も進んじやいない。依然として僕の目標は闇に包まれたままだ。

だから。

だからこそ。

頑張らなくちゃね。

「あ、ハロハロ。カツラさん？例のことなんですけどね。ええ、はい。ミュウツーですけど——」。

やらなければならぬことなんて、星の数ほどあるんだから。

まずは、資金調達からだね。

「はい。はい。ええ、ヤですよー。あんなバケモンと戦うなんて。そんなん親の責任でしょう?。」

こうして、僕らの日常は巡り廻る。

互いに別々の道を生きながら。

そして、僕らの時間は二年の月日が経った。

四天王編

18話 「凍らされて」

「あ、よっこいせつと」

あの、カントー全土を震撼させたロケット団が壊滅してから丸二年がたった頃。

そんな中、僕は一体全体何をしているのかというと。

「うーん、こつちも空振りかー」

洞窟を抜けて、太陽の光に目を細めながら落胆する。

何をしているかって？ 決まってるじゃないか、例の黒いポケモンを探しているのさ。

全土各地を旅して、本格的に僕は探索していた。

別に今までだって本格的じゃなかったわけじゃないけれど、ロケット団時代に集めた情報と旅をしながら新たに得た情報をしらみつぶしにしているわけだ。

結果は、芳しくないけれどね。

「ふむ。これで一応全部回ったわけだけど」

過去の伝承から、田舎にある言い伝えまで。

目ぼしいと思われる情報は粗方潰したが、結局伝承は伝承。言い伝えは言い伝えだったということだね。

現実には小説より奇なりっていうけれど、そんなのは限られた話さ。

「グルアアアアアア!!」

「カラカラ」

黒く凶暴なポケモンが統率する洞窟。人はおろか、そこらのポケモンすら寄り付かないという洞窟の情報をゲットした時はこれだ！ っ て思ったけどなー。

なーんて。

実際は、ただ暗闇で姿がよく見えなかっただけなのは笑えないオチだな。

いうが早いか、カラカラはあつという間に急所にホネこんぼうを叩

き込む。

「ただのゴローニヤだしねえ」

これで手もちの情報は最後。そして、これ以上粘ってもあまり期待は出来そうにない。

オーキド博士もなー、もうちよつと頑張ってくれないと。あの人の情報の情報、有益なの一個もないぞ。

・・・ふむ。カントーはもうダメかな。

僕の生まれ故郷であり、復讐の原点であるこの土地が一番可能性があると思つたし、だからこそここまで粘つただけだ。

二年間探して、カスリもしないってことはそういうことなんだろうね。

せめて何か黒いポケモンに繋がる情報があれば、話は違うけれど。

「まったく。探してもないのにはバンバン会うつてのに」

とはいえ、これからどうしようかな。

一つ、アテがないわけではないけれど。

「うげ」

出た。

探してもいないヤツが。

「ミュウ」

自身の名を、そのポケモンは鳴く。

「あのさあ、君なんなのわけ？僕のストーカー？」

黒いポケモンを探そうとした時から、この“ミュウ”はなぜか僕の前姿を現すようになった。

現すだけで、すぐにどこかへ去ってしまうんだけど。

「そういえば、初めて会った時はマサラだったっけ？なんか、黒いポケモンと関係あったりするのかい？」

そう思つて、その思わせぶりな態度に実はミュウを追いかけたこともあつたけど、その時は姿を現してはくれなかった。

めんどくさい女じゃないんだからさー。せめてなんの目的か、くらいは教えてくれないかなあ。

振り回されるこっちの身にもなつてくれよ。

「あ」

なんて思っているうちに、やっぱりミュウは飛び去って行ってしま
う。いつもと同じように。

「はあ」

ため息をつくことしかできない僕。アンニユイな午後はこれつき
りにしてほしいけど。

よし、決めた。もうこの土地とはおさらばだ。

いい加減、しがらみが鬱陶しくなってきた頃だし。

それを全部一掃することなんて、わけないんだぜ。

「みんな決めたよ。ジョウトに行こう、僕のもう一つのルーツだ」

「フェツフェツフェ。独り言かえ？楽しそうだのお」

「——っ!？」

殺気。それも並大抵ではないそれに、僕は自ずと距離をとってしま
う。

反射神経つてのは、人体のセーフティだと聞いたことはあるけれど
今ほどそれを身に染みたことはないね。

「えーつと？どちら様ですかね？おばあさん」

腰が曲がった老体に、杖がないと立っていられなさそうなおばあさ
んが僕の後方から声をかけてきた。

心当たり、なし。

実は僕の血のつながったおばあさんで、今更僕を心配して一緒に暮
らそうと言い出す可能性。

なし。

「ゲンガー！ シャドーボール!!」

「ああ!？」

僕の質問には一切答えずに、その代わりとっては何だが開幕先制
攻撃を繰り出す。

「まったく、昨今のおばあさんはクレイジーだね。年老いていくうち
に常識も忘れてきちゃったのかい?」

あーやだやだ。こんな年の取り方は絶対にしたくないね。

“シャドーボール”が僕の眼前でぶち当たる。その衝撃でモクモクと煙が上がった。

「・・・ほう」

「かみくだけ”ゴルバット”」

勿論僕そのものではなく、壁となったゴルバットに。

構えたモンスターボールと、シャドーボールを口で受け止めていたゴルバットは僕の指示通りに粉碎した。

「直撃したと思っただけけどねえ。その煙、モンスターボールを開閉したときの煙だったかい。フェツフェツフェ」

その一撃で仕留められるとは最初から思ってたのか、おばあさんは特徴的な高笑いをするのみだ。

うん、やつぱり知らないや。こんな特徴的な人、一度会ったら忘れそうにないしね。

「なんの用ですかね？見知らぬ人からこんな仕打ちを受ける憶えはないんですが」

「フェツフェツフェ。憶えがないとは、よく言うよ」

んんん？なんだなんだ？僕が知らない内にどこかしらで恨みを買っていたのかな？

ない、とは言い切れないのが僕の人生の悲しいところだよな。

「コレ”に見覚えは、当然あるよねえ」

そう言っつて、おばあさんはガサゴソと大きな荷物を取り出した。

そう。円盤型の両手で抱えないと落っこちてしまうそうになる、その大きな荷物を。

「それは・・・エネルギー増幅器」

二年ほど前、ロケット団が開発したジムリーダーのバッジの力を増幅させる機械。

だけどそれは。

「今更そんなの持ち出して、ダメですよおばあさん。ゴミはちゃんと分別しないと」

そんなだからゴミ屋敷だとか近所で噂になっちゃうんですよ。

昔の物に頼りたくなるのもわかりますがね、時代は受け入れないといつまでも老いて枯れたままになっちゃいますぜ。

「フェツフェツフェ。やはり気づいていなかったか」
「なに？」

その妙な自信と、含みを持たせた言い方が気になって僕は思わず聞き返す。

「妙だとは思わなかったかい？トレーナーバッジは全部で八つ。だけど、この機械には“七つしかない”ことに」

「……」

確かに言われてみれば妙な話だ。数が合わないなんて、そんな初歩的なミスあのサカキ様がするわけがない。

「なーんて言うと思っただ？そんなことに気づかないほど、愚かじやありませんよーだ。その機械の目的は、あくまで三匹の伝説ポケモンをパワーアップさせ、操るのが目的だった。つまり、それには七つで充分と判断した。ただ、それだけの話でしょう？」

機械の、そしてロケット団の目的さえ知ってればそれくらいわかる。

得意顔で若者に自慢したかったのか知らないけど、わざわざこんなところまで僕を追っかけてご苦労なことって。

崩れたアジトのビル本社から必死こいてそれを探したのかな。そう思うと込み上げるものがあるね。

「ぶぷー。徒勞(ぶ)苦勞(ぷ)様でしたー」

「フェツフェツフェ。それは、半分正解といったところだね」

「はあ？」

まったく、煽ってんだからちゃんと反応してよね。

僕の言葉は無視で、おばあさんは言葉を続ける。

「確かに、ロケット団の目的程度には七つで充分だっただろうさ。だが、この機械にはもっと秘められた力がある」

程度、というところにおばあさんがロケット団を下に見ているということがわかる。

「八つ目の……穴」

カパリと、おばあさんは僕に見せつけるように真ん中のくぼみを押し、八つ目のバツジを埋める穴を開く。

そこは当然のように空洞で。

そこで僕はようやく目の前のおばあさんの目的が分かった。

「フェツフェツフェ。この機械の凄さはね。あんなものじゃあないのさ。この八つ目の穴を埋めると、どうなると思う?」

「はっ。知ってたらとつくに埋めてるよ」

最早敬語を使っている余裕は、僕にはなかった。

たらりと、冷や汗が落ちた瞬間。

「ぐっ！ゲンガーか!」

いつの間にか、忍びよった陰に不意打ちの“おどろかす”を食らって、僕は後ろに転がっていく。

「この八つ目のバツジの所持者。サカキがどこに行ったのか、吐いてもらうよ。最後にサカキに会った、カラー。お前にね」

やっぱりか。なまじ想像していた通りすぎて、少し笑う。

あーあ、あの人に聞かるとロクなことになりやしないや。

「別に、サカキ様を庇うつもりは一ミリもないんだけど」

モンスターボールから、最後の一匹ウインディを取り出して戦闘態勢に入る。

「知らないって行つたところで、簡単には返してくれないでしょ?」

「フェツフェツフェ。伊達に悪の組織にいたわけじゃないねえ。そこら辺、よくわかってるじゃないか」

そこで、おばあさんは言葉をいったん止める。そのにやけ顔が何かを企んでいるのがモロだぜ。

ま、それを知ったところで警戒する以上のことはできませんけどね。

「レッドとは、大違いだ」

「・・・レッド?」

なぜそこでその名前が出てくるのか、とんとわからず僕はきよとんと首を傾げてしまう。

「いやねえ、少し前にもサカキの居場所を教えてもらおうとレッドの

元を尋ねたのさ。結果は、お前と一緒だったがね」

「フェツフェツフェと、高笑いするおばあさん。その反応から見るにどうやらレッドは無事じゃあないようだ。」

「心配かえ？ 弟分がどうなったか、教えてやってもいいんだよ」

「へー、そんなことまで調べてるんだ。本当に老人つてのは暇なんだね。いいな、わけてほしいくらいだ」

「なに？」

「ムカツクな。僕のことをそこまで調べておいてそんなことで、動揺すると思われてたことが。」

「本当にムカツクぜ。」

「ウインディ!!」

「高速移動」でスピードを上げた中で”とつしん”。

「弟分？ だーれが、あんな戦闘バカ弟にするかよ。僕の家族に、あんなの入ってないんだよ」

「くっ。速い!」

傍らにゴース、後ろにゲンガー。わからないけど、ゴーストタイプを主に使うらしい。

「ゲンガー!」

「カラカラ!」

なんて、指示なんていらさないよね。君は。

ゴーストタイプに力押しは危険だ。

なんて常識も、さ。

「さて、ゴルバット! ウインディ! 気を引き締めて行くこうか!」

後ろは振り返らない。負けたら死ぬまで弄ってやる。

「フェツフェツフェ。ポケモンとの絆ってやつかい? いいねえ」

「薄ら寒いこと言うなよ、おばあさん」

「キクコ」

ぼそりと不敵な笑みは崩さずに、おばあさんは名乗る。

「四天王、キクコだ。覚えておいてほしいねえ」

「はは。悪いけど、守備範囲外だぜ。おばあさん」

そして同時に、戦闘中にベラベラと喋るもんでもない。気が散るだ

ろ？

「どくばり」にご注意ください」

「っ!?アーボック!」

天高くゴルバットが舞う。その針の矛先はキクコの首へ。

「ありや」

三匹目、アーボックのおなかにどくばりは虚しく突き刺さる。

この二年で、ズバットからゴルバットに進化して多少は強くなったけど。

どうやらその強くなったゴルバットより、目の前のおばあさんは勝るらしい。

「まあいいさ。おかげで、時間は十分稼げたし」

この技を使うには、まだ一瞬の隙が生まれてしまうからね。

「ウインディ!!」だいもんじ」一乗」

ぐ、ぐうううう!?!」

大きな「だいもんじ」がキクコとそのポケモン達をまとめて襲う。体をぐるりと囲み、四方から攻撃を続ける。

「ふえ、フェツフェツフェ。こんなもんで倒れるほどまだ老いちゃいないよ!」

「いいや。終わりだよ」

苦しそうに、けれどまだ負けた目をしていないキクコの声に僕は首を振る。

なにせ、そのだいもんじ。

一度はまればもう、抜け出すことは不可能だ。

「さつき言ったけど、時間がかかるんだ。この技は」

「なにを——!」

「まあ、どこまで」かけるか」にもよるんだけどさ。今の溜めならとりあえず」二乗」までは行けるんだよ」

「ガウ!」

鳴き声と共に、もう一度。

飛んでくるのは「だいもんじ」。

「な!馬鹿な!?!」

「二年間、情報の真偽を確かめるためにさ。戦闘するってことも増えたんだ。できるだけ回避してきたけどね」

「ぐうううああああー!」

それでも避けられない戦いというのもあって、そしてそれを凌ぐのは現状の最低限の戦力じゃ無理だったわけだ。

「そこで地道にレベルアップなんてかったるいじゃない?」

誰でも特別なオンラインワンになりたいじゃない?

「ちよつと頑張っちゃいました。ねー?」

「キャウー!」

甲高い声で甘えてくるのは、相変わらずだけど。

「て、もう聞こえちゃいないか」

さつきから一人でしゃべっていることに気づいて、ちよつと恥ずかしい。

「一応言っておくけど、サカキ様が今どうしてるのかなんて本当に知らないぜ。興味もない。ついでにバツジも持ってなーい」

このまま粘着質に追い回されても鬱陶しいし、持つてる情報は?偽りなく伝えた。

「さて、そろそろ終わったかい?カラカラ?」

こちらの戦いも終わり、なんの気なしに振り返る。

「・・・カラカラ?」

いつもなら、こちらが呼ぶ前にもう終わったとばかりにスタスタと先に行ってしまうカラカラが、今日は返事すらない。

いや返事があるほうが珍しいんだけども。

「なっ!?!」

珍しいついでにもう一つ。僕が思わず光景がそこにあった。

「凍らされている・・・?」

キクコの手持ちを見る限り、こんな強力な氷技を使えるようなポケモンはいなかったはずだ。

それとも、隠していた手持ちがいるのか。

「お見事、あのキクコを難なく倒しちゃうとは。計算外」

「なるほど、アナタがやったのか」

眼鏡がよく似合う知的なお姉さん。そんなお姉さんとパルシエンがいつの間にか僕の後方に立っていた。

気を抜いていたわけじゃないはずだけど、いつの間について感じだなあ。

ゲンガーが倒されていることから、きつと倒した瞬間を狙われたんだろう。どうしてもほっとしてしまふのは致し方ないことだ。

「そう、私は四天王。カン——」

「ぶっぷー！ホントに氷漬けにされてやんのー！あーんなかつこつくてたのに！」

あれ？なにか言いましたお姉さん？

「アナタ。状況が分かっているのかしら？笑っている場合ではなくつてよ」

「いやいや、笑う場面でしょ。こっちは」

あんなに自信満々で挑んでおいてさ、これはお笑いだよ。

「ねえ、カラカラさん？」

僕の一言、一言に。

ピシピシと氷漬けにされているカラカラから音がする。

「あ、ちょうどいいや。写真撮っておこ」

「！！」

と、カメラを構えた瞬間。

カラカラは見事に内側から氷を砕いて見せた。

あー、おっしーい。もうちよつとで撮れたのに。

「・・・馬鹿な。あの状態から、自力で脱出するなんて」

ホントだよ。もうちよつとイジってたかったのにさ。

めったにないんだから。

「うーわ、怒ってる？」

見た感じ、目が吊り上がってるし態度悪いし。

あ、元からか！

「——っ！」

ヒュン。という風を切る音。

“ほねブーメラン”。

僕の髪の毛をかすったそれはきれいに後ろにいたゲンガーに直撃した。

「よし、ごめん」

本気で当てに来たと思った。ちよつと声出ちやつたじゃん。

「いいかしら？茶番は」

「ああ、待つてもらってありがとうございます」

さて、あれほど強力な氷技。その手のタイプのエキスパートと見たほうが――。

「……へ？」

「れいとうビーム」。待ったんだからもういいわよね？」

考える暇すら与えられないとはまさにこのことで。

「れいとうビーム」。パルシエンから放たれたそれはまっすぐに、最速で僕の右腕を貫いていた。

「くっ――」

貫かれた右腕から血が噴き出す。

「悪いけどサカキの居場所を知らないアナタに用はないわ」

「僕にだってアンタらなんか用なんてないんですがね」

まずいな。次第に右腕が凍り始めてる。このスピードじゃあ十分と持たない。

仕方ない。先程僕が言った通り用なんてないわけだし。

「それにしても、よくよく見ると綺麗な顔をしていますね。どうですか？あんなおばあさんとではなく、僕と一緒に楽しい夜を過ごしませんか？」

「はっ、はあ?！」

ズズイと近づいて、柔らかく冷たい手を握る。メガネのレンズには笑顔の僕が写ってた。

「ここは、トンズラといこうか。」

「冗談言わないで！悪いけど、私にはやるべきことが――」

「あ、さいですか。じゃあ、アディオス！」

「きやあー！」

ピン、と流れた血を飛ばし目を潰す。

「うぐぐうぐうー！」

「血液つてのは固まるんで、すぐに洗い流したほうがいいですよ」

その言葉を最後に、僕はウインディに乗って戦場を華麗に離脱した。

「うおお。やべえやべえ」

森の中をひた走りながら後ろを何度も振り返る。

正直言つてやばかった。特に最後に現れた女。奇襲が通じるのもこれが最後かもしれない。

二度とは会いたくないね。美人だけど。

「・・・チィ。思ったよりも早い」

凍るペースも広がる場所も、予想以上で。

「しゃーねえ。ウインディ」

心なしか体温も下がってきている気がする。しかも、逃げた場所が悪かった。

ここしかなかったとはいえ、こんな森じゃあ、太陽光は遮られるわ気温は上がりにくいわ、最悪のロケーションだぜ。

名前を呼んで、降ろしてもらおう。

「焼いてくれ」

「キャウ!？」

驚いているとこ悪いけどさ、時間無いから早くしてよ。このままじゃ、右腕が壊死しちゃうじゃないか。

そう目で訴えると、ウインディは涙目になり。

覚悟したのか、キツと目を引き締めて。

“かえんほうしゃ”で右腕を焼き尽くした。

「……。」「ひのこ」で、炙ってくれば、よかった、のに」
あまりの熱に意識が持ってかれ。
そこで、僕の記憶はぶつつりと途絶えた。
そして物語の歯車はまた、回りだす。
それはまた次のお話で。

18. 5話 「二年って案外短いもんだね」

「もうそろそろレッドが来ますよ。」「サカキ様」
「そうか」

二年前、ロケット団が壊滅して数週間たったある日。
トキワシテイのジム、そのリーダーであるサカキ様に僕はなぜだか雑用を押し付けられていた。

まったく、勘弁してほしいぜ。ロケット団は壊滅して、僕はもうとっくに自由の身だつていうのにさ。

今日だつてこれ、完全にボランテアだからね。ブラック企業も真つ青な仕様だ。

「フツ。これで、ようやく対峙できるわけだ」

うわあ。一人で笑つてらあ、あの人。ひくわー。

昨日急にエリカちゃんの家に来るんだもんなー。僕がいち早く気づいてなければ今頃どうなつていたことか。

まったくもう、もうちよつと自分の立場つてやつを自覚してほしいね。振り回されるこっちの心臓が持たないんだから。

「そんなものは些細なことだ。特に、これからつける決着の前ではな」
「おつと、声に出てましたか？」

わざとらしく口を抑える。サカキ様はそんな僕の仕草を気にも留めず、イメトレに励んでいた。

長く使われていないせいでボロボロだったこのジムを一日でなんとか使えるようにセッティングしたのも、レッドがトキワに来るという情報をキャッチしてそれを知らせたのも。

ぜーんぶ僕のおかげだつてえのに。

「ま、精々頑張ってください。僕はこれで」

寄りかかっていた壁から体を離して、僕は早々に立ち去ろうとする。巻き込まれるのも嫌だし。

「・・・お前は、どちらが勝つと思う？」

そんな僕に、サカキ様は問う。初めてサカキ様のそんな質問を聞いて

た僕は。

「そんなことを、下っ端の僕に聞くんですかあ？」

いつもの嘲笑まじりに答えた。

「……」

つてーのに、サカキ様は相変わらずその強面ぶりを発揮してらっしやる。

「お前の意見が聞きたい」

表情一つ変えないその顔は、どうやら真剣な答えを求められているようだ。

サカキ様つてば、真面目なんだから。

「そつすね。普通にやればサカキ様の圧勝じゃないですか？」

オツズでいえば一対百。賭ける側とすれば、何の難しさもない。

そりや、百の側が勝てばウハウハだけどね。世の中そう上手くは出来てないんだよねこれが。

経験、知力、瞬発力、非道さに、純粹な力としても。

そのどれをとつても、サカキ様に軍配の旗は上がる。

「普通にやれば、か」

それはサカキ様自身もわかっているだろう。

きつと、僕のその言葉の意味も。

「……気にすることないですよ。こんな下っ端の言葉なんて」

あの年頃の男の子は、何するかわかんないですから。

勝負には、たまにジャイアントキリングが存在する。

弱者が強者を喰らうことが稀にあつて、そこが面白いところらしいけど。

僕にはさつぱりだね、そんな不確定なもんに命かけて怖くないのかと思っちゃうもん。

「思えば、お前は最初から不思議な男だった。オレのところへ直接“入れてくれ”と懇願してきたときはふざけたヤローだと思つたものだ」

「……ありましたね。そんなことも」

「その癖大した功績もあげず、地方ばかり飛び回り。かと思えば、平気な顔で伝説のポケモンを捕まえてきた」

なんだなんだ？

僕は、サカキ様の話の本意が見えず訝しげに視線を送る。

あのサカキ様が雑談なんぞするはずもないし、ましてやサカキ様にとつちや因縁の決着の前だ。

もしかして、柄にもなく緊張しているのかな？

「不思議なヤツだったよ、お前は」

「えー、そっすかね？ワリとどこにでもいるフツーの人間だと思いますが」

「フン。その性格も、損なものだな。いいか」

そこで言葉を区切り、きつとサカキ様は一番言いたかったことを言った。

「ロケット団は必ず再構する。必ずだ。何年かかろうともな」

「……」

うーわ、まだ諦めてなかったんだー。その執念深さに僕は言葉もない。

「その時までには、“用事”は済ませておけよ。今度はくだらんガキなんぞに潰されないようにな」

用事。その言葉に、目を見開く。今度は驚きで、僕は言葉が出ない。

僕の目的を知っていたのか、それともそこまでは知らないのか。そんなことはどうでもいい。

僕がロケット団に入った真意を、この人は見抜いていた。その事実だけで、僕は心臓が絞められたような恐怖を味わった。

ナツメちゃんだけが知っていた、僕の目的を話した余裕があるとは

思えない。サカキ様はこの日のためにきつと誰にも会っていないだろうから。

「はは、また入るなんて言っていないんですけど」

ゾクリとした背筋を隠すように、軽口を返すので精一杯だなんて、まったく僕らしくはないな。

「それじゃ、まあ。ぐ武運をお祈りくらいはしておきますよ」

なんだかその場に居たくなって、僕は後ろ手にジムの扉を閉めた。

「……おっそろしー」

勝手に垂れる冷や汗と、震える手は恐怖からか。

にしては、頬は緩んでいる。矛盾だなあ、なんて、思いながら。

「そういえば、サファリパークに行った時貰ったものがあつたな」

いつだったか、ケンリヨウハリーの中隊長たちと遊びに行ったことがあつた。その時パク・・・貰ったのがサファリのエサ。

「何かに使えるかと思つたけど、対して使い道もないし。ちょうどいいから捨てていこう」

入り口付近に、それをばらまいて。

僕は、緩む頬を抑えながらその場を去るのだった。

サカキ様が負けて、行方をくらましたってのは後から風の噂で聞いた。

「あら？このウインデイは・・・カラー？」

そして時は戻って現在。

焦ったように扉をカリカリしているのは、人を背負ったウインデイ。

「酷い火傷・・・！大変！誰か！誰か医者を呼んでください！！」

約二年ぶりに訪れたその家の家主にまた、助けられることになってしまふ。

19話 「行方不明、なんて主人公っぽいイベントだろう」

「うーん、知ってる天井だ」

意識がまどろみの中に囚われているなか、僕は一人、呟く。

暖かい毛布に、ふかふかの布団はなんだか高級感があつていつまでもここでダラダラしていたい気分には駆られる。

「うん。ここはエリカちゃんの家だな」

伊達にエリカちゃん家でタダ寝してきてないぜ。最早布団の感触だけでわかるくらい、今の僕はエリカちゃん家ソムリエだ。

「で、なんでこんなところにいるんだっけ・・・？」

そんなソムリエの僕だから、例え寝起きだろうが当てられるんだけど。他は普通に寝起きのあの気だるい感じが僕の体を支配している。

だから、時間をかえてゆっくりと、とりあえず一つ一つ思い出そう。

そう、確か僕はカントー中にある伝承やら言い伝えやら。とにかく黒いポケモンに繋がるなにかを少しでも情報を得ようと動いていたんだった。

そんな道中に現れたのが、四天王を名乗るおばあさんで僕はこれを華麗にやつつけてやったのだが。卑怯にも奇麗なお姉さんの後ろからの不意打ちで右腕を負傷した僕は、ワインディに頼んで凍傷を直してもらおうとしたんだけど。

このワインディがまた何を勘違いしたのか、思いっきり「かえんほうしゃ」で焼き焦がすもんだから思わず意識を手放したのが僕の最後の記憶で間違いないかな。

「よし、どうやら頭にはなんの異常もないらしい」

よかった。これで生きる目的とか見失ってたら、ダラダラとつまらない日常を送るところだったぜ危うく。

さて、と。

どうやら右腕を見る限り、僕はまたエリカちゃんに助けてもらってしまったらしい。罪悪感なんて別に感じないけれど、男の子としてそ

れはちよつとどうなのかな、とは思うよね。

グルグル巻きの包帯が痛々しい腕をかばいつつ、僕は布団から起きて勝手知ったる家を歩く。

「まったくさー、常識で考えてほしいよね。」かえんほうしゃ”を人に向けるなつて親に習わなかったのかなウインディは」

まったくもつて親のつるピカな頭を見てみたいぜ。

ちなみに今、僕の手元にモンスターボールはない。

大方、家の庭でのんびりくつろいでいるのだろう。主を放つておいて。

「別にいいけどさ。せめて当の本人は反省の意くらいは示してもバチは当たらないと思うんだよなあ」

何個か途中の部屋を通り抜け、最後の一枚を勢い良く開ける。

「ガウガウツ♪」

「キューー！」

「呑気に遊んでやがるしよ」

いやまさか、危篤に迫いやつたご主人をほっぽいて遊んでいるとは、度胸が身についてよかつたよかつた。

「カラー!? 起きたんですか! というか、起きて大丈夫なんですか!？」

「やあ、エリカちゃん久しぶり」

そして、ウインディたちと仲睦まじく遊んでいたエリカちゃんに挨拶することも欠かさない。

「いやー、なんだか厄介になつちやつたみたいで。ありがとね」

一応の申し訳なさそうな感じと、治療のお礼くらいを口にする。

エリカちゃんはポカンと鳩が豆鉄砲を食つたような顔をした。

「あなた、そんな殊勝なことも言えたのですね。この二年で一応は成長したということでしょうか」

「あつはつは、泣くよ?。」

エリカちゃんが僕のことをどんな目で見ているかはよく分かつた。

「何事かと思いましたよ。大学から帰ってきたら、家の前でこのウインディが必死に家に入ろうとしていたのですから」

なるほど、ここまで連れてきたのはウインディか。

ま、君にとつちや頼れるところなんてここくらいしかないもんな。

「そしたら大やけどした貴方を担いでいるではありませんか。まったく、久しぶりに顔を見せたというのに、何をやってるんです?」

「うーん、これは不可抗力というやつだと思っただけだなあ」

少なくとも、僕だつてなりたくてなつた状況じゃない。

「でも、良かったです。無事で」

エリカちゃんの顔は、庭のほうを向いていてよくは見えなかったけれどその言葉はとても暖かいものだということはわかる。

それは確かに暖かくて優しくて、甘い甘いとても甘美なものだけだ。

でも僕は結局、それを求めてはいないのだ。

「不思議な縁だね。僕がケガした時に限って君と会うなんて」

だから特に用もないのだし、二年前と同じように早々に立ち去るべきなんだけだ。

「ええ、まったくです。ここは診療所ではありませんよ」

・・・まあ、少しくらいはどうってことないか。

どうせ、僕の人生長つたらしいくらいあるんだから。

「それにしても、丁度良いタイミングで戻ってきてくれました」
「さつきも言ったと思うけど、別に僕の意志ってわけじゃあないんだぜ?」

「レッドが行方不明になったのを、ご存知ですか?」

うわ、僕の言葉丸々無視だこの人。

「さあ？初めて聞いたね」

だからまあ僕も、エリカちゃんの質問をスルーする。人に与えてもらうのなら、自分も何かをあげないと不公平だろう？そういうのは義務教育で学んだはずだよ？

「そうですか。先日、ボロボロになったピカがマサラのオーキド博士のもとを訪ねてきたそうです」

聞いてもいないのに、エリカちゃんはスラスラと口が動く。

「へー、興味ないね」

エリカちゃんがどういうつもりで言葉を紡いでいるのか、どういう意図で僕にそんな話をするのか。わからない僕じゃない。

だから、僕は一貫して同じことを言い続けた。

「・・・四天王というのを、ご存知ですか？」

そんな僕にムツとした顔を向けるエリカちゃんだけど、残念ながらその可愛い顔じゃあ迫力でないよ。

「しーらない」

四天王、僕を襲ってきた連中が名乗っていた言葉だ。

ということは同様、レッドを襲ったのもその連中だということだ。

「そうですか。四天王というのは――」

「知らないから、説明とか」

この雰囲気で、この流れ。エリカちゃんはどうやら僕に望んでいることがあるらしい。

だったら、めんどいことは無しにして率直に言ってくれないと。

すっぱり断るからさ。

そんな僕の気持ちを探したのだろう。エリカちゃんはこちらに向き直り、真っ直ぐに瞳を見据える。

「レッドを探すのを手伝ってほしいのです。どうやらレッドは・・・」

「その四天王にやられた？」

「やはり、何か知っているのですね」

「いいや、今の話の流れから推測しただけさ」

レッドを探す、ねえ。

「そんなめんどいことを、なぜ僕がやらなくちゃならないんだい？僕

にとつて一ミリの利益だつてないつてのに」

「めんどいつて、心配ではないのですか？聞きましたよ、レッドから。幼馴染なのでしょう？」

ああもう、ベラベラと喋るもんじゃないだろ。レッドめ。

そんなだからこうやっていらぬ誤解が生まれてしまうんだ。

「幼馴染つて、小さい頃。ちよいと一緒で遊んだことがあるつて程度だよ。すぐに僕は引越したし。こつちで会つてようやく思い出したくらいさ」

幼馴染ねえ。そんなことをまだ言つてたのか。てつきり、ロケット団だとバレたときの感じで嫌われてると思つていたけれど。

「それは、嘘です」

エリカちゃんの顔が曇る。そしてその言葉に同時に僕の顔も、だ。

「なんだつてそんなことをエリカちゃんが決めるのさ」

「レッドは、言つていました。あの人はどうしようもないくらい馬鹿だけど、でも、どうしようもないくらい真つ直ぐなんだつて。だからこれと決めたら、それが例えどんな道でも突き進んでしまふんだつて」

エリカちゃんは慈しむようにそういつた。

きつとレッドも似たような顔をしていたのだろう。それがすぐにわかつてしまうところが腹立たしいけれど。

そしてもつと腹立たしいのは、レッドが僕に対してそんなプラスなイメージを持つていたなんてことが。

何も知らない癖に、芯にだけは迫つたその総評が。

まつたくもつて腹立たしい。

「あー、そうかい。的外れだなと伝えてくれ」

「それは自分で言つてください」

「だから、探すのを手伝えと？」

大体、探すと言つてもアテはあるのかい？アテもない探し物を二つも抱えるほど僕は器用じゃないんだけど。

「アテ、というほどでもありませんが」

そのエリカちゃんの顔は、言葉とは裏腹に暗い。

だーから、そんなあからさまに面倒そうな雰囲気を出さないでくれよ。もつとやる気が削がれるじゃないか。いや、受けないけどさ。

「先程、ピカがオーキド博士のもとに来た。と言いましたよね?」

「そうだったけ?」

「言いました。それで、そのピカと一緒にレッドを探すと、イエローという少年が旅立ってしまったようなのです」

ふーん。

とぼける僕に対して、鬼の形相を見せるエリカちゃん。だーから、迫力ないって。

「ん?ちよつと待て、じゃあ別にいいじゃないか。僕になんぞ頼らんでも」

レッドを探すと、そう言っていたのだろうか?その、なんだっけ?なんとかって少年は。

「イエローです。真面目に聞きなさい」

「そうそう、イエローイエロー」

「それが・・・そのイエローという人物を、私はまだ信用してません」なるほど、真面目なエリカちゃんらしい葛藤だ。表情が暗くなったのはそれか。

「なんでさ。見ず知らずのレッドを助けてくれるなんて、きっと物凄く心根の優しい少年なんだろうよ」

「そこなんです」

ん?どこなんです?

なんて、想像くらいはつくけれど。

「なぜ、イエローはレッドを助けに行こうと思ったのでしょうか。そもそも、なぜレッドが行方不明になったと分かったのですか?それにピカが一緒についていったというのも気になります」

ま、普通はそうだろうね。エリカちゃんじゃあなくたって疑問には思うところではある。

でも。

「それを僕に聞かれてもねえ」

イエローという人間を、僕は見たこともなければ知りもしない。ま

してやその裏にある事情なんざ知ったこつちやねえな。

勿論、レツドの事情なんつーのもさ。

「ですよね」

「案外、素直に引き下がるんだね」

一つ、深いため息をつくエリカちゃんに僕は警戒の色を込めてそう言った。

「そうですか？私は本来素直ですよ」

「まったまたー」

エリカちゃんらしくない冗談に僕は思わず笑ってしまう。

そんな僕に不満な顔を見せるだけで、エリカちゃんは特段何をしゃべるわけでもない。

「拗ねたかい？」

「・・・ええ。拗ねました。二年間、何の音沙汰もなかったことに」

その声からは、なんの感情の起伏も見えない。

見えないがゆえに怖い。未知ってのは人間の一番の恐怖だとはよく言ったもんだね。

けれど一つだけわかるのは、エリカちゃんはずっとそのことに対して怒っていたということだ。

「ええつと、何？僕らって定期的に密に連絡取りあうような仲だっけ？」

「・・・いいえ」

それはきつと意地の返事だったろう。隠そうとする声の中に、多少なりともショックが隠しきれていない。

とか、言っちゃうとまるで定期的に連絡を取る仲だと思ってたのか。ってなことになるんだけど。それはどうなのかな。

「おけー、わかった。これ以上はやめておこう。ほら、皆。帰るよ」

なんだか開けてはいけないパンドラの箱のようなものに触れた気がしたので、僕はさっさと帰り支度を済ませる。こういう時は物理的エスケープに限る。

「もう行ってしまおうのですか？」

ああ、なんだかエリカちゃんが変だからね。前はもつと、自分の気

持ちを隠していた気がするけれど。なんだろう、二年間という短い間でも人は変わっちゃうということかな。

「レットほどの実力があっても、負けることがあるんです。貴方も、あまり無茶はしないでくださいね。行方不明になるのなんて、レットだけで十分なんですから」

「・・・」

エリカちゃんは表立って僕を止めるようなことはしない。けれどその言葉の端々に、嫌というほど本当の気持ちというのが透けて見えた。

そんな対応に、僕はガシガシと頭を掻いて。

「あのさ、さっき言ったばっかでアレだけど、言いたいことがあるのな
ら言っちゃまいなよ。そうやっていい子ちゃんぶって飲み込まれる
ほうが僕にとつちやあストレスさ」

「・・・！」

その言葉を、待っていたのかどうかは知らないけれど。

勢い良く振り返って、頬を赤くさせたエリカちゃんは口早にまくしたてた。

「では言わせてもらいます！本当は言いたくないですけど！そんな
怪我をしているアナタに言いたくないですけど！私と一緒に、レット
を探して！イエローという人物が信じるに足る人物か、一緒に考えて
ください！」

「いやいや、もうそれと似たようなことちよいと前に言つて――

――」

そこで僕は、はたと気づいた。

いいや、エリカちゃんは一度だつて一緒に探してくれなんて言つて
いない。ということに。

それはただ、僕がエリカちゃんの考えを先回りしただけで、エリカ
ちゃんはただ僕に情報を提供していただけだ。ということに。

ああ、なんだこれは。なんだろうこの気持ち。

他人に想われていたことを知ったときの気持ち。他人に気遣われ
ていたことに気づいてしまった時の、やるせない感じ。

「ああ、もう。めんどい。なんて言える雰囲気じゃあないね、とてもじゃないが」

「……」

ああ、そうだろうともよ。エリカちゃんの表情は、複雑そのものだ。レッドを探してくれるという嬉しさ半面、ケガ持ちの僕にそんなことをさせてしまう負い目を感じてるんだろう。

だけど勘違いしないでほしい、僕は君ほど素直じゃないんだよ。

だから、痛々しいほどに見せびらかした右腕をちよいちよいと挙げて。

「ただし。エリカちゃんの願いを聞くのは一個だけだ。それが、僕と君とのこの交渉の妥協点さ」

人に気遣われるのも、人に心配されるのも趣味じゃないのさ僕は。

エリカちゃんの心配を払しょくするために、ちよいと寄り道くらいはしてもいいかな。

それにまあ、存外寄り道ってわけでもないかもしれないしね。

「一個、ですか？」

不思議そうに尋ねる彼女に、僕はスマイルで答える。

「イエローが、信じるに足る人物かどうか。それが僕が唯一君の頼みを聞く案件さ」

「……わかりました。それくらいならば、危険なことも少ないでしょう」

なんだか意図していたわけではなかったが、どうやらエリカちゃんを安心させる材料になってしまったらしい。

本当に、意図していたわけじゃあないんだけど。

「それじゃあマジにお開きだね」

ポポンと、皆をモンスタースターボールに返してから。僕は旅だつ準備をする。

とはいえ、今回はそう長くなるわけじゃあなさそうだけど。

「いいんですか？ 本当に。怪我を治してからだって、遅くは」

また、同じことを言うエリカちゃんの言葉を遮るように、僕もまた同じことを言う。

「だーから、エリカちゃんが言ったんだぜ。危険は少ない、どころかゼ口でしょ。そんなん。それに、大した怪我じゃあないんだよ。僕にとってはこんなの」

再度ひらひらと右腕を振って。

「いい子ちゃんは嫌いなんだ。もつと我儘になった方がいいんじゃない？」

靴を履いて、玄関を出る間際。そう言い残して、僕はエリカ邸を立ち去る。

二年前よか、マシだけど。

そう扉が閉まってから付け加えた。

「わはは。目を合わせてはくれなかったな」

ま、当然か。あんな言い方すりゃあ。

おかしーな。町の女の子とかにはもつとうまくやれるのに。

・・・別にいいけどね。

さて、と。

「あ、ハロハロ。オーキド博士？ええ、はい。・・・エリカちゃんに言われて、仕方なくですよ。それでですね、イエローの情報を、もう一回詳しく教えてください。ええ、その、”不思議な力”についてです」

電話越しに話をしながら、もうすっかり暗くなつた月夜に照らされた道を歩く。今気づいたけど、丸一日眠ってたんだね僕。

とはいえ、新たな旅の始まりもまた次のお話で。

20話 「暑いのは嫌い。寒いのも嫌い。丁度いい日が好き」

実を言うところの僕、カラーはイエローのことを知っていた。

イエローのことだけではなく、レッドが行方不明になったということも、エリカちゃんに聞く前から知っていた。

だからエリカちゃんに聞かされても特に驚きはしなかったわけだけど。

「あ、ハロハロ？オーキド博士？」

で、そのあれやこれやを頼んでもいないのに僕に教えてきたのは当然のごとくこのオジサンであるわけ。

まったく黒いポケモンに関してには雀の涙ほどの情報も持つてこない癖に、どうでもいい情報は素早く報告してくるんだから本当に迷惑なオジサンだよ。

「イエローに関しての情報を、詳しく教えてくださる？」

「なんじゃ急に」

驚いたような声に、僕はうんうん頷いて。

「無駄話をする気はないんです。面倒なことはさっさと終わらせたいんでね」

イエローの真偽を確かめると、約束してしまった以上。事は早急に済ませるべきだ。

それに、ことによっちゃあ僕は前のめりな対応をせざるを得ないかもしれない。

「・・・さては、お主。エリカに頼まれたな？」

「無駄話をする気はないって、言っただけですけど？」

どうもこの年頃のお爺さんは若者をいたぶるのが趣味のようだよ。にやついた声が抑えられていない。

「そうかそうか。いやいや、ええんじやええんじや」

すべての言葉を二回言ってやがるぜこの人。

「誰かのために、そういう気持ちは大事じゃぞ？」

くっそー、電話を切りたい。激しく投げつけたい。

何を勘違いしているのか知らないが、さっさと情報だけ渡せよ。余計なことしかないんだからさあ。

これだから老人のお節介は煙たがられるんだよ。

ギリギリと電話を握りしめていると、それが伝わった。というわけでもないのだろうがオーキド博士は口を開く。

「イエローの情報は、わしもいま調べているところじゃが・・・」

その口ぶりと声色から察するに、大した情報はないのだろう。本当に使えねえお爺さんだ。

「あー、じゃあ。オーキド博士は何か感じませんでしたか？例えば・・・そう、“不思議な力を使ったとか”」

せっかくなかかたくもない相手に電話を掛けたのだ、貰える情報は貰っておきたい。それに、人を見る目だけはあるお爺さんだ。何か掴んでいるかもしれない。

「不思議な力じゃと？ああ、そういえばボロボロだったはずのピカがなぜかイエローに触れた途端元気になったような」

・・・なんだって？

その大事な大事な情報に僕の声は自然と真剣味を増す。

「それ、本当ですか？」

「いやしかし、回復機械に入れておったし。気のせいかもわからんが」

「いいえ、十分ですよ。良かったです、もう二度と電話しないと誓うところでした」

「・・・あ、そう」

オーキド博士の呆れた声とは裏腹に僕の声は弾んでいた。

なにせ、もしかしたらもしかするかもしれないからね。

ピースの一つ、それも強力なのが埋まってくれた。これは俄然やる気がでるといふものだ。

そうだな。あと一つ、あと一つ確信できるものがあれば僕の目的のその陰くらいは見えてくるはずだ。

「それでは、失礼します。今後ともよろしく願いますね♪」

「なんとも都合の良い男じゃ」

その言葉を最後に、僕は電話を切る。なんだよ、流石博士だけはあるじゃん。その観察眼は大したものだ。

熱い手のひら返しにオーキド博士もあきれていたけど、そんなものはどうでもいい。

「さて、と。これで後は本人に聞くだけさね」

これまでと違って、わざわざ遠回りで面倒なことをしなくていいつてのは最大級に嬉しいな。

本当に、正義の味方ってのはいい奴だぜ。

と、いうことで。

「ふむふむ、麦わら帽子が特徴で低身長。コラツタとドードーを連れており物腰は柔らかい。か」

オーキド博士とエリカちゃんから貰った情報を元にまずは地道に聞き込みだ。

二人の話じゃあ博士の元を旅立ってまだ間もないし、移動手段も特にないとくればまだマサラからそう遠くは離れていないはず。

「にしても、どうやってイエローはレッドを探すつもりなんだろう」
レッドがどうなるうが知ったことではないが、もしその方法が僕の“予想通り”ならば。

「イエロー、君は僕にとっての女神となりえる」

意地の悪い笑みがどうしてもこぼれる。誰も見てないからこそで

きることだ。

口に出せば出すほど、その重要性を再確認できる。いやー、これは久方振りにまともな情報だぜ！

「んつと、あれ？なんか寒くなってきたな」

トキワの森、いつの間にかここまで来てしまったようだ。

「クシユーン！」

「ウインディ、君もか」

ちなみに僕の移動手段は当然のごとくウインディだ。

そのウインディが肌寒そうにくしゃみをするので、いったん立ち止まる。

「森に入った辺りから、急激に寒くなったかな・・・？」

トキワの森、普通の森に見えたけど。もしかして、そういう名所だったりののかな？

いや。それはないか。

自分の考えに僕は自分で首を振る。

そんな名所ならもつと有名になっていていいはずだし、もつと注意書きのようなものがあっていいはずだ。入る前なりなんなりね。

人里離れた、ってわけでもないし。通行人も町の人も普通に通るんだから。

それがないってことは、ここは当初の予想通りトキワの森。何の変哲もないってのはないけれど、温度に関してはただの森だ。

森特有の温度の低さだけじゃあない。こう、なんか、肌を突き刺すような寒さがある。

「ていうか、ダメだなこれ。酷くなってきたやがる」

最初は、肌寒いという感じだったのに。歩みを進めるにつれ、もう半袖の僕はガクブルだ。

それはポケモンも同じよう。僕よりあつたかそんな毛皮に包まれているウインディですら吐く息は白い。

「戻って、ウインディ」

ま、モンスターボールの中のほうが幾分かはマシだろう。

・・・くそ、一枚羽織るものくらい持ってきておくんだった。

ポケモンはこれでいいとしても、トレーナーがこれじゃあ話にならん。

「えーっと、なんかあつたかなー」
バックの中身をゴソゴソと確認する。

「携帯、お菓子、ジュース、警官服にシヨップ店員の服に制服にウエイトレスの服・・・うん！我ながらロクなものがないな！」

なんでこんなものもってるかって？趣味さ！

だって、いっどこで女の子とそういう関係になるかわかんないもんね！

なーんて言っている場合ではそろそろなくなってきたらしい。

「ロケット団の隊服。まあ、黒いし、一番暖かそうかな？」

取り敢えずまだ持っていた真つ黒い服に身を包んで、通行人に見られないことを祈ろう。

見られた所で大したこともないんだけど。

「ふんふん、寒いのはこれが原因か」

そんな感じで少し歩いて見つけたのは、川。

ただし、ただの川ではない。

「凍っている。これは、人工的に凍らされたのか」

強烈な冷気、川一面が氷塊と化していた。勿論、自然のものなんかじゃあない。

この氷、見覚えありありですねえ。

「・・・四天王、ねえ」

別に興味はないし、そいつらが何をしようと構わないけど。

この形跡から誰かと戦闘になったのは明白。

うーん、イエローじゃなきゃいいなあ。

「はっ、はっ、はっ」

川下に向かって伸びる川沿いを走っている僕の頭の中は、寒さのせ

いか思いの外冷静だった。

あの四天王の目的はもうわかっている、八つめのバッジだ。ということは、今向かっている先にはその八つめを持っている人物ということになる。

が、その可能性は物理的にない。

なぜなら八つめのジムバッジ。それを持っているのはレッド、サカキ様、この二人だけでありそれ以外には存在しないからだ。

あのサカキ様がほいほいとジムバッジを上げるなんて豚が真珠の価値を知るくらいにありえない。

これは確実なんだ。

と、いうことは今向かっている先にいるとすれば。

もう一つの目的。

そう。

「ピカ、それしかないよね」

レッドとの戦いでピカに逃げられたのは相当な痛手だろう。

なぜなら四天王と自ら名乗るくらいだ、相対した感じからして相当プライドは高そうだし逃げられたという事実を消したいと考えるのはごく自然な流れだ。

「あはっ。それって僕にも当てはまっちゃうんだよなあ」

というのは今のところ置いておいて、まだ追手が来てないのはきつと優先順位の問題だろう。

つまり逃げたという事実は同じなのに、ピカの方が優先順位が高いんだ。

それが示すは――。

ピカに知られたくないなにかを知られた。

これしかない。

「っ！」

川下を目指して降りてきたんだ。そりゃ海に出るってことはわかっていたけど。

「ちっ。遅かったか」

良い知らせと悪い知らせが一つずつある時、皆はどちらを先に知り

たい？

僕は、別にどっちでもいい。かな。

だってどうせそのどちらを聞く羽目になるんだから、どっちとつたって結果なんか変わりやしない。

だから取り敢えず良い知らせからいくと、僕の予想通りイエローはいた。

“いた”っていう所で察して欲しいのは、もういないってことだ。より正確に言えば、グングンと遠ざかっている。

「あーあ、ありや追いかけるのは無理だな」

川と同じように凍らされた海の一面、その凍らされた高波の先っちよがぼつきり折れている。

よくよく見れば、イエローたちをどんぶらどんぶら運んでいるのはその氷の塊だ。

「それでもって、悪い知らせは」

イエローが逃げたつてのは悪い知らせじゃあない。そりや残念だが、追いかけてりやそのうち会えるだろう。

顔もぼつちり把握したしね。

悪い知らせつてのは。

「メガネのお姉さんにまた会えるとは思わなかったなあ」

なんだろうね、運命かなあ。

なるほどイエローはどうやらあの人と対峙して、そして逃げおおせたらしい。

存外オーキド博士の話よりも肝が据わっているのかな。

とつとつと。

「ちつ。〃 イエロー・デ・トキワグロブ”。やはりあいつも・・・」
ずっと海のほうを向いていたお姉さんが、すつとこちらに振り替える。

こんなところで見つかるなんて馬鹿げてる。イエローも見失ったし。だからその辺の木陰に隠れた。勿論、お姉さんの独り言はぼつちりこの両耳が聞いておりますよ。

「はは、ようやく運が向いてきやがった、これも二年の地道な努力のお

「かげかな？」

「いやー、してみるもんだな。無駄な努力。

トキワグローブ、トキワの森のイエロー。

この情報の価値は、僕にはダイヤモンドよりも高い。

なんて、一人でニヤニヤしていると。

「なーんで、アンタがここにいんのよ・・・！」

「ん？」

「てつきり、一人だと思っていた木陰にはどうやら同居人がいたらしい。」

「・・・ブルー？」

「そしてお話は、次の局面へと移っていく。」

「それもまた次の話ということ。」

21話 「奇襲夜襲は僕のものだったのに」

「ブルー？なんでこんなところにいんのさ」

イエローを追いかけている道中、四天王と対峙して逃げおおせたイエローを見つけたのはいいものの。

数十メートル先には僕の右腕を貫いた四天王のお姉さんはいるわ、木陰に隠れたらブルーはいるわ。

なんの板挟みだっつーの。

「しっ！」

「むがもぎ」

なんて思っていると、唐突に僕の口はふさがれる。唇にはブルーの柔らかい手の感触が・・・ない。手袋のザラザラとした布の感触しかない。

おいおい、この距離だけ。肉眼で見えるとはいえ声が届くとは思えない。

そう目で訴えたのが伝わったのだろう。ブルーは静かに口を動かす。

「いいから黙ってなさい。私がここにいるなんて絶対ばれたらだめなんだから」

その声からも、表情からも、緊張感と真剣さが伝わってくる。

ふむ、なーるほど。大体は理解できた。

なぜブルーがこんなところにいるのか、その疑問に対してね。

・・・数分の間。息を呑むブルーと対して緊張感も何もない僕は彼女に見つからないように息をひそめて。

「・・・行つたわね」

「行つたみたいだね」

どうやら固唾を飲んで見守つただけはあつたらしい。四天王のお姉さんはこちらには気づかず、その場を去った。

残ったのは、強烈な寒さと凍った川。

おいおい、地球の生態系をなんだと思つてんだ。まったく迷惑な連中だ。

「で？なんでアナタがこんなところにいるわけ？」

ふう、と一息ついたブルーはそのままの勢いで僕を指さす。

「割とこちらのセリフでもあるけどねソレ」

まあでも僕の方の疑問は解決してるようなものだ、答え合わせをするくらいでね。

だからここは良心的にブルーの質問を答えてあげることにしよう。

「僕はただ、イエローを追いかけてきたのさ。皆が情報を中途半端にしかくれないから、仕方なくこの優秀な僕がね」

いやほんと、自分の頭が恐ろしいぜ。正直、こんなノーヒントでイエローをばっちり見つけたんだから称賛されてしかるべきだろうこれ。

「イエローを？」

「ああ、君には隠してもいざればれそうだからもう話すけど、イエローの“特別な力”を目当てにね」

ブルーがここにいること。そしてトキワグローブという名前。その二つで、僕の予想は確信へと変わった。

「.....」

僕の言葉に、ブルーは珍しく言葉が出ない。僕と同じで饒舌なタイプだからこそ、本当に動揺していることがわかる。

「僕が知ってることを話すから、情報を補ってんしてくれると助かるよ」だから喋れない彼女の代わりに、僕が主導権を握ってあげよう。

ああ、なんていい響きだ主導権を握るってのはいつでもどこでも元気になっちゃうね。

「トキワグローブ、その名前にはある共通点がある。トキワの森の出身者がそうだ。イエロー・デ・トキワグローブ。トキワの森のイエロー」

ここまででは、ああそうなんだ程度の認識だ。僕だって最初にそれを聞いたときだからなんなんだって思ったくらいだし。

だけど、ここから僕にとって肝心要の要所。

「これは、僕が二年かけてカントー中のありとあらゆる伝承、伝説、言い伝えからにわかには信じがたい噂まで拾い集めた中であつたもの

「なんだけど」

「トキワの森の出身者の中には、稀に、ポケモンと心を通わせる者がいる。よね？」

「——っ！」

やはりか。やっぱり、僕の予想は正しかった。間違っていないかった。

僕が言うより先に、立ち直ったブルーが白状してくれた。

白状というように、きつとブルーはその事実を隠したかったに違いない。イエローが本人がどうかは知らないけれど。

だってあんなあからさまな敵に本名を名乗っちゃうんだからね。でもま、そのおかげで僕は考えに確信が持てたわけだけけれど。

レッドと同じ馬鹿正直な考えなしだな。

・・・いや、考えなしというのは取り消そう。レッドはいつだってその頭は激しく回転させていた。考えていた。

どうすればいいのか、どうしたらいいのか。

だからこそ、僕に対する評価がエリカちゃんに聞いたようなものだったんだろう。

「そう、アナタの言う通り。イエローにはその力があるわ。ポケモンを癒し、ポケモンと心を通わせる。それがイエローの能力よ」

「ふふ、フフフフ」

わかつちやいた。わかつちやいたけれど、いざこう真実を告げられるとだめだね。口の端がどうしても吊り上がってしまう。

「なにをする気？イエローを使つて」

「やだなあ。くっふふ。そんな、顔しないでよ」

「それはこっちのセリフ。そんな顔しないで」

ブルーの顔は引きつっている。一体全体、どんな酷い顔しちやつてるんだらうね僕は。鏡がないからわかんないや。

わかんないけどこれ以上同じ顔をしているとブルーがドン引きしそうなので、僕は一度くるりと後ろを向いて自分の感情をリセットする。

「よし、それでえーっと、イエローを使つて何する気かと聞いたかい

？」

「・・・ええまあ」

ブルーの表情は相も変わらず優れなかったけれど、僕の表情はいつも通りのニコニコ笑顔を取り戻したから良しとしよう。

「別に大したことじゃあないぜ。ただ、その、ポケモンと心を通わせるっつー能力を見てみたいだけさ」

世にも珍しい能力だ。世界にそうコロコロといるものじゃあない。だったら、試す価値は大いにある。

あの火事の中。黒いポケモンを見ていたのは僕だけじゃあない。

カラカラだって、しかとその脳みそに焼き付いているはずなんだ。僕と同じく、その深いところに刻まれているはずだ。

どうしようもないほどに。

「見ただけって、見世物じゃないのよ？」

無論そんな事情なんざ知りもしないブルーは僕をただの野次馬と一緒にしている。

別にその辺の事情を隠している意味も特にはないけれど、それと同じように話す必要も感じられない。

「わかってるよ。君はイエローの正体を隠したいんでしょ？」

ブルーがここにいる理由。それはイエローがオーキド博士の元を尋ねることが出来た理由と重なる。

「君がどうしたいのかは知らないけれど、イエローの能力を知っていた君はピカのもとに向かわせ、ピカの記憶を探りレッドを探そうとしている。こんなところだろ？」

どこでレッドの訃報を知ったのかは知らないけれど、大方ボロボロのピカとすれ違ったりでもしたのかな。

そこら辺はまあどうでもいいや。

これでイエローがオーキド博士の元を尋ねることが出来た理由が埋まる。

ここにいた理由も同じこと。イエローのサポートだろうよ。

「ええそうよ、その通り。憎ったらしいほどにその通りよ」

うーん、僕はいつも通りに戻ったつてのに、ブルーの表情は変わら

ず苦虫を噛み潰したようだ。

何がそんなに悔しいのか僕にはてんでわからない。

わからんついでにもう一つわからんのは。

「なんで表立って協力しないの？わざわざイエローを使うくらいだ、レッドのことは気にかけてるんでしょ？」

「・・・勘違いしないで。私には私の目的があるの。そのために今は別行動をしているだけよ」

ふーん、真剣な目つきから見ても、嘘とは感じられない。

まあ、別にどんな理由があろうと僕には関係ないんだけどね。ちよつと気になっただけさ。

「そっか、じゃあ僕はこの辺で」

「ええ、精々気を付けることね。奴ら四天王はアナタより強いわよ」

「そうかい、肝に銘じておくよ」

言われなくてもこの右腕がしかと覚えているけどね。

さて、そろそろ動き出さないと、またイエローを見失ってしまう。

この海をそのまま道なりに進んでいったとして、ある街にたどり着くはずだ。

「あーあ、こんなことならエリカちゃんの言う通り家でグータラしてればよかった」

そう、タمامシシテイに。

ということ、再度やってきたのはタمامシシテイ。

辺りは暗くなり、もうすっかり夜になってしまった。

「ったくさ、こうグルグルと回り道させないでよね。会ったら一度文句言わなきやな」

イエローに会うというただそれだけなのに、なぜこうも労力を使うんだろう。そろそろ右腕の傷が開きそうだ。

貫かれ、火傷を負った右腕は正直重症だ。風に当たるだけでも痛いので、包帯でグルグル巻きにしている。

そんな腕をさすりながら僕はエリカちゃんのお家へと着いてしまった。

「あんだだけ啖呵きって、イエローの真偽を確かめるだけだと言ってしまったのは失敗だったなあ」

そんでおめおめ「てへっ。ごめん、結局もどってきちやっただ☆」なんてカッコ悪いったらありやしない。

あーあ、本当になんでここに来るんだよ。

なんてことをいつまでも言っても致し方無いので。

「大丈夫、僕のキャラなら受け入れられる！ やったね！ 日頃の行い！」と、勢い良く僕はインターホンを押そうとしたところ。

“ 勢い良くいったのは、僕の真横から伸びてくる長い長い足だった”。

「……っ!？」

何が何だかわからない僕は、頭の中が一瞬フリーズして思わず伸びてきた足をただ見つめていた。

まるでバネのようにいかにも伸縮自在ですといったようなその足で、一瞬でインターホンをぶっ壊したその足は。シウルシウルと胴体があるであろう位置まで縮んでいく。

「……よし、逃げるか」

その間のタイムラグがなければ、いやもつと最初。その一撃があと数センチ右にずれていれば。

僕の頭はサッカーボールのように高く舞い上がることになっていただろう。

「……はやつー!」

思ったよりも追撃は早く、エリカちゃん家の門は僕が逃げるせいで崩れ去っていく。

「ごめんねエリカちゃん。埋め合わせは今度するよ。」生きて会えれ

ばの話だけ！」

この時点で、敵の正体なんて考えるまでもない。

けれど、それと、僕が生き残れるのかって話はまた別物で。

「レッドの二の舞だけは避けられないですねー」

さて、どうなることか。

それもまた、次のお話で。

22話 「明るい月夜に現れたるは」

「くっそー！」

伸びる足に追いかけられ、追いつめられる。こんな風に卑怯なやり方で攻撃される心当たりなんかまったくもってないけれど。

こんな時に都合よく僕の邪魔をしてくる奴らに心当たりはあった。

(こんな時に攻撃してくるなんざ、十中八九四天王!!)

さつきから執拗に僕の右腕を狙っていることからそれは確定だ。

なんせこの腕をけがしてるのを知っているのは、ケガさせた張本人である四天王とエリカちゃんくらいだからね。

それはさておき、十中八九四天王って字面にすると数字ばつかでわけわかないね！

「おわつとー！」

なんて現実逃避も敵は待つてはくれない。

できるだけ人気のないところに攻撃を避けながら必死になって逃げる。

さて、敵の正体が四天王だと分かったところで、実のところあまり意味はない。あ、そーなんすね。ぐらいの話だ。

敵が四天王だろうがなんだろうが、結局僕より強いってことに変わりはないし。敵の正体を見破ったからって帰ってくれる話でもないしねえ。

「あ、やっべえかもこれ」

なんとなく、人気のないところのほうに敵も姿を表してくれるんじゃないかっていう淡い期待があったんだけど。

え？他の人への危害？いやいや、自分のことを守るので精一杯ですよこちらら。

それはともかくとして、どうやら嵌められたらしい。

「雑木林のなかじゃあ、あの蹴りがどこから飛んでくるかわからんぜ」

たらりと垂れるのは冷や汗か、それとも今まで走ってきたためか、拭うことすら忘れた僕はとにかくモンスターボールを握る。

まるで僕の心を写したかのように、ざわざわと林は揺れ。

「ぐうっ!!」

握った手を持ち帰る暇もなく、蹴りの主はここぞとばかりに攻勢に転じた。どうやら今まではネズミを追い込んでいただけで本気を出してはいなかったらしい。

かー、鼻につくねえ。その余裕がさ。

「だがしかーしーその余裕が命取りだぜ!」

この蹴りの持ち主がどんな奴でどんな性格をしていて、どんな気持ちで僕を襲っているかなんて知らないけれど。

唯一知っているのは、この蹴りは、いやこの“足は”確実に敵のモノで敵の元に帰っていくってこと。

「つまり、その先に敵がいるってことは幼稚園児だってわかる簡単な問題さ」

ピンポンパンポーン!じゃあその足っ先に僕のポケモンが入ったモンスターボールを括り付けたらどうなるでしょうか!

「正解は苦勞せず、敵の位置がわかるって寸法さ!」

いいね樂するって、苦勞しないって最高!

「~~~~~!!」

「そこか!ウインディ!!」

カラカラの鳴き声が林中に響き渡り、僕はウインディに跨り颯爽とかける。

「って、うん?」

なんだか、鳴き声もこつちに向かっているような?気のせい?

「じゃ、ないですよね!」——うおっ!」

この野郎、位置がばれたと瞬時に判断して突っ込んできやがった。お陰で僕はウインディの上から吹っ飛ばされたんですけど?

がペペ、と口の中に入った砂やら草やらを吐き出して敵のご尊顔をようやく拝める。

「……サワムラー、だけ?」

敵のポケモンはサワムラーだった。特徴的なのはその伸びる足。これは最初の一撃を受けた時から予想通り。

だけど、てつきりトレーナー、つまり四天王も一緒だと思ってた。どこかに隠れているのか、しかしそれじゃあ指示ができないはずだけど。

「ぐうっ！」

なんて考えてる暇はどうやらくれないらしい。近づいたことにより、より威力が増した蹴りを右腕に食らう。

怪我人だぞ！もっと丁寧に扱え！

「カラカラ！」

言われなくてもわかってると言いたげに、僕の声と同時にカラカラは動く。

そのホネこんぼうで足技を巧みに防ぐ。

「オロオロするなウインディ!!」

「キャウ！」

二匹の攻防に圧倒されたのか、ウインディは入れる隙間もなくウロウロしていた。

「かえんほうしゃ！」

流星に、まだまだカラカラのようにはいかないか。まあ、そこまで求めるのは酷ってmond。

今ある現状で、なんとかしなくちゃ。

つたくさあ、こうなったのも全部サカキ様のせいだ。今度会ったら文句言わなきゃ。

あれ？文句言わなきゃいけないやつがもう一人いたような？忙しいなあ僕も。

「カラカラ！スイッチ!!」

その呼びかけと共に、前線で戦っていたカラカラが即座に離脱する。サワムラーにとっては急に眼前の敵が消え驚いたところに「かえんほうしゃ」が浴びせられるわけさ。

ナイスコンビネーションだね。

そして、「カラカラにどくけしを与えて」。もう一度、戦線復帰。「つとと。おいおい、ポケモン無視して僕に攻撃してきやつがたぜコイツ！」

トレーナーがいないことといい、妙すぎるな。まったく不気味さだけを演出しやがって。

「その意図はちゃんと教えてくれるんでしようねえ！」

さつきから飛んでくる蹴り技に僕は逃げることに集中せざるを得ない。

くっそ、これじゃあ指示もちゃんと出せない・・・！

「なーんちゃって」

「!!」

ペろりと舌を出して、僕はサワムラーを挑発する。

その隙にウインディの“いかく”にカラカラの“ずつき”。

「残念だけど、僕ってば毎回毎回ちゃんと指示を出すような、そんなちゃんとしたトレーナーじゃないからさあ」

僕のポケモンは次第に自分で動いて考えて戦う癖がついちやうんだ。いいことか悪いことかは知らんけどさ。

たまにウインディがテンパっちゃうんだよねー、それで。

「ギャウウー」

わー、いったそー。

どうやらモロに“ずつき”が入ったらしい、悲痛な叫びが木霊する。

「さて、と」

勝負はついた。いくら四天王だからって、一匹で僕に差し向けるだなんて舐められたもんだぜ。

ようやくゆっくり考察できる。

僕が戦った二人は、ゴーストタイプと氷タイプの使い手だった。ジムリーダーがそうないように彼ら彼女らもまた、一つのタイプのエキスパートと考えていいだろう。

と、いうことはこのサワムラーは僕が戦っていないもう一人つてことか。

サワムラー、戦ってからもわかるようにそのタイプは“格闘”。

格闘、氷、ゴースト。それが四天王の内訳の一つことなのだけけれど。

四天王っていうくらいだ、三人じゃあ示しつかないよね。

「ま、あと一人が誰でどんなタイプのエキスパートかってえのは、襲われてから考えりゃいいや」

これで僕は三人を退けたツワモノになっちゃったもんなんー、あつはつは。もう一人が出てきてもおかしくないし、その一人が四天王のボスって線も濃厚だ。

ゲームじゃあそういうパターンが多いんだけどなあ。

「どうしようこれ？」

地面に伸びているサワムラー。別にこのままにしておいてもいいんだけど、また襲われても面倒だ。

・・・レッドのことを聞くのなら、こいつの御主人様の下に案内してもらおうのも手なんだけど。

「うーん、リスクを考えても、そこまでする義理はないんだよねえ：」
僕の目的はあくまでイエローであり、レッドなんて二の次、三の次だ。

とはいえ。

「ま、連絡するくらいはしてやってもいいかな。恩を売るのも、悪くはない」

どうせここはエリカちゃんの街だ。放っておいても見つかるだろうし、だったら僕が倒したことを全面的にアピールしたほうがいいもんね。

そう思って、僕は電話を取り出す。

だからというわけではないだろうが、僕は敵の実力を見誤っていた。

四天王の力というやつを。

「なっ!?!うぐ!!」

油断していたわけではない、サワムラーの一番厄介なところはその伸びる足だ。だから最大限の注意を払っていたし、ウインディがしゃかりとその足を封じていた。逆に言えばその足さえ封じてしまえばなんてことないのがこの目の前のポケモンだ。

そのはずだった。

「ひ、卑怯じゃん・・・?聞いてないよ・・・手が伸びるなんて・・・

！」

僕の首と、カラカラの首。その両方をサワムラーの腕はがつしりと回され締め付けてくる。

くそ。気絶したふりをして、気づかれないように手を伸ばしてやがった。

眼鏡のお姉さんが川や海を凍らせていたのをもつと気に掛けるベキだったな。それほどの使い手なら、当然、同様に四天王全員そのレベル以上なのだ。

とはいえわかるかい！こんな曲芸じみたことをさ！

「う……ぐ……！」

まずい、これじゃあ絞殺されて終わりだ。右腕を執拗に狙っていたのもこれか。おかげで動きやしない。

片腕じゃ限界なんて見えてる。

ウインディはその光景を真っ青になってみているだけだ。

でもいいんだよ君はそれで、君がこっちに来てみる。今度こそ正攻法でその自由に足で蹴り殺される。

今はその君の“おくびよう”さが役に立っている。

ちつくしよう、我慢大会なんざ僕の趣味じゃないんだけどな。

段々と視界がゆがみ、脳に酸素がいきわたっていないことをいやでも実感する。

くそ、あと少し。あと……。

朦朧とする意識の中で、それは見えた。

「……はっ！がはっ、ごほっ」

一気に緩んだ腕を必死で引きはがし、僕は思いつき空気を吸う。

いやー、空気が美味しい！みんなも美味しい空気が吸いたいなら、わざわざ自然とかいくよりこっちをお勧めするぜ。命知らずなクレイジー野郎にはね。

「ふうー、あつぶねえ。マジで死ぬとこだった。助かったよ。“ゴルバット”」

「~~~~キュウキュウ！」

褒められたのが嬉しかったのか、顔を綻ばせ擦り寄ってくるゴル

バット。今回ばかりは暑苦しいけど許してやろう。

「お、まだ意識あるんだ。さっすが四天王が差し向けてきただけはある」

力なく横たわっているサウムラーの顔は、何が起きたのか理解できていない。そんな顔だった。

「保険つてのは、いついかなる時も打っておくべきなんだよ。今回みたいなドタバタ劇の中ではね」

といっても簡単な話でね。君に襲われた瞬間から。僕は機を見てゴルバットを空に放ったのさ。

「そのゴルバットが、空から」どくぼり」を放っていた。どさくさに紛れてね」

にしてもあの混戦の中、よく気づかれずに当ててくれたよ。素直に流石だねと褒めておこう。

「とはいえ完全に勝利したわけじゃあなかった。君の奇襲は完璧だったし、僕は本当にその前に倒したと思ったからね」

最後は君の体力が尽きるのが早いから、それとも僕が絞殺されるのが先かの我慢比べだったというわけさ。

よかったー、こんなこともあろうかと、この日のために肺活量を鍛えておいて。

これも日頃の行いさね。

「あっはっは、？をつくなという目で見るなよカラカラ」

そして心の中を読むなよこの骸骨頭。

「さて、これでもうやく安心して——、……」

サウムラーは僕の声を聴いて、悔しい表情も何もなくなっただ力尽きた。職人って感じだなー。

なんて思っている僕だけど、なんだか違和感が全身を襲う。

その違和感は何だか、下から這いあがってくるような。そんな感覚で……。

「うーはー!!」

「!!」

一瞬。マジで一瞬早かった僕のとっさの機転でモンスターボールにポケモンを仕舞って、その場を回避する。

「……マジかよ」

結構素で驚いちやった。

だって、下の地面がぽっかりと口のように突然あいちゃうんだもん。

そんなの、怪奇現象と呼んでも差し支えないじゃん？

「いやー、どこにいるのか、もしくはいないのかなんて思ってたけど。まさか下からくるとは」

まったく、聖徳太子もびっくりな荒業だぜ。

筋骨隆々とはまさにこのことで、雄雄しいその体からはなんだか格闘家独特のオーラを放っている。

状況からみてどう見ても四天王の一人。その一人が、ぱっくりと空いた地面から飛び出してきた。

なんてことない顔で。

「……」

ちつ。ポケモンがポケモンならトレーナーもトレーナーだな。

職人気取ってんのか知らんが、寡黙な脳筋って僕の嫌いなタイプだ。

「——っ!!」

「カラカラ!?!」

ボールに仕舞ったと思っていただけけど、どうやら一人逃れていたらしい。

そんなカラカラが、ここぞとばかりに奇襲を仕掛ける。

「……チツ」

がそれは筋肉で固められた防壁によってシャツアウトされる。

ちょうど、手首につけられていた腕輪に直撃したようだ。

舌打ちまじりに、そのままの勢いでクルクルと僕の隣に着地する。

わー、かっこいいー。

「エリカちゃん、助けてくんないかなー」

勿論、そんなこと言ったって通じないのはわかってるけどなんか

言つとくと伏線っぽいじゃん？来てくれそうな気がするじゃん？

でも、現実はそのはいかない。僕はこういう時に都合よく助けが来てくれるような人間じゃあないってこと。

・・・フツ。わかつてますよ。そんなの今更ね。

そんな期待はこう生きると決めた時からとつくに捨て去った。

「エビワラー、カイリキー」

筋肉のおっさんが出したポケモンはその二匹。僕の見立てに間違いはなく格闘タイプだ。

それに呼応するように、僕ももう一度ウインディとゴルバットを出す。

さつき見たいな奇襲はもう通じない。こういう力押しにはなんか策考えててもぶっ壊してくるからなあ。

ほんと、厄介だぜ。

たらりと垂れるのは今度こそ完全に冷や汗で。

そして。

そのポケモンは唐突に表れた。

まるでずつとそこにいたかのように。

「・・・君は、ミュウ？」

そして物語は次のお話に。

「ミュウ！」

23話 「すれ違いは恋愛だけにしてくれよ」

「ミュウ?なんで、ここに?」

突如現れたその伝説のポケモン。

つか本当に伝説かい?最早その有り難み、僕の中じゃあないに等しいぜ?

この二年で何回も会ってきたからか大してそのレアさに感動もなくなってきたが、それでもやはりその理由だけはわからない。

なぜいつも僕の目の前に姿を現すのか、その理由が。

「.....うぐううう!」

「おいおいおいおい、今度は何だつてんだよ」

窮地に追い込まれているからか、笑顔で取り繕う余裕はない。四天王の大きなうめき声に僕は嫌になりながら目線を外せない。

「ミュウー」

するとフワフワと、白い塊のように光を発光しているミュウは一つ鳴き声を挙げて空中へと浮遊する。

敵である四天王はその自慢の筋肉を見せびらかすでもなく、ただ両手をわなわなと震わせ苦しんでいるだけだ。

一体全体何をしに来たのか、その不気味さに生唾を飲み込みながら、僕はその光景をただ見ていた。

「!」

「うわっ——!?!」

「ぐうっ——!?!」

すると、突然ミュウの体から溢れ出る光が大きくなり、僕だけじゃなくポケモンも四天王の一人も包み込んでいく。

(なんだこれ。暖かい...?)

これがなんなのか、わかるはずもない僕は、ただ瞳をぎゅつとつぶって耐えるしかない。

けれどそれは耐えるというほど不快なものでもなく、どちらかといえばずっとこうしていたいような。

そんな光が、どれくらいの間続いていたのだろうか。

時間なんざわかるはずもなく、長いような短いようなそんな時がたち。

「ん……あれ？」

光で目がつぶれたわけでも、なにか特殊なことをされた様子もない。

本当にただ光っただけ？いや、それもきつとないだろう。何か理由はあるはずなんだ。

「……ここは？」

その理由は目の前の敵を見ればなんとなくわかった。

「お前は、誰だ？それにここは、どうなっている？」

敵である四天王のおっさんは混乱したようにブツブツと独り言を喋っていた。

“まるで記憶がないかのよう”。

「……どうということだ？」

ミュウがやることにわけがわからないのはいつものことだが、今回もヒドいな。

あの光、大方目の前のおっさんを正気に戻したらしい。

まずおっさんが正気じゃなかったって部分が驚きだけど。いや仕方ないじゃん？だっておっさんの素なんてこっちは知る由もないだからさ。

「あーあー、もしもーし？おっさん、自分のことわかる？ドゥーユーアソダスタン？」

「自分のこと……俺の名前はシバ。四天王のシバだ」

お、ラッキー。どさくさ紛れに情報ゲッツ。

そんでやっぱり四天王かよ。

「ここに至るまでの経緯とか覚えてる？僕ってばなんにもしてないのに一方的に殺されかけたんだけどさあ。これって覚えてないで済まされるのかな？ねえ？張本人としてはどう思う？」

どうやら相手は混乱しているらしいし、搾り取れるものは絞っておこーっと。

「経緯、だど？わからん、確か俺はレッドと対決していて、そして……

「そうだ。その時もこんな感覚だった」

「ううん？レッドのことはどうでもいいんだけど？もつとこうなに？ないの？四天王の秘密とかさ、弱点とか弱みとかそういうやつ。ブツブツと呟くシバの言葉に大した情報はなく。」

「……うーむ」

それ以上聞いても無駄だと判断し、僕は踵を返すように街へと向かった。

「ちらりと後ろを振り返ると微動だにしていないシバがいたけど、放っておいていいな。あれは。」

「四天王シバ、あの様子じゃ誰かに洗脳でもされてたのかもしれない。そんなもってそんなことが出来るのは、あの四天王の中じゃあきつと。」

「てことは、ミュウはシバの洗脳を解いたのか。なんで？」

「なんでそんなことをする必要があったんだろうか。それに僕が窮地に追い込まれてから現れたことも気になる。」

「そこで初めてあたりを見まわしたけれど、やっぱりというなんとうかそこにミュウの姿は既になかった。」

「となるとマジでシバの洗脳を解きにきただけ？」

「うーむ。」

「わからん、それを考えるのも阻止するのも僕の役目じゃあないね」

「走りながら、僕はそう口を開く。」

「僕の役目は、そんなの決まっている。」

「ああ、これでようやくイエローに会える」

「拜ましてもらおうよ。その面」

「待ってろよ人殺し。ぜってえその尻尾捕まえて見せる。」

「はあはあ・・・なんだあれ?」

街へとついてすぐ。僕の真上を大きな影が過ぎ去っていった。

ポケモンのように見えたけど。野生かな?

「おつとと、こんな所で油売ってるわけにはいかねえんだった」

ただでさえシバのせいで時間食ったんだ。急がないとまたニアミスなんて笑えないよ。

なんて思っていたのに。

「はあ!?グリーンと修行に出ただあ!?」

「ええ。つい先ほど」

とりあえず適当に街を走っていると不意に人だかりにぶつかった。

その中心にいたのは、なぜか知らんけどボロボロになったエリカちゃんに。

「コイツが例の“カラー”?ふーん、ひよろつとしてるわねえ」

正義のジムリーダー様であるところのハナダジムのカスミ。

おてんば少女の異名よろしく短パンにへそ出しルックはどちらかといえば健康的な印象を受ける。

「その傷はどうした?なにかあったのか」

警戒心バリバリなのはニビジムのタケシ。細目でなぜか上半身裸だ。

「おいおい、僕は一体今日だけで何人の男の裸を見なきゃいけないんだい?」

「は?」

「いや、こつちの話さ」

さつきニアミスは笑えないと言ったけれど、ことこうなってくると逆に笑いが出てくる。乾いたそれが。

グリーンと飛び立ったと言っていたし、さつき上空を飛んでいたのがそれかな。

あーあ、もうちよつと気を配っておくべきだった。

「でも、なんでまたグリーンと修行なんかに？」

「それは――」

ボロボロになったエリカちゃんにひとしきり経緯を聞いた僕。

「なるへそー。キクコがねえ」

理科系の男を使ってどうやら何かを企んでいたらしい。グリーンによって阻止されたそれが何だったのかは今ももう知る由もない。

「あんたねえー！まずは一言エリカの心配くらいすれば!？」

カスミの怒ったような、いや本当に怒っているんだな。これは。

カスミとエリカは親友だということは知っている。エリカちゃん家にちよこつといた時に聞かされたからね。

だから自分のことのように怒ってるんだと思うけど。

ダメだなあ。君はエリカちゃんのこととは知っていても僕のこととは知らないんだから。

もつと慎重に人を見極めないとダメだぜ？

おいおい。まったくななんでこの僕が、他人の心配なんかしなくっちゃあならないんだい？このたった今、目の前で目的が遠ざかったちゃった僕に慰めろって？逆に僕が慰めてほしいくらいだよ。これでまた捜査は一からなんだから。

大体それを頼んできたのはエリカちゃんの方だよ。だったらそんな言葉一つかける間に出来ることもあるはずなんじゃあないかな？

と、というようなことを僕は一瞬で頭の中で描いて、あとはさあそれを口に出すだけだ。

だけの、はずだったんだけど。

「いいのです。カスミ。カラーはそういう人じゃないことは知っています」

「でもー」

げぼげぼと咳き込みながらそう口にするエリカちゃん。どうやら腹をやられたらしい。

「……………」

そんなことをエリカちゃんに言われてしまったら、僕のセリフがな

いじゃないか。せつかく長文を考えたのに。

「カラー、と言ったか？俺もまたカスミと同意見だ。それに、お前の方こそなぜこんなところに、それもそんなボロボロでいる？元、ロケツト団のお前が」

言外に何か企んでいるんじゃないのか、それを含んでいるのは明白だ。

「タケシ、と言ったっけ？聞いてないの？今回僕は味方だよ？イエローの調査をそのエリカちゃんから承ったのさ」

だから、そんな面するなよ。とてもじゃないが君、正義の味方って面じゃあないぜ？

細い目をさらに鋭く尖らせ、今にも襲いかかってきそうな雰囲気じゃないか。

まったく、どうしてこうせつかちなんだろうね君たちってばさ。

「ボロボロなのは、ちよいと一戦やってきたからさ。知ってる？四天王のシバ。やれを今やつつけてきたところだね」

「シバだ?!?その話、本当だろうな！」

「当たり前じゃん。きつとこの街を襲おうとか考えてたんじゃない？キクコと二人で」

「……」

「おいおい、仲間だろう？仲間ってのは無条件に信じるものではないが」

「俺はまだ、お前を仲間だと認めてはいない」

勿論、シバは僕を倒しにきたわけでそんなことを計画していたわけじゃないのはわかってはいるけれど。

でもそんなことは確かめる術なんてないし、きつとシバも流石にもう逃げているはずだから真実は僕だけのものだ。

「そこまでだ。今は味方同士で争っている場合じゃないだろう」
「……あれ？」

なんてやりとりをしていると見知っているような声が聞こえる。

この声、なんかつるつとしてそうなの声は……！

「カツラさんだ。お久しぶりでーす」

「ああ、久しぶりだな。カラー君」

相も変わらずその眩しい頭は健在で何よりです。

それはいいんですけど、なんでこんなところにカツラさんが？

「ああ、それは私もこの度正義のジムリーダーとしてレッド捜索に協力するつもりだ」

「ひえー、あの元ロケット団の研究員のそれもまあまあ偉かったカツラさんが？」

うーん、世の中、人ってどうなるかわつかんないね。あんなに悪の街道爆進していたカツラさんが、正義の味方面して再登場とはね。

あ、面じゃなくて本当に正義の味方になったんだっけ？

「……」

そんな心の内が透けて見えちゃったんだろう。僕ってば素直だから嘘つけないんだよね。

カツラさんは神妙な面持ちで僕を見ていたけれど、やがてカスミの傍まで歩いてきた。

「この通り、難儀な性格をしているし目的のためなら手段を選ばないような男だが、だがその腕と観察力、推察力に関しては私が保証しよう」

えー、べつつに難儀な性格なんてしてないけどなあ。さっき言った通りちよつとばかり素直なだけだよ？やりたいことやって、言いたいことを言ってるだけさ。

けれどまあ、カツラさんがせっかく口利きしてるんだ余計な茶々は入れないでおこう。でも余計で不満げな表情くらいはいいよね？

「それと……すまなかった」

カツラさんは唐突にそう言うとその頭を下げ謝罪した。

僕にはてんでなんのことかわからなかったが、とりあえず僕の不満げな表情は誰も気にも留めていないってことはわかったので元に戻す。

「二年前の、君のギャラドスのことずっと詫びたいと思っていた。すまなかった、許してほしい」

二年前のギャラドス。その内容を聞いても別にピンとはこなかった

たけれど、それでもカツラさんのその覚悟と、勇気だけは僕にも伝わってきた。

こんな僕に伝わるんだ、その当事者であり今日の前にいるカスミに伝わっていないはずがない。

「もう・・・いいよ。これからは一緒に戦ってくれるんだよね?」

「ああ、もちろんだ」

あれかな? 昨日の敵は今日の友ってやつ?

僕にはどうでもいいことだし、関係ないな。

そう判断して僕はさっきのポケモン、グリーンが乗っていたとするならきつとりザードンだな。それが飛び去った方角を見る。

関係ないけど、カツラさんのことを水に流してくれるんなら僕みたいな下っ端のことなんてさつきとちり紙にでもくるんで捨ててくださいよ。

「うーん、流石に今回は予想がつかねえや」

徒歩や川を下っているのならある程度の予想はつけられるし行動範囲も限られる。

だが相手は空を飛んでいるんだ。その距離もスピードも予想できるものを超えている。

「・・・ここで振り出しかよ」

「ああ、そういえばカラー。イエローには会ったのですか?」

カスミとカツラさんがよろしくやっているのを傍目に見ていたエリカちゃんがふと気付いた様子で僕に問う。

「うんにゃ。ていうか、ここに来ている時点で察してよね」

「そうですか。ではそれはもういいです」

「はいっ」

ひどく消耗している様子だけど、それでもエリカちゃんのはつきりとした口調でそう言った。

「先程までイエローがここにいたのは知っていますね? その時に私達ではつきりとこの子に任せようと、そう決めました」

なんだいそりゃ、人に頼んでおいて随分自分勝手だなあ。

「ですから、あなたももう十分です。ごめんなさい、勝手なことを言っ

てるのは――」

「エリカ！」

ぐらりとエリカちゃんの体が重力にあらがえずに落ちていく。

喋っている途中で立っている力すら尽きてしまったのか。きつきから目が虚ろだったもんね。

「……つたく。僕だつて怪我人なんだぜ？その僕がこんだけピンピンしてるつてのに、ジムリーダーが聞いて呆れるぜ」

「……ごめん、なさい」

本当に今にもぶつ倒れそうなエリカちゃんの体は軽い。左腕一本でも支えられるほどに。

その軽い体にどれだけの重荷を背負っているのか。

「まああれだね。僕は二回助けてもらったわけだから、二回までなら僕も君を助けよう」

借りを作るのなんて気にしないし、借りを作らせることに重きを置いてなんていけないけれど。

でもまあ、せっかくの機会だ。返せるのなら返してもいい。

「勘違いしないでね。君を助けたくて助けるんじゃないってこと」

「ええ、わかっていますよ。それでも、お礼を言わせてください」

ありがとうございます。

弱弱しい笑顔で、エリカちゃんはそういった。

「お礼を言うと言って、ありがとうございますような人間にはなりたくありませんから」

「はっはっは、なにそれ。意趣返しのももりかよ」

まったく本当に、どこまでも可愛くない女だ。そんなだと嫁のもらい手もないんじゃないの。

「変な二人、仲がいいのか悪いのかわからないわ」

「あれでいいのさ。カスミ君。人と人との関係なんてそれこそ人の数だけあるのだから」

なーんか後ろでしたり顔で口に行っている二人を無視しながら、僕はエリカちゃんに肩を貸しながら歩く。

そしてイエローのことは、また次回ということだね。

24話 「ようやく会えた本命」

「あ、えっと。カラー？もうちよつと、その、優しく」

「仕方ないだろう？僕だって、初めてなんだから」

「なーにを意味深なやり取りしてるのよ！この変態男！」

四天王の襲撃から落ち着きを取り戻してきた今宵。

僕たち正義のジムリーダーズはエリカ邸でひとまずエリカちゃんの治療をすることにした。

「おいおい、僕はただ服の上から治療するなんて初めてって意味で言っただけど？カスミちゃん？一体全体どういう意味で受け取っちゃったのかな？」

「~~~~出てけ変態!!」

顔を真っ赤にしたカスミちゃんから勢いあるグーパンチをもらったところで、僕はお役御免となり部屋から追い出されてしまった。

なんだよ、せつかくこの僕が珍しく治療してやろうって気になっただけのにさ。

廊下を歩きながら、ぶたれた頬をさすりつつ歩く。

「カツラさん」

「おお、カラーか」

正義のジムリーダーがここにいるのだから、当然カツラさんに会うのは不思議ではないのだけど。

僕は不思議にカツラさんに尋ねた。

「その男は？」

「ああ、こいつがレッドに化けてエリカ君にケガを負わせた男だ」

ぐでーつとカツラさんの肩で伸びているその男は、なるほどキクコに利用されていたらしい小物感がする。

眼鏡に黒髪というこれといって特徴的でもない出で立ちに僕は視線を外した。

「ふーん、で？そんな男を担いでどうするんです？」

「こいつがどうしてレッドに化けられたと思う？」

なんだろう憑き物が落ちたかのようにすつきりとした表情のカツラさんは意味深に僕に問う。

けれど、興味ないんだよ。そのカツラさんの表情の意味とか、昨日の謝罪の心情とかさ。

「さあ」

だから僕は気のない返事を返すしかない。

「もつと言えば、なぜレッドではないと見破れなかったのか」

しかしそんな僕を置いてけぼりにしてカツラさんは自分の世界^{ワールド}へと入り込んでしまっているようでその口は止まらない。

「答えはこれだ」

呆れていた僕にすつと取り出したるは、黒いグローブ？

ああ、これ確かロケツト団のグローブだ。

僕はそれに見覚えがある。意気揚々とマチス様が身に着けていた。

「レッドが身につけていたグローブだよ。もしこれを研究していけばレッドへの手がかりとなるかもしれない」

ん？レッドが身に着けていた？そだっけ？

最後にレッドにあったのは、確かシルフカンパニーでの対決だったけどそんなときは結構必死だったしな。自然に負けるのに。

だからあんまし覚えてないけれどカツラさんが言うならそうなんだろう。僕なんかよりよっぽど真剣にあいつを見てる。

「ふーん、じゃ。頑張ってくださいな」

そう言い残して、僕は玄関へとむかって歩を進める。

「もう、行くのか？」

「ええ、ここにやるべきことは僕の中にはないんでね」

ひらひらと手を振る僕にそれ以上カツラさんは何も言わず。

玄関から、壊れた門をくぐって。

ぎゃーすか聞こえる女の子たちのやかましい声を聞きながら僕は一人呟くのだ。

「じゃあね、エリカちゃん」

これでようやくイエロー探しに集中できる。

とはいえ、アテがあるわけではないので僕は取り合えず昔の旧友に会うことにした。

「やあ、久しぶり。リヨウ、ハリー、ケン」

「ああ、久しいな。カラー」

元ロケット団中隊長組、リヨウ、ハリー、ケン。

ロケット団が解散してからも、この三人はしぶとくロケット団の広報活動を行っていた。

広報活動、つまりはロケット団復活ののろしを上げるべくゲリラ的に活動していたわけだ。

そんな三人と握手しながら僕は昔話に花を咲かせる。

「僕が各地を旅していた時に偶然会ったのが始まりだったね」

「そうだな、結局まだロケット団は復活できていないが。俺たちは諦めない！」

そのキラキラとした真っ直ぐな瞳は最早尊敬に値するけどさあ。無いに等しいと思うよ。その可能性。

「うん！流石だね！皆ならきつと出来るよ！」

友達だからってなんでも本音を話すなんて勘違いしちゃあいけないよ。

僕にはロケット団が復活しようがしまいが、もう関係ないもんねー。

「何を言っている！復活した暁にはお前にもそれ相応のポストしようではないか！だから一緒にロケット団を復活させよう！」

リヨウ君、君のその熱血誰かさんと被るからやめてくれよ。その黒

い服が真っ赤に染まって見えるんだよ。

「毎度毎度、その提案してくるけどさあ。答えは変わらないよ、僕はもうロケット団には何も求めちゃいないの」

何度断られても懲りないその諦めの悪さは、別に評価しないよ。普通に有難迷惑だ。

とはいえ、じゃあなぜ今回来たかってーと。

「で、今回は何をしようっての?」

「お前もついに我々に協力する気になったか!」

「早とちりはやめてよねケン君。内容次第だよ」

なぜなら今回の集合場所が場所だったから。遠い目で見て僕にも有益なことかもしれないと思ったからだ。

「今回、我々はサントアンヌ号強奪作戦を実行するのだ!」

「・・・ほう」

サントアンヌ号、だからここクチバシティの港に集まったわけか。ふむふむ。

「そんで?具体的な計画は?」

「それはお前、まず動力源を壊して動かないようにしてだな・・・」

つまりハリー君。それは詳しいことは何にも決まってないってことだよな?

「でも、乗った」

「え?」

僕の言葉に三人は意外そうな間抜けな声を出す。

それもそうだろう、さっきまでの対応とは天と地ほどの差があるのだから。

でも乗った。イエローを探すという当初の目的からはちよいと外れはするけれど、その後、の事を考えればここで船を手に入れるというのは千載一遇のチャンスだろう。

カントーを抜け、ジョウトに行くという僕の計画からすれば。

「その計画に、僕も協力すると言ったんだ」

「お、おお!そうか!お前もついにロケット団の一員としての自覚が・・・」

ウルウルと目を潤ませて、今にも泣きそうな三人には悪いけど全然そんな理由じゃないんだ。

「よし！そうと決まれば善は急げ、いや悪事は急げだ！」

いや聞いたことないけどそんな言葉。なんの格言にもなっていないし。

ということで僕らはサントアンヌ号に乗り込んでいた。

サントアンヌ号と言えばマチス様が悪事を働いていた記憶しかないけれど、辺りを見回すと案外人で賑わっている様子。

悪さをしたのはマチス様であって、サントアンヌ号ではないということ。案外人はわかつているのかもしれない。

この賑わいを見て、そう思った。

「急げ！」

「よし！セット完了！」

「あとはねんりき」で作動させるだけだ！カラー！」

「はいはい」

そんな人の多いこの船で、不用心にも動力室には誰もいない。

外を見張っている僕の目の前で動力室に細工をしている三人を邪魔するものも、誰もいない。

「船をぶっ壊した後のことは任せていいんだな!？」

「ああ、任せてよりヨウ君。甘言に冷色、口八丁に手八丁。あらゆる手を使って騙し奪い取ってやるよ」

「おおー任せたぞー！」

僕が協力すると決めたからいいものの、もし断られていたらどうするつもりだったんだろうこの人たち。

ふと気になって逃げる際に聞いてみた。

「そりゃ、お前全部終わった後に考えるつもりだったのさ！」

あー、なるほどー。

君たちが成功しない理由の一端が垣間見えた気がするよ。
それはさておき。無事動力室から逃げおおせた僕ら。

「よし！それ！ヤドン！」ねんりき」だ！」
かねてから計画していたように、彼らはスイッチを押すようにヤドンに命ずる。

大きな爆発音と共に振り返れば動力室は見事に煙を上げていた。

「いよっしーあとはスリーパーの力で空中に逃げ、乗客に我らの名前を声高々に宣言するだけだな！」

「そう簡単に行けばいいけどね。リョウ君」

「なに?！」

逃げる際にちらりと見えた麦わら帽子。

うーん、運がいいやら悪いやら。

いや、ここはポジティブに行こう。船なんて他にも腐るほどあるし、けれど“あの子”は一人だけだ。それにこれを逃せばまたいつ会えるかもわからない。

「よし、ここから別行動だ。三人共」

「なんだ?!急に何を言い出すんだ!」

凶太い眉のケン君が素っ頓狂な声を出すのもうなずける。何しろ今から僕は君たちに熱い掌返しをしようとしているんだから。

「一つに固まってちや、いざという時に動けない。君らは空中から。

僕は地上から援護させてもらうよ」

「そ、それもそうか!」

そんなこと知りもしない三人は僕の口から出まかせを信じたらしく(いやそうじゃないと困るんだけどさ)さっさとスリーパーと空中へ逃げ込んだ。

僕は取り敢えず適当なところに身を隠して、彼らの宣言を聞くことにした。

「ワハハハハ！我らロケット団の存在!!忘れさせるわけにはいかぬ!!」

うわー、口上までベタだな。

「そうはさせない!」

「——おっ！」

出てきた出てきた。

僕はより一層木箱に身を隠して、揺れる船と共に流れを見守る。

「なんだガキ!? 誰だ貴様は!?!」

「僕は・・・僕はイエロー! トキワの森のイエローだ!」

麦わら帽子が特徴的のイエローは、なぜだかこのサントアンヌ号に乗り込んでいたらしい。

まったくこつちから追いかけていた時はてんで姿を現さないのに、諦めたとたんこれだ。

君といいミユウといい、神様ってのは僕のことを嫌いなのかね。

「いくぞー皆ー!」

イエローはそう言って、取り出したるは6匹のポケモンたち。

エリカちゃんに聞いてた通り、ドードー、コラッタ・・・はラツタに進化したのか。あとは、レッドのピカにタケシのゴローン。カスミのオムナイト。

ここまではいいけれど、あのキャタピーはなんだろう? 新しくゲットしたのかな? 聞いてた話だとポケモンを捕まえるのは苦手だって話だったけれど。

まあいいや、お手並み拝見といこうじゃなか。

僕が興味あるのは君のポケモンなんかじゃあなく、君そのものなんだからさ。

「ドドすけー! ふきとばし!」

「うわっ!」「なに!?!」「くっ!」

ふきとばしを受け、船上が荒れる。それに恐れをなしたのか、元々あまりチームワークを感じさせなかったイエローのほかのポケモンたちも散り散りになって逃げてゆく。

「あーコラ待て!」

「放っておけ! どうせあんやつら、大したことない!」

「寧ろ好都合だ! 相手が二匹になったのだからな!」

リョウ君たちの言葉に僕も概ね同意だ。今厄介なのはまず間違はなく目の前のイエローであり、単純に戦力としてみても本当に大した

ことはなさそうなメンツだった。

が、僕は知っている。イエローがレッドを探すことを目的にしていることを。それを成すには、最低でもレッドと同等程度の力は持つてなきゃいけないということ。

例え特別な力を持つていたって、純粋な戦力は確実に必要だ。それを分からずにジムリーダーたちに認めてもらったわけでもあるまい。(さあ出せ、奥の手としてとっているのか知らないけど。このままじゃ船は沈むぞ)

「どうせここまで傾いている船だ。乗客ごと沈めちまえ！ヤドン！」

「いつに！」

おいおい、僕が乗ってることを忘れてないかいあの人たち。頭に血が上っちゃってるじゃん。

ギギギギ、と船が軋む音が木霊する。まるでどつかの大作映画のように真っ二つに折られようとしてる船からはポロポロと乗客が海に放り出されていた。

「あーもうーゴルバットー！」

これ以上は危険と判断した僕は見つかることを承知で空に逃げる。これでイエローに逃げられたらあの三バカにはもう協力してやんない。

で、その三バカはというと。

「スリーパー！ ヨガのポーズ」で我々を空中浮遊させろ！」

これで安全とばかりに勝ち誇っている顔をする三人。まあ確かにイエローに空を飛べるようなポケモンはいないようだったし、勝負はあつたかな。

ふむ、ではどうやってイエローに取り入ろうか。

三バカと一緒に脅迫するか、それともここで颯爽と助けに入るか。

もうそんな計算ばかりしていた僕は不覚にも気付かなかった。

オムナイトがひっそりと三バカのほうに近づいていることに。

ゴローンがなんとか船を支えていたことに。

ラッタがガリガリとその自慢の前歯で船体を削っていたことに。

「・・・キャタピーが糸を乗客に巻き付けている？」

そのことに。

「見ろ！先に落とした乗客も全員キャタピーが作った浮き輪に！」

「おのれ!!・・・あれ?なんか、足元が冷たいような!」

「ポーズを組んだ足元が凍り付いている!?オムナイトか！」

「お、おい！氷の重さで段々と沈んで・・・スリーパーがんばれ！」

そしてここまで来たらもう形成逆転。

「乗客の皆さんは既に港に着きました。この船に乗っているのは僕だけです」

残念僕もいます。空中にですけど。

「降参してください」

あつという間の逆転劇。いや、しかも”すべてが計算された逆転劇”。

につこりと笑うその顔はとてもじゃないが純粹とは言いづらい。

(は、はは・・・人は見かけによらないとは、よく言ったものだね)

まったく可愛い顔して、案外えげつないなあ。この子。

ひきつった笑顔をしている自覚はありながら、それでもまだ僕は空中を漂う。

なぜならまだ、戦いは終わっていないからだ。

「アーボ！マタドガス！」

「うわっ！」

「はは！お前も落ちろ！」

最後の抵抗とばかりに三人の攻撃を受けるイエローだが。

「”でんきショーツク”！」

「~~~~ツッ！」

ああ、きつと終わりだ。これで決まった。

三人には悪いけれど、君達と僕の縁もこれで終わりさ。

さて、戦いは終わってしまったしどうやってカツコよく登場しようかしらん？

なんて考えてた僕は再度裏切られる。

船体を削っていたラッタがついに船を真っ二つに折ったことによつて。

「~~~~!!」

声にならない声で泡を吹いていた三人は既に戦う意思などない。

「もう悪さはやめますか? でないとゴロすけが支える手を緩めますよ」

「は、ハイ」

まさかそこまでするとは思わなかった僕はゴルバットを握る手が思わず緩む。

うーん、意外と完璧主義だったり?

いや、単にロケット団が許せなかったただけかな?

とはいえ、これでようやく一件落着。

壊れた船を港につけて、三人は縄でグルグル巻きに。

「ふー、なんとかなったね」

「やあやあやあ。お見事お見事」

一仕事終えた感じで汗を拭き、自らのポケモンたちを労っていたイエローに僕は拍手しながら擦り寄る。

こうやってようやく念願のイエローちゃんに会えたわけだけど。

「——えっと、あなたは?」

「僕?僕はカラー。正義の味方さっ☆」

それはまた次のお話で。

「ああ! てめ! カラー! 今までどこに!」

「ゴルバット、”さいみんじゅつ”」

「——ZZZ」

「・・・えと」

「コホン、正義の味方さっ☆」(さつきよりも三割増しの笑顔で)

・・・次のお話で。

25話 「人を探して三千里」

「それにしたって、まさかあのメンバーで勝っちゃうんだもん。正直びつくりしたよ」

「あ、あの・・・」

「いやー、最初はさなんか変な事件に巻き込まれて必死に上空に逃げただけど。あ、このゴルバットでね？そしたら君みたいな子供が勇敢にも悪漢たちに立ち向かっていくじゃないか。いやー、もう僕はハラハラしっぱなしで」

僕ことカラーは今現在絶賛饒舌に喋り倒し中でございます。

なにせせっかく念願叶って麦わら帽子のイエローに会えたんだもの。変な勘繰りを入れられる前にこつちから場を掌握しないとね。

クチバの港には大勢の人もいる、さつきケン、リヨウ、ハリーの三バカの襲撃から救った人たちだ。

「あ、助けたかったんだよ僕だって。君の手持ちパーティー正直強そうには見えなかったし、あ、最初ね最初。でもさあ、それでも知恵とチームワークで乗り切っちゃうんだもん。僕ってば途中から見惚れちゃったよ」

「いや、そんな・・・大したものでは」

おお、好感触。照れてる照れてる。ラツタを愛でるその手がなんだか嬉しそうに動いているのを僕は見逃さないぞっ。

「おおーっ!!これは!?!」

「チツ」

おっと、思わず軽く舌打ちしちゃった。見られてないよね？

まったく、いい雰囲気だったのに邪魔するなんてどこの馬の骨だい？そんなやつはすり身にして食っちゃうぞ。

「君達!!ありがとうー!わしらを救ってくれたヒーローじゃ!」

人混みを掻き分けて現れた小ちやいおじいちゃんはブンブンと大袈裟に僕の手を握って離さない。痛く感動しているらしくサンングラスの奥の瞳が光っている。

ってあれ？このおじいちゃんどこかで会ったような？

「ぬおおお！この悪党どもめ！イエロー君じゃったな！わしも一撃くらわしても？」

「え？え？」

困惑するイエローをよそにおじいちゃんは一人勝手に盛り上げて。

「ねここにこぼーん！」

を、連発して満足したのだろう。大量の小判を両手に抱えようやくこちらに向き合った。

「むむ？よくよく見たら君・・・？」

「・・・」

じーつと顔を見られ、僕は取り敢えず顔をそらすけれどきつとそれも無駄だろうな。このおじいちゃんには。

うん、思い出したよ。この他人のことなどお構いなしでせわしないマイペースっぷりをね。

「アラ君！アラ君ではないか!!」

「え？アラ・・・？」

そして同時に、気軽に偽名を使ったってことも。

うーむ、人に嘘つくときはもつと慎重に嘘をつこう。まさかここでこんなめんどくさいことになるなんて。

「・・・」

ほーら見ろ、イエローの目が段々と怪しいものを見るそれと変化しているじゃん。

あーあ、ここはもう開き直って重ねるしかないなあ。

「いえ、会長。それは人違いです。アラは僕の双子の弟です。僕はカラーです」

「な、なんと！しかし、顔がそっくりで・・・」

「ええ、それよく言われるんです。ですから会長が会ったのはきつと僕の弟でしょう。二年程前各地を伝説のポケモンを探して旅をしていましたから」

「おお！そうじゃそうじゃ！なるほど双子じゃったのか！しっかし似

ておるのお！」

よかったー、会長がアホ。じゃなくてバカで。

無邪気にはしゃぐ会長を見ているとなんだか胸の内が痛んでは決してない僕だけれど、しかしここで真実を伝えたところでマイナスにしかならないのは明らか。

だったらほら誰も傷つかない嘘をついたほうが得じゃん？

まあそれもこれも全部僕中心の話ですけど。

「連れてるポケモンたちもそっくりじゃ！ほれ！このカラカラなんてまさにウリ二つ！」

「ははは」

ちよいとハラハラせんではない僕だけれど、しっかしばれないもんだね。あまりに馬鹿馬鹿しいからかな。

純粋な会長をよそに僕は本命に声をかける。

「……アラさん、なんですか？」

ほうら予想通り半目で僕のことをじっと睨みつけているよ。まいったなあ。

会長ほど素直に信じちゃくれないか。

ま、そうじゃなきやレッドを探すなんて雲をつかむような話になっちゃうから、それはそれで朗報かもしれないけれど。

「実はここだけの話、前回会長に会ったときは素性を隠す必要があるお仕事についていてね。心苦しくはあるけれどなにせ会長に危害が及ぶのは避けたかったもんだから」

僕ってばこんなにもアドリブ上手でしたっけ？口を開けばスラ斯拉とあることないこと浮かんでくるんですけど。

これが二年の時を経た成果かしらん？

まあここは背に腹は代えられぬと言いますか、一番大事なのはイエローの信用だ。

それさえ得られれば後はどうなろうとも構わない。

「へえ。そうなんですか」

あつれー？あれあれー？

全然興味なさそう、取り敢えず怪しいけれど危害はなさそうだから

いいやって感じがビシビシと伝わってきちゃうぞ？

ちくしょう、こうなったらもうなりふり構ってはいられない。この手は多少時間がかかるからあまり使いたくはなかったが。

「ところでイエロー、君レッドを――」

「そう！それがクチバの港の伝説!!」

「で、それがレッドさんとどんな関係があるんですか？」

「うわーい！全然聞いてないや！なんだこれ！なにこの塩対応！なんであの会長よりもぞんざいな扱いなんだ！」

「ぐぬぬ。人は第一印象が一番大事とは言うが、それにしたってあんまりじゃねえかな」

「なんて言っている今もお、イエローは会長の言うことに耳を傾けているので僕の方なんざ見てもいいない。」

「・・・仕方ない、今は焦りは禁物だ。特に人と人との関係はね。」

「こうしてイエローに出会えたんだそれだけで今は満足しておこう。」

「いつだって強欲になると人は失敗を繰り返してきたことは歴史から見ても明らかなのだ。」

「愚かな先人たちには感謝をしつつ。」

「ふう、ここら。僕も話に混ぜてよ」

「あ、カラーさん」

「おお！カラー君も気になるか！クチバの港の伝説」

「話し込んでいる二人に割って入るように僕も口をはさむ。」

「今はイエローの信用が先決。そう心でつぶやきながら。」

「ああ、その話ですか」

「なんと！既に知っておったのか！」

「驚く会長を余所目に僕はさらさらと答える。」

「取り敢えず一発、イエローには僕が頼りになる男だと証明しておかなくっちゃね。」

「ええ、なにせ。この僕のウインディもそのクチバの石で進化させたもんで」

「な、なななんですよ！本当に実在しておったのか！クチバの海底に眠る『使ってもなくならない進化の石！』」

腰が抜けたように驚く会長、そんな会長とは対照的にイエローはその事実を聞いてもまだ冷めたままだ。

「ですから、それがレッドさんとどういう関係があるんです?」

「どうやらあくまでも、レッドが優先順位の不動の一位らしい。」

「なにがイエローをそこまで駆り立てるのか気にならないでもないが。」

「おおーそうじゃったそうじゃった!」

「ま、今の僕の優先順位の不動の一位はイエロー。君の特殊能力なんだからどうでもいいや。」

「実はじゃな!かくかくしかじかで」

「へえ、そんなことがあったんですね」

会長の話は長いので、カラーディレクターの大体な編集を駆使して要約すると。

「カラー!せっかくのワシのセリフを!!」

「会長、ちよつとうるさい」

「つまりはこういうことだった。」

二年前、クチバのサントアンヌ号事件の折、レッドはマチスさんと戦い一度は破れ海に落とされた。

がしかし、不思議なことにニョロゾがニョロボンに進化して海から這い上がりマチスさんに勝利したのだ。

ニョロゾはみずの石でしか進化しない。それが海に落ちただけでなぜ?その事件の顛末を聞いたものは皆そう思ったそうさ。

「そこで!わしは考えた!クチバの伝説が本当なら!すべての辻褄が合うのじゃと!」

「あ、最後のセリフとられた。どんだけ喋りたかったんだこの人。」

「つまり、そこに行けばレッドさんに繋がるヒントがあるかもしれないと」

「そうじゃ!」

「ふーん、ま傍目から聞いていても確かに行く価値はありそうさ。」

「ピカ!」

「ピー!」

「よし！出発だ！」

どうやらそう思ったのは僕だけじゃないらしい。イエローもピカもまあ嬉しそうに歩き出した。

しかしそれはこちらにとっても好都合、もしかすると短期決戦が見込めるかもしれない。

僕の大好きな、ね。

しかしまあ、それはまた次のお話ということで。

26話 「思い出はふとした瞬間に思い出すのが一番感慨深いのか」

「ところでイエロー。アテはあるのかい？」

会長から情報を得て、走り出したイエローの後をウインディで追いかけてながら僕は話しかける。

必死に走って息が切れているところ申し訳ないんだけどね。

「とにかく会長が言っていたクチバ湾沖合に行ってみます!!」

「そかそか」

その瞳は燃ゆる炎で揺らめいている。あんなただっぴろい海からクチバの進化の石、使ってもなくならないというその石を探すのは途方もない作業だと分かっているのかしらん？

分かかって言ってるのならバカ決定、分かかってないのなら大馬鹿決定だね。

まあでもそんなバカだからこそ、潰け込む余地があるんだけどさ。

「それより！なんでついてくるんでしょうか!？」

「えー？ほらー、言ったじゃん。レッドのことは僕も心配なのか」

とつとつと、こりや完全に怪しいものを見てる目をしているなあ。会長についた嘘でどうやら第一印象が悪くなってしまったらしい。会長め。

「じゃ、そういうことだから。早くしないと誰かにとられちゃうかもよ？クチバの石の伝説は割と有名だし」

「~~~~~!!ピ、ピカ！」

そんな僕の言葉を鵜呑みにしたのか、顔を真っ青にしたイエローはピカと共に全速力で港へと走っていった。

「おーおー、若いねえ。そんなもって純粹だねえ」

有名なのと、それを信じている人がいるのとは月とスッポンくらい話が違うんだけど。

それに気づくのはもうちょっと大人になってからなのかなあ。

さて、そんなこんなで場所は沖合。

具体的にはどうやって探すつもりなのか、興味深く見守ってみたものの。

プカプカ浮かぶ浮き輪は平和そのもので、そこから垂れる釣り糸はまるで時間の概念を忘れてしまったかのように動かない。

「あーあ、あくびしちやつてるよ」

真面目なのかそうじゃないのかわからないねえ。

いや、あれはただの考え無しか。

そうイエローの評価を改める僕はと言えば。

当然、涼しげな木陰でイエローを傍目で見ているだけですけど何か？

右腕の包帯も取り替えておきたいとこだったし丁度いいんだよね。

・・・よし。

「さて、包帯も無事取り替えたし。そろそろ自分の無謀さにイエローが気づいた頃だろう」

おーい、と大声でイエローを呼ぶ。

戻ってきたよと、手で合図をするとすごすごと戻ってきた。

「どう？調子は？」

「・・・全然です」

うわ、この子今にも泣きそうじゃない。

どうしよ、やけになつて泣かれても困るしなあ。

もしかしたら、僕が必要以上にプレッシャーを掛けちゃったかもしれない。

「あー、イエローさんや、イエローさん。さっき言ったことだけどね、クチバの石の伝説は確かに有名だけど。荒唐無稽すぎて信じてる人なんて誰もいないよ」

だからそんなに焦った顔しなさんな。僕の計画にまで支障が出たらしたら許さないぞ。

「ふえ？そうなんですか？」

安全安心の僕の笑顔を返答代わりに、イエローはどうやら安心したらしくその表情はゆるむ。

まったく、こんなのがレッドを助けに行こうだなんてどれだけ人材不足なんだろうね。それともこれが君の人望かい？レッド。だつたらたかが知れてるぜ。

「とにかく、闇雲に探したつて無駄さ。ここはひとつ、お兄さんに任せなさい」

「・・・手伝ってくれるんですか？」

「ああ、その代わりと言つてはなんだけど。一つだけ、頼みを聞いてほしい」

さあ、自分一人じゃあ先に進めないことはもうわかつただろう？ここは大人しく協力者の話を聞いておけ。

「頼み、ですか？」

「なあに、簡単な頼みさ」

不安げな表情をするイエローに僕は優しく笑いかける。

「この“カラカラの記憶を探してほしい”。僕が君に願うのはそれだけ。そのたった一つだけだ」

そう、これが僕がイエローに望むこと。

「・・・」

一瞬にして顔がこわばつたイエローに僕は慎重に言葉を投げかける。

間違えないように、なにせここでの最悪はイエローが警戒して僕の頼みを断るといふのが最悪も最悪だ。

「大丈夫、君の能力は知つている。ブルーから聞いたからね。それで少しだけ、やってほしいことがあるんだ。少しだけだよ」

悪用するつもりはないのだということを、あくまで知りたいことがあるのだと。

どうしても知りたいことがあるのだと、そう僕は訴えかけた。

「代わりに僕は君を手伝おう。クチバの石の伝説、その在り処を見つけてみせるし。必要ならそこから先だって、ずっと君と行動を共にしてもいい」

それほどまでに、目の前の人物は重要だ。他の何を捨て置いてでも得なければならぬほどに。

だから。

「だから、君の能力で。カラカラの記憶探り、僕の親を、妹を、殺したポケモンの手掛かりを見つけてほしい」

「……」(ゴクリ)

生唾を飲み込む音が聞こえた。そこで、僕ははっと我に返る。痛く力を入れた両手が、イエローの手を握りしめていたことにそこでようやく気付いた。

こんなんで自分を見失うなんざ、僕もダセエなあ。

「親、を……?」

かろうじて口をついて出たセリフは弱々しい。

さて、もう一度気合い入れなおして。

「説明する必要はないだろう?」

なにせ、見ればすぐにわかることだ。

「それで?頼みを聞いてくれるの?それとも、聞いてはくれないの?今!ここで!決めてくれ!」

逃げの一手なんて許さない。長期戦をするつもりもない。

僕はずいっと、イエローの瞳をのぞき込む。

「は、はい」

「それはどつち?はっきりしてくれ」

「き、聞きます。カラカラの記憶、見させていただきます」

「……そうか」

ほっと、一つ胸を撫でおろす。まったく、ここで断られたら一体どんな悪逆非道な手を使えばいいのかわからなかったよ。

「で、でも!その前にいくつか質問してもいいですか!」

「……まあ、少しなら」

これくらいの譲歩は仕方ない、か。もしイエローの能力が精神に作

用するもので、僕のことを気になって集中できないなんて言い訳されても面倒だし。

「それで？なにが聞きたい？」

どさり、と地面に腰を下ろして僕は少しだけ気を抜く。

「あ、えっと。いっぱいあるんですけど」

いっぱいあんのかー、こりや断ったほうがよかったかな。

若干憂鬱になりながら僕はふむふむと頷く。

「ま、まずーブルーさんと、知り合いなんですか？」

「ああ、そこね。そうだよ、知り合いだ。初めてあったのは二年前。君の情報もブルーから仕入れた」

これは嘘。だってこう言っておけば、多少なりとも信用が生まれるでしょ。君とブルーは秘密の関係みたいだし。悪いがつけこませてもらうよ。

つつてもカラカラの記憶を調べるんだから、そんな嘘はすぐに見破られるんだけど。それでいいのさ、繋ぎの役割さえ果たしてくれれば。

トキワの森のイエロー。僕が二年の間に集めてた伝承にトキワの森出身のものは稀にポケモンと心を通わせるものがあると、聞いたことがある。

そんな人がいるのなら、頼りたくもなるぜ。なにせ、僕の記憶からはうつつらとしか出てこなかった“黒いポケモン”も。

もしかしたらはつきりと姿形が見えるかもしれないんだから。

まあ、自力じゃあそんな人物見つけられなかったんだけどね。これぞ柵から牡丹餅。レッドがいい仕事をしてくれた。

「じゃ、じゃあ次の質問。カラカラの記憶から、一体何を見たいんですか？」

これは、ちよつと真面目に答えなきゃだ。探し物をわからずに探してたって意味ないし。

「僕はね、幼い頃、家が火事になったんだ」

「・・・はい」

とつとつと、僕は昔のことを語った。家族が、火事に巻き込まれて

死んだこと。そこにいた正体不明の黒いポケモンのこと。

「知り合いに超能力者がいてね、調べてもらったけど、僕の記憶じゃあそこまでが限界だった」

「?じゃ、じゃあどうして?」

「おいおい、もう一人いるだろう?僕と同じ境遇で、ソイツを覚えてるかもしれないやつがさ」

「??」

ええー?ここまで言ってもわかんないの?察しの悪さはレッド以上だね。

「つまりさ、それがコイツ、カラカラだよ」

普通ならあり得ない。ポケモンとは言葉を交わすことができないからだ。いくら以心伝心だと言ってもできることには限度がある。

だが、目の前のイエローならそんな限界などやすやすと超えていく。

ポケモンと、心を通わせることがでいるイエローなら。

「君なら、カラカラの記憶を辿ってそのポケモンのことを引き出せる。それが、僕が頭を下げて君に頼みごとをする理由さ」

ここまで喋って、ちらとイエローを見る。

どうにも真面目な表情で、これは好感触と言ってもいいんじゃないかな?

まあ、なんだっていいよ。君が今の話を聞いてどう感じるかなんて興味もない。

ヤツの正体が暴けるのならば、僕はなんだっていいし。なんだってできる。

「はい、わかりました。カラカラの記憶を読んで、そのポケモンを見つければいいんですね」

「そうだよ」

どうやら、作戦は成功。やる気になってくれたらしい。

「って、うわわ。どうしたピカ?」

「ウウウウウ!!」

あら、ゴルバットの催眠術が切れかけてきた。

ピカは、この場で唯一僕がロケット団に所属していると知る人間だ。イエローが心を読める以上、それを知られると面倒だ。

そう思っただけで眠らせておいたんだけど、起きちゃったか。

ま、でも、一歩遅かったね。

「この、記憶」

案の定、イエローはピカの記憶を読む。

もし初対面の時にピカが僕の顔に気付いていたら、あるいは違っていたのかもしれないけれど。

だがしかし。

そんなことは詮無きことだ。

「どうした？僕がロケット団に所属していた時のことでも見たかい？」

「……本当なんです。このピカの記憶」

そこには敵対心というよりは、ただただ困惑している様子だった。ダメだねえ。僕がもし敵だったら、即座に戦闘になるとこだよ今の。

その甘えが吉と出るか凶と出るかは見ものではあるものの。

今はそんな余裕はない。

心身ともに。

「ああ、でもそれがどうした？ロケット団に入ったのは黒いポケモンを見つけたためだと言って信じるかい？君。それに」

それに、君はもう一度僕の要求を呑んでいる。

「それを、ものの数秒で掌返しなんて、それはちよつと人としてどうかと思うね僕は」

「いえ、断るつもりはありません。アナタの言う通り、一度受けたんだ。ちゃんとやります」

おお、変なところでも真面目だ。今は救いだが。

「でも、最後にちゃんと聞かせてください。？偽りなく、レッドさんを心配してる気持ちはありますか？ちゃんと、レッドさんを探すの手伝ってくれるんですか？」

そんなことを聞いてしまうあたりがまだまだ子供か。

といつても僕だってそんなに年は違わないんだけど、これがくぐつてきた修羅場の違いってやつ？

「このウインディはクチバの石で進化させたって言ったよね？」

「え？ええ」

「僕も最初は半信半疑でね。探してたら運良く見つかったんだけど、そのことはさつき喋るまで誰にも話していなかった」

「あの、それが何か」

いいから聞きな。

「その後、善良なる僕はちやーんと石は元の場所に戻したんだ。その時、レッドはまだ行方不明なんぞにはなっていなかった」

つまり、何が言いたいかってーとき。

「会長の話じゃあ、レッドはクチバの石の伝説が本当にあることを知っている。そしてそれを知っているのはきつと僕とレッドだけだろう」

さてここで問題です。石のある場所に行ったはいいものの、肝心の石がなかった。さて、なぜでしょう？

「レッドさんが、持ち去ったから？」

「正解、だが、まだ弱い。レッドはイーブイを持っていた」

「あ！それ、見ました」

そう言つて、イエローは自身が持ち運んでいるスケッチブックを見せてくる。

ああ、そうか。今レッドの凶鑑はイエローが持つてるんだっけ。

で？なに？それをスケッチブックにお絵描きしてるの？暇だねえー。

「うん、そのイーブイは少し特殊でね。ロケット団に開発されて、ブースター、シャワーズ、サンダースに自由に進化できるのさ」

「ということは、その三つの石がなくなっていたら」

「少なくとも、無関係ではないだろうね」

パアアッと暗かったイエローの表情が一気に明るくなるのを感じる。

この子、レッドのこと好きすぎだろう。何があつたのか・・・うん、

興味ない。

「でも、その場所がわからないんじゃない？」

うわあ、底無しのアホかコイツ。

ジェットコースターのようにコロコロ変わる表情に僕はため息しか返せない。

「おいおい、言ったら。」返しに行った”って、場所なんてとっくに知ってるよ」

「えええええ!?じゃあさつきなんで教えてくれないんですか?!」

それはほら、君を交渉のテーブルにつかせるためだよ。

「H A H A H A」

とは当然言えないので、欧米式苦笑いでごまかす。

「とにかく！等価交換だよ！場所が知りたければ、今すぐ、カラカラの記憶を読むんだね」

最早当初の穏便に事を済ませるといふ理想は叶わなくなってきたいるけれど、ま、理想は理想だ。しゃーないしゃーない。

「うううううう、わかりました」

ようし、これでようやく一歩目だ。

今までスタートラインにすら立たせて貰えなかったんだ。

ここから、ここからようやく始まる。僕の物語は。

やや緊張の面持ちの僕だけど、それはまた次のお話で。

27話 「君の姿」

「っ!!」

苦悶の表情を浮かべるイエロー。

クチバの港が一望できる林の傍らで、僕とイエローはカラカラの記憶を読むという重要イベントをこなしていた。

なんとかここまで交渉してこぎつけて、もう後はただただ行くすえを見守るのみ。

「はあ、はあ、はあ」

終わったのだろうか、なにせ、ポケモンの心を読むだなんて奇術に遭遇したことがないもんでそこらへんがとんとわからない。

「カララ、さん」

虚ろな瞳だ。それがポケモンの心を読むという力を使った代償なのか、それとも、僕らの過去を見たうえでの反応なのかもわからない。

「終わったのかい?」

結論は焦らない。目の前で疲弊しきっているイエローをいたわるくらいの心の余裕は持ち合わせているつもりだ。

・・・いや、これはきつと本心ではない。ただの強がりだ。

自覚してしまうぶん、誰かに言われるよりもそれは我が身に重くのしかかってくる。

本当は、いち早くにも聞きたいのに。

もし、ダメだったらと思うと、恐怖で足がすくむ。

「・・・大丈夫ですよ」

そんな僕の気持ちを汲み取ったのか、イエローは相変わらず凄い汗をかきながらそれでも笑顔を取り繕った。

・・・あーあ、こんなんじゃないやお兄さんぶっていたのが馬鹿みたいじゃないか。

「ちゃんと、アナタのカラカラは覚えていました。あの日のことを」

どこまで見たのか、どこまで見えるのか。それを聞くのはきつと野暮だ。

だから、結論だけを聞こう。

例えイエローが何を知ったのだとしても、その事実だけは何としても聞きださないといけないのだから。

「それで？肝心要のポケモンの正体は？」

その言葉を発した瞬間に、僕は異変に気付いた。

鼓動がまるで頭蓋骨から鳴っているように頭を揺らす。

木々の木の葉の一枚一枚がわかる。波の動きが、揺らめきが、その奥にいるポケモンたちが見える。風の柔らかさを感じる。

どうでもいいことばかりに敏感なのは、きっと僕が目の前的事实から逃げたしている証拠なのだろう。

聞きたいのに、聞きたくない。

知りたいのに、知りたくない。

聞いてしまったら、知ってしまったら、一体自分はどうなってしまうのか。

想像がつかなくて、自分が自分じゃなくなってしまういそう。

口が乾く。舌が上あごにくっついて離れない、そんな錯覚にすら陥る。

何度唇を舐めようと、すぐにひりつく。体の震えが止まらないような気がする。

自分の体の不調ばかりを探して目の前のイエローに、現実に、立ち向かえない。

「……さん！カラーさん！」

「……え？あ、ああ」

何度も呼ばれてようやく気が付いた。

全て、自分の妄想だったことに。

イエローに右手を強く握られている。そのことにすら気づかなかった。

うわ、だせえ。

自己嫌悪、二回目。

「大丈夫です。カラーさんは、大丈夫です」

何度も何度も、馬鹿の一つ覚えみたいにその言葉をイエローは繰り返す。まるで、赤ん坊をあやす母親のように。

「ああ、わかったよ。俺は、大丈夫だ」

真実を知ってしまったら、形の見えなかった敵を知ってしまったら。

この感情の行く道が決まってしまったら。その重さに僕は耐えきれれるのか、なんて。

「いらぬ杞憂だったな。どうせ、知らなきゃ始まらないんだ。僕の人生つてやつは」

ああ、結局のところそういうことだったのだろう。覚悟が出来ていなかった。

口で言うだけの、くだらない覚悟しか僕は持ち合わせていなかった。

ただそれだけの話だったのだ。

「はい・カラーさんは、大丈夫ですよ」

その言葉が、僕の人生を見てきた上で言っているのか、それともイエローの性格によるものか。

どっちでもいいや。

覚悟は決まった。その一点だけで、僕はいい。

「じゃあ、教えてくれ。僕の復讐の相手を、さ」

「はい」

コクリと、イエローは神妙な面持ちで頷いて。

パラパラと先ほど見せたスケッチブックをめくりだす。

「えつと、なにしてんの？」

まさか、そこにいるのか。もう、イエローは出会っている？いや、それにはレッドの図鑑にいるやつも書かれている。

ということはレッド？ここにきてやつが必要になるのか？

どれだけ翻弄されれば気が済むんだよ。

歯ぎしりするほど噛み締めた奥歯は、しかしあっさり解放される。

「ちよつと言葉で説明するのは難しいので、絵を描きますね！」

・・・そっかー、絵で描いてくれるんだー。

うんいやまあ、そっちのほうがわかりやすいからいいけども、なんだろうなあー、この肩の力が抜けちゃう感じは。

イエローが持っている天性のものなのだろうが、ヒートアップしていた僕を精神を落ち着かせるのに一役買ったことは間違いない。

別に感謝なんかしないけど。

まあでも人間、冷静になんないとね。見えるもんも、見えなくなっちゃうもの。

「出来たー！これですー！このポケモンですー！」

出来たことによる感動か、キラキラと目を輝かせて僕の目の前に紙を差し出すイエロー。

まったく、いいね純粹で。そのパーセントでも分けてほしいとは、思わないけれど。

「・・・。。。そうかい」

決するほどに意義もなく、僕はまるでマンガの次のページをめくるかのごとく軽快さでそれを見た。

真っ黒い体に、まるで髪の毛のようなものが頭の上に白く鎮座している。

首元にあるのはなんだろう、なんか赤いけど。

足はなく、腕は二本。肩から揺らめくものは影かな？

とにかく、僕がその絵から読み取れたのはそれだけだった。

これはイエローの画力の問題ではないし、僕の理解力の問題でもない。これでも芸術を見て感動する心くらいは持つてるんだぜ？

「すいません、カラカラが僕に心を許していないのか。細かいところまでは、見えませんでした」

「いいや、上出来だ。上出来すぎる」

いつものように、からかう口調は鳴りを潜めている。自分でも不思議だが。

僕がナツメちゃんに見てもらったときは、ここまではつきりとはしていなかった。デイトールの問題はあるにせよ、それは些末事だ。

これがあれば僕の復讐は何倍ものスピードで、目的に近づける。

「ありがとうイエロー。今回ばかりは本当に、心の底からそう思うぜ」
表情は無く、落とした視線は、その絵から動くことはない。焼き付
けておかなければ。

自らが失ったその形を、今一度記憶する。

「……いえ、お役に立てれば、幸いです」

イエローの表情は打って変わって暗いものになる。

その表情が指し示す意味は、九九を覚えるよりも簡単なことだ。

「今ここで見たことは、君の人生には何の影響もない。ツマラナイ映
画を見たと思つて、さつさと忘れることだね」

純粹で、いい奴なイエローには僕のそれはあまりにも毒だろう。

別にイエローを気遣うわけじゃないけれど、それで何かが変わって
しまつたらきつとブルーにどやされる。

うるさいからなあ、あの子も。

「悪いがこれは貰っていくよ」

「え、ええ。それはもう」

ふー。

一つ、長めのため息をつく。

「ほらほらー・暗い顔してると、空まで暗くなっちゃうじゃないか!!ど
うしてくれんない!?このままじゃ野宿だよ!?君はいいだろうが、僕は
ちゃんとお布団に寝ないと寝れない繊細な男なんだから気を遣え!」

「は、はあ」

バーンと、尊大な態度を取っている僕を相手にポカンとしているイ
エローをグイグイと押しやって、僕らは再びクチバの沖へと向き直
る。

イエローから貰った絵は、嚴重にバックに保管するとして。

「さて、こっちの願いは叶えた。次は君の番だ」

早くしないと、本当に日が暮れるぜ?

「そ、そうでした。クチバの石の場所、知ってるんですよね?」

ようやく調子を取り戻したイエローは、ふんすつと気合いの入った
顔を見せる。

「ま、”知っていると”言えば知っていると、知らないと言えば知らない

“んだ”

「・・・あの、そういう言い回しはやめるほうがいいんじゃないですか？それで誤解を生んでることだってありましたよ」

おっとお！ジト目で指摘してくるこの感じはロクな予感しないなあ！カラカラの記憶を全部読ませたのは失敗だったかな!？」

僕と生まれた時から一緒にいるカラカラの記憶を読むことは、イコール僕の記憶を読むってことと同義だからね。

チラと横目で見るモンスターボールには、憔悴しきったカラカラ。君は普段可愛くない捻くれものなんだ、たまには大人しくしときなよ。

でも、君はちゃんと覚えていたんだね。あのポケモンのことを。

それが、どれだけの覚悟と精神力の成せる業か、なんて。

語るまでもない。

「ま、期待には応えますよ」

ね、カラカラ。

「で？知ってるんですか？知らないんですか？」

ズイズイと顔を近づけてくるイエローに、僕はいつものスマイルを取り戻して説明する。

ほら、笑顔って人を元気にするらしいからさ。

「焦んなさんな。ま、見てなよ」

ゴルバットを呼び出して、僕は取り敢えず手頃な所にいたメノクラゲに“あやしいひかり”をかける。

「僕のゴルバットは特殊な技が使えてね、この光を見るとちよつとだけど洗脳状態になるのさ」

「ああ、それはさっき見ました」

ふーん、そんなところまで見たんだ。見えちゃったのか、見たのかつてところは今は保留にしておいてあげるよ。

「で、このメノクラゲにちよいと尋ねる。クチバの石の在り処を教えろってね」

こうして、僕は二年前“ほのおの石”を手に入れたってわけさ。

「なるほど、って、それ要はしらみつぶしってことですよね!？僕と変わ

らないじゃないですか！」

おお、よく気付いたね！

「でも違う、君のは当てずっぽうでなんの根拠もないが僕のはそれがある」

確実に探せば見つかるってのと、かもしれないじゃあ雲泥の差だぜ。

「うーん」

どうやら僕の説明じゃあ納得いってないらしい。僕の記憶を見たんなら、その効果は信用して然るべきだと思うけどね。

「そんなに言うなら、別に君は君で探せばいいさ。僕は僕でやるし、君の手は必要ないしね」

「それもそうですね」

と、いうことで僕らは二手に分かれてクチバの石の搜索を実行した。

僕は僕で、しらみつぶしにポケモンに催眠をかけ。

イエローはイエローで、懲りずに釣り糸を垂らしている。

「うーん・・・箸にも棒にも掛からぬのう」

一時間ほどが経過したところで、少しの休息タイム。

もう何十匹と洗脳を繰り返すものの、その手掛かりには辿り着かない。

このままじゃあ、ゴルバットが先に音を上げそうだ。

「前は確か、メノクラゲがドククラゲのところまで案内して、そこからクチバの石へと行ったんだっただけ」

やることなく暇なのか、モンスターボールから出てずっと水面と睨めっこしているウインディに尋ねる。

そのドククラゲに会えれば一発なんだけど。

「キャウー」

話しかけられたことに気づいたウインディは、嬉しそうに吠えた。

「はは、僕にはわからないな、君の心は」

首元をもふもふしながら、イエローの進捗状況はと横目で見る。

「うん？」

なんだか、遠目だけど慌てている？

「つてあの子!!」

襲われていた。長い触手のようなものにグングンと絡めとられ、ついで、すっぽりと海の底へと沈んでしまった。

あの触手、間違いない。ドククラゲのものだ。

まさか、自身のテリトリーにちよっかいかける敵だと思われたのか？

だとしたら、それは多分――。

「チツ。ああもう!」

上着とズボンを脱いで、海に飛び込む。

こんなところで死なれても目覚めが悪いじゃねえか。

(で、なにしてんの?)

もちろんここは海の中、声は届かずに僕の心の浮かんで消える。

簡潔に言えばイエローは無事だった。

どころか、どうやら襲われていたと思ったのは勘違いだったらしい。

(はーん、なるほど)

困ったように拝むドククラゲと、岩に挟まっているメノクラゲ。

ちよいちよいと指さすイエローのその先に広がっている光景は、言葉がなくても通じるアホさ加減だった。

あーあ、パンイチで海に飛び込んだ僕の立場よ。

「――つ――」

(あーはいいい、わかってるよ。君の言いたいことは)

必死に目とジェスチャーで訴えるまでもない。イエローは助けたいらしい、どうやらこの子を。

まったくとんだ寄り道だぜ。レッドはどうした、レッドは。

仕方なしに、僕はカラカラを呼ぶ。

(疲れてるとこ悪いけど、ちよつとそのこんぼうを貸しておくれ)
憔悴しきった彼に、いつものツンケンさはない。素直に差し出すホ
ネこんぼうを僕は握った。

さて、メノクラゲが挟まっているのは大きな岩だ。

イエローはゴローンを出していたようで、踏ん張ってどかさうとし
ているが芳しくない。

ゴローンは岩タイプ、この水中じゃあ動けるものも動けないだろ
う。

(っせーの!!)

僕はテコの原理で、ホネこんぼうを僅かな隙間に差し込んだ。

しよーがないから手伝ってやる。

何度か挑戦して、そろそろ体力が底をついてきたころ。

(やった!!)

イエローの声にならない声が聞こえた。大きな岩は持ち上がり、メ
ノクラゲはスイスイと水中へと脱出した。

・・・おお、以外となんとかなるもんだ。

「ゴボツ!!」

つと、こつちはなんとかならなかったか。

あんだけ余計に騒げばそりや酸素持たないって。

(つて、ゴローンをボールに戻す体力くらい残しとけばか!)

イエローが酸欠になり、沈んでいくのをすんでのところでキャッチ
して、ギリギリゴローンをボールに戻す。

(アブネー、つて、あ、ヤバイ。急に動いたから、息が・・・)

どうやら今ので、残った酸素を吐き出してしまったらしい。

靄がかかったような頭で、虚しく上空へと腕を振る。

(あーあ、ちくしょう。せつかくテメエの尻尾が見えたつてのに・・・
な・・・)

僕の声にならない声は、泡となって消えていく。

そして、次のお話へ。

28話 「ちよつとした再戦」

「カラー、カラー」

誰だろうか。僕の名前を呼ぶ声がする。

なんだろう、周りは真つ白でそこにポツンと僕がいる。それ以外には何もない。

いや、何もないというのには語弊があった。

「兄ちゃん？聞いてる？」

「え？ああ、聞いてる聞いてる」

「ウソ！今ぼーつとしてた！」

隣には怒った少女、というか幼女。

「ほら！積み木しよ！」

「ああ」

なぜか積み木があつて、不自然さ極まりないこの空間で僕は幼女と積み木をして遊んでいる。

だいぶ時間がたった後で僕は聞いた。

「これ楽しい？」

「うん！」

「あ、そう」

退屈すぎて僕は途中でやめてしまったけれど、彼女は一心不乱に積み木を積み立てていく。

「あ、」

バランスが崩れたのか、ガラガラと音を立てて積み木は倒れた。

「あーあ、死んじゃった」

「死んじゃったって・・・また積み立てていけばいいだけじゃないか」
「ダメだよ。もうダメ、二度はないの」

ああそうか、二度はないのか。

失ったものは、二度とは戻らないのか。

「そうだよ、兄ちゃん。だから、気を付けてね」

そう言って、彼女は立ち上がる。

「もう二度と、大切なものを失わないように」
振り返ったその顔は、光に照らされて見えはしない。
僕は手をかざし、なんとか見ようとするけれど、光は強くなるばかりで。

そして――。

「ん――ゲホツガハツ?!」

目が覚めた。とても快適な目覚めとは言い難く、肺から必死に水を掻きださないと呼吸することすらままならない。

えーつと？何してたんだったつけ？

なんか、夢を見ていた気がするんだけど。

寝起き特有のまどろみだけじゃない苦しきから解放されようと、僕は必死に記憶を探る。

「なんだか顔と体がビチャビチャなんですけど」

ああ、そうだそうだ。

クチバの石を探してて、イエローと一緒に溺れたんだった。

記憶に齟齬はない、ちゃんと宿敵の姿も覚えている。

「ふ、ふふふふ」

そのことに、なぜか今更感動がわいてきて、どこからともなく笑いが漏れる。

「おっと、そんな場合じゃなかったな」

顔を吹くものが何もないのでほったらかしにして。

さて、イエローはどこに行ったのか？ていうか、ここはどこだ？

どうやら僕は溺れていたところを助けられたらしい。
が、ここは陸地ではない。

「・・・なるほどね」

上を見れば幾千の星。の代わりに海を泳ぐ幾千のポケモン。海底の底でドーム状になった球体の中にいる僕は察した。ここがどこかを。

ということは僕の安全は今のところ大丈夫らしい。なんでこんなところがあるのかとか、どうやって空気を生んでいるのかとか。気になることはあるけれど、今は放っておこう。

「ぎ、イエロー。起きて」

僕の隣でグースカ寝ているイエローを起こそうと、僕は体を揺らす。

? 気でいいなあー君は。

「ん、んん」

どうやらイエローも無事そうだ。間抜けな寝顔を晒している。目的のものも達せそうだし。

モチ、僕の目的も。

うーん、今世紀最大の収穫じゃないか今日は。

ちよつと恐ろしいくらいに上手くいきすぎてるんだよなあ。

こういう時は往々にしてしっぺ返しがあるもんだが、ま、今は素直に喜んでおきますか。

「ん?」

そこで僕は何かを握っていることに気付いた。

竿?

「ああ、イエローのか」

そういえば海の上でプカプカと釣り糸を垂らしていた。馬鹿みたいに。

いつの間にか苦し紛れに握っちゃってたらしい。

「これ・・・先にオムナイトが付いてる」

バタバタと暴れているので何事かとみてみれば、なるほど。

「まるつきり考えなしたったわけじゃあなかったのか」

あの釣り糸を垂らしていた先にはオムナイトがついていて、きつと異変を察知したら引つ張り上げるようにしていたんだろう。

結果は芳しくなかったが、イエロー、君の評価は訂正しようじゃないか。

なにせ、今の僕は最高に気分がいいからね。

「ん？・・・んむ？」

「あ、起きたかい？その眠い目こすって見て見ろよ」

口を開けて、よだれを拭くイエローに僕は頭上を指さす。

「カラーさん？って、うわあ・・・！」

ここは自然の海底ドームだ。

その迫力は筆舌に尽くしがたい。

「すごい」

目を輝かせて感動しているイエローを見ながら、僕はさらに指をさす。

「そこ、見て見なよ」

この海底ドーム、広さはそうない。縦は僕らが立ち上がれば簡単に届くし、横だつて五メートルほどだろう。

そんな小さなドームまん真ん中に鎮座ましましているのが。

「これ！進化の石！」

そう、クチバの伝説、その石だ。

このドームは、さしずめこの石の力によって作られた天然ドームといつたところだろう。

いっけね、ドームのことなんて放っておこうって言ったのに。僕們たら思わず謎を解いちゃったぜ。

「そうか、君が連れてきてくれたんだね」

傍らにいたのは先ほど助けたメノクラゲ。

メノクラゲとドククラゲ、その二匹にどうやら命を救われたらしい。

感謝はしないけどね。

「で、カラーさん。やっぱり」

「ああ、＼足りない＼ね」

そう、足りていない。本来四つあるはずの進化の石。その石が足りない。

三つも。

「残っているのはリーフの石だ。これで確定だね」

ほのおの石、みずの石、かみなりの石。

この三つがない。つまりはこの三つが必要だったトレーナー。

なおかつこのクチバの石の伝説を真実だと知っているもの。

そりやもうレッドしかない。

「てことは……どういふことなんでしょう？」

「これを必要とするくらい、切羽詰まってるってことなんじゃないの？」

「ここでそんな議論しててもしょうがない。それを求めた理由なんのにはね、これ以上は情報が不足しすぎている。」

「だから、一つだけ言えることは“レッドは生きてる”。それだけだよ」

「……………」

つと、あれ？もつとこう大はしやぎするものかと思ってたけど。

案外冷静なイエローを横目で見ながら、僕は考える。

生きているのはこれで確定だろう、だが、だったらなぜレッドは姿を現さないのか。

ここの状況だけじゃあ三つの石がいつ取られたか、なんてわかりはしないけれど、それでもいの一番に心配している者たちに姿を見せるくらいいけないはずだ。

レッドは色々は無茶はするが余計な心配はかけさせないタイプだし。

だとすると、姿を見せられない理由がある？

「……あー、やめやめ。考えても答えなんざ出ねえんだし」

ポスつと仰向けに寝っ転がる。

大体、なんでこの僕がアイツのために頭働かせなきゃならんのだ。それが腹立つ。

「よかった、レッドさんは、生きてたよ。ピカ」

「どうやらイエローは静かに事実を噛み締めていたらしい。ピカと抱き合って、今にも泣きそうだ。」

謎と言えば、イエローも謎なんだよなあ。なんで、そんなにレッドに肩入れするのか。

「ま、なんにせよ。もうちよいゆつくりしていくか。こんな光景も滅多に見られるもんじゃあないんだし」

前回来た時は、まだロケット団に追われてたしろくにこの絶景を見られなかったもんな。

たまにはいいだろう。自分へのご褒美ってやつも。

しばらくしてから、僕らは陸地が上がって。

結局のところイエローとは別れた。

「本当にいいのかい？言つとくけど、僕がこんなに協力的なのは珍しいんだぜ？」

帰り際、イエローはこの先も一人で行くと言った。

僕の記憶を見て、信じられないと思われたのかイエローの意志は固かった。

「いえ、いいんです。グリーンさんの時もそうだったけど、たぶん、僕は甘えすぎちゃうので」

それに、と、イエローは真面目に答える。

「カラーさんは、他にもやらなきゃいけないことがあるでしょ？大丈夫です、レッドさんは僕が見つけます」

両手をぐつと握って大丈夫だというイエロー。この短時間で何回聞いたんだろうな、そのセリフは。

「・・・そうか。君がそう言うなら、そうなんだろうな」

結局のところ、人に人の気持ちはわからない。イエローのような特殊な力をもつてしても、人の気持ちは完全に理解することなど不可能なのだ。

だからまあ、イエローのそれが気遣いであると僕は感謝しなくたっていい。だって皆、したいことをしているだけなんだから。

故に僕もまた、したいことをしなければならぬ。

それもこれも、復讐を終わらせないとできないことだけれど。

「もう会うこともないと思うけれど、達者でね。レッド、見つかるといういな」

僕としては珍しく、本心でそう言った。

「はいーでも、僕はまた会う気がしてますよ」

「・・・そう」

振り返ることはせずに、各々の道に行く。

イエロー。不思議な子だったな。なんとなく、ブルーがこの子に期待しているのも分かった気がするよ。

さて、と。

「まずはどこから行こうか」

傍らにはカラカラ。ようやく元気になったのか、いつものツンツンが戻っている。

開けた道があるってのは、いいことだね。やらなきやいけないことがいっぱいだ。

「あら？ お別れしちゃったの？ 残念、二人まとめて殺してあげようとしたのに」

「ほらみる、人生つてのはバランスよくできてんだよ」

良いことがあれば、その分悪いことが起こるのさ。

ただし、悪いことが会った時は良いことが起きるとは限らないのが人生でもあるんだけどね。

つまり、総じて人生は悪いんだってことさ。

「フッフ、久しぶりね。坊や」

ゆつくりと振り返る。クチバから少し離れた郊外で後ろから現れたのは、四天王カナンナ。

その身も凍る、クールビューティーなお姉さん。

「いつから尾行してたんです？あと、坊やって年齢でもないんですけど」

「あなたがタママムシに入ってから、ずっと」

わあ、それももう立派なストーカーやん。

これ裁判したら絶対僕勝つと思うんですけど？

「パルシエン。ルージユラ」

二匹のポケモンを出す。完全に戦闘態勢だ。

周りに冷気が目に見えるほど濃くなってくる。

「戦う前にいいですか？なんでさっさとやっつけなかつたのかなって」

別に泳がす意味なんてないだろうに。性格悪いなあ。

「フフ、そんなの簡単、アナタという人間に興味を持ったのよ」

「はい？」

せんせー、仰っている意味がよくわかりませーん。

「あんな風に逃げられたのは私の人生でも初めてだったわ、だから屈辱と共にアナタという人間に興味が沸いたのよ」

それで今までずつとつけていたと？いやー、モテる男は大変ですなあ。

「さいですか。気に入って頂けたなら、もう一度しましょうか？」

「いいえ、もう十分。二度寝はしない主義なの!!」

“とげキャノン”。

パルシエンが放つそれを間一髪で避けながら、思考を回転させる。

ここで四天王が出てくるとは予想外だった。てつきり諦めてくれたのかと思つてたのに。

「フフ、いつまで逃げられるかしら？」

何も無い原っぱに次々ととげキャノンが大地に突き刺さる。

僕を尾行していた理由には当たりがつく、大方イエローのことだろう。

レッドのピカと行動を共にし、ポケモンの気持ちを読み取るトレーナー。警戒するには十分すぎる。

に、しては、だ。

一人だけというのは不自然だろう。絶対に、どこかに仲間がいるはず。キクコやシバか、それとも、もう一人か。

「何を探して——？ああ、心配しなくてもここには私しかいないわよ」

「・・・敵の言葉を信じろって？」

なにそれ笑える。

「あら、意外ね。真実か、そうじゃないかくらいは読み取れると思っていただけれど」

「むむ」

これは一本取られた。確かにそれを見極めるのは僕の仕事か。

さて、ここまで喋っておいて追撃は相変わらずパルシエンのみ。

奇襲を狙っているのなら、さっきの僕のセリフで警戒されていることは分かったはずだ。

「ぐっ——」

苛烈を極める攻撃も、避けられないほどではない。

「っ！」

「待てカラカラ！まだ！」

痺れを切らして、単身突っ込もうとするカラカラを制しながら思考は深くクリアになっていく。

奇襲が無理なら、隠れている必要はない。さつさと数の利で押さえればいいんだ。

今までの戦いで一対一なら逃げられるとは学習しているだろうし。

そう、逃げられる。五体満足とはいかずとも、一対一なら逃げられるのだ。

（つーことは、本当に一人？）

これは何かの作戦ではなく、本当にカンナの独断。

そういえば、僕と戦ったときシバはまるで何かに操られたかのようにだった。

キクコは八つ目のバッジを探している。

・・・確かに、独断の可能性はあるか。

「あら？逃げるのは終わり？」

「ええまあ、僕ってばビビりなんでようやく覚悟が決まったところですよ」

これ以上は逃げてても無駄と判断して、ようやく僕はカンナと向き直る。

「アンタラには反抗しないんで見逃してくれって言っても無駄なんですよ？」

「ええ、よくわかってるじゃない」

はは、別にわかりたくもないんですけどね。

ふーっ。

一つ、長い息を吐いて。

「そんじゃ、悪いけどやることあるんでね。勝たせてもらおう」

「フフ、そうこなくっちゃあねえ！」

そうしてカンナとの戦いが幕を開ける。

のも、また次のお話で。

29話 「覚悟の違いってやつは」

「カラカラ!!」

「とげキャノン」

四天王カンナの攻撃をカラカラは自身のホネこんぼうでなんとか防ぐ。

さすがは四天王と言ったところだろうか、さつきからずっと防戦一方だ。

ガチンコでやりあえばそりゃこんなもんですわ。

に、してもだ。

「カンナさん。本当に僕を仕留める気あるんです?」

「……」

繰り返してくるのは馬鹿の一つ覚えみたいに、「とげキャノン」オンリーで。

まさかそれしかできないなんてことはなく、彼女が何かを企んでいることは明白だ。

「とげキャノン」

「チツ」

が、それを考える暇を与えてはくれない。

突っ立ってるルージュラといい、これ見よがしに企んでるのは確実なだけだなあ。

「まさか僕の方から力押しすることになるとは」

こういう戦い方は心臓に悪いから嫌いなんだけどね。

「カラカラ!」ずつき」

「とげキャノン」

カラカラは基本的に近距離タイプ、懐に潜らないとその威力は発揮されない。

だからこそ、こちらとしてはウインディを出したいところなんだけど。

「……っ!」

「フフ、ルージュラ」ふぶき」!

僕が腰のモンスターボールに手を伸ばす素振りを見せれば、突っ立ってたルージュラが攻撃に加わる。

「まったくよお、そのままかかしてやればいいのにさあ!

しかも今の攻撃で、カラカラのずつきまで相殺された。

幸いにしてとげキャノンも方向を狂わされたのがもうけか。

(にしても、狙いはなんだ? つくそー、違和感だけはビンビンに感じんのかなあ)

とげキャノンしか出してこないパルシェン。突っ立っているルージュラ。視界が悪くなるほどの周りの白い冷気。もつと言えば、この広い原っぱという舞台。

全てがきつと計算されているはず。ここまで泳がされたんだ、この状況は相当厄介だと思っておいた方がいい。

「とはいえちよつと寒すぎ」

そこまで言って、僕はひとつの違和感が具現化する。

そう、寒すぎるんだ。いくら氷タイプの使い手だからってポケモンがいるだけでここまで寒くなるだろうか。

「とげキャノン」

「だーかーらー、考えてる最中に攻撃してくんなや!」

コツリ。

その瞬間、僕はぞつとすると音を聞いた。

コツリ? コツリってなんだ? だって、ここは広い原っぱで壁なんて

ない――。

「なるへそ。そのための」とげキャノン」

ようやく繋がったけれど、これはもうお手上げだ。

その全てが終わった後で気付くなんて、負けたもいいとこ。

「ようやく気付いたようね、でももう遅いわ。」二重の意味でね」

あん? 二重の意味だあ?

おいおい、やめてくれよこちとら既に一回読み負けてイライラしてんだからさ。

「すでに、氷の壁は完成した。けれどそれだけじゃあないのよ」

そう、カンナの言う通り僕の背中は見渡す限り既に氷の壁に覆われている。

とげキャノンを支えにした分厚い氷の壁。冷気の正体はこれだったわけだ。

確かに、氷だけじゃ割って終わりだが、とげキャノンを凍らせてさらにその上から重ねる氷の壁なら時間をかけて壊すしかない。

そしてその時間をカンナは許してはくれないだろう。

まったく。おかげで逃げ場がないわ肌寒いわでロクなもんじゃないぜ。

ただ技を繰り出していたわけじゃあないとは思ってたけど、まさか壁の支えにするとは。

それを気取らせなかったカンナが一枚上手だったか。

が、しかし。

「それだけだ。ただ逃げられない。そんなものでしか、これはない」

「そうよ、それはあくまで保険。前みたくふざけた逃げ方をされても癪だから策を講じただけ」

つまり本命はこつちじゃないと？二重の意味ってことはもう一個なんか仕込んでんだ。

「ふつーに考えりゃあ、動かなかったルージュラが怪しいけれど？」

「フッフ、あなたのそういう冷静なところ、嫌いじゃあないわ」

あーあ、ヤダヤダそういうの。だったら逃がしてくれればいいのに。

そんな気さらさらないなんてことは、今まででもう痛いくらいわかつちまつてるわけで。

「これ」何かわかるかしら？」

「？」

カンナが手にしているのは・・・小さな氷の人形、か？

ずっと持っていたにしては溶けてない。いくらこの低い温度があるとはいえ体温である程度は溶けてしまっただろう。

つーことは、今作ったわけだ。きつと、ルージュラが。

「ご名答。私のルージュラは特殊だね。ルージュラが」れいとうビー

ム」で作ったこの氷の人形は、私の口紅で印を付けたところと同じ箇所が対象に”氷の手錠”として現れるの」

つまり、とカンナは声を大にして言う。

「この氷の人形はあなた自身。レッドもこれにやられたのよ」

あつさりとその真髓を語ったのはそれを作ったが最後、僕に勝ち目はないと思っているからだ。

そしてそれは、僕の方も同じ。その能力を知ってしまった以上、あれを作らせてしまったら終わりだ。勝ち目がない。

「どーでもいいんですけど、四天王やらナツメちゃんやら、なんか特殊能力がないとやってけないんですかね？この世界」

「・・・冷静な男は好きと言ったけれど、モノを考えないバカは嫌いだよ」

「あら？奇遇ですね。僕も嫌いですよ」

ただし、と僕は付け加える。

「僕が嫌いなのは、最後まで愚直に何かを信じてる阿呆ですがね」

「なにを———？」

カラカラの足音は絶えず僕の耳に届いている。

氷の人形はカンナの手元。で、あればなんとかなる。

カンナが僕と同じ音を捉えた時、すでにカラカラは氷の人形を砕ける射程範囲内だった。

あれを完成させてはマズイ、が、完成してしまったものはしょうがない。しょうがないから壊すしかない。

「とった———！！」

「ぐっ！」からにこもれ”パルシエン！”

カラカラの振り下ろすホネこんぼうが早いか、氷の人形を咄嗟に渡され命令を聞いたパルシエンが早いか。

濛々と立ち込める冷気。

目を細めると。

「……ふ、フフ、フフフフ、どうやら、間一髪で。私の勝ちみたいね」

「ちえ」

端的に言えば、パルシエンはからにこもるのは間に合わなかった。ただ、本当に間一髪氷の人形が届く数センチ前で、真剣白羽どりの要領でパルシエンの両頬がカラカラのホネこんぼうを挟みこんで防いだのだ。

何かがズレれば確実に氷の人形は砕けていたが、まあ、これは運がなかったと諦めよう。

カラカラも同様に考えたのだろう。

シウルシウルシウルと、器用に弧を描いてカムバックしてくる。

「それにしてもあなたねえ！私が言ったこと聞いていなかったの!？」

ただし、そうやって落ち着いているのはこちらサイドの二人のみ。

カンナは、ずれたメガネを戻すことも忘れ唾を飛ばしている。

「この氷の人形はあなた自身。これが壊れるということはあなた自身も壊れることを意味するのよ!？それくらいわかるでしょう!？」

「えー？そんなん聞いてないしー、敵の言うことなんて信じられないしー」

「な、なんて無茶苦茶な……」

驚愕に伏しているところ悪いがその対応はまずいと言わざるを得ないぜ。

「まあ無茶ですがね、それでも何個か得た情報はありましたよ」

時々は無茶するもんだ、それ相応の見返りが返ってくるとは限らないが。

「まず一つ、その氷の人形は連発できない」

それができるのなら、一個失ったところで大した意味はなく、カンナがそこまで慌てる必要がない。

「二つ目は、貴方は僕を殺す気がないということだ」

「……なにを甘ったれたことを！」

「そう、甘ったれた。こんなのは甘ったれ以外の何物でもない。なぜ

なら。殺すつもりがあるのなら、カラカラの攻撃を防ごうなんて発想にはならないんだからな」

僕はマジで知らなかったが、その人形は壊れると対象自身も壊れるらしい。

あのカラカラの勢いで行けばまず確実にスプラッタ、グロ死体の一丁上がりだろう。

つまり労せずして僕を排除できたのだ。なのにそれをしなかった。カンナが「そんなグロ死体見たくないやい！」ならまだしも、ここに来て防ぐ理由など何一つないのだ。

いや、よしんば見たくないのだとしても。それはやはり甘えと言わざるを得ない。敵に同情している時点で、ね。

「はっ。何を言うかと思えば、そんなの予想外のこと起きて少し焦っただけよ。たった一回見逃してもらえたからって、調子に乗らないでもらえるかしら？」

「確かに、一回だけなら確信なんてできない。偶然で手抜きで慢心で気まぐれで、そういうこともあるだろう」

明らかに、カンナの顔色は悪くなっていく。場の主導権が僕に握られていく。

「だが一回じゃあないんだなこれが」

「な、なにを・・・」

旗色が悪くなってくるカンナに僕は悠々と右腕を掲げる。

「これ、カンナさんに初めて会ったときに貫かれた右腕、これが何よりの証拠だ」

「はっ。それが何だっっていうの？知っているわよ、その右腕今も感覚はマヒしているんでしょう？」

優位に立とうとするカンナだが、残念。顔が笑えてないよ。

だがまあ言われたとおり、右腕は完治してない。ずっと応急処置のまま右腕の感覚はほとんどないと言っただろう。

ひどい裂傷と火傷に加えて凍傷だ。完璧に処置を施したとしても一か月以上はかかる、と医療に造詣が深くない僕でもわかる。

「当り前よねえ。私の技をもろに食らったんですもの」

「ええ、そうですね。ですがそれこそが証拠なんですよ。僕を殺す気がないというね」

「なに?」

「あの時、僕は卑怯にも不意打ちで“れいとうビーム”を食らいました。右腕にね」

「なに?なにによ?!何が言いたいのだ!」

カンナの顔には見ればわかるほどの脂汗と体の震え。

甲高い金切り声に僕は答えた。

「つまりねえ、貴方ほどの人なら一瞬で殺せたはずなんですよ。ここ、心臓を狙いさえすれば」

トントンと自分の心臓を指し示し、僕は不敵に笑う。

あの時あの状況あの場所で、外す理由が一つもないんだ。

自分の中の本音つてのは厄介だ。それだけで自分を縛れる。

それに気付いていなかった場合は尚更に。

「——っ——」

気付いていなかったのか、気付こうとしていなかったのか。

他の四天王については知らんが、少なくともこのカンナは人を殺そうとはしていない。

「だからほら、ここは痛み分けっつーことで手を引いて下さいよ。貴方たちの邪魔はしな——」

勝った。心の中でそう呟いて僕は締め算段に入る。

カンナの顔は信じられないと言った様子で、俯いている。しばらくはそうしているといい。

なんて、勝ち誇っていた時。

後ろで閃光が瞬いた。

「……あ?」

異常を察して後ろを振り向いたときには、もう、ことは終わっていた。

クチバの港を覆いつくすほどの閃光、その光線は街一つをゆうに消し飛ばした。

「……なにが、起こったんだ?」

突然の状況の変化に脳が追い付かない。クチバの港が消えた？
んで？

眩い光に脳みそも視界も奪われ、成す術がない。
数秒たって、ようやく一つ一つの事象を確認する。

（あの光は、多分〃はかいこうせん〃だ。つてことはポケモンの仕業
？なんで？クチバの港を破壊する意味がわからんぜ！）

幸いにして、クチバの港からは離れていた僕らはなんの被害もない
が。

「イエロー……」

あの子、どうしたんだろう。あの時分かれて、まだ港に残っていた
としたら。

ゾクリと、背筋が凍る。

それは辺りの冷気のせいでも、ましてやカンナのせいでもない。

純粋な恐怖、知っている人間がその存在があやふやになる恐怖。

そう、この恐怖を僕は知っている。

「は、ハハ。そう、やったのね、〃ワタル〃」

「あん？」

整えられていた髪は乱れて、体は力が入っていないのかだらしな
い。

だが、その瞳が。その瞳だけが何かを覚悟したように力のこもった
瞳だった。

「ワタル？そう、そいつがアンタらのラストメンバーってわけ」

カンナの漏らした言葉を逃すような僕じゃない。この状況だつて
敵に注意はしておかなくっちゃね。

四天王の最後の一人。そうか、今のはソイツがやったのか。

ということは、だ。

「そのワタルってのは、人を殺すという覚悟があるのか」

今の光線は確実に敵意があった。ここからじゃあ確認のしようが
ないが、活気あるクチバの港だ。

人が死んでいたっておかしくはない。

「……そうね。ワタルには、あるのかもしれないわ」

その言い方に引つかからないわけではないが、それよりも。

「どうしたんです？ 目の色変わったちゃいましたけど」

「ええ、そうね。私も覚悟が出来たところ。お礼を言うわ。アナタのおかげよ」

チツ。

そんなお礼いらねえっつーの。犬の餌にもなりやしねえ。

どうやら、僕は余計なことをしてしまったらしい。

この人生余計なものばかりだが、今回ばかりは手痛いお釣りがきそ
うだ。

「さいですか、でもまあ。今を見て、僕も覚悟しましたよ」

そう言っつて、僕はおもむろに上着を脱ぐ。

「さて、頑張りますか」

「殺してあげる」

見るほどに怒りを露わにしたカンナは自身のメガネを握りつぶし、
口紅の蓋を歯で抜き取り、僕の右腕に印をつける。

「・・・ほお」

パキパキと凍っていく右腕を見ながら僕は息を漏らす。

確かに、これは厄介だ。トレーナー自身を攻撃できるなんて面倒な
こと極まりない。

「カラカラ！」

もう一度、今度は奪い取るために間合いを詰めようとするが。

「とげキャノン！」

パルシエンの此度は確実に貫こうというその砲弾に、カラカラは応
戦するしかない。

「さあルージュラ」ふぶき！」

さらに攻撃に参加しだしたルージュラのサポートがさらに厄介な
状況へと追い込んでいく。

「どうするの？ このままじゃあジリ貧でしょ!？」

「・・・ええ、そうですね。二対一じゃあ流石に厳しい」

だからこそ。

「僕は言ったんだ。覚悟をすると」

カラカラ!

僕はその名を呼ぶ。

誰よりも頼れるその名を。

「この一撃に込めさせてもらいますよ!」

さて、覚悟は決めた。あとはもう成るようになれだ。

「すてみタツクル!!」

「なにを……はっ!しまった!こいつ!パルシエン!!」

……。

濛々と立ち込める煙の中、シルエットとなった影だけが重なって行く末を見守る。

ぐらり。

小さな影が倒れた。

そして、煙が晴れる。

「ば、バカな……」

カンナの言葉と共に、戦場が露わになる。

「パルシエン……」

驚きの声と共に、音を立てて崩れていくのはパルシエンの殻。

どうやらカラカラの石頭はパルシエンのシエルターに打ち勝ったらしい。

が、しかし。

「……氷の人形も、砕けている」

そう、その衝撃で守っていた人形も粉々に砕けてしまっていた。

「なんなの!結局、ただ無駄死ににただけじゃない!!」

こうなってしまうては生きている確率は方に一つもない。

使い手だからこそ、そのことをカンナは誰よりも実感していた。

「いえいえ、そうでもないですよ。ねえウインディ」

「ガウ!」

だがしかーし、その現実をひっくり返すのがこの僕なのさ。

「な！生きている!?け、けれど人形は確実に砕けて!!」

そう言つて、カンナは目の前に視線を動かす。

そう、僕がいたカンナの目の前に。

「……なんで立っているの？いえ、おかしいわ、そんなの」

そこまで言つて、カンナは何か気付いたように僕の目の前に駆け寄った。

「ぐっ!!」

その瞬間に割れる。 “ 氷の壁が ” そして、カンナの見ていた現実が。

「氷の壁、それが、反射して鏡となっていたのね……!」

「その通り!!そのおかげで、僕はほらこの通り無傷でアナタの後ろに立ってます」

氷の壁、それはつまり鏡みたいなものだ。

だから僕はカンナが氷の人形を作った時からこの作戦を考えていた。

「いつ?いつ入れ替わったの?」

「さあ、いつでしょう?」

そう言つて、僕は上空を指さす。

「ゴルバット?……そう、なるほどね」

流星は四天王、たった一つのヒントで全てを察しやがった。もうちよつと勝者の余韻に浸ってたかったのに。

「おかしいと思った。この冷気は濃すぎる。ゴルバットの “ しろいきり ” を気づかれないように混ぜていたのね。視界をあやふやにするために」

「ええ、そして同時に “ ミラーコート ” での反射を利用してちよつとずつ角度を変えながらアナタの後ろに回り込んでたつて寸法です」

ちよつとずつちよつとずつ慎重に、カンナの眼前にあたかも本当にいるかの如く。

それは緻密な計算と精神力のなせる業だった。

とはいえ、視界が明瞭ならばその違和感に気付かれて終わりだろ

う。

だからこそ”しろいきり”でその僅かな違和感を隠した。

「メガネを割ったのは愚策でしたね、あれでさらに僕はやりやすくなった」

「ぐっ」

感情に身を任せるとろくなことにならないって、僕知ってるんだ。

「そんで氷の人形の説明を聞いて、僕は思ったんです。それはきつと認識の問題があるんだと」

僕は言葉が続ける。言わなかった三つ目の情報を。

「だって、そんなものがあるのならアナタは最強だ。影からそれを駆使して氷漬けにしてしまえばいい」

「だけど彼女はそうしなかった。そこにはいつだって理由があり、そこにはいつだって理論がある。」

「つまるところ、それは対象とカンナさん自身が認識していないといけないんでしょう？その口紅でつける印もその一つ」

こんな強力なモン、なんの制約もなしに使えるわけないのだ。

「カンナさんがそれを認識し、対象がそれを現実だと認識したとき、その技は完成する」

「・・・ええ、その通りよ」

「だからこそ、鏡に映った虚像を実像だと勘違いしたカンナはその技が発動されなかった。」

僕自身を彼女は認識していなかったのだ。

「鏡である氷の壁が割れたのは、それを本体だと勘違いしていたからで、僕が服を脱いだのは」

「鏡による反射で反転しないため。つまり、ちゃんと真後ろに立ったのは服を脱いだあの時」

「ちよつとー、セリフ取らないですよー。あ、会長の気持ちは今わかってしまった。」

「あ、ちなみにカラカラは本物ですよ」

「だからカンナの勝機はちゃんとあったのだ。先にカラカラを封じるといふ慎重さを見せていれば僕の作戦は台無しになる。実行犯が

いなくなっちゃうんだから。

「そう、私の完敗ってわけ。久しぶりね、この気持ち。幼いころ、味わった時以来」

ガツクリと、膝をついてうなだれる彼女に掛ける言葉はない。

「ルージュラ——！」「おそい！」

最後の頼みの綱、そのタイムリングを伺っていた彼女だったが、それもウインディの炎の前に無力と化す。

「……最後まで諦めない姿勢ってのは評価されると思いますよ」

慰めにすらならない言葉。ああ、僕はこういう時にどう言葉をかければいいのかわからないのか。

ちゃんと戦って、ちゃんと勝った経験が少ないというそれは証拠なのだろう。

案外と戸惑っている自分に驚きながら、それでも僕はちゃんとケリはつける。

「とはいえ、僕に人を殺す覚悟はないんで“みねうち”にさせて頂きますよ」

さきほどの戦いからムクリと起き上がっていたカラカラが、間髪入れずに意識を刈り取る。

「——覚悟の差、ってこと……か」

完全に意識がなくなったカンナは力なく倒れる。

「……いいえ、別に僕は死ぬ覚悟をしていたわけではない」

そして、僕のお腹からは無数に切り刻まれたような傷跡が浮かぶ。

「——っ。完全に、意識をそらせたわけじゃあ、ない。僕の覚悟は、ここまで命を削る覚悟だ」

あーあ、また傷が増えちゃった。これじゃあヤツを探すのなんていつになるやら。

自身の傷跡と、滲む赤を見ながら物語は次のお話へと向かう。

30話 「お腹痛いで早退しまーす」

「う・・・ぐ・・・ぐうっ！」

うまく立ち上がることもすらできない。下腹部からの出血は想定以上で、頭がくらくらとさえしてきた。

カンナとの戦いで、命を削る覚悟はしていたが、まさかここまでとは。

生死の境ってやつを、きつと僕は今まさにさまよっている最中だろう。

「キャンキャン!!」

「・・・そんな、心配そうな声ださんでも」

ウインディの目線が物語っているように、きつと傍目から見ても僕の自己分析は間違っていないのだろう。

氷の人形を砕いたのは失敗だったかな？死んでちや世話ないぜ。

だが、ここまですらないと勝てない相手だったのは確かだ。

チラ、とカンナを見る。

起き上がる気配はない、すっぱりと頭を揺らしてやったんだ。しばらくは起きられないだろう。

だから時間を気にする必要はないんだけど。

「ダメだ。血が出すぎてる」

動くこともままならず、応急処置した腹も大した効果が見えない。

これじゃあ街まで戻って治療って手も使えない。ていうか治療してもらえんのか？さっきのはかいこうせんで木端微塵なんてシヤレにならんぜ。

ん？おつとお？これは手詰まりってやつじゃあないですか？

しばらく考えても打開策が見当たらない。流石の僕もここからの一発逆転ってのは無理。

なんて、思っていた時。

「随分と無茶したなあ！ええ!?!おい！カラーよお！」

「クツクツク、貴様がそこまでリスクを背負うとは。この二年で変わったか？」

「それとも、ただ隠していただけかしら？」

「な……！アンタらは……！」

どこからか聞こえてくる三人の声。

その声はいつぞやはやかましい程に聞こえていた声。

この二年ですっかり聞かなくなった声だった。

「マチス、キヨウ、ナツメちゃん……」

「二様をつける!!!」

「えー？そこ？」

まったく、感動の再開だったのに、二言目には怒声って。もう、変わらないなあ。

「はは、生きてたんすね」

「フン、てめえが余計なお世話をしやがったからなあ！」

「はて？なんのことやら」

「とぼけたって無駄よ。私の超能力の力を甘く見ないで欲しいわ」

なあるほど、ロケット団のビルが崩れ去りその瓦礫の下敷きになった三人を助けたこと。それも超能力でお見通しだったってわけかい。

「テメエがいなくてもなあ！あれくらい自力でなんとかなったんだよ！」

「うわあ……可愛くねえ」

素直さも時には大切ってロケット団で習わなかったですか？

マチス様ってば、本当に助け甲斐ないなあ。

「そりゃ、悪うござんした。余計なこと、しちやって」

つか、何しに来たの？この人たち。自分、取り込中なんすけど？

「フフ、けれどお前がここまでボロボロになっているのを見るのは愉快だな」

だから本当になにしに来たの!?冷やかしたら帰ってもらいたいもんですねえ!!

ナツメちゃんの嗜虐的な笑みはもつと余裕のある時に楽しみたいもんだぜ。

「あ、ヤベ。ツッコんでたら傷口が・・・」

くそ、こいつらマジで僕を冷やかに来ただけか?百害あって一利なしなんですけど。

「フツ、まあそう邪険にするな。こいつらもこれで感謝をしている」

はいいい?感謝あ?

おいおい、この人たちと感謝なんてお花畑と拳銃くらい離れた言葉だぜ?

「ていうか、キョウさんはなにを僕のお腹に塗り込んでいるの?」

「忘れたか?俺のエキスパートは毒。相手の体内を蝕み、変幻自在に操る」

「ええ、覚えてますけど」

「つまりは、その逆。体調不良を治すことも造作もない」

得意げに笑うキョウさん、ああ、見たことあるぜこの顔。外道な作戦が上手く嵌った時の顔だ。

つまるところ、この顔のキョウさんが言ってることは自信あるって信じていい。

「そして、私のユンゲラーの“サイコキネシス”で破れた血管の代わりに血を巡らせている。幸いにして臓器に傷はついていないようだし、しばらくすれば治るわ」

「ほほお」

確かに、ナツメちゃんの言う通り先程までの出血が?のように血が巡る感覚はある。

最後に、包帯でお腹をグルグル巻きにすれば、はい完成!

「ただし、まだ動くのはダメだ。我々のコレも応急処置の範囲だからな。あとはよく寝てよく食うことだ」

そんな小学生の骨折みたいなの!?んなことであの傷が治っちゃうんだ。

「で？マチス様は？」

「ああ？」

「他の二人は僕のために尽くしてくれしたけど、マチス様だけなんもしてないんですけどー」

「ん」

そう言つて指さすのは僕のお腹。

「その包帯を用意したのは俺だ」

「誰でもできるう！そこらのコンビニで売ってるよ多分！」

温度差すごいな、マチス様だけなんの感謝も感じられない。今だつて心底不服そうな表情を隠そうともしねえ。

とはいえ。

「へえー、マジで感謝してんだ。意外だなあ、三人ともあんな傲慢で自己中心的で自分の出世以外に興味なしの腐れ外道だったのに。随分とまあ人間らしくなりましたねえ」

「ニコロス」

「まあ待て」

マチスさん、ナツメちゃん。お二人ともマジで獲物を刈る目をしてますよ？

「やだなあ、ちよつとしたジョークじゃないっすか。怪我人ジョークっすよ」

「そうか、いいんだなそれが遺言で」

「今ここで黒焦げにしてやってもいいんだぜえ!？」

「だから待てと言っているだろうに。お前も、俺が止めるからといって煽るな」

ペろつと舌を出して、ごめんないと態度で表す。

しかしまあ大変だねえ、僕の元上司も。この二人をまとめるのは至難の業だろうに。

そして、その至難の業を駆使してまで一体全体僕に何の用なんでしょうか。

「へッ、わかってんじやねえか」

「ええまあ、短い付き合いではありませんたけど貴方たちが何の見返りもなく人助けをするような人達じゃないということは僕は胸を張って言えますよ」

「図つたかのようにタイミングよくここに現れたことも、妙に手際の良い治療も、そも、治療するという行為自体が。

不自然極まりない。

「お前には、頼みごとをしにきたのだ」

「頼みごとねえ」

「なんだろうなあ、サカキ様と一緒に探そうとかだつたらジョーク通りこして笑えないけど。」

でも、ナツメちゃんの顔を見るに真剣なのは伝わってくる。

それもそうか、僕なんかに頼るほど切羽詰まった状況なんだ。

否が応にも真剣にもなるか。

「四天王が、このカントーで不穏な動きを見せているのは知っているな」

「おっと、どうやら僕が目論見は外れたらしい。サカキ様関連じゃあなかったか。」

「俺たちが復活するはずのこの場所で、好き勝手されるのは癪に障るんだよ」

「マチスさんも、そしてキョウさんもナツメちゃんもどうやら気持ちとは同じらしい。」

郷土愛、とは多分違うのだろうが。

「今までの復活の準備、それをコケにされるのは一番腹が立つわ」
「だから、我々はまず敵である四天王の排除を決意した！」

なるほど、キョウさんの言葉を聞いて納得する。

つまりは敵は同じ、そう言いたいんだ。

「我々が仕入れた情報によれば、カントーはもう間もなく四天王により襲撃される」

「どこが襲撃されるのかは、まだわからねえ」

「そう言いながら、マチスさんの視線は自然とクチバに向かう。」

ジムリーダーとして君臨していた町、それはもう自分の町と言っても過言ではない。

いくらその仕事を成していなかったとはいえ、一抹ほどのそういう感覚というのは持ち合わせていたらしい。

(ま、この人。部下には慕われてたしなあ)

面倒見はいいのだ。僕に対して以外。

「そいで？具体的に僕は何をすればよろしいんで？」

「・・・意外ね、てつきり駄々をこねるとばかり思っていたが？」

「駄々つて・・・子供じゃないんだからしませんよそんなん」

別に特別な意味などない。

ただ、三人が借りを返しに来たように。

僕もまた、借りを返すだけだ。

「だからまあ、治療代分くらいは働きますよ」

「それは懸命な判断だな。断っていたら俺の電撃の餌食になるところだったんだぜ」

極悪非道なその表情に、僕は笑顔がひきつるのを感じる。なんでもそういうこと言うのか、いらん真実なんざ葬っておけよ闇にさ。そういうの得意でしように。

「お前には俺たちの町を守ってもらいたい。俺たちが四天王のアジトに攻め入っている間にな」

「へえ、アジトの場所知ってるんですね」

「どうやらキョウさんの言い分だとそこに乗り込む算段は整えてあるらしい。」

「だけど、攻め入っても守りがいない。四天王を倒したところで街が焦土と化せば意味はないし、そこで僕の出番ってわけですか」

「ええ、相変わらず気味が悪いほど察しがいいわね」

「褒め方下っ手！もつと上手にほめてもらわないとやる気でないんですけどー。」

「まったく、元上司共じゃなかったら治療代なんて踏み倒してるところだぜ。」

いや、実際に踏み倒していたかもね。

アレを見なければ。

「クチバが一瞬にして消された。アレを見ていなければ断っていたところですよ」

現実として目の前に脅威として現れてしまった以上は、まあ、ねえ。一応思い入れもなくはないし。

「つまり？」

キョウさんの最終確認に僕は首を縦に頷く。

「いいでしょう。それで今回助けてもらったことはチャラってことで」

「交渉成立、ね」

「ええ、で？守るのは貴方たちの町だけでいいんですよ？」

流石に僕といえど、三つの町を同時に守るのは苦しい。

これ以上は手が回らないどころか体が足りない。

「ああ、それ以外なんざ知ったことか」

うーん、そういうセリフがなければいい領主って感じなのに。惜しいなあマチスさんは。

「敵が襲来してくる時期は？」

「そこまではわからん。が、そう遠くないと俺は睨んでいる」

ふむ、こういう時のキョウさんは頼りになるなあ。

今回も敵じゃなくて助かるぜ。

「ナツメちゃんの超能力でなんかかわかないの？」

「近いうちに敵が来る、としか」

かー、それに引き換えナツメちゃんは役に立たねえなあ。

「つて痛い痛い痛い!!」

「お前が何を考えているかなど、超能力を使わずともわかるわよ？それと、ナツメちゃんはヤメロー！」

思いつきりエスパ―技で頭を締め付けられる。

ていうかちよっと！ユンゲラーは僕のお腹の血管巡らせるのに集中させよ！

「ふん、そんなもの。もうとっくに手を離れている。しばらくは留まったねんりきで動くはずだ」

なんだ、そうなのか。じゃ、マジであんまり動かしちゃダメじゃん。で、請け負ったのはいいが現状じゃ情報が少なすぎる。

四天王の襲来だったって、確實ってわけでもない。

敵の戦力も動向も策もわからないんじゃない？あ、作戦だって大雑把になっちゃうし。

ていうかなにより人手が足りねえ。三人の立場上、これ以上は見込めないし。

「って、あんまりにも突拍子だったもんで記憶から抜け落ちてたけど、カナナさんに聞けばいいんじゃない？」

幸いにしてここには悪の幹部が三人もいる、拷問でもなんでもわからないだろ。

「って、思ってたんだけど。」

「跡形もなく消えてやがる・・・」

「あん？何言ってるやがる。俺らがきたときからとつくにいいえよ」

・・・そうだったのか、気付かなかったけれど。

大方キクコかな、そういうことをするのは。

「ま、やるだけやってみますわ」

重要な情報源を失くしたのは痛いけど、ポリポリと頭を掻きながら僕はそう言った。

「頼むぞ」

最後にキョウウさんはそう言い残して、三人は一瞬の内に目の前から消えた。

・・・そんなんじゃないやあもう驚きませんけども。

「さて、時間はないとはいえ。情報はある程度欲しいな」

とてもじゃないが、各町に四天王一人分の戦力でもつぎ込まれたら敵いっこないし。

「って、あれ？どうしたんすか？マチスさん」

これからの指針を考えていたら、どこからともなくマチスさんが戻ってきた。

「つとと、スーパーボール？」

「ソイツを teme に預ける。有効に使える」

無造作に投げ渡されたのは一匹のポケモン。

どうやら、戦力の足しにしろということらしい。

彼なりの施しだろうか。

「いいか、貸すだけだからな。ぜってえ返しに来いよ」

「……ははっ。そりやもう、後が怖いですから」

まったく、わかりづいらいねえ。気持ちってのは伝わんなきや意味ないってのに。

「それと、クチバをもう絶対に傷つけさせるな」

「それに関しては当然。請け負った仕事は完璧にこなしてみせますよ」

マチスさんの怒りも、受け取ったポケモンの怒りも。

全部乗せて有効利用させてもらいますぜ。

「ついでといっちゃあなんですけど、一個、お願い聞いてもらえますっ？」

「……言ってみろ」

やりに、こういうのは言ってみるもんだぜ。

「……。っていう、簡単なお願いなんですけど」

「ああ、わかった。終わった暁には手配してやる」

「へへ、あざっす」

こうして、四天王との対決の時は刻一刻と近づいてくる。
が、それはまた次のお話で。

31話 「踊る阿呆に歌う阿呆」

さて、カンナとの壮絶な死闘を繰り広げた後。

元ロケット団の皆さんとの交渉も成立し、傷も最低限動けるくらいには回復してきた。

とはいえ、この時点で既に数日を費やしておりあんまりちんたらやっているわけにはいかないのもまた事実。

そんな中で僕はマサラへと戻ってきた。

四天王たちの襲来がいつ来るかは分からない、だからこそその前にさっさとやるべきことは終わらせておくべきだ。

そう、カントーでやるべきことは一つ残らず、ね。

「へーい！オーキド博士！アナタの便利な一番弟子、カラーが今戻りましたよーっと！」

テンション高い？それはほら、愛嬌ってことで。

「つて、あり？」

勢いよく扉を開けて、いつもの埃っぽいお客様になんの気も使っていない研究室のほが。

そこかしこに散らばっていた資料は、きつと分類別に分けられていて。

埃っぽさが常に付きまとっていた部屋は、見違えるように清潔に保たれている。

そして何より、いつものおじいさんが。

「えつと・・・？どちら様でしょうか？」

「綺麗なお姉さんになってる！」

おいおいおい、これは一体全体どういうことなんでしょうか？

これは夢？幻？僕の願望が生み出した悲しい幻想？

「なんてことだ！こんな嬉しい幻想があっただなんて！」

悲しくたつていい！何より目の前の美人になってしまったオーキド博士のことを考えると胸が痛まなくもなくなることもないが、でも美女になれんなら元のおじいさんのことなんて忘れてもOKだよ
ね！

「いいわけあるか！このたわけ！」

「あいたつ」

あら、オーキド博士いたんですか？てつきり僕は何かの事件に巻き込まれて美女に変えられてしまったのかと思っただけですけど。

ふざけているとオーキド博士が後ろからげんこつ付きで現れたので僕は妄想をパタリと閉じる。

「まったく、お主は久々に現れたと思えば・・・また変わらないのお」「いえいえ、オーキド博士は少し白髪が増えましたね」

「ワシが気にしていると知ってのそのセリフじゃな？」

「え、えつと・・・」

おつと、久しぶりすぎてオーキド博士との会話が弾んでしまった。僕としたことが美人を蔑ろにしてしまったよ。

「ああ、すまん。ナナミ君。こちらカラー、信用ならんから近づかん方がいい」

「ちよつとちよつと、その紹介の仕方はあんまりにもあんまりじゃないんです？ほら、一杯僕のいい所を並べ立ててくださいよー」

「一つも思い浮かばん」

「おつとおーじゃあしようがない！」

なにせ僕だって思いつかないし、これは仕方ないネ！

そんなやりとりに苦笑しながらナナミと呼ばれた女性は口を開く。

「フフ、なるほど。聞いてた通りの人なのね。私はナナミ。オーキド博士の助手をしています。よろしくね」

「はい！そりやもう今後とも末永く宜しくお願い致します！」

ぶんぶん握った両手を振り回して僕は笑顔でそう返した。聞いた通りってのが一体どんなことを聞いていたのかはこの際問わないことにしよう。

「で？今度は一体どんな厄介事を持ってきたんじや？お前さんは」

「やだなあ、僕がいつも厄介事を押し付けているような言い方じや、誤解されちゃうでしょう？」

「誤解じゃなく、事実じやろう？」

心底嫌そうに椅子に腰かける博士。なんだよ、ちよつとはこき使わ

れたっていいじゃんかよー。

とはいえ、これ以上はマジに頼みを聞いてくれなさそうなので、断られる前にさっさと本題に入ることにした。

「ちよいと頼みごとに進展がありましたね」

「む」

オーキド博士にしていた頼みごと、例の黒いポケモンを探してほしいというその話だとオーキド博士は一言で察して真剣な表情へと変わる。

まあ、この二年の情報の精度の低さを考えるとこの人のことはあまり頼りにはならんが、それでも藁よりは丈夫だろうよ。

「これ、こいつのことを探してほしい。もちろん僕も探しますから、片手間程度いいので」

あまり強く押して断られても面倒だし、オーキド博士にはこれくらいでいい。

「・・・これは。なるほど、お主がイエローにこだわっていたのはこれが理由か」

「別にこだわっていたつもりはありませんが、そう見えていたんですか?」

「しかし、イエローは人の心も読めたのか?」

「いいえ、読んだのは僕ではなくカラカラの心ですよ」

「・・・ああ、なるほど」

口数は少なく、イエローが書いた画用紙越しのソイツと随分と睨めっこしながらオーキド博士はなにやら機械にスキャンし始めた。

「少々待っておれ、今、学会に提出する用にコピーする」

「学会、って。それ、結構大事じゃないですか」

「大事じゃよ、なにせ。こんなポケモン、わしは見たことも聞いたこともない」

そうか、ポケモン研究の権威と呼ばれるこのお爺さんですら知らないとなると本当にこのマサラには、カントーにはいないのかな。

まあいいさ、いよいよもってこのことの未練がまた一つなくなっただけだ。

「ん？ああ、ナナミさんにはなんのことかわかりませんよねえ。すい
ません秘密の話しちゃって」

「いいえ、それはいいのだけれど。ちよつと見ても？」

「ええ、どうぞどうぞ」

会話に入れなかったのを拗ねていたのかと思つて声を掛けたけれ
ど、柔和な笑顔で返されてしまった。どうやら見当違いだったらし
い。

まったく美人つてのは人間が出来てるなあ。

「・・・このポケモンを探しているの？」

「ええ、諸事情がありましたね。どうしてもソイツを見つけ出さなけ
ればならないんです」

コピーが終わり、博士が何やらパソコンを弄っている間、僕は椅子
に腰掛けナナミさんが入れてくれたお茶をお供に会話に興じる。

「へえ、所々曖昧だけど確かに見たことはないわね」

ねえ、ラキっち。

と、傍にいたラッキーに彼女は声をかける。

どうやら一人と一匹でこの研究所を手伝っているらしい。

「にしても、驚きです。こんな美人なお姉さんが一体なんの縁でこん
な寂れた研究所で働いているんですか？よつぽどお金を出している
のでしょうけど」

「変な言い方をするな！まったく、ナナミはわしの孫じゃ。縁という
のならそういう縁で手伝ってもらっておる」

「・・・」

ポカーンと、僕はポップポが豆鉄砲を食ったような顔になってしまっ
た。

え？マジ？孫？この包容力抜群の美人なお姉さんが？

「ええ、本当よ」

にっこりと、聖母のごとき笑みでナナミさんが言うもんだから僕を
からかう冗談つてわけでもなさそうだ。

「げえ、なんじゃそりゃ。ちつとも似てねえじゃんかー。つてことは
なに？あの目付きのおつそろしいグリーン姉ちゃん？」

「はい、その目付きが怖いのは弟です」

「つかー、家族つてのは不思議だねえ。顔は似てないのに不思議と説得力がある。雰囲気つてののか、スピリチュアルに言えばオーラ？」

「へえー、そう。このお爺さんから一個飛ばしとはいえこんな美人が生まれるとは、遺伝子つてのはまだまだ神秘に満ちているってことかあ」

「カラー、お前さんよっぽど失礼なことを言っている自覚は・・・あるのだろうなあ」

「よっぽど困った顔をしている博士だが、どうやら用事は終わったらしい。」

「が、しかし。」

「パソコンの電源を切った瞬間、突然とまた電源が入った。」

「オーキド博士？今、大丈夫かしら？」

「おお、カスミ。どうした、大丈夫じゃよ」

「画面越しに現れたのはおてんば娘カスミ。」

「つて、なんでアンタがここにいんのよ！カラー！」

「やあハロハロ、久しぶり、でもないか。カスミちゃん」

「僕を見つけるなり怒号をよしてほしいなあ、今回ばかりはマジなんにもしてないのに。」

「アンタねえ！イエローはどうしたのよ？」

「それならもう会ったさ、うん。君らの推測通り真っ直ぐでいい子だったね」

「・・・ふーん。アンタからそんな言葉が出るなんてね」

「よっぽど信用ないのかな、めちやくちや疑わしい目で見られてる。」

「けれど、疑わしきは罰せずだよカスミちゃん。」

「なら、一度エリカにちゃんと連絡しなさい。ああ見えてすつごく心配してたんだから！」

「なんで君がそんなことを強いるのさ」

「いいから！絶対だからね」

「へいへい」

「カスミちゃんは案外甲斐甲斐しいんだね。つばいっっちゃぽいけど。」

なんだか大家族の長女って感じするんだよねえ。
となると僕は弟？

・・・笑えねえ。

「で？なんか用があつて掛けてきたんだろう？」

「つとと、そうだった。アンタのせいで忘れるところだった」

わお！ナチュラルに僕の所為にしてきた！

「博士！レッドが見つかったわ！」

「なんと！それは本当か！」

そのカスミちゃんの一語で場が一気に盛り上がる。どうやらナナミさんもレッドのことは心配していたらしい。

・・・羨ましいとは思わない。そういうのはしがらみにもなると僕は知っているから。

「正確にはその痕跡だけだね」

そう言つて、カスミちゃんは一つの画像データを添付してくる。

「これは・・・」

博士が驚くのも無理はない。

確かにそこにレッドはいた。

レッドの抜け殻とでも称せばいいのか、氷の人形、レッドを模写したかのような氷の人形がそこには映っていた。

「レッドの抜け殻よ。オツキミ山に調査に行つてたタケシがこれを見つけたの」

その後もデータは何枚かの角度を変えた写真が添付されてくる。

この氷の人形は、まず間違いなくカンナのものだろう。一応喰らつた本人だからね、それくらいはわかる。

右腕をさすりながら場を見守る僕。

「・・・」

けれど、それをここで言うのかどうかは別問題つてやつだ。

僕はレッドの生死なんかどうでもいいし、カスミちゃんたちに協力しているわけでもない。イエローを探し終わった今はね。

「これ、この後ろの方がほっかりと空いているの。これってここから出たつてことだよね？」

カスミちゃんはどうかやら意見を聞きに来たらしい。
が、これは聞くまでもなくそうだろうな。

「うーん、ねえ、カラー君。どう思う?」

「そうですねえ、この氷の人形がレッドだというのは間違いないでしょうし、これを自力で脱出するのは不可能でしょう。後ろからつてことは誰かが助け出したって線が一般的なんじゃないですかね?」

え? 黙ってるのはどうしたって? そりゃこんな美人にお願いされちやあ隠せるもんも隠せないって。

「そうね、私たちの意見も概ね同じ。でも問題は一体誰がそれを助けたかってことなんだけど――」

・・・あんまりにもすんなりと意見の一つとして受け取られて僕はちよつと不満げにお茶をすすす。

なーんか口ではああ言いつつも仲間の一人として見られてそうで怖いんだよねえ。

「・・・ま、なんて思われててもいいんだけどさ」

「ん? なにか言ったかしら?」

「あら。聞こえてました? ナナミさん、横顔も綺麗だなんて、心の声」

「もう、こんな時に何を言ってるの?」

「てへ」

怒られちゃった。けどその顔も素敵だねえ。

「あの、いいかしら?」

「あ、勿論カスミちゃんも綺麗だよ。怒った顔以外」

「よし、アンタは次会った時クロス」

なんでさー、ほめたのに。

複雑な乙女心ってやつー?

「ウオツホン、して、本題に戻るがそんな人間に心当たりのあるものはおるか?」

レッドの冷凍状態を(それもカンナのそれを)解いて脱出させるだけの実力を持ちながらレッドがあそこにいると知り助けようとする人物?

「ごめんなさい。思い浮かばないわ」

「ナナミさんに同じくー」

「すまんのお、力になれそうにはない」

「こんなん答えるなんて無理ゲーだよ。複雑すぎ。」

「まあ今は少なくともレッドはその瀕死の状態からは抜け出せたって認識さえ持つてりやいいんじゃないやありません？今頃はどつかでおっ死んでるかもですけど」

「うん、まあそうよね。私たちもそんな人に心当たりなんて――」

「おう！ついにスルーされ始めた！こうなるとマジで喋らないぞ僕！

なんて軽口を叩いていたのもこれが最後。

カスミちゃんが訝しげな表情になって、カスミちゃんの従者が何やら慌ただしく入ってくる。

「ん？どうしたんじや」

僕らには一言も告げずに、カスミちゃんはどこかに出ていった。

僕らはあまりにも唐突だったので互いに顔を見合わせる。

「――ごめん！今私たちの町が襲われてる！すぐに他の皆にも知らせなきゃ！！切るね！！」

そう言つて、パソコンの画面はオーキド博士たちの驚いた表情を映した。

最後に、カスミちゃんの青ざめた顔を残して。

「な、なんじやと・・・？」

オーキド博士は直ぐに研究所を飛び出して直ぐ近くの見晴らしのよい丘に行く。

もちろんナナミさんも。

「ほ、本当じゃ・・・ハナダだけじゃない。ニビ、タمامシも襲われておるー！」

「ぞ、そんな・・・」

ニビ、ハナダ、タمامシ。三つの町、ジムリーダーがいる町。

「つて、おい！どこに行くのじゃカラーー！」

「博士、一つ、伝言を頼まれてください」

「はあ!？」

「どれだけ他の町に被害が出て、どれだけ他の町が気になろうとも絶対に自分の町以外のことを考えるなど」

「なにを・・・?」

「君たちは、てめえの町だけ守ってろってね。じゃないと四天王の集団からは守れない」

よいしょつと、僕はウインディにまたがる。

見たところ、まだ襲われているのは三つの町だけ。

予想よりも早かったけれど、まだ間に合う。

「お前さん、何を知っておる? どうするつもりじゃ?」

「いえ、なに。お仕事引き受けちゃったんでね、引き受けたからには仕事しなきゃでしょ」

「待たんか!!」

博士の制止も聞かずに、僕とウインディは高速で移動する。

「まったくアイツはなんて無茶を——!!」

「おじいさん、カラー君はなにを?」

「さあな!だが、とんでもないアホウなことをしようとしするのは確かじゃ!」

後ろ目にちらりと博士が急いで研究所に入っていくところが見えたけれど。

気にしてる暇はもうないね。

さて、生きて帰れるかな?

それもこれも、次のお話で。

32話 「サービス残業にご用心」

走るウインディの上から、一瞬で過ぎ去っていく景色を横に僕は自身のポケモンたちに今回の作戦を告げる。

「さて、諸君。わかっているとは思うけど、今回は相当分が悪い戦争だ」
向こうの戦力は底知れず、計り知れない。

ただでさえ四天王という精鋭たちが相手なのだ、流石に本人たちが出張ってくることはないと考えていいとはいえ、その手下たちだって相当の手練れのはずだ。

「加えて僕らの勝利条件は無いに等しい。町を守るってっただって、どうすればそれが成功するのかなんてわかんないしね」

簡単に言えば敵の殲滅だけど敵の総数が分からない中でそれを目標にするのはあまりにも無謀すぎる。

だから頼みの綱はナツメちゃんたちの本隊なわけだが。
「ま、そっちの勝率とかは考えないようにしよう」

とはいえ、僕だつてここで死ぬわけにはいかない。打てる手なんて少ないけれど、一個だけ効果を発揮しそうなもんがある。

おっと、言ってるそばから電話だ。

「あ、ハロハロ。カツラさん?」

「ああ、カラーか」

電話のお相手はツルリンと眩しいイメージのカツラさん。

「そっちは無事に到着しましたかね? スオウ島」

「ああ、おかげさまでね。そういえば、イエローとも合流したよ」

スオウ島、ナツメちゃんたちが言っていた四天王の本拠地。その情報を僕はカツラさんだけには渡していた。

「お、生きてたんだ。やるねえ」

あのクチバの一件でどうなったのかは聞いていなかったからね。にしても生きてたか、悪運が強いのか、はたまた実力か。

「てことは、もうそろそろ出会う頃かな」

「・・・ロケット団の幹部たちのことかね?」

「あちや、もう会ってました? なんだよ、驚くカツラさんの声聞きた

かったなあ」

「まったく、これを仕組んだのは君か？」

「いえいえ、まったくの偶然でござえますよ」

ロケット団の幹部たちとカツラさんは色々と思うところあるだろうからなあ、これを機に仲良くなつてほしいもんだ！

「はあ、電話越しからでも君の笑顔が想像できるよ」

「やだなあ、人のことをクズみたいに言わないで下さいよお」

でもまあ無事に合流できたのならこれ僥倖つてやつだ。流石にナツメちゃんたち三人じゃあ心許ないからね。僕の中で頼れる人なんて一人しかいなかったのは申し訳ないが。

これが僕からの餞別つてやつで。

「ま、なんにせよ。頑張つて下さいね。アンタらが頑張つてくんないと。こつちが死んじやうんで」

「・・・一人でなんて無茶にもほどがある」

あら、もうそこまで聞いてたんだ。

「はは、僕もそう思いますよ。でもほら、カツラさんたちのほうが大変でしょう？」

なにも命を捨てて無茶をしようなんて思ってるわけじゃない。

なにも命をかけてまで町を守りたいと思ってるわけでもない。

僕はただ、どうせ巻き込まれるなら少しでも楽な方を取っただけ。

だってほら、敵の総大将を討ち取るなんて一番労力を使うじゃん？

「それに、僕はこつちのほうに向いてるんでね。案外楽しいんですよ？こつちのほう」

「・・・健闘を祈ろう」

「お互いね」

その言葉を最後に電話は途切れた。

視線を感じて、モンスターボールの中のカラカラを見る。

「なんだい意外そうな顔をして」

楽しいって言ったあれかな？そんなに珍しいかな？

「別に嘘じゃないぜ、頭を使って策を巡らせ敵を討つ。僕は高みの見物つてほら、僕の理想じゃん」

「………フン」

鼻を鳴らしてそっぽを向かれた。なんだいなんだい、人がせつかく鼓舞してやってんのに。

「さて、本題に戻ろうか。いくら何でもこの戦力で街を三つ守るのは不可能だ」

僕らのミッションは、いかに被害を抑えながら敵の本丸が落とされるまで持ちこたえるかってことで。

ここで重要なのは、敵の殲滅が目的ではないということ。あくまで時間稼ぎが重要であり、敵さんどうこうは無視していい。

大将さえ討ち取れば他の雑魚は所詮有象無象へと成り果てる。であれば、そんなものに執着してもしょうがない。

逆に言えば敗北条件は町の破壊。この場合は死人が出るかどうかでことだろうね。

例え向こうがワタルを討ち取ったとしても、こっちの被害が甚大ならそれは勝ちじゃない。

「まったく、正義の味方つてのは難儀だなあ」

完全勝利以外は許されず、勝っても得られるものは何もない。

これを酔狂と呼ばずなんというのだろう。

「そこで、僕らは戦力を三つに分ける」

「———っ!!」

「いいリアクションをありがとうゴルバット」

ボールの中で驚いた表情をしている彼に僕は語り掛けるように言葉が続ける。

「いいかい、さつきも言ったが一つでも町が落とされれば僕らの負けだ。ならちんたら一個ずつ敵を撃破していく時間的余裕はない」

敵の戦力は現状わからんが、それを許してくれるほど甘ちゃんではないことは確かだ。

つまり多方面からの戦線同時展開しかない。

「戦力を削つてでも敵の進行を少しでも抑えたほうがいいってことさ」

そこで！と僕はこの計画の要を話す。

「ゴルバット、カラカラ。君達には町を一つ頼む」
「……………」

片方は反応なし、多分覚悟していたのだろう。

片やもう一方はただでさえいつも大口開けてる口が塞がってない。
「その反応は正しいし、痛いほどわかる。けれどここは君たちに頑張ってもらうしかないんだ」

僕の手持ちの戦力で一番対軍戦闘能力を有しているのはゴルバットだ。

その洗脳という特殊な性質をうまく使えば一番君が適任であり、一番君が輝く。

「それは、わかるよね」

「(コクコク)」

「よし」

しゅんと項垂れながらも、頷いてくれるのなら僕は信頼するよ。
その君の勇気にね。

「……本当はカラカラではなくウインディに任せたいんだけどね」
もう一方を見て、僕は思わず呟く。
もう一人の対軍戦闘で発揮する長中距離型のウインディだが。

「そうなつてくると、この作戦の根幹が揺るぐ。要である移動手段がなくなつちやうんだ」

町を任せるというのは、何も最初から最後までではない。

二人が粘っている間、僕は残ったポケモンで速攻で町の敵を一つずつギリギリまで削る。

それが終わったら次の町、次の町。と巡回していくわけなので、移動手段というのとはなくてはならない。

「キャウンー」

「ここから、走りながら喋るなよ。舌かむぞ」

それでなくても、ウインディを一人でつてのはちよいと不安だしなあ。この子の性格上。

「つつーわけで、カラカラ。悪いけど貧乏くじ引いてくれるかい？」

当然、言葉は聞こえなくても態度がそう言っていたように思う。

「うん。ま、そう言ってくれと思うたからの選択だよ」

ああ、君はいつだって僕が一番困ってるときに――。

「さて、ここから一番近いのはヤマブキだ。まずそこでカラカラ。君を降ろす」

そして次のクチバでゴルバットを降ろし、僕らは最後の町セキチクで戦闘を行う。

「町が助かるギリギリまで敵を削り次第、引き返していくから。皆、それまで死んじやあだめだぜ？」

「キュウ！」

「キャン！」

「・・・」

「ほーら、君も今くらい輪に加わんなさいよ」

右手に握ったスパーボールは怒りを露わにガタガタと揺れるのみだ。

「はあ、まあこの際贅沢は言わないけどさ」

なんせこちとらニヤースの手も借りたいんでね。

「さて、作戦は以上。つつつてもこんなもん作戦なんて呼んでいい代物じゃないけれど」

なんせ運否天賦が過ぎる、まったくもって危ない橋なのさ。

「でもどうせ運否天賦なら、最後まですがろうぜ、神様の気まぐれってやつに」

もうすぐヤマブキに差し掛かるところ。僕は最後にそういつてカラカラを送り出す。

「よし！ついた！」

カラカラ、ゴルバットを戦場へと送り込み、僕は一つ目の町セキチクへと降り立った。

「は、いいけれど。なんじゃこりゃ」

そこはまさに地獄絵図。阿鼻叫喚の地獄だ。

悲鳴が町を支配して、絶望が空气中に蔓延している。

「今まで来た二つの町の中で一番ひどいや」

敵のスオウ島から一番近いのに、僕が来たのが一番遅いのは流石にまズったかな。

でもそこはしょうがない。町民の皆さんにはそこは許してもらおう。

さて。

敵の把握は既に済んでいる。

奴さん、どうやら人間的な戦力はないらしい。ここにいるのはやたらめったら数の多いポケモンのみで、トレーナーの姿はない。

多分、キクコ有能力で洗脳しているのだろう。無人発電所で多数のポケモンを同時に操る実験をしていたと聞いてたけど、これはそのための布石だったんだな。

「なーんて分析している間にやっちゃおう！」

さあ、君にも活躍してもらわなければね。

「行くぜ、"ライチュウ"！」

マチスさんから預かったこのライチュウ。主人に似てまったく全然まんじりとも僕に懐かないけれど戦闘においてはこれ以上ないくらい助っ人だろう。

「チュウ!!」

ワイルドな顔立ちに逆立っている尻尾と耳、そのほっぺには貯めた電撃。その電撃はことごとく敵を貫いていく。

「ビュー、流石ジムリーダーのポケモン。僕が指示する必要ないなあ」
「キャウーン!!」

「つとど、こっちはダメか」

まったく、君だって同じジムリーダーのポケモンだろう？

「しんそくッ！」

必ず先制できるこの攻撃でウインディは一気に五体の敵を屠る。

「ま、戦力は申し分ないんだけどね」

さて、ここで一つわかったことがある。というか誰でもわかることだけだ。

敵さんがドラゴンタイプしかない。

これが何を意味するのか、単純に一番戦力が大きいってことだろうけど、僕がここまで来た他二つの町もドラゴンだけだったからなあ。全部そう、つてのは考え過ぎだろうけど。うーむ、これは一番貧乏くじ引いてるわ。

タイプ相性というものを考えれば氷タイプくらいが一番楽だったんだけど。

「なーんて言っている間にライチュウさん!? 一人でグングン進むなよ！」

どうやらライチュウ、気合いは十分に入っているらしい。君のことは一ミリだって知らないけれど、今は好材料は一つだって有り難い。「くっ————！にしても」

数が多い。

純粹に数というのは暴力だ。

どれだけ差が開いた相手だって数をそろえればなんとかなることばまもある。

だからこういう多対一つてのは策としては純粹でオールマイティに力を発揮するのだが。

「でもねえ、こちとらカードで言うジョーカーですから。そういうセオリーってやつをぶっ潰すのは得意なんですよ！」

やっ！と、僕は走りざまにその辺に落ちてた木の枝を投げる。

「ギャアア！」

「やり、命中」

敵の目を潰す。それだけで、ほら。

怒り狂ったポケモン、ハクリューは、手当たり次第に尻尾を振り回しそれが周りのポケモンを巻き込んでいく。

するとどうだろう、統率の取れていたポケモンたちがたちまち仲間割れをしだしたではないか。

「いいかいライチュウ、これだけ聞いてくれ。敵を倒すのは結構だけど、こういうやり方もあるんだぜ？」

その様をライチュウは少し驚いたように見ていたので、僕は言葉で付け足す。

敵を倒す、それはいい。立派だしちゃんとした力がないとできないことだ。

だけど、今ここにおいてそれは最善ではない。

いつだって、僕らは最善を選び取らなければならない。勝ちつづけていきたいのならばなおさらだ。

「敵はどうやらトレーナーはいないようだし、細かい作戦はとれないだろう。こうやってちよつと和を乱してやれば」

今度はウインディの“すなかけ”、先と同様、目を積極的に狙い潰していく。

敵のハクリューは、テンパッてカイリューやらハクリューを自身の尻尾でがんじがらめにしていく。

「ほら、この通り」

雑然としたポケモン団子の一丁上がりだぜ。

「わかったかい？」

「.....」

うん、頷きはしないか。

けれど、瞳の色が変わった。好戦的な赤からものを考える青に。

今はそれで充分。

「さて、敵さんは烏合の衆だ。数に惑わされるな、一匹一匹に囚われるな。全体を見ていこうか」

ここからがショータイムの始まりだぜ？気を引き締めていこう。

「はあ……はあ……」

よし、だいぶ削ったな。

敵の動きが目に見えて鈍り、敵の数が体感できるほど少なくなつた。

が、しかし。

「ヒュー……ヒュー……」

ウインディは舌を出して荒い呼吸をし、ライチュウは無言で汗をぬぐう。

（思ったよりも疲労が濃いな。僕含めて）

腐つても四天王の配下のポケモンだってわけか。この分だと、他二つの町はどうだろうな。

「よし、ここはあと少し片づけたら撤退だ」

一息呼吸を入れて、僕はそう決断する。戦力はだいぶ削ったし、あれだけの数だ、さらに戦力を隠しているわけでもないだろう。意味も分からんし。

にしても、このポケモンたちは何の目的で送り込まれたのだろうか。

カントーを焦土と化すだけならジムリーダーの町に限定されてるわけがわからん。

分からんついでにもひとつわからんのは、四天王たちの目的だ。キクコは八つ目のジムバッジを探していたけれど、それを見つけてどう

なるというのだ。

あの増幅器に一体なんの力が隠されているのか。

「ま、それを考えるのは僕の役目じゃあない」

興味ないしな。そっちはどっかの酔狂なバカに任せよう。

「ギャアス!!」

「っ!？」

しまった。考え事してて周囲に気を配ってなかった!

多少なりとも油断、疲れからくる思考への逃避。

その虚をつかれ、僕は後ろからくる敵の接近に気付けなかった。

「スリーパー!! サイケこうせん!!」

間一髪、目の前まで迫った鋭い尻尾は、だがしかしだらしく地面へと落ちた。

「・・・君たちは」

声が出た方。ちよつとした丘を見れば眩しい太陽に遮られ、真っ黒に塗りつぶされた顔はどこか親近感を覚える。

「ケン!!」

「リョウ!!」

「ハリー!!」

「二「そう!!俺たちはロケット団中隊長!!」二」

少々頼りないが、どうやら正義の味方ってやつは都合のいい時に助けが来るもんらしい。

・・・ホント頼りないけれど。

そして戦闘は激化していく。

それもこれも、また、次のお話で。

333話 「筋肉痛がすぐやってくるのは若い証拠ってことだ」

「それで?どうしたんだいこんなところで、散歩ってわけじゃあないんだらう?」

ケン、リヨウ、ハリーの中隊長三人組の登場で緊迫していた空気はいくらか弛緩する。

「当り前だ!我ら中隊長は隊長たちの敵本陣突入作戦につきガラ空きになる町を守りに来たのだ!」

ケン君は気合い十分と言った様子で顔からもそれが見て取れる。

にしても、この三人がそんなまともな作戦を立てられるなんて思えないんだけど。案外できるやつだったのかな?

「そう!我らが隊長たちの命令でな!!」

「久しぶりの命令で心躍るぜ!」

ああ、やつぱね。

ハリー君とリヨウ君の言葉に僕は安堵する。よかった、僕の観察眼が衰えたのかと思った。

にしても、あの人達め。それならそうと先に行ってくれよな。こっちにだって作戦のたて方つてもんがあんのに。

まったく性格悪いなあ。

「つってもまあ、この戦力じゃあさしたる変更はないか」

「おい!どういう意味だそれは!」

「額面通りさ、リヨウ君」

「にしても、お前これ一人でやったのか?」

ケン君が視線をやるその先には倒壊したセキチクの街並み。

「いやはや、実力不足で申し訳ない。怪我人もいっぱい出ただらうし、そこは言い訳のしようもございませんよ」

別にこれは本心だったけれど、それをケン君に指摘されるとは思わなかったなあ。

「そうじゃねえ！あのポケモン軍団をお前ひとりで退けたってのかつて聞いてんだ」

わりかし神妙な面持ちでケン君はそう訪ねるので。

「いやいや、ライチュウもウインディもいたさ」

「……」

おっと、そろそろおふぎけが効かなくなってきた。

君らが何を思おうがどうでもいいけどさ、こちとら時間がないんだ。そういうのはすべて終わった後にしてもらおう。

「さて、一つ確認だけど。君ら、町を守りに来たんだよね？それもマチスさんたちに頼まれて」

「ああ」

「それなら、僕と目的は一緒だね。だったら頼まれごとをしてくれないかな」

言いたいことは数あれど、ここは遠慮なく利用させてもらおうか。

なにせこれで不安材料が格段に減るのだから。

「頼まれごとだと？この状況でか？」

「この状況だからこそだよ、ハリー君」

まあ、助っ人に現れたのがこの三人だけっていう不安はなくならないんだけどね。

「いいかい、今回は時間との勝負だから、ちんたらやつてる暇はないんだ。だから悪いけどノーという選択肢はない。僕の言葉は隊長たちの言葉だと思ってくれ」

「……ふん、言われずともそうしろというお達しだ」

あら、以外とそこは考えられてたんだね。どうやら腐つても隊長たちは自分の部下の力量くらいは知っていたらしい。

ハリー君の不満そうな顔に僕は笑みを浮かべながら言葉が続ける。

「じゃ、遠慮なく。僕の作戦はこうだ——」

そこで僕はなるべく手短に簡潔に今回の作戦の概要を伝える。

「……お前、それを一人でやろうとしたのか？」

「無茶なのはわかってたよりヨウ君。でもほら、やんなきゃいけないんだからしょうがない」

そりや、僕だつてこんなギャンブルしたくないけどね。レートが高くなきやとつくに降りてるとこだよ。

「で、そうだな……。ハリー君はここセキチクの防衛を任せたい」
いくら戦力を減らしたとはいえ、ゼロになったわけじゃない。一人くらい守りを固めておきたかった。

町民がやってくれるか、やれるのかって賭けに出なくて済むだけでもこの三人が来た意味はある。

本来はその賭けに打って出なくちゃいけなかったんだから、やっぱ無茶だよなあ。

「お、おとお俺一人か!？」

ハリー君は思つてもみなかったのか、多少。いやかなり動揺した様子だ。

「あのねえ、見てわかるほどに戦力減らしてやったでしょーが。こんなくらいは気張つてよ」

「ぐぐぐ……」

基本的に僕のことを下に見ているであろうハリー君は悔しさと不安が入り混じった顔を隠そうともしない。

「大丈夫さ、僕にだつてできたんだから。君なら楽勝だ」

「そ、そうか。いや、そうだな。うん、お前でできるんだ、俺にだつて」

いやー、君のそういうチョロイところは大好きだぜ。

君たちの唯一の長所だよ。今後も伸ばしていこうね！

「残りの二人は僕と一緒に他の町へ行くぜ」

そこで、また同じように守りに一人おく。そうすりやこの作戦の成功確率は格段に跳ね上がる。

「さあ、話は終わりだ。行こう！」

そう僕は締めくくった時だった。

一つの悲鳴が響き渡つたのは。

「———っ!？」

「い、今のは!？」

「若い女の声だ!」

「おい!カラー!？」

三人が言うが早いか僕は駆け出していった。
まったくもう！初っ端から失敗なんて勘弁してくれってんだ！今
後のモチベーションに関わってくんだろうが！
声がした方向は、多分ジムの方向だ。

「くっ!!」

なにがそろそろ大丈夫か、だ。
全然残ってるじゃないか。

「おいこらー悲鳴上げたのはどこのどいつだ!?!」

瓦礫と凶暴な目をしたポケモンだらけで、人の姿なんて見当たらない。
い。

方向は間違っていないはずだ。だとしたら。

「一番ポケモンが集まっている中心地!」

必然、そこに思考は向かう。

「いた!」

崩れ行くジムの真ん中で、半分倒壊し開けっ広げになっていたおかげで見つけられた。

「ウインディ!」しんそく!」

今まさに、一人の女の子がカイリユーに襲われそうになっている。
ウインディのしんそくで薙ぎ払い、僕は後を追うように走る。

とりあえずポケモンの敵意はウインディに向いたらしい。これで
ひとまず女の子は安全に……。

「いや、まずったな」

しんそくの影響か、半分ほど崩れていたジムの建物の耐久力は今ま
さになくなってしまったらしい。

ぐらぐらと不安定に揺れ、そして――。

「きゃああああ!!」

崩れるのを防ぐことはできなかった。

「……おいおい、耳元で大声を出さないでくれるかい?」

ウインディは動けず、ライチュウはまだ命令を聞くほど完璧じゃない。
い。

あーあまったく、こんな僕しかいないじゃん。

「あ。あ・・・あ」

大きな瓦礫を背負って、女の子を見下ろしている僕を見て女の子は驚愕に目を染める。

ほたり、ほたり。

と、血が女の子の頬を伝った。

「おつとごめんね、可愛い顔を汚しちゃった」

「ひっー」

僕がその血を拭こうと手を伸ばすと、彼女小さく悲鳴を上げて今まで一步も動けなかったのが嘘のように脱兎のごとく駆け出した。

「あらら、なんて、助け甲斐のない」

ほっぺにチューくらいのもじりを感じた気がするんだけどねえ。

これだから正義の味方ってのは、ホントこんなことやるやつはよっぽど頭おかしくなきやできないよ。

「おい！カラー！大丈夫か!」

「あ？ああ、大丈夫大丈夫。ただ、ちよつとこの瓦礫どけてくんない？」

予想以上に重くつてき、受け止めたはいいものの。背中に張り付いて動かねえの。

「お前、血が・・・」

「大丈夫だつて言つたらう？これくらいなんでもないよ」

三人がかりで瓦礫をどかして、僕は背中をさする。

どうやら重症なのはもろに受けた背中ではなく、頭のほうだったらしい。

ダラダラと流れる血が止まんない。拭つても拭つても出てきやがる。おかげで左目が開けらんない。

だからそれはもうあきらめた。

「問題は敵の方だ。ごめん、まだ結構残つてた」

まったくいくら街全体を守んなきやいけないとはいえ見落としなんて笑えないぜ。

どうやらさつきの子で避難は完了したらしいことが不幸中の幸いだが。

「残って……？ 一体何の話だ？」

「……何って、そっちが何言ってるのケン君？」

まったく敵の区別もできなくなったのかい？ だったらさっきの作戦いくらか変更しなくちゃなんだけど？」

「お前が何言ってるんだ。敵はお前が殲滅させたんだらう？」

いや、殲滅はさせてないけど。

当然僕の作戦上、それはない。なのでそんなことは一言も言っていない。

はずなんだけど。

そこで僕はようやくあたりを見まわした。

「……うわお」

確かにケン君の言った通りそこには敵なんていなかった。

より正確に言うならば、全員倒されていた。

「ライチュウ、君がやったのかい？」

その戦場のど真ん中で立ち尽くしているのはライチュウ。状況から見るに、一瞬で敵を刈りつくしてしまったらしい。

ぱっと見でも十匹くらいはいたはずなんだけど……。

ははは、流石の僕もそんな乾いた笑いしか出なかった。

だって、規格外だってそんなん。

「……チュウ」

さっさと次に行くぞ。まるでそういつているかのように僕の隣を歩くライチュウに。

「やっべー、頼もしいわー。その三人より全然頼もしいわー」

「……くっ、反論ができない」

その背中がいやに男らしかったのは満場一致の意見だろう。

「よし！ついた！」

次なる町はクチバ。この町はワタルからの攻撃もあって壊滅状態が他の比じゃない。

だが、それが幸いして町にはもうほとんど人が残っていないかった。

あれだけ活気のある港でさえ今は見る影もない。

死人は……ま、出ていないことを祈ろう。

僕は、僕のことをするだけだ。

「ぜえ……はあ……ぜえ……」

ケン君リヨウ君の息が整うのを待つまでもなく、僕らは戦場へと足を踏み入れる。

「くそ……おい待て！つてうわ！」

……結構敵もやられている。

けれど。

やはり一匹だけで防衛というのは無謀が過ぎたかな。敵さんの勢いは先程の町と同様衰えてはいない。

「ケン君！リヨウ君悪いけど敵の相手しといて！」

「なにいい!?!」

「ヤバイヤバイヤバイ！」

二人の悲鳴にも似た言葉を聞きながら僕は必死になって走る。

くそ、どこだ……。どこだゴルバット。

この敵の勢い、最悪のシナリオが頭に浮かぶぶん、僕の手からは嫌な汗が止まらなくなる。

「チッ！邪魔なんだよ！どけえ！」

ウインディの“とっしん”で道を切り開く。

縦横無尽に進み、やがて敵の密集地を抜けたころ。

「いた！ゴルバット!!」

フラフラと上空を滑空するゴルバット。

それは地上から見ていても疲弊していて、今にも落ちてきそうなほど弱々しいものだった。

「いや、ていうかマジで落ちてきてないか。あれ」

ヤバイ。そう思うよりも早く、ゴルバットの高度はあれよあれよという間に下がる。

「くそっ!!」

まるでキャッチャーフライを受け取るがごとく、僕は顔を上空に固定させながら足を動かした。

その間の敵の攻撃をウインデイが防ぎ、ライチュウは自分のやりたように暴れているだけだったが、僕らの傍を離れてはいかない。

「っ」

落下速度が上がり、すんでのところではあったものの。

「はあ……はあ……はは。おかえり」

「キユウ……」

力なく笑ったその顔を、僕はしっかりと見ることができた。

「よく耐えてくれたよ、本当。すげえよ君は」

たった一人で、この戦場を生き抜いた。

まったく、主人よりも何倍もかっこいいじゃん。

「さて、この頑張りに報いないとね」

僕はゴルバットをボールに戻し、戦いへと自らを放り込んでいく。

・

・

「……こんなもんかな」

ウインデイの体力もそろそろ底をつきて来た。

僕の方も、流れた血が固まってマジで左目が開かねえ。

いまだ元気なのはライチュウくらいなもんだ。

本当にゴルバットの洗脳がなけりゃとつくにお陀仏だぜ。

「ヂュウー」

このエリアの最後の一匹を倒して、ライチュウは一つ雄叫びを上げる。

「ケン君。後は任せてもっ」

「ああ、さっさと行ってこい」

「うん、頑張って」

「カラー、お前、大丈夫か？」

「はあ？大丈夫だって」

どうやら僕はリヨウ君に心配されるくらいには見た目的にもヤバいらしい。

だけど、だからといってここでやめるわけにはいかないんだ。

やめられるのならとつくにやめている。

「だからさあ、さっさと行こうぜ」

「あ、ああ」

それ以上、リヨウ君は何も言わなかった。

クチバの町をリヨウ君と共に後にする。

次は、最後の町だ。

別に、断ったって良かったんだ。

この任務を受けるべき大義名分というものは、正直言っ僕にはなかった。

ならなぜ受けたかと問われれば、まあ、色々あるんだけど。

昔の知り合いとのしがらみも、交換条件にだした要求も、四天王という目障りな連中を倒してくれるということも。

そのどれもが、本当のことで。

でもきつと、一番ではなかった。

じゃあ、一番は。

一番は。

「え、エリカちゃん・・・？」

「本当に、本当にアナタという人は・・・！」

最後の町、ヤマブキシテイに差し掛かって。

町に足を踏み入れたその数秒後。彼女は僕の目の前に現れた。

「な、なんでここに正義のジムリーダーが!？」

リョウ君の言う通り自分の町を守っていたはずだ。

それだけを考えてとオーキド博士から伝えられたはずだ。

そも、ここは敵のテリトリーで彼女がここに来る理由なんか、義理なんぞ何一つだつてない。

「なんで?ですつて?」

訳が分からないどころの話じゃないのに、加えて彼女は怒つていた。

誰がどう見てもわかるほどには。

「それはこっちのセリフです!なんでこんな無茶をするんですか・・・!」

静かに声を張り上げるといふ器用なことをやってみせる彼女に、僕は辟易する。

何度も言うようだが、これは時間との勝負だ。

こんなところで無駄に消費するわけにはいかない。

「言つたろう、自分の町のことだけ考えてろつて。テメエの町はどうしたよ」

「そんなの!とつくに任せても大丈夫なんです!いいから私の質問に答えてください!」

いかないのに、なぜだか足が前に出ていかない。

「はっ。任せて大丈夫だから、リーダーの自分が、自分の町放つてまで僕に説教しに来たって?」

お笑い草だぜそんなのは。無責任もいいとこだ。

「私の精鋭たちは、そこまでヤワではありません。いいから、質問に答えてと言っているでしょう」

ヤワじゃない、か。まあ、そうだろうね。知ってるよそんなん。

彼女はまるで情緒が不安定。静かに怒気を含んだその声に、けれど僕は答えない。

「隣の人は何です？何で、またロケット団なんかと一緒にいるんです!?!」

「悪いけどさあ、問答している暇はないんだ。そこをどいてよ」

君に取っっちゃあどうでもいい街だろうけどさ、僕にとってはそうじゃないんだ。

街が、じゃあないぜ。そこにいるヤツが、さ。

「どきますよ、アナタが答えてくれるなら」

今度は泣きそうな顔。まったく面白いほどにコロコロと表情が変わる。

「ギャアアアッ!」

はは、ベストタイミング。そろそろこの場から脱出する理由が欲しかったんだ。

「カラー!!」

再び歩き始める僕に悲痛な叫びを送るエリカちゃん。

嫌になるぜ本当に。

「いくぜライチュウ。ウインディ」

ポケモンの者と思われる悲鳴。

今のはアイツじゃあないけれど、それでも、僕の心臓は全然安心なんてしてくれなかった。

「~~~~~!!もう!!」

一声、大きな声を発したかと思うとエリカちゃんは僕らについてきた。

「おいおい、何やってんだよ君は」

「うるさい!全部終わってから全部聞きますからね!」

どうやら、彼女の中でさつきまでの質問は取り敢えず置いておくらしい。

目の前で襲われてる町を放っておけないのだろう。

でも甘めえよ。そんな隙を見せちゃあね。

「モンちゃん!」しめつけて!そして!すいとる!」

「ライチュウ!」アイアンテール!」

「息ぴったりじゃねえか」

リョウ君の一言に寒気がするからやめてほしいなあ。ただでさえ出血多量で体温下がってるのに。

「行きますよカラー!!」

「言われんでもね!!」

僕らは別々に各個撃破で戦闘に当たる。

「ライチュウ!」でんきシヨック!」

カラカラってば、小さいからなあ。見逃さないようにしないと。

「!!カラー後ろ!!」

「っ!」

気の緩み。リョウ君の一言があるまで後ろの敵の存在に気付かなかった。

プテラの鋭利なツバサが一直線に最短距離で僕の首元へと伸びてくる。

「あ、やべ」

「——っ!」

そう思った瞬間、骨と骨がぶつかる鈍い音。

「・・・はは。ベストタイミング」

「ブン」

おいおい、なんだよ。全然元気じゃねえか。

「カラカラ、”ずつき”」

「っ!!」

バキリ、という痛々しい音が響く。

プテラの巨体は地面に倒れ、何事もなかったかのようにカラカラは両足で地に立った。

「よお、元気だったかい?」

「・・・」

相変わらずのそのクールさが、今はなんだか心地が良い。

「誰かさんとは大違いだぜ」

口にしたら飛んできそうだから言わないけれどね。

「さあて!これでもう気遣うことは何一つない!最後にもうひと暴れ、たまった鬱憤晴らそうぜ!」

ごめんなあ、特に君たちにはなんの思い入れもないんだけど八つ当たりさせてもらうね。

「つたく、マジで・・・チクったヤツ誰だああああああ!!」

広がるのは歓声と、喜びの声。

安堵した住人たちが今一度自らの家があるヤマブキへと戻ってきていた。

結局、あれだけ頑張つて最後の最後に待っていた結末は謎の光がポケモンたちを無力化するというなんとも肩の力が抜けるオチ付きだった。

ホント、服はボロボロだわ体は傷だらけだわ。慣れないことつてのはするもんじゃないね。

「カラー!? カラー!? まったくどこ行ったのですあの人は!? あ、おじいさん、いいえ、私の力など微々たるものです。いえ、あの、それより、人を探してまして」

「おお、こわこわ」

茂みになった物陰から、エリカちゃんの姿を見送る。

ちなみに捕まるのが怖かったのかとつくにリョウ君の姿はない。混乱に乗じて上手く脱出したらしい。

「そういうえば、ライチュウ。君、最後には僕の命令聞いてたよね」

「・・・チュウチュウ!!」

「あいてててて」

どうやら一応あの瞬間だけは認めてくれたらしいけれど、うーん、まだまだ心開いてくれないや。電撃が僕を焼く。

ま、どうせ全部終わったんだからいいんだけどさ。

「カラー!!」

「つとと、んなことやつてつとマジで見つかる」

なんだか前回もこんな風にして逃げたような。

あの時はエリカちゃんに捕まったんだっけ？今回は同じ轍は踏まんようにせんとね。

「誰に見つかるって？」

「そりゃ、当然エリカちゃんに」

言つてて気づいた。この声は。

「カスミちゃん。君も来てたの」

「ええ、まあ私の方はついさっきだけ」

そこにいたのは仁王立ちがこれまたよく似合っているカスミちゃん。

「・・・今回はまた無茶したわね」

「あのさあ、どこまで広まってんのその認識」

情報源はわかってるから後でちゃんと釘指しておこう。

ああ、勿論物理的にだよ？

「さあね、でも安心しなさい。私はエリカみたいに説教するつもりはないから」

「おお、それは有り難い」

正直ここでもエリカちゃんと同じ対応されると力づくで行かないやらんくなるからなあ。

「でも、ちゃんとエリカとは話しなさいよ。逃げてないでさ」

カスミちゃんの顔は真剣そのもので、それは純粹に親友を案じてのものだろう。

「ああ、うんうん。するする」

対して僕は、真剣さなど微塵もない。おちやらけてお茶を濁してヘラヘラ笑う。

いつもの僕だ。

ほら、今回は慣れないことをしたからね。ここらでいっちょよう自分を取り戻しておかないと。

「はあ・・・まったく難儀なヤツと関わっちゃったわねえ。エリカもおいおい、僕がめんどくさい子みたい扱いは不服だなあ。これでもわかりやすい人間だと思いがね。」

「で？話は終わり？もう僕いいかな？」

「どこ行くの？」

それ聞いてどうすんのさ。僕に興味もないくせに。

「いいの？今出ていけば、一躍ヒーローでしょ？町を救った、それも三つ同時に。そんな救世主になれるのよ？」

「言ってる意味が分からないなあ。それは望んでる者になるべきだ」

そう、今回で言えばエリカちゃんのような。

望んで、望まれている人間になるべきだ。

「それに、僕はそんなもののために戦ったんじゃない」

別に称賛されたいわけでも、誰かに喜んでほしくてやったわけじゃない。

そんなチンケなもののために戦ったんじゃない。

「じゃあ、なんであんたはそんな無茶してまで戦ったのよ」

カスミちゃんの声に悲痛の色が灯る。

結局根が良いやつなんだよ君は。嫌いなはずの僕にだって、そんな対応をしてしまう。

まったく僕じゃなかったら勘違いして惚れられてるところだけ？

「僕が戦ったのは僕のためだ。それ以上でも以下でもない」

僕はただ決めているだけさ。昔からね。

「・・・それでも、アナタがしたことは称賛されるべきよ。それほど凄いことなのよ。アナタがやったのは」

「あつはは！」

思わず、笑いが出た。

「なっ！なに!？」

「いや、そんなに優しいカスミちゃんは初めて見た」

「こんの、人が真面目に話してんのに！」

「そうそう、その顔だよ。僕に対して何か、そんな顔で十分さ」

照れたような顔なんて、レッドにでもとつときなつて。

僕にはそうやってしかめっ面で十分さ。

それに報酬というのならもうもらっている。いや正しくはこれかなのだが、なにもただ働きをしたわけじゃない。利益はちゃんとあつた。

「それじゃあね。カスミちゃん」

「エリカに！エリカにちゃんと話してあげてよ!？」

そのカスミちゃんの言葉に、僕は後ろでにヒラヒラと手を振って返す。

「さて、じゃあ行こうか。〃ジヨウト〃にさ」

かくして、四天王による一連の事件は収束へと向かっていった。

そして物語の歯車は新天地へと向かう。

それはまた次のお話で。

ジョウト編

34話 「新たな旅路はいつまでも」

「やっほー！」

「・・・一応言つとくがなあ、それは山でやるもんだ。海でやったって意味ねえぞ」

あの、四天王との戦いから一年。

「やだなあ、わかってますよお。〃 マチス〃さん」

今僕は一体全体何をしているのかっていうと。

一言でいえば、フェリーに乗っていた。

フェリーのデッキ部分、その手すりへと体を乗り出し頬を風いで行く潮風が気持ちいい。

そんな場所で僕らは二人、男だけの会話を楽しむ。

だってえ、この人の顔が怖すぎて女の子たちが全員逃げちゃったもん。

「しかし、俺が言うのもなんだがこんなんで本当に良かったのか？」

「おっとお、珍しい。普段なら利用するだけ利用して紙屑のようにポイする地球に厳しいマチスさんからよもやそんな言葉が聞けるなんて」

「エレブー、〃かみなり〃」

「うわつと!!」

ちよつとちよつと！今のマジで殺す気だったな！おい！

そう、一年前。あの戦いの報酬に僕が選んだのはマチスさんの持っていたフェリー。

通称アクア号。ジェットで走るこのフェリーはカントーとジョウトを繋ぐ交通機関としての役割をほぼ一手で担っている。

このアクア号が開通してからというものの、カントーとジョウトの行き来は活発になり、さらに噂だと近タリニアモーターカーが走るとかなんとか。

「で、何を隠そうその船長こそがここにいるマチスさんなんですよ

ねー」

それを知っていたからこそ、この交渉を持ち込み、今こうして実現させているわけだが。

「おうよ、このアクア号はサントアンヌ号以上の船になった。つまりところ豪華客船だ」

マチスさんの言い分は大袈裟でもなんでもなく、その役目もそうだが内装も外装もその名に恥じない豪華絢爛さだ。

「で、ジヨウトには何しに行くんだ？観光つてわけでもねえんだらう？」

その船長であらせられるところのマチスさんだから、忙しいことこの上ないはずなのだが。

なぜかさつきから僕につきつきりである。

「いえまあ、当たらずとも遠からずって感じですかねえ」

「はっ。例によって暗躍か？」

うーん、バカにしたようなその感じが気に入らないけどここは愛想笑いで切り抜けておこう。

なにせこの人の機嫌を損なうと海にポイされてしまいそうな勢いあるし。

割とマジで。

「ところで、あとどれくらいでジヨウトにつくんですかい？」

「けっ。もう少しでつく、黙って待ってろ」

それだけ言うとマチスさんはスタスタと機嫌悪そうに中へと戻っていく。

「あ、ちよい待ちー！」

「ああ!？」

そんな背中に僕は一つ、スーパーボールを無造作に投げ渡した。

予想していなかったのか不機嫌な声を上げたものの、流石の反射神経をお持ちでパシッとキャッチする。

「お、ナイスキャッチ」

「んだこれは？」

「ライチュウですよ、まったくマチスさんつてば忙しすぎて会えない

んだから。延滞料金は無しですぜ」

一年前に借りたものの、返すアテが今日までなかったのはマチスさんのせいであるからして僕は悪くないはずだ。

なんて正論もこの人の機嫌次第で覆っちゃうから嫌なんだけど。

「・・・ふっ」

お、笑った。

と思ったのもつかの間、確かめるようにマチスさんはボールから自身の相棒を取り出す。

やだなあ、僕がボールだけ渡して中身すり替えるなんてマネするよ
うな人だと思われてたのかしらん？

そんなことしないよお、マチスさんには。

だって報復が怖いもん。

「待ってたぜ、相棒」

「ヂュウ!!」

うん、ライチュウも嬉しそうだ。この一年見たことない満面の笑みである。

なにせ、散々こき使ってやったからねえ。どうせ返すんだからって
一年たつとは思わなかったけど。

「ん?」

なんて遠目から見ているなら、ライチュウは割と神妙な面持ちでこ
らへトコトコと歩いてきた。

「おいおい、なんだよ。お別れでもいいに来たのかい?」

らしくないと言えばそれはそうなのだが、ライチュウもこの一年を
悪くないと思っていたということだろうか。

頬を染めて、そっぽを向きながらも体はこちらを向いてその手は紛
れもなく僕に差し出されている。

僕は目線をライチュウに合わせてしゃがむ。

「・・・そっか。じゃあね、ライチュウ」

多くは語らない、たった一年、されど一年。

過ごしてきた時間は、無為ではなかったわけだ。

「・・・ヂュウ」(ニヤリ)

「ん？」

と思つたのもつかの間。

がっちりとした硬い握手を交わした瞬間、ニヤリと口角が上がるライチュウに不穏な空気を察する。

そして案の定。

「あがががが!!」

電撃を見舞われた。

「ガハハハ！こいつはいい！よくやったライチュウ!!」

「チュツチュツチュ！」

クツクツクと悪くどい笑みを浮かべる二人。

ああ、君たち確かに似合いだよ。やっぱ君はマチスさんのポケモンだ。

「つたく、この悪戯っ子め」

プスプスという音が耳に響く。この一年、数々の悪戯を受けた僕だ。これくらいでは怒りません。わっはっは。

「待てやこの性悪!!」

「キヒヒヒ」

なんていうと思つたかポケエ！

ライチュウを鬼の形相で捕まえようと追いかけるもの。

「うげっ」

ポンツポンツと軽快に僕の両手をかいくぐり頭を踏んでマチスさんの横に戻る。

「まったくもう、感謝とかないのか君は」

小さな足で踏まれた頭をさすりながらぶー垂れる僕。

でもまあ、似合っちゃってるからしょうがないか。その隣がやっぱ君はしつくりくるよ。

「少佐ー！」

おっと、どうやらマチスさんが呼ばれているらしい。この船の従業員っぽい人に。

「おう！今行く！」

それだけ伝えると、マチスさんは今度こそ船の中へと帰っていつ

た。

「にしてもあの人もまあ丸くなったなあ。ロケット団にいた頃が既に懐かしいぜ」

ねえ、カラカラ。

と僕は傍らにいたはずのソイツに声をかけようとして気付いた。

「……………」

パラソルとハンモックによる完全プライベート空間で一人、のんびりとしていたことを。

「満喫してんなあ……………」

ま、せっかくだし、僕もこの豪華客船をのんびり楽しむとしますかね。

「で、なんで部屋割りがこの爺さんといっしょなんだろう」

「ぐー、がー」

ある程度中を散策し終わって、豪華客船の豪華な食事を楽しみさて部屋へ戻るかといった矢先に僕のテンションはただ下がる。

『ピンポンパンポーン、間もなくジヨウト、ジヨウト。お降りのお客様はお忘れものにお気を付けください』

「ほら、”オーキド博士”もう着くつてよ」

「むにやむにや」

「いや可愛くねえから」

何が悲しくて爺の寝言を聞かにならんのだ。つかなんで寝てんのこの人？

なぜ僕がこの人と一緒なのか、それを語るにはまず一週間前に遡る必要がある。

〜一週間前〜

「ええ、ええ。おーけーおーけー、それでいいですよ」

僕は一人、高台上り景色を見渡しながら電話をしていた。

確認の電話が終わり僕はボタン一つで電源を切る。

「・・・さて、ようやくジョウトに行ける」

あの戦いから一年、カントーの町はだいぶ復興しておりもう戦いの影はないに等しいと言ってもいいだろう。

そして最近、ようやくカントーとジョウトを結ぶアクア号が開通しそのチケットをマチスさんからもらおう手はずが整った。

そう、電話の相手はマチスさんだ。

「はあ、ようやく見つけたぞカラー」

「あら、珍しい客人だね、グリーン」

後ろでの扉が開いた音がしたと思えば、そこにいたのはグリーンだった。

あまり、話したことはないはずだし、どうして僕がここにいることを知っているのか。

まさかとは思うが、エリカちゃんの刺客だったらどうしよう。グリーンに勝てる自信はないなあ。

そんな予測と共に僕は密かにボールの開閉スイッチへと手を伸ばす。勿論逃げるためにね。

「おじいちゃんがお前に頼みたいことがあるそうだ。マサラに戻ってもらおう」

「おじいちゃん、ってーとオーキド博士？」

若干拍子抜けした表情を隠せなかった僕だけど、それにしても意外だ。あの人からの頼みなんて。

「嫌われてるかと思ってたよ」

「いいから、お前に拒否権はない」

「えー?ここで君を倒して、その頼みごとを不意にするっていう道もあるでしょ」

きらりと鋭くとがるグリーンの瞳。

ハハハ、そんな顔すんなよ。元々怖い顔がさらに怖くなっちゃうぜ。

「まあまあ、落ち着いてよ。ちよつとしたジョークさ。何も君に勝てると思うほど傲慢でもないさ」

「ふん、相変わらずふざけた野郎だ」

「ま、あのじいさんが僕に頼みごとってのも珍しい。頭を下げるころでも見てみるのも一興かな」

「・・・とにかく、伝えたからな」

それだけ言うと、用は済んだとばかりにグリーンはりザードンに飛び乗って飛んで行ってしまふ。

「ありや、要件くらいは先に聞いておきたかつたんだけれど」

空を見上げるもあつちゅーまに彼方へと消えていく。

まいいか、楽しみに取っておいても。

なにせこの一年、なんにもなさすぎて退屈してたところだ。

ちようどいい暇つぶしくらいにはなるかもしれない。

「・・・ポケモン図鑑？」

と、思っていたんだけれど。

グリーンの言う通りに僕は久々にマサラへと帰ってきていた。

最後までエリカちゃんが仕掛けた罫の可能性を疑っていた僕はその頼みごとに思わず素っ頓狂な声を出してしまう。

「つてなに？」

「うむ、この世界にいるポケモンのことを詳しく観察し記録する機械じゃ」

そう言つてオーキド博士が手に持っているのは長方形に赤く彩られた箱型の機械。

どうやら話を聞くに、これがオーキド博士の長年の夢らしい。

「で？それを僕にどうしろつて？」

「じゃから、これを持って全国にいるポケモンを捕まえてデータでいっぱいにしてほしいんじゃよ」

詰まる所、頼みごとというのはこれか。嬉々として喋っているオーキド博士の言葉を右から左へと聞き流し僕は早々に興味を失う。

だって僕が興味があるのはたった一匹のポケモンであり、それ以外のすべてが僕にはどうでもいいことなのだから。

よって、受ける価値も聞く価値もなし。

「大体、なんで僕なのさ。そんなもんレッドとかにでもやらせろよ」
僕はアンタらが思ってるほど暇じゃないんですー。この一年以外はー。

「レッドはもうすでに持っておるよ、レッドだけではなくグリーンもブルーもな」

・・・さいでしたか。

確かにそういわれて見ればこれと似たようなのを持っていたような気がせんこともない。

あまり気に留めてなかったから記憶が定かではないが、どこことなく形違いのやつを見た気がする。

「そうーそれじゃよー」

「いやどれじゃよ」

そんなことを言ったら、オーキド博士が食いついてきた。

「これはレッドたちのとは違い、バージョンアップ版なんじゃ」

へえ、どうでもいいけど。

まあ？レッドたちより最新機種を僕に、って点は評価してやらんこともないが。

「今までカントーのみじゃったが、ほれ、アクア号が開通するじゃろ。それに向けてジョウトでも記録できるように進化させたのじゃ」

「ふーん、で？僕にジョウトでチマチマポケモン集めをしろって？博士、僕の目的を知っててそれを頼もうとしてるんですか？」

「勿論無理には言わんが・・・しかし、お主が適任じゃと思っただからこそこの頼みじゃ」

適任？誰が？むしろ真逆だろう。

「それこそお門違いですよ。その新しい奴をレッドにでも渡して、ジョウトに行ってくれて頼む方がよっぽど建設的だと思いますがね」

「ダメなのよそれは」

「あー！ナナミさん！会いたかったです！」

「あら、ありがとう。私もよ」

湯？にお茶を注いで運んできてくれたナナミさんに僕は歓喜の声で迎える。

この研究所に戻ってきた理由の一つにナナミさんがいたことも大きい。

「怪我はもう大丈夫なの？」

「怪我？ああ、もうすっかり。ていうか一年ありやそりや完治しませんでした」

心配症だなあ、そこもいいんだけど。

「まったく、今の姿をエリカが見たら・・・」

なぜかオーキド博士が頭を抱えていたけれど、その名前を出さないでよ。せつかく上がったテンションが冷や水ぶっかけられたように冷めちゃうじゃない。

「で？ダメって、理由は？」

「レッド君はね、治らないの。一年前、四天王カンナに受けた傷が」

・・・ああ、氷漬けにされたあれか。

確かにあの攻撃は強力だった。脱出できたとは言え、一度完璧にあの攻撃を受けたレッドだ、後遺症が残っていても何ら不思議ではない。

僕も受けたけど、その後の対処がよかったのか、はたまた技が不完全だったのが幸いしたのか、多分そのどちらもだろうが後遺症は残ってない。

「手足がしびれたり、ポケモンバトルにも影響が出ててね。もうすぐジムリーダー試験を受けるって言ってたけど大丈夫かしら」

心配そうに頬に手をやるナナミさん。

「ジムリーダー試験・・・？」

「ああ、カラーは知らなかったのか。あいつ、トキワジムのリーダー試験を受けると決めたんじゃない」と

「ふーん・・・」

いや別に特に何の感情もないのだけれど、そうか、ジムリーダーに

ねえ。

昔、それが夢だと聞いていたけど本当に叶えちゃうのかレッドは。しかもトキワジムだつて？サカキ様の後釜じゃん。まるつきりタイプが違い過ぎて笑い話くらいにはなるなあ。

「でも、そんな体調で受かるほどジムリーダー試験つてのは楽勝なんです？」

「それなのよねえ、今グリーンが各地を旅して治療法を探してるんだけど・・・なかなかねえ」

そこでピーンときてしまった、なるほど僕へのアレはそのつかか。

・・・にしても羨ましいやつめ、ここまでナナミさんに心配してもらえるなんて。

「・・・じゃあまあオーキド博士の頼みをただ断るのも心苦しいんで、一つ情報をあげましょう」

「情報？」

「というか、やっぱり断るんじゃない。わしの頼み」

がっかりしないでくださいよオーキド博士、わかつてたことでしょうか？

それでもダメ元でも僕に頼んできたつてことは相当に人手不足なんだろうなあ。

だからといってそんなめんどいことを引き受けるきにはなれんけど。

「ええ、まあ。そんな一銭の得にもならんことをしてる暇はないんでね」

「お、なんじゃ。報酬か？これでもこの業界の権威。それなりにもらつておるから対価としての報酬は弾むぞ？」

ここぞとばかりに博士は畳みかけてくる。

少しぐらつとはしたが、いいや、労働と対価が見合わない。さつきも言ったがそんなことをしている暇はないんだ。

片手間でできるほど簡単でもなさそうだし。

「そ、それで!?情報つてなに!?!」

そんな博士を押しつけて、ナナミさんがずっと顔を近づける。

「いえね、ナツメちゃんも確か同じ技に引つかかっていたなあって思いまして。今どうしているかは知らないですけど、彼女にきけば有効な治療法とか知ってるんじゃないですかね？」

何しろ超能力者のサイキックガールだ。お得意の千里眼で治療法を探すのはわけないだろう。

自身の体の傷を放っておくタイプとも思えんし。

「そうなのね！早速グリーンに知らせなきゃ！」

そういうと、バタバタとナナミさんは部屋を飛び出していった。

「・・・すまんのお、またお主に頼ってしまった」

「また？別に、アンタらに頼られた記憶なんてないですよ」

それに今のだってお礼を言われるようなことじゃない。

あ、いや礼を言われたわけじゃないか。

「それじゃあ、すまないというのなら一つ頼まれてくれませんか？」

「・・・お主のそういうところは最早尊敬するよ」

「へへ。こりやどうも」

「で、なんの頼みじゃ」

「いえね、簡単ですよ。この一年でそろそろ貯金もなくなってきたんでね、一つ仕事をさせてくれっつーことですよ」

「仕事？・・・といわれてもなあ、助手はもうナナミがおるし」

「一つ、あるでしょう？僕に都合の良いお仕事が」

「・・・？？」

ふふふ、お金があるっていいことですよ。

そのお金、僕が有効に使わせてもらいますよ。爺さんが貯めこんでてもしょうがないですからね。

さーっていいこと聞いちゃった。

く現在く

で、今現在に戻る。

「博士、荷物持ちました？」

「ああ、忘れ物もない」

そう、詰まる所そのお仕事というのがこれだ。

僕が爺さんと行動を共にしている理由。

「にしても、護衛をするなんて言い出した時は呆れたもんじゃない」

「だって、そのポケモン凶鑑貴重なものなんでしょう？ だったら誰かに襲われる可能性だってあるわけじゃないですか」

だからこそその護衛だ。なんでも博士はしばらくジョウトに住み込みで研究するというらしいじゃないか。

僕もジョウトにはしばらくいるつもりだったから一石二鳥。ただ移動するだけでお金がもらえるなんて夢のようじゃないか。

「まあ、いいんじゃないかな」

そして、フェリーは到着を知らせる汽笛を鳴らす。

さあ、ここから新しい旅の幕開けだ。

一歩、新たな土地へと踏み出して。

また、次のお話で。

「いや！僕は諦めない！世の中案外甘いはずだ！今後も積極的にこういった話には首を突っ込んでいこーっと！」

「ほれ、お茶じゃ」

「えー、ナナミさんが淹れたやつがいいー！」

「我儘いうな、ここにはわしとお主しかおらん」

「そう、ナナミさんはマサラにある研究所に残るといふ、まあ、留守番が必要だという言い分も分かるけど、なーんかそれだけじゃなかった気がしてならない。」

「ちつくしよー、もう夜じゃんかよー」

「ほぼ一人で作業していたせいとか、せつかく昼頃に着いたのにもう辺りは真っ暗だ。」

「一日潰してまで付き合ってたんだ。報酬の方を期待しないとやってられんぜまったくもう。」

「む、確かにいつの間にかこんな時間か」

「お茶を湯？に注いで、僕が配置したソファに腰掛ける博士。」

「遅くまで付き合わせて悪かったのお。どうじゃ？宿がないなら泊っていくか？」

「はあ？なーにが悲しくてジジイと同じ屋根の下で一晩過ごさんといかんのじゃ」

「どんな感動ビデオを見るより泣ける状況なんですけどそれ。」

「ハッハッハ。お主は老人をいたわるといふことをもう少し覚えても罰は当たらんぞ？」

「ハッハッハ。やだなあ、博士はまだまだお若いでしょう？」

「オホホ、あはは、なんて笑いあっていたのは一瞬ですぐに苦い顔になる二人。」

「つたく、それで？お主はジョウトでどーするんじや？」

「そんな気の合わない二人だけど、博士は構わずお喋りを再開する。」「んー？どうしましょうねえー」

「ノープランというわけでもなからうに。わしには喋らんか」

「そうかそうかー、と言って博士は立ち上がり自身の書齋にこもりにいった。」

別に、隠してるわけじゃあないんだけどなあ。

本当にどうしようか決めてるわけじゃあないんだ。カントーには例のポケモンはいなかった。

だから次なる僕のルーツであるこのジョウトに来ただけで、それは明確な理由にはならない。

なし崩しのものだ。つまりは。

「まあ、用事がないわけでもないんだけど」

一つだけ、あるにはあるんだけど。

果たしてそれを用事と言っているのかどうか、そんな大袈裟なものじゃないしなあー。

よつと。と、空いたソファに寝っ転がりながら僕は瞳を閉じる。

はてさて、この土地で一体どれだけ進歩するのかな。

なんてことを考えながら。

昔々、僕が小さかったころ・・・からも抜け出して、けれど大人ではない中途半端な年齢の時だった。

その孤児院に預けられたのは。

過去、いくつもの孤児院を潰して、いくつもの善良な人々から忌み嫌われて。

ついたあだ名が「破壊神」中二病もいい所だろう。

そのあだ名を気に入ってはいなかったけれど、当時の僕はそのあだ名に相応しい人物ではあった。

物を壊し、人を壊し、絆を壊し、命あるものを壊した。

そんな時、その孤児院は奇怪にも僕を受け入れたのだ。

「.....」

瞳は荒み、体は傷だらけ。孤児、という言葉がこれほど似合う人間も現代にはそうはおるまい。

「オ、皆さん。今日からこの孤児院の新しい友達アル。ほら、カ

ラー君。自己紹介してアル」

なぜかクルクルと周りながらそんなことを言うオジサンに、僕は当然反応なんてしない。

いつもと同じようにいつもと同じ。ただ衝動のむくままに、壊した
いから壊す。目的はなく、理由はない。

理想も意志も何もなく、ただ生ける屍として生きてきた。

少しだけスカツとする。その感覚を追い求めて、それが欲しくて。
それしかなくて。

「・・・え、えーつと」

周りに集まった児童も、オジサンも無視して僕は一人ただ隅っこに
いる。

「う、うおっほん！それじゃあ皆！一緒に遊んでくださいアル」

そのオジサンの一言が合図となり、子供たちは開放されたかのごと
く思い思いに遊ぶ。

当然、子供離れした。というか本当に年齢としては一番上だったの
だが、それでも異質なその子供に近寄る人間は誰一人としていなかっ
た。

「う、うーむ・・・」

オジサンだけが困っていたけれど、そんなことは知ったことじゃあ
ない。

塀に寄り掛かって、当時の僕はこう思った。

「なんて平和ボケした場所だろう」

と。こんな自分を好んで拾うくらいだ、もつと殺伐とした世紀末の
ような場所かと期待していたのに。

そんな場所ならもしかしたら自分をボコボコにできるくらいのヤ
ツがいるかもしれない。

そう、期待していた。

僕は期待をしていた。こんな自分を殺してくれるような人間を。
期待していたのだ。

目的はなく、目標はない。そんな人生に意味はあるのかと。

自問しても答えは出ず、なのにそれをやめることはできない。ただ

ただ、心だけが疲弊していく。

せめて、意味が欲しかった。生きていてもいい意味が欲しかった。僕だけが生き残ってしまった、そこに意味が欲しかった。

時間が過ぎて、相変わらず一人だった僕はだけど一人鬱陶しいほどにくつついてくる女の子に出会った。

その子はどれだけ引きはがそうとしても、どれだけ拒絶しても僕の傍にくつついてくるなんとも不思議な女の子で。

「今日は、どこに行くのー？」

「……」

そのあまりの鬱陶しきについぞ僕は根負けした。

会話なんてしない。顧みることもない。だけど、引きはがそうとはもうしなくなっていた。

目的もなくただ町を散策して、目標もなく孤児院に帰る。

「やーだー！まだ遊ぶー！」

彼女には親がいたから、だから帰る家があった。

それでも必死に僕の足にしがみつく彼女に、僕は言ったのだ。

帰れ。お前には家があるんだろうが。ここはお前の家じゃない。

もうちよつと言いつてもものがあつたとは思うが、致し方ない。当時の、いや今だって僕の根本は変わらない、捻くれものの嫌われものだ。

だから、小さい彼女を泣かせてしまった。

「……ん？」

ふと、目が覚めた。

どうやら夢を見ていたらしい。

けど、どんな夢だったかは思い出せない。
んー、まいつか。

いつものように僕は大きく努力もせずに、眠い目をこすりながら辺りを見回した。

オーキド博士の新しい研究所は、静謐さを保ち暗闇が支配している。

「毛布……うわー」

どうやら気を遣われたらしい。疲れてたつもりはなかったけど、船旅と引越して知らず知らずのうちに体力を持ってかれていたのか。意図せず博士の言う通りに宿を借りてしまったことを不満げに思う。

博士に毛布を掛けられる、そんな場面を想像するとうげーつと苦い顔になるけど。

「………?」

そこまで考えてふと、気付いた。

ここには僕とオーキド博士、この二人しかいないはずだ。

「ぐー、ぐー」

そのオーキド博士も、いびきがここまで聞こえてくるほど熟睡しているのがわかる。

だから何者かが動いている気配なんてしないはずなんだ。加えてここはマサラに負けず劣らずの田舎、近所さんは歩いて十分以上遠くだ。

(おいおいおい、まじで泥棒だったり?)

護衛をするときに出た、かもしれないという低い確率の空想が、よもや現実になろうとしているとは。

博士、まじで僕に感謝してくださいね。

「
」
傍で寝ていたポケモン達をボールに収めて僕は再度寝たふりをする。

もしも泥棒だというのなら、こんな田舎の、それも今日入居してきたような家だぞ。目的があるのは確実。

そしてそれは十中八九あれだろう。

研究所の一室、そこはパソコンやらなんやらで固められた部屋の奥にあるポケモン図鑑。

大事そうに三つ並べられたそれ以外、ここに奪う価値のあるものなんてない。

静かに、扉が開いた音がした。

耳を澄まさなければいけない程に小さなその音、どうやらむこうさんは手馴れているらしい。

その後の佇まいから、極限まで消えた気配。

(だけど運が悪かったな。僕相手じゃなきや、騙せただろうよ)

こちらとらありとあらゆる悪事を働いた、悪事のエキスパート。悪事専門のジムリーダー試験とかあつたら主席で合格できるレベルだぞ。君とじゃ、積み重ねてきたものが違うのさ。

「と、いうわけで。残念だったね」

彼が案の定図鑑に手を伸ばした瞬間、僕の腕は彼の首筋にあてがわれる。

まったく、マジで護衛みたいな仕事するとは思わなんだ。

「……誰だ」

意図して低くしているその声に僕は答える。

「おいおい、それはこっちのセリフだぜ。泥棒さん」

「ニューラ……!」

やれやれと被りを振ったのもつかの間、闇夜に紛れていたニューラに一声かける。

「……!?!」

「言つたら。残念だったねって」

そんなあからさまにポケモン出してて、対策しないわけがないだろう?。

ニューラの首筋にはカラカラがこんぼうでがんじがらめにしているところだよ。

「何者だ、貴様」

「さつきも言ったじゃん、そのセリフはこっちのだったっの」
「まったく。泥棒が吐くセリフじゃないだろう。」

この絶対的な状況で、よくまあそんな冷静で敵対心まるだしのセリフが吐けるもんだ。驚嘆に値するよ。

それとも、こっつから逆転できる策でもあるからこそそのその余裕なのかな？

「あー怖い怖い。その前に、なーんか弱みないかなー」
「チツ」

動けないように細心の注意は払いつつ、僕はポッケやらなにやらをまさぐって何か身元特定に繋がるものを探す。

「あら、あんまり物は持たない主義？ハンカチしかねえや」

あとは、ヤミカラスが入ったボールくらいでこれといって特定できるのではない。

「ポケギア以外はね」

ポケギア、ラジオや電話なんかが出来るジョウトで流行っている通信機器だ。

僕が前にいた時はこんなハイテクななかったけど、時代は進むねえ。

「んーつと、どこをどうするんだろ」

適当にポチポチとボタンを押していく、やがて連絡帳のようなペー
ジに行きついたが、その間も少年は抵抗する気配はない。

(もう諦めたのかな・・・?)

だったらいいけど、この静けさは逆に不気味だ。

「えー、何々——。この名前」
そこに連なっていた二人の名前。

その文字を見て、僕は多少面喰い目の前の少年の後頭部を見る。

「君は・・・一体？」

と、そこまでにどうやら僕は時間をかけ過ぎたらしい。
異変に気付くのがちよつとだけ遅れた。

「フツ——」

「こ、これは?」

いつの間にか、周りは“ふぶき”で凍らされていた。

しまった、ニューラの属性は“悪・氷”なんせジヨウトは久々なもので、ポケモンの情報の精度が甘かった。

が、それを差し引いても見事な手際だ。気を取られていたとはいえ、今の今ままで気付かなかった。

「けど残念、最初に言った通り相手が悪かった」

悪いがその手のタイプにはすでに煮え湯を飲まされてるんでね、そう何度もやられるわけにはいかないんだ。

カンナに比べれば、なんてことないわけだし。

「バカな……！」

“ふぶき”で完全に凍らされる前に僕はポケモンで空中に脱出する。

「ウインディ、燃やせ」

空中から眼下に向けて、ウインディの“かえんほうしゃ”が轟々と燃える。

「くっ……！ニューラ！だましうち！」

“かみくだけ”！ウインディ！

ニューラが鋭利な爪で応戦しようとして前に出たところを狙って、ウインディのその屈強な牙でぎっくりと“かみくだけ”。

「つて、あら？」

ように見えたのだけれど、それも一瞬。

ニューラはゆらゆらとその姿を消し、いつの間にか泥棒の少年も窓を割って外を逃げていた。ヤミカラスによって空中へと。

「そうか……」かけぶんしん“だったんだ今の”

これは一本取られた。暗闇という利点を最大限に生かされたな。

ビチャット、かえんほうしゃによって溶かされビチャビチャになった床に着地する僕。

「にしてもなんだったんだ今の」

まあでも無事に凶鑑は守りきれたわけだし、良しとするか。

「……あれ？」

と思つて、僕は凶鑑の安否を確かめるべく確認したのだが。

「一個ない・・・」

・・・これは、どうしよつか。

「ぬわぁにいー!？」

朝一番、怒号が研究所にこだまする。

「博士ー、近所迷惑ですー」

「ご近所さんは近くにおらんから大丈夫じゃ! ってそんなことはどうでもいい!」

そつすかー、よかったすねー。

ゆつくりとソファに腰かけ、お茶をすする僕とは対照的に寝巻がずれ、寝癖を直す暇もなかった博士の動揺は続く。

「わ、わしのポケモン凶鑑が・・・、丹精込めて作った内の一つが昨夜何者かに盗まれたと、そういうのかお主は」

「疑うんなら自分で確認してくださいよお」

「ぐぬぬぬぬ」

うわーお、まるで般若のようなお顔になっておりますよお爺さん。

マジで泥棒にあったとき人はそんな顔になるのかねえ。

「で、その間お主は・・・?」

「おっとやだなあ、ちゃんと応戦してましたよ。ぐーすか寝てた持ち主に代わってね」

一応護衛という名目でお仕事を受けたんだ。受けただけの仕事はしますよ僕は。

にしても起きなかったねえー、窓が割れた時なんて奴さん音に気を遣うこと忘れてたつてのに。

「そうか、それはありがとう」

「あはは、とてもありがとうって顔じゃないんですけどー。写メ写メ」
以前般若な顔は崩すことはない博士、後でナナミさんに送ってあげよーつと。

「さて、じゃ報告も終わったんで僕はこれで」

「な！今帰るといふのかカラー!?!」

「えー？なんですー？これ以上は長居したくないんですけど」

厄介事に巻き込まれるのは御免ですぜ。なんかそんな感じするし。

「それに泥棒の情報は渡したでしょう？赤髪に黒い服、ニューラとヤミカラスをつれたトレーナー」

と、それと情報はまだあるんだけど。ま、そこまででも十分でしょう。

あの時見たポケギアにあった名前。この情報は後々使える気がしてならないですよええ。

「それはそうじゃが・・・」

「これ以上はなーんも出てきませんってー、あ、報酬は指定した口座に振り込んでくださいいね」

最後に一番大事なことを念押しして僕はトントんと靴の調子を整える。

「わしはこれからその犯人を追う、お主は？」

「あー、まあ、どっかで見かけたら連絡くらいはしますよ。あ、ボロボロにしちやった研究室の弁償代は引いておいて構いませんので」

じゃ、とあつさり僕は研究所の扉を閉じた。

不満そうな博士の顔を最後まで見送りながら。

そうして僕はやっと目的のために生きられる。

我が人生の目的のために。

「と、その前にちよいと寄り道はするんですけどね。久しぶりに会いに行くか、“ジョバンニ先生”に」

それもまた、次のお話で。

36話 「劇的な再会とかホントいらない」

「オ、それはすごいアルねえ」

オーキド博士の元を出発して数日。相変わらずなんの変わり映えもしない、僕のもう一つのルーツ。

ボロボロな壁に囲まれたその孤児院に、僕は訪れていた。

「おっと」

少し寄っただけでもボロボロと崩れていく。ここだけ世紀末かよ。

「ホホホ、それは良かったアル」

子供たちと談笑しているのはこのボロの持ち主、曲がりなりにも孤児院の院長だ。

見た感じただの太った中年のオジサンだけだな。

「ジヨバンニ先生、いい加減にインターホンくらいは付けられようです？」

「オ、カラー！久しぶりアル」

これじゃあどこをノックしていいのかもわからんし、ていうか、どこが玄関なのかもわからんよ。

ブンブンと両手を握って振り回すジヨバンニ先生に冷やかな対応をしながら、僕は辺りを見回す。

「また、子供が増えましたね」

「そうアルよ、最近、行くところのない子供やポケモンたちまで預かっていたら」

この有様で……。

頭を抱える彼に、僕はため息しか出ない。

元々はただの塾だったここを、ジヨバンニ先生のもはやそれは趣味を超えているレベルで子供たちを連れ込んでいるせいで、経営は圧迫しこの惨状を生み出している。

「カラーから援助してくれるお金で」なんとか保っている状況アルよ」

不用意なその一言に、僕は舌打ちしながらジョバンニ先生を蹴り上げる。

「グフっ！」

「そのことは口に出すなつつつたよなあ？ええ？てめえは言われたことも守れねえのかよああ？」

周りの子供には聞こえないように、見えないように影でこそこそと締め上げる。

裾の短い服からミチミチと悲鳴が上がるも気にはしない。

「お・・・オ、も、申し訳ないアル、だ、だから、手を離して」
マジで苦しそうにするジョバンニ先生、この人はいつまで経っても成長しないというか本当に考えなしというか。

「いてっ」

なんて心の中でため息をついていると後頭部に鋭い痛みが。

なんだなんだと振り返れば、見るからに怒っているガキが群がっている。隠していたつもりだが運悪く見つけられてしまったようだ。

そして、どうやら僕は小石をぶつけられたらしい。

「こら！先生をイジメるな！」

「そうだそうだ！手を離せ！」

「先生！大丈夫!?!」

・・・なるほど。どうやらここの子供たちはとても勇気があるらしい。これもご高名なジョバンニ先生の教えのたまものですかね。

「・・・おい」

「な、なんだよ！こつちくんな！」

「やんのか！」

「ね、ねえケンちゃん。私怖いよ」

僕ははずんずんとその子供たちの元に歩いて行って。

「いてえ！」

「なにすんだ！」

「トモちゃん！ユウちゃん！」

両手で二人にデコピンを食らわせた。

ただし、ただのデコピンではない。最大限威力を發揮するにはどう

すればいいのか、大人が真剣に考えた結果の超く痛いデコピンだ。

「人に石を投げるのはダメだと、お前らの先生は教えてくんなかったのか？」

「う・・・うわーん!!」

「トモちゃん！ユウちゃん！」

ちよつと脅かし過ぎたかな？僕の目を見るや子供たちは否や泣き出して走り去って行ってしまった。

「おいおい、そこで逃げちやあダメだろう？」

君たちのジョバンニ先生置き去りだよ？いいの？

「本当に申し訳ないアル。ウチの子供たちが」

「別にいいけど、石を当ててきたまでは中々良かったんだけどねえ」

子供からすれば、突然現れてジョバンニ先生をシメる僕は恐怖の対象以外の何物でもなかったはずだ。

それでも手を出して大切な人を助けようという心意気は誰にでもできることじゃあない。特に僕とか絶対やんないし。

「そろそろさ、なんでもかんでも拾ってくんの辞めろよ。アンタの両手は何もかもを救えるほど大きくはねえよ」

地べたに伏しているジョバンニ先生を引き上げて、僕は思わず口を出す。意味ないとはわかってはいるんだけど。

「ハハ、いやもうまったくその通りアルよ」

僕の言葉に怒るでも納得するわけでもなく、ただ困ったように笑う。いつものことだ。

「でもね、目の前にいたら手を差し伸べてしまうアルよ。これはもうしょうがないことアルね」

子供たちが遊ぶ広場を温かな目で見ながらジョバンニ先生は言った。これもまたいつものことだ。

「救えるものもあつて、救えないものもある。そんな当たり前をアンタは知るべきだと僕は思うけどね」

そんなため息交じりの言葉もジョバンニ先生は笑って流した。

分かっただけでもなお続けているのか、それともただの新生のバカか。僕にはわからんが。

それでも、そんな彼の人間性に救われている人間が確かにいるのだからこれまた面倒なのだ。

「姉ちゃん！アイツ！アイツだよ！」

「ワルイやつなんだよ！やっつけてよ！」

あ？なんの騒ぎだ？

と、僕はそれきり会話を終わらせ騒々しくなってきた方向を見やる。

「えー？お姉ちゃん、戦うのは得意じゃないんだけど・・・」

「げ」

そこには、今一番、会いたくない人間がいた。

僕が彼女と会ったのは、12の頃だった。

少年と大人の狭間で揺れるなんとも中途半端な年の頃、彼女はやってきた。

元々が塾という体裁を保っていたその孤児院は、僕のような家なき子もいれば彼女のように親が忙しくて預かっているだけという人間もいる。

「ねえねえ、今日はどこに行くの？」

「うるさい、ついてくんない」

僕の何がそんなに面白いのか、瞳をキラキラと輝かせた彼女は僕にくっついてくることを至上命題にしたかのようにしっこかった。

前回にも述べた通り僕はやがて彼女に根負けし、けれど近づくわけではないなんとも中途半端な距離感で。

そして、事件は起きた。

事件と大袈裟には言っただけけれど、現実起こったのは些細なことだ。

いつものように喧嘩をして負かせた相手が少し年上を引き連れて報復に来た、ただそれだけの話。

「やめてよお！痛いよお！」

ただそれまでと違うのは、相手は的確に弱みにつけこむタイプでそしてその弱みを僕が持ってしまったこと。

端的に、彼女は巻き込まれた。ただ僕の傍をうろちよろしていただけだったがそれでも敵には僕が仲良くしている妹のようなものに映ったことだろう。

（それみたことか、だから僕は最初に言ったんだ。ついてくるなど）別にその行為に僕は大したことも思わなかった。敵のそれはただの戦法だし、似たようなことは自分もやる。

大事になんかしていないし、大切になんか思っていないかった。

「離せよ」

はずなのに、出てきた言葉は思っていたのとは全く違った。

煽って煽って、敵が冷静さを失ってくれば御の字。それくらいの感覚だったのに、口から漏れ出たのは意外にも怨嗟の念で。

安い挑発を、柄にもなく買ってしまった。

「はっ！カラカラと二人で何ができる!?!」

そんな自分にまたイラついて、僕はただ憂さを晴らすように壊した。

どうやってやったかは記憶が定かじゃあない、頭も殴られたし色んなところを怪我したから。

ただ覚えているのは僕以外をぶちのめしたごとと、彼女の泣き顔くらい。

「……カラー？」

「……」クリスタル」

そんな彼女の泣き顔と、目の前にいる少女の顔がどうしようもなくリンクした。

あー、ヤダヤダ。その顔がまた涙でいっぱいになるその瞬間も。

何年もあっていなかったというのに、一目見たわけでわかってしまう自分も。

「カラー!!!」

「ぐえぶー!」

堰を切ったかのように走り出して、僕のお腹にタツクルを決めてきやがったこの少女。

ツインテールの黒髪と、真面目が絵を描いて歩いているかのような雰囲気兼ね備えた少女。

クリスタル。それが彼女の名前だった。

「なんで今まで連絡してくれなかったの!?!」

「おいおい、開口一番どっかの誰かと似たようなことを言わないでくれよ」

マジ虫唾が走るからさ。

「で、クリス。なぜ君がここに? って質問より先に、そこをどけ」

まったくいつまで乗っかってるつもりだい? 君ラグビーでもやってたの? ってくらい見事なタツクルで僕の背中は地面と隣り合わせなんですけど?

「うううううううう!!」

「いやうめき声上げてないでどいてくれ」

一体全体どこに委員長キャラを置いていったんだろうな、真面目だけが取り柄みたいなものだろう君は。

苦しいほどに僕の体を締め上げる彼女はやがて顔だけを上げて抗議した。

「急にいなくなっちゃうから! 心配したんだよ!?!」

「やっどどいたよ……」

ガバリと起き上がったかと思えば、その後も言葉の嵐。どこに行っていたやら、なんで連絡しなかったやら、なぜ今帰ってきたのだやら。こつちに回答する隙間すら開けないマシンガンなそれに、僕は辟易として言葉を返す。

「ここに来たのは気まぐれだし、君に連絡しようなんて思ったことないし、僕忙しいからこれで帰るし」

「なんで!？」

「さつきからうるさいんだけど君」

まったく、せっかくエリカちゃんには絶対見つからない土地に来たつてのに君に見つかったら意味ないんだよ。口うるせえから。

だからさつきと現状だけちらつと見たら帰るつもりだったのに。それもこれもジョバンニ先生が余計なことを口走るからだ。

「でも・・・よかった・・・元気そうで」

六年ぶりだね、とクリスは未だ瞳からあふれる涙をぬぐい去って感慨深げにそう言った。

「どう?変わってないでしょう?」

今度は僕がジョバンニ先生を引き上げたみたいに、先に立ったクリスが「ごめんね」と僕の目の前に手を差し伸べる。

が、それを払いのけ僕は一人で立ち上がった。

君の保護を受けるなんて例え些細なことでもまっぴらだ。

「もう、相変わらず素直じゃないんだから」

「君はもうちょっと人間観察したほうがいいと思うよ」

どこをどうとらえれば今の素直じゃないなんて感想を抱けるのか皆目見当がつかないよ。

ちよつと怒ったように言うクリスに呆れながら僕はズボンについた砂を払い。

「さて、もう僕はいくよ」

「ええ!?!もう!?!」

だからさつきから何度もそう言ってる。

顔だけでそう訴えると、クリスはまた地団駄を踏み、泣きそうな顔で会話を続ける。

「じゃ、じゃあポケギアは!? 持つてる? ば、番号とか、さ!」

「持つてないし、例え持つてたとして教えねえよ」

「な、なんでよ!」

理不尽極まりない怒られ方をしている気がするんですけど? そんなん僕の勝手な気がするんですけど?」

「じゃ、じゃあさ! ほら! 懐かしいんじゃない? ここ、全然変わってないから」

なんとか引き留めようとしているのがスケスケだ。君は本当に策を練るといのが向かないな。

ポケモンを捕まえるとき以外はね。

「変わってないっていうか、変えられてないって言った方がいい気がするけどねこれは」

こんな物好きなどころに金を出すところなんて僕くらいしかないのもそうだが、そういう努力を目の前の子供と戯れている男ができないのが最大の問題だな。

「そ、そんなことないよ。安心してポケモンたちと遊べて、学べる場所があるっていいことだと思うの」

そう言つて、彼女は広場の方に目を向ける。

「きゃあ!」

と、狙いすましたかのようにボロの壁が壊れ子供が下敷きになりそうになっていた。

「安心して・・・なんだって?」

「・・・・・・・・」

これにはさすがのクリスも苦い顔するほかなかったが。

「で、でも! 私はこちらが大好きなの!」

にしてもひどい。ボロボロさもそうだが、改修工事をする金がないというのが一番ひどい。

けれど、僕の金でできることなんてたかが知れている。一番大事な食で精一杯でとてもじゃないがそんなところまで回らない。

どこかにこんなボロ家を改修してくれる物好きな金持ちがいればいいんだけど・・・・。

「いや、いたな」

そんなおつきさんが、一人だけ。

「なあ、クリス。君さあ、ここには働きに来ているのかい？」

「え？なに？突然」

「いいから答えてよ。面倒な前置きはしたくないんだ」

簡潔にいこうぜ、君と喋っていると疲れる。いろいろと。

「えっと、働きについていうかボランティアみたいなものかな」

「そう、じゃ、ジヨバンニ先生。コイツ、今日からここ辞めるんで」

「ええ!? きゅ、急にそんなこと言われても困るアル」

「クリス、君さ」ゲット 捕獲の専門家スペンチャリスト「なんて呼ばれてたよね」

「う、うん」

ジヨバンニ先生の困った声は無視して、僕は一人で話を進める。

ふむふむ、合致するじゃないか。あのオジサンの目的とぴったり

ね。

「クリスタル、君に仕事を紹介しよう」

「・・・ふえ？」

にやりと意地の悪い笑みを浮かべて僕はクリスにそう告げた。

そして物語は緩やかに次のお話へ。

37話 「勘違いと勘違いと勘違い」

「博士！博士！おった！おった！おりましたで！」

朝っぱらから開口一番、パソコンからの画面越しで大きな声を喚き散らしているのは。

「なんじゃ急に」マサキくん」

マサキ、かの有名なポケモン転送システムを開発した科学者。

天然パーマが目立つ彼の慌てぶりに寝ぼけたような顔で答えているのは、こちらもかの有名なポケモン研究の権威オーキド博士。

「おったって、何が？」

「博士が探してた人材ですがな！新凶鑑のデータ集めをしてくれる人材！やつてもいいつちゅう連絡が来たんです！」

「ブーっ!!」

博士はその言葉を聞いた瞬間、モニターに向かって飲んでいたコーヒーを吹き出す。

それもしかたない、なぜならこの数日。それだけをずっと探していたのだから。

三つの新凶鑑の内、一つは奪われ行方知らず。

一つは道中で出会った少年に半ば衝動的に手渡してしまった。

その二つの凶鑑が埋まることが期待できない以上、残る一つはなんとしてでも埋めたい。研究者魂として。

でないと、わざわざこのジョウトまで移り住んできた意味がない。

そう思つて、手当たり次第に情報を募っていたところだったのだ。その一つであるマサキからの連絡は博士にとって願ってもない朗報だった。

「ですがね、これがどーにもきな臭いんですわ」

「とうとうっ」

「なんでもゲット捕獲のスペシャリスト専門家つちゅーことらしいんですけど」
「うってつけじゃないか！」

凶鑑を埋めるためにはこれ以上ないくらいの人材だ。俄然前のめりになって博士は話を聞く。

「しかしですね、相手方の名前も年齢も写真もなーんもない。おまけに引き受けるには条件がある言うて、つまりお礼が欲しいらしいんですわ」

「むむむ」

マサキの困ったような声も頷ける。それだけ秘匿されているとなると、なにかあるんじゃないかと勘繰りたくもなる。

「いちおう、差出人の名前はあるんですけどね」

「なんじゃ、あるんじゃないか」

相手の情報は何も無い、そんな雰囲気で喋っていたのでオーキド博士は拍子抜けを食らう。

「ええ、ですがどーやら仕事を引き受けるのは差出人じゃあなくて、その紹介人らしいんです」

「・・・ますますきな臭いな」

「なんでもその紹介人は家がビンボーで家の修理費が欲しくて働いてるらしいんですわ」

うーむ、と、オーキド博士は腕を組んで考える。条件としてはこれ以上ないくらいの好物件だ。

が、正直冷やかしなどの危険性がないとも言え切れない。

金だけもらってポイされるわけにはいかないのだ。

「して、その差出人の名前は？」

「ああ、それですね・・・えっと」

それでも一応、手元にある情報は聞いておこうと博士は尋ね、ガサゴソとマサキは貰ったメールを探る。

「あ、あったあった。名前は〃カラー〃って書いてますわ」

「・・・なんだって？」

その憎らしいほど聞き覚えのある言葉に、オーキド博士の頬は引きつく。

「ですから、〃カラー〃っていうらしいですわ。この差出人の名前は」
「・・・なるほど」

頭を抱えるオーキド博士にマサキは首を傾げるばかりだが、博士の脳内には今、意地の悪い笑みを浮かべているカラーの顔が浮かんでい

た。

「で、どうするんです？」

「行こう、なんせ今は藁にでもすがりたい気持ちじゃからな」

もしかすると、藁なんかよりよっぽどひどい雑草かもしれないとも思いつつ、オーキド博士は送られてきた地図と待ち合わせ時間を見てこう叫ぶのであった。

「あと30分しかないじゃないか！あの男めえええ！」

「ふー、これでよし」

「なにをしたの？」

場所は変わってカラー、一行。

「なあに、ちよいと仕事を手配しただけさ」

「ね、ねえ。お仕事って、私のできることなの？」

不安そうに揺れる瞳を持つのはクリスタル。握った箒をぎゅつと握りしめてカラーの方を見つめている。

「大丈夫さ。むしろ君にしかできない仕事だろう」

凶鑑を埋める、そのためならあの博士はこの塾の改築工事なんてお茶の子さいさい。

いやー、なんていいことをしたんだろうねえ僕ってば。こりや来世も安泰ですわ。

「ま、詳しくはこの後来る爺さんに聞くといい」

僕の仕事はここで終わり、なお困惑しているクリスに説明する役目

は僕じゃあないね。

「じゃあね」

今度こそ確実に、僕はその場を去ろうと歩き始める。

「あ、うとう、え、えっと・・・」

何が何やらわからないクリスは困惑しつつも、僕の言ったようにここに残って爺さんを待つらしい。

本当に律儀というか、真面目というか。

それでも何かを言いたいらしくクリスはワタワタしている。

「ま、また会えるよね？」

心配そうに最後に尋ねるのがそれかよ。

まったくもって、この少女は僕を勘違いしている節があるなあ。

「・・・さあね、神様にでも聞いてみてよ」

だから僕は突き放すようにそう言っつて、ようやくもって用事ともいえない用事を片づけることができたのだった。

さてと。

僕はイエローに書いてもらった似顔絵、その紙を一枚握りしめてしらみつぶしに地方を旅していた。

クリスマスに仕事を託してから数週間。風の噂でどうやら仕事を受けたいらしいことは聞いたけれど、その後のことは僕の預かり知るところではない。

「ちっ。当たんねえなあ」

爆音で流れる品のない音楽とどこか後ろ暗い雰囲気支配しているここはそう、ゲームセンターだ。

眠らない夜の街、コガネシティで僕はスロット相手に格闘していた。

ここジョウトでの情報散策もある程度の目星を付けたところでの小休止。

「おいおい君たち、何を白けているんだい？心にも栄養補給は必要だろーが」

なんでこんなところで油を売っているのかってえ顔している僕のポケモンたちに、懇切丁寧に教える。

「だあつてさあ、今まで使ってたお金の使い道が消えっちゃったんだもん。ちよつと散財したつて罰は当たらんですよ」

あの後一度、こつそりと工事現場を見に行ったことがあったがそりやあもう立派なもんだつた。さすがはオーキド博士、権威の名は伊達じゃないね。

それが果たして心からの善意なのか、僕の名前が関わっているからという理由なのかは定かではないが。僕としては一石二鳥の収穫だつたからね、どつちでもいいよ。

というわけで今までのお給料の使い道の一つが消えたことで今僕はちよつとした小金持ちである。

「とか言つてたらやべ、金が足りん」

こういうところつてのはどうしてこう金と時間がすぐになくなるんだらう。精神と時の部屋かな？得られるものは借金だけだけどさ。

ピーピーと残量を示す数字がゼロで点滅しているのを眺めながら、僕はしやーなしに席を立つ。

「こらこら君たち、だから言つたじゃんつて顔しないの」

カラカラに至つてはもはや諦めているのか僕の方を見てすらいない。

とはいうものの、確かにまあちよいと遊び過ぎた感は否めない。自分が今プー太郎だということを忘れていた。

「にしても人の少ないゲーセンだなあ」

さつきから独り言ばかりだっというのはご了承頂きたい。

「お、話し相手発見」

なんて言っていると警備員の格好をした恰幅の良い男性が現れたのでちよいと話かける。

「む、なんだ貴様。怪しいやつめ」

開口一番ひどい言われようだった。お客にその態度って、この会社は一体どういう教育をしているんだ。

別に僕が年がら年中コソ泥のような雰囲気なわけでは断じてないよね？

「おいおい、警棒に伸びたその手は引っ込めてよ」

唐突すぎて両手をホルルドアップするしかない。今更ながらに気付いたが、妙にピリピリしている空気がゲーセンには流れていた。

自分はただのお客だということを懇切丁寧に教えると、警備員は。

「なに？さつきほど客は全員立ち退いたはずだが」

聞くところによれば、今日はナントカつていう怪盗がこのビルにあるお宝を盗むという予告をしたらしい。

ゲーセンが入ったこの総合ビルは広い。運良く見過ごされたのだろう。

そう、運良く、だ。

「なるほど、なるほど。ふむふむ」

「わかったら君もさつきと出ていきなさい。出口までは案内するから」

「はーい」

聞き分けの良い子供のように返事をして僕は警備員の後ろに入る。

「ぐっ……!?き、貴様……!？」

「いやあ、すんませんねえ。良いこと聞いちやったもんで♪」

カラカラのこんぼうで「えいやっ」と相手の意識を刈り取る。

これは神からの啓示だろうか、金欠になったとたん金策が向こうから裸で飛び込んできた。

こりや抱いてやらねば失礼に値するってんで、僕は決めましたよ。

「そのお宝、僕が代わりに頂戴しよう」
いそいそと警備員の服を借りて、僕はそうつぶやいた。

ふむふむ。

なるほど、確かに先の警備員が言っていたことは嘘ではなかったようだ。

警戒態勢という名にふさわしく、数多の警備員が巡回している。

(おーおーおー、それじゃあお宝がどこにあるのか教えてるようなもんじゃん)

それだけ人がいれば自然、流れというものが出来るもんだ。

視線、人の動き、呼吸、会話。

その全てから推測するに――。

(ブーンゴー)

不自然にガードが堅い部屋、そこにお宝と思しきものはあった。

思わず小さく呟いてしまったが、問題はないだろう。なにせ、ここは天井裏。誰かにばれる危険性は少ない。

ほら、古来から怪盗は天井裏に忍ぶって相場が決まってるじゃん？

「……しろいきり」

部屋の中には人は人つ子一人いなかった、ということはなんかしら罠を仕掛けているのは明白。

排気口からすつと顔だけをのぞかせ、しろいきりをばら撒く。

はいはい、赤外線センサーがばっちり見えちまってます。

ダメですよー、罠ってのは気付かれた時点で効果ないんですからー。

こんなこともあるのかと持っていたゴーグルをつけ、僕はお宝へと手を伸ばす。

(もー……ちよい……)

赤外線を避けながら、体をひねり僕は腕を目いっぱい伸ばして四方をガラスに囲まれたソレに手を伸ばす。

そーいやお宝って何なんだろう。金の延べ棒とかがいーなー。

なんて、あまりにもザルな守備に気楽さを全面を押し出している
と。

「っ!？」

指がガラスに触れるか触れないか、そんな一瞬の隙に風を切る音が聞こえた。

ヒュルヒュルと高速で飛んでくるソレを間一髪で避け、僕はソレが飛んできた方向を見やる。

(おいおいおいーなんじゃあ今の！)

一瞬見えたそれが、クナイのようなものに見えたのは気のせいかな!?

確実にこここの警備レベルを超えた術義に驚嘆しながら、その先には。

少女がいた。

まだ色濃く残ってる霧のせいで詳しい全体像はわからないが、それが少女だということはわかる。よしよし、僕のセンサーは今日も感度良好だ。

「・・・」

バチン!

「・・・なんだあ?」

と、大きな音が鳴ったと思ったら突然の停電。どうやらセンサーまで消えたらしい。

これ幸いと僕は天井裏から地面に飛び降りる。

無言で佇む目の前の少女に気を使いながら周りを見やる。彼女がそんな様子を見せたとは思えなかったからだ。

「となるとまあ陽動ですわな」

「っ!？」

後ろからのクロバットの“きりさく”一撃。それをこちらも同じく“クロバット”で凌ぐ。

ジヨウトに来るまでの間で最終進化したこのクロバット。四天王との戦い以来、ますます僕の傍を離れなくなつて鬱陶しいが、まあよしとするさ。

「わかるよー、わかる。得体の知れない敵と真正面から戦いたくなんかないわな」

その気持ちは凄くわかる。だって僕も一緒だもん。

加えてこの霧だ。視界の悪さを利用しない手はない。

「最初に投げられたあのクナイにはスーパーボールがくつついていた。僕の反射神経なめんなよ」

「フツ」

「ああん？」

クロバットの刃が罅迫り合いを起こし膠着状態だというのに、なんだその笑いは。

しかしその疑問も数秒後には晴れることになる。

「あーれー？」

なんです？天地が逆転しましたけれど？

自分が宙ぶらりんでつるされていると気づいたのはそのさらに数秒後だった。

見れば足元には幾重にも重なった白い糸が見える。

「アリアドス・・・いつの間に」

「お主が喋っている間に、策は打たせてもらった」

おつとようやく喋った。なんだ無口なクールキャラを狙ってるのかと思つたよ。

「けどごめんね、策なら僕も打ってるんだ」

ただし、愚直な策だけだね。

「カラカラ！ みねうち！」

「なに!?」

しろいきりから唐突に現れた白い頭蓋骨のそのポケモンは、少女の首を狙つて獲物を振り抜く。

が、しかし。間一髪でそれは相手のクロバットに阻まれてしまった。

「ちよ！何やってんのさ！このバカ！」

あの一瞬で打てる手なんて一つしかなかったってえのによお！

「フフ、決まったな」

「しゃあねえ、ウインディ・・・！」

「させん！」

「ぐえっ！」

腰に手をかけたとたん、アリアドスは待つてましたと言いたげに勢いよく糸を吐き出し簧巻きが一丁完成する。

こうなつては動かせない。

「・・・フフ、中々筋はよかった。一警備員とは思えなかつたでござるよ」

「・・・」

「さて、そろそろ他の警備のモノも来る頃か」

「あーあー、やだねえー、ヤダヤダ」

「む？」

「そうやって、すぐに勝利の余韻に浸るのは」

バツン！

電気系統が回復したのだろう、タイミングよく明かりが一斉に照らし出す。

「足元救われるぜ」

「なにっ!？」

そこには、コロコロと転がっていく一つのモンスターボールが。

「気付かなかつたかい？いつの間にやら僕の後ろにクロバットがいなかつたことにさ！」

開閉スイッチが押され、勢いよく飛び出してくるクロバット。

「くっ！クロバット・・・！」

「おっそいね！さつきキミのクロバットが喰らつた技は“みねうち”！体力を極限まで減らす技だ！」

体力満タンの僕のクロバットと、どっちが早いかなんて明らかだ！

“つばさでうて”！クロバット！

「ぐううううう!!」

その軽そうな体重はクロバットの技で軽く吹っ飛び、痛そうな音と共に壁と激突した。

「いやー、まじ危なかった」

ビリビリとクロバットに糸を割いてもらって、晴れて僕は自由の身。

「とと、さつきから警報が鳴ってらあ」

集中していたので気付かなかったけど。うかうかしているとお宝を取り損ねちゃう。

「さーつてと、お宝ちゃんは何っかな」

デデン！

おおきなしんじゅー！

「いやいらねえ!!」

いらねえなあ！おおきなしんじゅー？それも一個？しよぼくねえ!!？もっとお宝って形容するからにはさあ！骨董品とか美術品とか、わかりやすく金とかにしてくれよ！売ったって3000円くらいだろこなんなん！

「ふう、此度の戦闘。中々に白熱した戦いであった」

「つてこつちもなんか復活してるしよお！」

なんだよなんだよ、骨折り損のくたびれ儲けてこのことだったんだな！

「お主、一介の警備員にしておくのはもったいないなあ」

「はいいい？」

いやまあ確かに警備員の格好はしてませんが、オタク泥棒でしょ？なに親しげに話しかけちゃってるわけ？

「あー、なに？コレが欲しいからお世辞言ってるの？いいよ、あげるよ。僕もう新しいゲーム買ってもらうから」

「は？なにを言っているのだお主・・・というか、お主・・・」

「ちよ、なに？」

急に明かりがついたせいか、まだ視界がぼやけている様子の彼女はよく目をこすりながら僕の方をガン見する。

「やはり・・・お主・・・いやアナタは」

「侵入者だあ!! ってあれ?」

彼女の顔が段々と興奮と驚愕に入り混じった顔つきになってきたところで、空気を読まない警備員共が雪崩のように押し寄せてきた。つかおっせーなあ。本当に仕事してた?

「む?なんだこれは、防犯訓練は終わったと思ったのだが」

防犯訓練?

「・・・?」

目の前の彼女と、警備員共の混乱した顔。そして彼女が漏らした一言でなんとなく察しがついた僕は急いでポケモンたちをボールにしまう。

なるほど、防犯訓練。なるほど、なるほど。

そーいうことだったのね。

「それじゃ、アディオス!!」

「あー! アイツ! 俺を後ろから殴って気絶させたやつ!!」

「なにいいいい!!」

脱出成功。

窓を飛び割って、クロバットを背に滑空する僕は冷やあせをぬぐった。

あぶねー、なんもしてないのに冤罪で捕まるところだったぜ。お宝は盗んでないってのに。

後ろを振り返ればわたたと世話しないビルの一室が見える。

やっぱあれだね、無計画な行動ってのはリスクと隣り合わせだね。

「少し、話したいことがあるのですが」

「いやー、マジでマジで。奇跡的なニアミス具合だったぜ」

「あの・・・良いでしょうか?」

ん?

「・・・なーんで並走して付いてきちやっつんの君?」

横を見れば先の彼女が、同様にクロバットで並走していた。

そして、物語は緩やかに下っていくことになる。

それもまた、次のお話で。

38話 「仲間になりたそうにこちらを見ていた」

「あの、良いでしょうか・・・?」

「へ・・・?」

なんやかんややって、僕は今、クロバットでビル群を滑空しているところ。

泥棒は未遂に終わって、僕はまだ善良な市民であるはず。こんなところまで追ってが来るなんて予想の範囲外だ。

「少し、少しでよいのです。お話をさせてくれませんか?」

不測の事態すぎて焦っていたところ、目の前の少女は伏し目がちにそう言った。

今まで暗闇で戦っていたために少女ということくらいしかわからなかったが、よくよく見れば奇怪な格好をしている。

黒髪を後ろでまとめ、口元を隠すマスク。全身網タイツに黒のスカート。

そう、まるでクノ一のような恰好をしていた目の前の少女はなおも口を開いた。

「お願いです・・・」

クロバットで夜の街を飛びながらとはとても思えない話の内容だが。

なんとなく、その少女のしょんぼり具合が凄まじかったので僕はわざとらしくため息を一つついて。

「わかったわかった。話を聞こう」

「ほ、本当ですか!」

根負けした僕に、少女の表情は見る見るうちに晴れていく。

「で、一体全体、僕に何の話があるってんだい?」

ビルの屋上、そこに取り敢えず着地した僕たちはクロバットを撫でながら会話を続ける。

ちらと少女の方を見れば、同じようにクロバットを労わりながらど

う話を切り出そうか、そう思案している顔だった。

「あの、拙者の顔。拙者の顔に見覚えはありませんでしょうか」

「おいおい、恰好だけじゃなくて一人称まで忍者なのかよ。なに？甲賀とか伊賀の生まれなわけ？」

「なんて茶化せるような雰囲気ではまるでなく、僕のそれは心にしま

う。真面目、ともすれば泣きそうな顔で僕の目の前に自身のご尊顔を差し出す彼女を僕は不思議に思いつつも記憶を辿る。

「・・・うーん。見覚えかあ・・・」

僕とすれば珍しく真面目になってるのは、多分意外とマスクの下が美少女だったからだろう。

見覚えがあるかといわれると、あるようなないような。そんな曖昧な答えになってしまう。

見覚え、というよりはなんかデジャヴというか似ている人を知っているかのような。

「君、誰か有名人に似ているとか言われる？」

「は・・・有名人、ですか？」

「もしやテレビで似たような人を見たとかそういうことかと思ひ質問するが、どうやら的外れだったらしい。彼女は困惑していた。

「まあ、この稀代のテレビっ子と言われた僕がパツと出てこないんだからその線は薄いかな。」

「となると、なんだ？」

「あの、有名人とは少し違いかもしれませぬが、私の名前は“アンズ”」

「ああ、そう言えば自己紹介もしてなかったね。僕の名前は・・・あ、ねえ、これで名前聞いてさっきの泥棒未遂を逮捕するとかそういうパターン？」

「あまりにも不可思議なことに巻き込まれているので思わず聞いてしまった。もしそうならさっさとトンズラせねばなるまい。」

「が、それは杞憂に終わった。」

「い、いえ。そうではありませぬ。私の名前はアンズ。前セキチクジ

ムのジムリーダー」

ん？最後の一言で、もやつとしていた何かが晴れそうなそんな感覚に陥る。

「キョウ」の娘であります」

「……………マジ？」

思わず目が点になる。開いた口が塞がらないとはまさにこのことか。

キョウ、ロケット団幹部の一人。忍者のような成りで毒のエキスパート。僕の元上司。

言われて見れば、似ているような気がせんこともない。いや、似てない、か？

「ふむふむ、へー。ほー」

「あ、あの……………」

「ああ、ごめんごめん」

結構驚いたために、ジロジロと見過ぎた。失敬失敬。

「お父さんは？今どこに？」

「それが……………拙者にも」

一年前、四天王とのスオウ島での戦いでキョウ様は行方をくらました。生死すら不明で。

まあ、あのキョウ様のことだ。ちよつとやそつとのことでは死なないと思うが。

マチスさんもナツメちゃんも、キョウ様のことをさほど心配していない様子だし。

まあ、娘さんは心配だろうけどね。

暗い表情になっていく彼女を見て、同情、なんてしませーん。

「で？そのキョウ様の娘さんが僕に一体何の用？キョウ様の行方ってんなら僕に聞いたって無駄だよ？」

「あ、いえ、それもあるにはあるのですが」

ん？どーにもこーにも歯切れが悪い。

「あの、一年前のこと。もし、違っていたら違うでいいのです」
ただ、ただ確かめただけなのです。

と、彼女はなお神妙な面持ちでそういった。

「二年前、セキチクの町を襲ったポケモン軍団。その戦時下の渦中に貴方様はおられましたか？それが、それがどうしても知りたいのです」

今までで一番力強く、彼女は僕の間を見てそう言った。

「・・・ああ、君の言う通り。確かに僕はそこにいたけど」

それがなにか？そう言いかけて、アンズちゃんの反応に押しとどめられる。

「やはり！やはり！あの時、”拙者を助けてくれた、命をかけて助けてくれたのは貴方でしたか”!!」

急に肩を掴まれ、涙ぐむ彼女を僕はただ見ている。

何を勘違いしているのか、まったくもって僕にはわからない。

「そうか、アンズちゃん。君はあの時、崩れ行くジムにいて、僕に助けられたにもかかわらず逃げていった女の子だね」

「う・・・」

少々意地悪な顔つきといい方になっていたかもしれない。けれどいいだろう？あれマジで痛かったんだからさ。

なるほど、どこかに感じていた既視感の正体はわかった。僕としてはもうすつきりしたのでここでお別れで全然いいんだけど、アンズちゃんのほうはそうはいかないらしい。

「そ、それは事実です。拙者は、あの時怖くなって逃げてしまいました」

なに？それを謝りたくってジョウトまで来た？

いや、それはないな。僕に会ったのは本当に偶然だろう。彼女のここまでの反応がそれを物語っている。

「うん、まあ、だろうね」

「しかし！あの時の自分を、拙者は恥じ、そして鍛錬してきました！今

まで！」

必死、まさに必死の形相で彼女は伝えようとする。

別に謝ろうが、そうじゃなかろうがどうだっていいんだけどさ。

「要領を得ないなあ、本筋を話そうぜ」

今まですつぱりと忘れていたくらいだし、僕としてもそんな昔のことをネチネチ言うような小姑のような真似はしない。

だからさつと本題に入ろうと、僕は興味を失くしながらそう言った。

「・・・拙者は今、道に迷っております。鍛錬をして力を付けて、しかし！その力の使いようが分からない！」

「ふーん、で？」

「父上には仕えるべく主人を探せと言われてきましたが、それを探しているうちにジョウトまで来てしまった。自分のジムも放つておいて」

ん？自分のジム？

大体話の終着点は見えたので聞いているフリをして今晚の夕食のことなんか考えていたところ。

最後の一言が引つかかった。

「自分のジムってなに？」

「え？ああ、継いだのです。父上のジムを」

「つてーと、つまりなにかい？今、セキチクジムのジムリーダーって君？」

「はい」

はい、親子そろってジムリーダー？ひえー、エリートっすねー。

まあ考えて見ればずっと空きにしておくよりかは、さつさとジムリーダーを決めた方がいいに決まっている。

そう言えば、忘れそうになるけれどナツメちゃんもマチスさんもジムリーダーなんだよなあ。全然そんな感じせんし、マチスさんに至ってはアノ人ジムにいる時間なんてあんの？って感じなんだけど。

にしてもちよつとその情報にビビりながらも、取り敢えず最後の一言までは黙る。

「・・・今、拙者の力を使うに値する人物。それは貴方様しかおりません！私の命を救ってくれた、貴方様しか！」

大方、この話の核にはたどり着いた。

つまりはこう言っているのだ。

“自分の主になってくれ”と。

「うへえ・・・」

頭にその言葉を描いた瞬間、苦いものを噛んだ、そんな顔になる。

「あ、主殿？」

「おいおいおい、ちよつとまって！なにナチュラルに主呼び?!いい加減にしてくれ！」

なにをどういう風に間違えれば元上司の娘から主なんて呼ばれにやならんのだ。

悪寒しかないんだけど。

「し、しかし！これ以上はないのです！命の恩人のためにこの力を使う！これ以上相応しい理由はないのです！主殿！」

「頑なに主殿呼びだよこの子！なにその押し売り！即刻返品してえ！」

なんで僕が部下なんて持たなきゃいけないんだよ。僕は一人がいの、これは目的云々抜きに！

一人で勝手気ままに行きたいの。好きな時に飯食って、好きな時に風呂入って、好きな時に寝たいの！

なんてことを、一方的にまくし立てて、取り敢えず先方には諦めてもらう。

そう、主なんてそんな立派な人間なんかじゃあないことに。

「だ、大丈夫です！拙者も自分のことがあります！そこまでの干渉はしません！もちろん、主殿が望むのなら衣食住までお世話しますが！」

ここぞとばかりに、今度はアンズちゃんのほうからまくし立ててくる。

「あのさあ、なにを幻想抱いてんのか知らないけどさあ。僕は別に君の主なんてタマじゃあないわけ。君を助けたのだから、仕事だったか

らで、それがなけりやあムシだよムシ！」

さつきだつて見たろう？僕は自分のためなら他人なんざどうだつていい。そういう人間だ。必要な泥棒だつてするし、強盗だつてするし、人だつて殺す。

間接的にでも、直接的にでも。

「それでも！それでもかまいません！」

それがわからないアンズちゃんでもないだろうに、それでも彼女は今日一番声を張り上げる。

「ワタシだつて、考えたのです。色々と考えて、そしてこの結論に至つたのです。おいそれとは変わりませぬ！」

意志は頑な、決意は変わらない。

自分もそういう人間だから、なおのことわかる。この子は誓いを立てたのだ。不変の、そして不滅の誓いを。

もう二度と、あんな真似はすまいと。

僕と違うのは、彼女のそれは健全で。

僕のそれは不健全だということだけだろう。

「……………！」

「……………あーもう、わかった。わかったよ」

二度目の根負けは、どうやら高くつきそうだ。

「本当ですか!？」

ただの気まぐれだ、こんなものは。

利点がないわけじゃない。ぶっちゃけ一人よりも二人の方が情報は集まりやすい。

限界を感じていたわけじゃないが、一人でやらなきや意味がないと、そう言い張る時期は過ぎた。

オーキド博士、イエロー、その他にだつてもう既に一人でやるなんというには他人に頼り過ぎた。

「ただし、主だというのなら。ちゃんと命令には従ってもらおう」

「もちろんです！」

……………あーあ、まったく嬉しそうな顔しちゃってさあ。

女の子のそんな顔みたら、強く言えないじゃんかねえ。ほら、僕っ

てば紳士だからさあ。

「はあ、僕の名前はカラー。奇妙な関係になっちゃったけど、取り敢えずヨロシク」

「はい！今一度、アンズです！よろしくお願いするでござる！主殿！」

まあ、その呼び名は悪い気はしないけれどさ。

と、いうわけで、なんだか一人この復讐劇に加わって。

僕の物語は相も変わらず進んでいく。

それもまた、次のお話で。

39話 「マジで無地で火事で」

「えーつと・・・？こころ辺かな？エンジュシテイは」

アンズちゃんとのやり取りの数週間前。

僕がジョウトにきてやっとこさ生活に慣れてきたころ。

実を言えば一つだけ、このジョウトで有力な情報を得られるかもしれない場所があった。

場所というよりかは、そこにいる人に用があるのだけれど。

「すみません。人を探しているのですが、心当たりはありませんでしょうか？」

「ああ？悪いが忙しいんだ！他を当たってくれ！」

「・・・むう」

見ての通り、エンジュシテイは騒がしく世話しない。

元々気性の荒い町といわけでもなく、なにやら人づてに聞けば、スズの塔という有名な塔が地盤沈下で沈んでしまったらしく。

その復興作業に街中が躍起になっているのだ。

「ふむ、町ゆく人に声をかけても成果はないし。これは一人で地道に探すしかないかなあ」

なんて、ぶらぶら町ぶらしながら思っていると。

「あれえ？カラーさん？カラーさんじゃないですかあ？」

「この声は・・・」

なんだか気の抜けるような間の抜けた声。

一年前に僕をアシストしてくれたような声に、似てなくもない。

キヨロキヨロとその声の出所を探っていると。

「おーい！こつち！上です！上！」

「上え？」

その言葉の通りに、僕は真上を見上げた。

するとどうだろう、太陽の光を遮って一人、姿をみせる。

バタフリーで空を気持ちよさそうに飛びながら。

「やあ、＼イエロー＼。久しぶりだね」

「お久しぶりです！カラーさん！」

相変わらず大きな麦わら帽子がトレンドマークのイエロー。

一人、かと思いきやよくよく見ればもう一人。同じくバタフリーで空を飛んでいたおじさんが一人。

「そのバタフリー、キャタピーが進化したんだ」

「はい、スオウ島の戦いで。他にも」

「おう、イエロー、どしたい？知り合いか？」

「あ！こちらカラーさんです！凄く頭がよくて、凄く無茶をするんですよ！」

「ちよいちよいちよーい、いきなり初対面の人に向かってその説明はないだろう。イエローちゃん？」

前半はいいよ、前半は。後半はなんだいそれ？またどこぞの誰かに入れ知恵されたのかい？

それとも、それがまんま君の僕への評価ってわけじゃないだろうね。

ていうか人と話す時くらい降りてきなよ、なんか上から喋られると腹が立つ。

「まあいいや。で？イエロー、君なんでこんなジョウトなんか？」

まさかと思うけど、オーキド博士の差し金じゃあないだろうな。クリスの仕事ぶりが思ったより上手く行かないから、イエローに連絡した、とか？

・・・ないか。だとしたら人選がミスすぎる。

「ああ、それはあるポケモンの調査に来たんです」

「ポケモンの調査？」

おいおい、それはとても馴染みのありそうな話だね。

「はい。といつても、カラーさんのソレよりは難しくないと思うんですけど」

たはは、と苦笑いする様子を鑑みるにどうやら上手くいってないらしい。

「おいおい、君まさかそれ手伝えなんて言うんじゃないだろうな」

なんか怪しくて僕は疑惑の目を向ける。エンジュシティに着いた

とたんイエローに出会うなんてタイミングが良すぎる。

「そんなそんな！ここには調査と、復興作業の手伝いにきたんです」

ひえー、復興作業の手伝い？よくもまあそんなメンドイことが出来るなあ。しかも笑顔だよこの子。

レッドに負けず劣らずイエローもお人好しだな。

そんなイエローに辟易しながら、僕は巻き込まれないよう後ろでに歩き出す。

「じゃ、僕も用事あるしこの辺で――」

「あら？あなた方は？」

復興作業にいそしんでいる周りからは多少浮いていたのだろう。一人の女の子から声を掛けられる。

「ああ、すまない。俺たちはラジオを聞いて復興の手伝いをしに来たんだ。こっちはカラー、そしてイエロー、俺はその叔父だ」

僕とイエローの会話を見守っていたおじさんが事情を説明する。

のはいいんだけどさ、それだとあれだよ。なんだか僕まで復興の手伝いをしなくちゃならないような感じだよ。今の説明の仕方だと。

「ありがとう。私はアサギシテイジムリーダー、ミカンです」

白いワンピースとサンダルがなんとも清楚で、二つに束ねた髪の毛はさらさらと透き通るようだった。

早い話が美少女だ。まごうことなき美少女だ。

「わおーアサギシテイのジムリーダーさんがなぜこんなところに？」

「つと、おい！なんだよ？」

パタパタと鬱陶しく浮いていたおじさんを押しのけて、僕は彼女の目の前を陣取る。

第一印象は大事だからね！

「ふふ、なんだか楽しい人たちね」

ほうれ見ろ！優しい笑顔を灯すことに成功したぜ！

「私、地盤沈下の事故がおきたとき正にこのスズの塔に閉じ込められていたの」

「この塔に!?大丈夫だったんですか？」

驚いた声で尋ねるのはイエロー、だから君、いい加減降りなつて。
「ええ、助けてくれた人がいたの。その後、怪我した人やポケモンを放っておけなくて」

「なるほど、そのまま復興の支援をしていると」
うんうん。見た目通り真面目でいい子みたいだ。

正直いい子過ぎて、ちよつと僕には手が出せないね！まぶしいね！
それにジムリーダーにはいい思い出がないんだ！ここは大人しくしておこう！そう、眺めるくらいにしておこう！

「たいへんだー！焼けた塔からまた火事がー！」

「なにい!?イエロー！」

「わかってるよ！おじさん！」

作業員と思しき人が慌ててこちらにやってくる。見るに、どうやらミカンちゃんが現場の指揮を執っているらしい。

ちよつと怖いから聞かなかつたけど、この町のジムリーダーはどこにいるんだろうねえ。

臆病で人望がないからミカンちゃんが指揮取ってる、とかだつたらいいんだけど。

なにせ、僕が用事があるのはエンジュシティのジムリーダーなんだから。

「焼けた塔つてネーミング、変えた方がいいんじゃない？」

もはやそれは塔にあらず、二階から上がごっそり抜けている。しかも今は、「焼けた塔」じゃなくて「焼けている塔」だ。

「大昔に二階から上が焼け落ちたから焼けた塔なの！それより消火を手伝って!!」

「まあまあ、落ち着いてよ」

ミカンちゃんが、いや作業をしていた人たちが大慌てバケツリレーで消火活動をしている。

が、とてもじゃないがそんなものでは間に合わない。僕やおじさんが人手に回ったとしてもね。

「オムすけ！ハイドロポンプ!!」

「い、イエローは何を!？」

「まあ、見てなよ」

バタフリーで火の手が届かない上空から、まるで釣りでもするかのよう釣糸を垂らしている。

先つちよにオムスターをくつつけて。

「ひ、火が消えていく・・・すごい・・・」

上から“ハイドロポンプ”でくまなく消火活動をしていくイエロー。効果も効率も段違いだ。

「あとはイエローに任せておけば問題はないよ」

「カラーさあん！一人じゃ無理ですう！手伝ってください！」

「・・・ちえ、水タイプのポケモンなんて持ってないっつもの」

泣き言言うなよ。せっかくカツコつけたのが台無しだろう。

「しゃーない。クロバット行ってきたくれるかい？」

「キュウ！」

ボールから出したクロバットは、勢いよくイエローの元へ飛んでいく。

「クロバットで、どうやって？」

ミカンちゃんの疑問に僕は行動で示す。

「たつまき」

強力な突風を生み出すこの技で、炎をかき消していく。

威力が弱いと逆に炎を広げてしまいかねないが、まあ、今のところは大丈夫そうだ。

ネックなのは火を消すと同時に建物も多少壊れてしまうけれど、そこはほら！もうだいたい壊れてるしいいよね！半壊が全壊になろうが変わらないよね！

「・・・すごい」

そんな僕の心境とは裏腹にミカンちゃん、感心しっぱなしである。

「ところでミカンちゃん、一つ聞きたいんだけど」

「え、ええ、なにかしら？」

「この町のジムリーダー、“マツバ”に用があってきたんだけど、今彼はどこに？」

「ああ、それは——」「うわああああ！」

なんだなんだ？

僕とミカンちゃんの会話を遮った悲鳴の主、イエローの方を見る。

すると不思議なことに、イエローはまだ燃える塔の中へと引っぱりこまれてしまった。

「なにやってんだあいつ!? クロバット! 消火を続けろ!」

「イエロー! どこだあ!」

焦った様子のおじさんの声が虚しく響く。返答は一度もない。

イエローが引っぱりこまれていった辺り、そこにおじさんと僕、そしてミカンちゃんが搜索を続けていた。

「多分、この辺りだったと思うんだが」

「ええ、私もそう思います」

消火活動はあらかた終わり、幸いにも負傷者はいなかった。

行方不明のイエロー以外。

厄介事に巻き込まれる才能でも持つてるのかなあ、僕。

イエローを探しながら、そんなことを思っている。

「うわっ!」

「きゃっ!」

唐突に、どこだかから三匹の生物が飛び出してくる。

「つて、おい! イエロー! 大丈夫か!」

そんなポケモン? のようにも見えた生物に驚いていると、真後ろにいなかったはずのイエローがいた。

「きれい・・・」

「はっ」

「きれいな、ポケモンたちだったなあ・・・」

などと、意味不明なことを呟いて。

なんてことがあってそして現在。

『マツバは今は仕事でこの町を離れているの、よく各地を回っているからこの町にいても会えるとは限らないわ。ごめんなさい』

そう、ミカンちゃんに謝られてたのが数週間前。今、僕は一人で街の外れの図書館へと缶詰め状態になっていた。

あの後、イエローとは岩の中に吸い込まれたただなんだとわけのわからんことを言うので、話半分聞き流しておさらばした。

じゃあイエローはあの時どこにいたのか、その疑問はあるものの、多分僕には関係のない話だし、なにより、厄介事のおいがしたのでね。

「・・・結局、マツバにも会えなかつたし目ぼしい情報はないなあ」
アンズちゃんが部下？仲間？になって数日、ジヨウト地方がある程度探し回って、伝承に、伝説に、噂に聞きこんで。

それでも、黒いポケモンに関する情報は得られていない。
かすりもしない。

（ここじゃないのか・・・それとも探し方が悪いのか）
それはずっと感じていたことだ、過去のことを振り返っても直接探そうとするといつも空振り。

情報を得たのはいつだって、寄り道をしていた時だった。
だからって積極的に寄り道をする気もないが、こうも進展しないとそれも視野に入ってくる。

まるで重々しい音楽が流れているかのように、僕の表情はこの所ずっと暗い。

「ちよっと、空気の入替えどきかな」

大きく一つ伸びをして、僕はポケギアのラジオをつける。

情報収集の一環として聞き始めたラジオだが、これがなかなかどう

してはまってしまった。

テレビっちはどうしたかって？ 忘れたなあそんな昔の話は。

「今日もクルミちゃんに癒されようっ」と

クルミちゃん、とは可愛い声とその愛嬌でラジオ界を牽引しているアイドル歌手のことである。

僕がラジオにはまった原因の一つ、さぞかし顔もかわいらしい顔をしていることだろう。まだ見たことはないけれど、きつとそうだ。そうに違いない。

『さて、数日前からにわか話題のエンジュシテイ、そのやけた塔から突然いずこかに飛び去ったと話題の三匹のポケモンについてですが』
クルミちゃん目当てに、ラジオのチャンネルを捻っていると妙な話題を扱っている番組があった。

編成表を見ると、どうやらこの次の番組にもクルミちゃんが出演しているらしい。

その番組を聞いたことはないけど、ま、目当てはクルミちゃんだしどーでもいいや！

なんて具合にただラジオを聞き流していた。

『ええ、どうやら学会はこの三匹のポケモンを、それぞれスイクン、エンテイ、ライコウと名付けた模様です』

こーしてみると強く実感する、世の中つてのは暇なんだなあ。と。

こつちが躍起になっているのに、流れてくるのはこんなどうでもいい情報ばかりで、どうせなら僕に有益な情報を持ってきて欲しいもんだね。

別に、平和なのは良いことなんだろうけどさ。

『それでは次の番組は、オーキド博士のポケモンアワーです』
ん？

おかしいな、今聞き覚えのあるお爺さんの名前が聞こえてきた気がするけれど。

うん、気のせいだな。だってこれラジオだし、あの爺さんがそんなもんに出ているわけないし、クルミちゃんと二人つきりで番組なんて

そんな羨ましけしからんことしてるわけがない。

『ポケモンアワー！今日もこのわし、オーキドがポケモンの秘密を放送するぞ！』

『アシスタントのクルミです。よろしくね』

ま、マジだったあ!?

思わず椅子を転げ落ちてしまう僕にはお構いなしに、ラジオからはオーキド博士とクルミちゃんの楽しそうな声が聞こえてくる。

「おいおいじーさん、あんたとつくに男として引退してんだろーが、変われよそこ」

帰ってくるはずもないその悪態もついてしまうというものだろう。

まったく思いもよらないところで衝撃受けちまったぜ。息抜きしよーとしてただけどな僕。

ため息がでて、だらりと全身の力が抜ける。

うーむ、博士に頼んでクルミちゃんを紹介してもらおうか。

なんて打算的なことを考えていると。

「ん？・・・アンズちゃん？」

ポケギアの電話が鳴り響く。

端末に出るのは番号を交換したアンズちゃん。

「なに？なんかいい情報でもはいつたん？」

「あ、主殿。今、大丈夫でござるか？」

「ああ、はいはい。大丈夫ですよー」

このアンズちゃん、これがなかなかどうして使い勝手がいい。

ジョウトを探すと言つても、一人じゃ流石に広すぎる。

ある程度の土地勘があったカントーと違い、ここジョウトはジョバニニ先生の塾以外ほぼ知らないということもあって。

大きく役割分担をすることにした。

僕は噂や伝承、伝説などつまりは過去を遡って調べる担当。

そしてアンズちゃんは現在、人や土地や建物や。とにかく今あるものから探っていく担当。

「で？なんか進展があつたんだろうね？」

前回、僕とアンズちゃんは主従契約するにあたって約束事をいくつ

か定めた。

一つ、僕の邪魔はしないこと。

僕の言うことは絶対で、それには歯向かわない。

今、僕が一人で気ままに過ごさせているあたりこれは守られている。

一つ、余計なことはしないこと。

変に首を突っ込まれても厄介だし、つまりは言われたことだけやってればいいってことだ。

一つ、自分を優先すること。

なんせアンズちゃんはジムリーダー、それにしたって年頃の女の子だ。色々とやることもあるだろう。それをないがしろにしてまで、僕に尽くすのはやめてほしかった。

重いのはキライだからね。

最後に一つ、危ないことはしないこと。

なんせキョウ様の一人娘だ。これになにかあれば僕が殺される。

いや、キョウ様だけじゃなくもしかしたらマチスさんやナツメちゃん、果てはサカキ様にも殺されるかもしれない。

考えただけで身震いして上着を羽織ってしまう。小心者なんだよ？これでも。

というような条件のもと、僕らは関係を結んだ。

「はい、しかし、これといって確証などは何も無い。薄い情報ではありますが」

「いいよ、別に。これまでだって似たようなもんだ」

薄めて薄めて、結局空振りなんて何度味わったか知れない。

「ええ、では。エンジュの焼けた塔、そこからポケモンが飛び出していったのはご存知ですか？」

「ああ、なんかニュースでやってんね」

おお、なんだかついさつき聞いたぞそれ。タイムリーだな。

「それが？どう関係があるって？」

「主殿、一つ確認なんです」

「うん？」

アンジュちゃんは神妙そうな声色で話を続ける。

「主殿は“ある火事”を起こした犯人であるポケモンを探している、
そうですね？」

「ああ、まったくもってその通りさ」

「なんだいなんだい？もったいぶられるのは好きじゃあないんだけどな。主導権握られてる気がするから。」

「エンジュシティ、焼けた塔。この焼けた塔というのは文字通り大昔に“大火事で焼けた”ことからその名が付けられたそうです」

「……」

「いつになく真面目なアンズちゃんの声に、すくなくならず僕の中で真面目に話を聞くスイッチは入った。」

「その時に、死んでしまったポケモンがいたそうです。三匹」

「それと、僕の探しているポケモンが関係しているかもしれない？」

「わかりませぬ。ただ、その三匹は空から現れたポケモンに生き返してもらったようなのです」

「あの……。と、アンズちゃんはおずおずと言葉を付け足す。」

「余計なことをしている自覚があります。約束を早くも破ってしまっているかもしれませぬ。しかし」

「いいよ、続きを言って」

「……もしかしたら、このポケモンに頼めば。主殿が失ったものも、取り戻せるのではないでしょうか」

「なるほど、ずっと控えめだったのはこのせいかな。」

「出過ぎた真似をしている自覚があったから、それを決めるのは僕だとわかってるからこそ、ずっとおどおどしていたんだ。」

「アンズちゃんには、詳しいことは言っていない。」

「失ったものが僕の家族で、僕はそれを取り戻したいから行動しているわけじゃないと。」

「そう、取り戻したいから行動しているわけじゃないんだ。」

「アンズちゃん、ごめんな」

「え？へ？」

突然謝られるとは思ってなかったのだろう。ボケた声が電話越しに聞こえる。

きつと怒られると思って、身構えていたんだろうな。その姿を想像するとちよつと笑える。

「いや、詳しいことなんも言っていないのに。そこまで本気で情報を集めてきてくれてき、悪いことしたよ」

なんだか、謝りたかった。

珍しいことを言っていると自分でも思う。普段、謝ることなんてないから。どう謝っていいのかわからない。

だって、普通さ。怒られると分かっているながら、それでも僕に情報を伝えてくれたんだぜ？

これが、本気でなくて何なんだ？

「ぶつちやけさ、ここまで本気で探してくれるとは思ってなかった。なんか一個でも仕事してくればラッキーぐらいのさ。そんな感覚だったよ」

僕にだってプライドはある。

ここまで本気で仕事してる彼女に、対等な対価を渡せないんじゃないやあ経営者としては失格だろう。

「だから、僕がしたいこと。隠していたこと。話すよ、全部」

なんで隠してたかって、きつと多分僕は怒られると思っていたからだ。理解してもらえないと思っていたからだ。

別にそれでよかった、理解なんて僕だけが出来ていればいいから。だけど、僕と同じく。僕と同じものを探そうとしている人にはそれじゃダメなんだ。

あーあ、博士には普通に話したのに、なんでアンズちゃんには隠したんだろう。

わかってる、それが一種の“かつこつけ”だったことも。

つたく、まさかこの年で黒歴史を作ることになるうとは。

恥ずかしくって火が出るね。

僕の話はものの数分で終わった。

火事で失くしたのは家族だったこと。

その復讐をやり遂げなければならないこと。

失ったものを取り戻しても、それは本当の意味で取り戻していることにはならないと、僕は知っていること。

「……ごめんなさい。やはり、拙者は余計なことをしました」

「だーかーらー、謝らないでよ。むしろありがたいまであるね。この調子でじゃんじゃん情報持ってきてよ」

正直、使えるかどうかで言えば眉唾ものだが、まあ今は藁だろうがなんだろうが掴んでおきたいからね。

「まあ、ともかく行ってみるよ。エンジュシテイ」

しゅんとしてしまったアンズちゃんをどう慰めていいかもわからない。ていうか、なんでこーなった？慰め方なんて知らねえよ？僕。

だからまあ、アンズちゃんには時間が勝手に癒してくれることを信じて僕は向かった。

もう一度、エンジュシテイの焼けた塔に。

そしてそれはまた、次のお話にて。

40話 「観光名所とかある町はいろいろ楽」

「さて、と」

アンズちゃんからの情報を信じ、一人エンジュシティ入りした僕は町の復興具合に多少驚いていた。

数週間前に訪れた時よりかなり進んでんなあ、あん時は本当に災害地って感じだったけど。今じゃほとんど元通りじゃん。ま、元がどんな街だったかなんて知らないけどさ。

辺りを見回しても、もうあの時の騒がしさは鳴りを潜め街の住人たちは穏やかさを取り戻していた。

今ならマツバがいるのかどうかくらいはついでに聞いておこう。

マツバ、ここエンジュシティのジムリーダーでありその通り名は「千眼通」。

つまり、千里眼を持つ男ってわけだ。

一度、ナツメちゃんに僕の記憶を探ってもらったことがある以上あまり成果はないのかもしれない。

ナツメちゃんには信用してないみたいで申し訳ないけど、僕は使えるものはなんでも使う派だからわかってくれるはずだよな。

とはいえ、まずは焼けた塔及びスズの塔だ。

なんて街を歩いていると。

「あれ？カラーさん？カラーさんじゃないですか？」

「・・・おっと、そういう君はミカンちゃん」

驚いた顔をした美少女、アサギシティのジムリーダー様にかち合わせしてしまう。

用件が用件なので一人ゆっくり見て回ってたんだけど。

なんだってまだこんなところにいやがるのか、そう思ったがきつと完全に復興するまではこの町にいるつもりなのだろう。

「なんじゃなんじゃ？ミカン、お主の知り合いか？」

「これ、ばあさんや。急に飛び出すでない」

しかもなんだ？後ろにはくつつき虫のようにべったりのお爺さん

とお婆さんの老夫婦が一組。

「ああ、紹介するね。こちらカラーさん。焼けた塔の火事を消化するのを手伝ってくれたの。凄かったのよ?」

まるで道端で昔の友人にでも会ったかのようなテンションで二人に紹介するミカンちゃん。

けどちよつと待ってね、僕たち一度会ったくらいでそんな紹介するような関係じゃないでしょ?

「あの、僕急いでるんで・・・」

「ほほお!なるほどなるほど!コイツがミカンがしきりに言ってた男かえ!」

面倒そうなことになりそうな予感がひしひしと伝わってくるので颯爽とその場から去りたかった僕だけ。

一番捕まっつてはいけないお婆さんに捕まっつて、ジロジロと顔をのぞき込まれる。

まったくなんだって世のおばあさまがたはこうデリカシーというものがないんだろうねえ。なんなの?それが年を取るということなの?それが世の中を生きていくということなのお?

「かー、信用ならん顔をしておるのお!」

「わあ!凄いや!初対面の人にそんなこと言われたの初めてだ!」

びつくりしすぎて声が出た。こりやデリカシー云々というより、この人の元々の性格な気がしてきたぞ!

「ちよつと!お婆さん!」

「なんじゃ!ワシはこういう軽薄そうな男は好みじゃないんじや!ミカン、選ぶならもつとマシな男にせえ!」

「大丈夫ですよお婆さん、僕もちゃんと守備範囲外なんで」

一方的にボロクソ言われるのでつい反撃したくなる。なんで人生引退した婆さんに好みじゃないなどといわれにやならんのだ。

「も、もお!そういうんじやないって言ってるじゃない!」

しかもしまいにはこの二人、僕を無視して口喧嘩をし始めましたよ。一体全体、どんな教育をされておられるんでしょうか。私、気になります。

「すまんのお、なんだか巻き込んでしまつて」

一方でお爺さんの方は優しい感じで僕に謝ってくる。

「いやほんと、帰つたらしつかり説教しておいてくださいよ」

「ほっほっほ、いや確かに君の言う通りだ」

いやね、とお爺さんは会話を続ける。僕はさっさとこの場を去りたいというのに。

「君に会つて以来、ミカンは君の話ばかりするもんだからばあさんは嫉妬しておるのさ」

「はあ」

嫉妬？おいおい、可愛くねーつて。そういうのは数十年前で卒業していてくれ。

なんだつて見知らぬ婆さんに敵視されなきゃならんのだ。

「もうっ！行こっ！カラーさん！」

「は？いや、ちょ」

どうやら言い争いはミカンちゃんの戦線離脱という決着を迎えられない。ちらりとお婆さんの方を見れば、「フンツ」とそっぽを向いている。

いやだから、可愛くねーつての。

「もうっ！お婆さんつたら、困るわ！」

半ば強引に連れ去られた後も、ぶんすかぶんすか怒っているミカンちゃん。

まあ、僕とすればあの場を離れられたのでそれだけでも良しとしよう。当初の予定とは違うが、この現実なんでもかんでも上手くいくな

んてことはない。僕の人生がそう言ってる。

「それでミカンちゃん？あのお婆さん方は放っておいていいのかい？」

「・・・少し、頭を冷やします」

一歩前を歩くミカンちゃんの背中からいじけたような少女の声でそう言うので、僕はただ肩をすくめた。

「そうかい、それじゃあちよいと付き合っておくれよ」

「え？」

「行きたい場所があるんだ」

どうせならそう、このマイナスな現実もプラスに転換していかないとね。

「ここがスズの塔です。皆さんのお陰で九割方復興は終わったんですよ？」

最初に来たのはスズの塔、当たり前だが僕が前に一度見た時よりも迫力も荘厳さも桁違いだ。

これが本物のスズの塔かと、感心するレベルには。

「凄いでしょ？このスズの塔は観光客の皆さんも必ずと言っていいほど立ち寄っていかれて——」

「悪いけど」

ミカンちゃんはきつと僕のことをそこらへんの観光客だと思ってるのだろう。前回もただエンジュシティが好きで訪れたと。

だからそんなツアーガイドのような笑顔で解説を入れてくるので、僕は一言で遮る。

「悪いけど、観光で来たわけじゃないんだ。そういうのはいらないよ」

「そ、そうなんですか？では、なぜ？」

「調べもの、かな？」

曖昧なその返事に当然彼女は首を傾げる。

別にわざと含みを持たせたいわけじゃないんだけど、一言では説明しづらいのでミカンちゃんにはそのまま困っていてもらおう。

「でもまあ、黙っていくのもつまらないし、そうだなあ。ここには一体何があるんだい？」

観光客が好きそうなもの以外でね。

そう僕は付け加えて、ミカンちゃんはうーんと唸る。

「そうですね、はつきり言っただけには別段何ありません。この塔の構造や歴史の長さに惹かれてくる人はいますが」

そうか、何も無いのか。

そのことを聞いて、僕は特にガツカりはしなかった。

元々黒いポケモンに繋がるなんて期待はしてない。ただ、これより他にすぎるほどの情報がないというだけで。

命を生き返らせたという伝説がよしんば本当だとしても、僕の目的には合致しない。

「ああ、でも、一つだけ」

だからガツカリしたつもりはないし、ましてや表情なんかには出てなかったと思うんだけど、ミカンちゃんは絞りだしたように一つ情報をくれた。

「一番上の階に石像があるんです。といっても、ただそれだけ寂しく置いてあるだけなんですけど」

「ふーん。これ、中に入っても？」

入り口で二人、喋っているだけじゃここまで来た意味がない。復興中とはいえこれだけ元に戻っているのだから、中を見るくらいは許してほしいものだが。

「ええ、大丈夫ですよ」

なんて思ったが、どうやら杞憂に終わったらしい。

「その像はなんの像なの？」

いつもは観光客で賑わっているであろうはずのスズの塔だが、今現在には人っ子一人いない。

僕らはそんな人気のない塔の階段を静かに上っている。

人がたくさんいるより、僕はこの静けさのほうが好きだな。

「ええと・・・なんだったかな。すみません、私も良くは見たことないんです」

ま、そりやそうか。

この塔のように有名で人を呼んでいるわけじゃない、ただ、偶々そこにあるという像になぜこんなところ！？という疑問こそあれど、誰も注目なんてしない。

「ま、正体は見ればわかるさ」
今回はね。

まったくなんてちよろいんだろう、階段を上がればそこに答えが転がってんだから。

あーあ、僕の探し物もこんくらい楽ならなあ。

さっさと次に、行けるのに。

「あ、この階です」

この階ですって、そんな言われても最上階なんですけど。

流石に階段でここまで登ってくるのはきつかった、多少肩で息をしながらそれでも顔を上げる。

対してミカンちゃんやんはケロツとしている、腕なんか枝くらい細く全体的にか細い印象なのに。そんなものは今ここでちり紙にくるんで捨てよう。

「これがその像？」

「はい」

最上階の中央に鎮座しているのは鳥のような大きな翼とくちばしが印象的なポケモンと思しき石像。

確かにこれじゃあ観光客は呼べない。荘厳な外装も神秘的な魅力も何もない。本当にただの石像だ。

「これじゃあますますなんでこんなのがここに？つっ、謎が深まっただけだな」

一応、周りになにか見回ってみる。

すると、石像を支える台座。そこにこのポケモンのものと思しきネームプレートが、ご丁寧にも添えられていた。

「えつと？なにになに？・・・ほ、う、お、う。ホウオウ？」

「あー」

僕がそのネームプレート上の文字を読み上げた途端に、ミカンちゃんは何かを思い出したように声を上げた。

「思い出したー！ホウオウー」

ずいっと身を乗り出して、よっぽど閃いた感覚があつたんだろう。やや、興奮気味に説明しだす。

「そうですねー……、スズの塔はホウオウが降り立つ場所という伝説があるんです。だから、この石像がここにあるんじゃないでしょうか」なるほど、いうなればここはホウオウの住処だというわけか。

そうだというのなら、この町の違和感にも納得できる。なんでこのスズの塔だけがこんなにも早く修復されていたのか。

いくら観光名所だからといって、普通町の方を優先するだろう。それが、僕が前に来たときはこの塔の方がどう考えても優先順位が高かった。

「そうかい、それで僕も思い出したよ。その伝説の由来に」

伝説、伝承、人の噂まで調べていたから僕の中で記憶が薄くなつていたけど。

確かに調べていた時その名前を見た記憶がある。

「150年前に、雷が焼けた塔に落ちて火事になった。その時に三匹の名もなきポケモン達が死に、哀れに思ったホウオウが命を蘇らせた。とかだっけ？」

「ええ、確か」

忘れそうになるけれど、ミカンちゃんはアサギシテイの人間だ。ここエンジュの伝説に地元民ほど強くはない。

それでも知っているのはこの伝説がよっぽど有名なんだろう。

「もしくは、伝説ではなく、真実だから。なのか」

「はい？」

「いいや、なんでもないよ。ミカンちゃん、もう一つ案内をお願いできるかい？」

「え、ええ。それはもちろん」

そう言つて、僕らはスズの塔から、もう一つ。この町のシンボルである塔、「焼けた塔」に來た。

町の東西に位置するこの塔。この位置も、何か関係があるのか？

「ミカンちゃん。確か、イエローが一瞬姿を消したのつてここだったよね」

「ええ、その岩に吸い込まれた。と彼は言っていましたね」

ミカンちゃんが指し示すその岩は、どう考えても一人一人が吸い込まれていいものではない。

荒唐無稽すぎて検討すらしていなかったが。

もしかしたら。

「なあ、ミカンちゃん。あの時飛び出していったポケモン。丁度三匹だったよね、確か名前がついたつていう」

「スイクン、エンテイ、ライコウ。ですね」

「どうやら、僕が言いたいことがわかつたらしい。」

「そのハウオウが生き返らせたというポケモンと、数は一致しますけど」

けど、きつとその言葉の続きは「そんなことがありえるのか」だ。

焼けた塔で死んだというポケモン。生き返らせたというハウオウ。そして、偶然にも数と場所が一致したスイクンたち。

偶然で片付けるのは簡単だ。そしてそれがもつとも現実的だろう。

「はは・・・なんだか、興味が出てきたよ」

そう、興味が出てきてしまった。

なんで急にこんな場所から飛び出していったのか。

本当に命を生き返らせるなどとそんな因果に逆することが出来るのか。

スイクンたちは、本当に生き返ったポケモンなのか。

そして何よりは。

「ムカツクなあ。なんか、そういうの」

もしそれらが現実ならば、世の理ってやつが壊れる、そんなことになぜか、どうしようもなく腹が立った。

「一度死んだやつが、もう一度生き返ったとして。失くしたものをもう一度取り戻したとして」

それはもう、ミカンちゃんに向けた言葉ではなく。

「それは本当に、元に戻ったっていうのか？それは本当に、幸せなことなのか？」

「カラーさん？」

きつと、自分にだけに問いかけた言葉。

そして、その問いに対する答えは、僕の中にあつた。

復讐を誓った、その時から。

「ありがとう、ミカンちゃん。色々と助かったよ」

主に今後の行動方針つっ—意味で。

「いえ、お役に立てたのか、わかりません」

「はは、だろうね」

いくらなんでも説明不足すぎる。ミカンちゃんの目には僕は頭のおかしいニヒルでダンディな男に見えていることだろう。

でも別に説明はしない。同じ目的を擁する仲間じゃないから。

「そういや、敬語じゃなくてもいいぜ？どうせ歳おんなじくらいでしょ？」

「え？そ、そう？」

なんか嫌な奴思い出しちゃうからさ、ジムリーダーで敬語な美人つて。

「あ、そう言えばマツバ。今はこの町に戻っているみたいですよ？」

「そうなんだ？そりやラッキー」

なんだなんだ、急に運が向いてきたな。やっぱり寄り道効果？

「てか、敬語」

「あ、ごめん」

笑いながらほっぺをかく彼女に僕は「お、美人は照れてる姿が様になりますなあ」「も、もうっ！からかわないですよ！」なんてやりとりしながら。

「じゃあ、またどこかで会おうぜ」

「うん、その時はちゃんと声掛けてね？」

「・・・あー、そうだね」

なんだ、僕が嫌がってたの気付いてたのか。

最後の最後にしてやられた僕は、そのままミカンちゃんと別れた。

そして、マツバがいるであろうジムへと向かう。

(まず、先手必勝。取り敢えず話を聞いてもらわないことにはどうに

もなんないからねえ)

プランはこう、マツバがのんびりとジムでたむろしている間に暗殺者ばりのスニーンキングスキルで近づいて首元をちよーつと小突く。ちよつとね？

んで、「千眼通のマツバさんと見込んで見てほしいものがあるんです。お願いします」と、懇切丁寧に頭を下げる。なーに、きっとジムリーダー様はいい人だろうからちよつと”お願い”すれば快く引き受けてくれるに違いない。

「うん、これでバッチシ」

と、意気揚々。ジムにたどり着くと。

早速、マツバを見つけた。

どうやら本当について今しがたジムに帰ってきたらしい。外に出て多少疲れた顔をしている。

そんな正面におあつらえ向きに人が隠れられそうな茂みを発見。

大チャーンズ。とばかりに、僕はそこで息をひそめた。

(いいかいクロバット。せーっの！で飛び出すからね)

コクコクと頷く服の内側に忍ばせたクロバットの翼の先つちよを腕に忍ばせて。

「いくよ・・・せーっの！」

「なに!？」

と、タイミング良くかつ勢い良く飛び出した。案の定、マツバはこちらを驚いた表情で見つめるしかない。

までは、本当に良かったんだけどなあ。

「SHIT!!」

その声と被って、僕の左手に強烈な衝撃。

そう、痺れるようなその電撃が左手を襲った。

「なんだこれ!?ちよ、外れねえ!」

予想の範囲を大幅に超えたその出来事に、思わず声が大きくなる。隣にいるマツバに気を回せない。

と、いうかよくよくその左手を見ればなにやらコイルが僕とマツバの手を仲良く拘束しているではないか。

これは一体全体何がどうなってやがんだ？

そう思った矢先、コイルの主であろう声は呆れ驚いた声で口を開いた。

「どーしててめえがいやがんだ？」 カラー！」「

「・・・いやいや、それはこっちのセリフですよ。」 マチスさん」「

本当に、色々と言いたいことは山ほどあれど。

それはまた、次のお話で。

41話「綺麗なお姉さんは好きですが、綺麗なお兄さんには興味ありません」

「なんでテメエがいやがんだ？カラー・・・？」

「いやいや、それはごっちのセリフですって、マチスさん。つか、前回もやりましたよ。このやりとり」

マツバに用があつてここまで来たのはいいものの、まったくもってお呼びじゃあない人にばったり出会つてしまう。

こんな偶然はいらないし、これが運命だというのなら僕は神様を恨もう。

「で、これは何の真似ですか？」

左手をコイルでがっちりロックオンし拘束しているのはマチスさん。確かにこんなことされるような恨みを買った覚えは、あれもこれもあるんだけど。

「ああ？オメエが勝手に射線に入ってきたんだろうが、テメエこそ何の真似だよ」

んん？マチスさんの呆れたようなイラついた表情に嘘はない。ロケット団にいた頃さんざ見た表情だから、間違えることはない。

ということとは、今回のこれはマジで紛れもなく偶然？僕の運が悪いつてやつ？それともマチスさんの運かな？うん、そうだ、そうに違いない。

なにせ今僕はキテいるはずだからね。

「んんっ。取り込み中のところ悪いが、これは一体なに巻き込まれているのかな？僕は」

そこで初めてマツバは口を開いた。

額のバンダナが特徴的な全体的に優男の雰囲気は抜けない男だ。こんなやつが千里眼持ちのジムリーダーだつてんだから、世も末だね。

あ、とつくにそうか。

「いえいえ、なーんか自分関係ない。みないな態度ですけど、僕はアタタに用があつてきたんですよ」

「おい、カラー。なんだそれは、このオレを差し置いて話を進めんじやねえ。オレの方が先だ」

「えー？マチスさんも、この人に用があるんですか？」

なんて、僕にないなら当然マツバにしかないわけだが。

「いいじゃないっすかー、譲ってくださいよー。なんせこちら数週間前からこの人探してたんだから」

もう捕まわないのなんのって。

「冗談じゃねえ、こっちは一発やってきたところなんだよ。そんな余裕はねえ」

「やだー、一発ってマチスさんやらしい」

「おい、テメエが千眼通のマツバで本当にいいんだな？」

「……ああ。紛れもなく」

あ、無視されたー。それで勝手に順番決められた。

まあいいけどね、こっちは急ぎでもない。というか対して期待してないってのが本音なんだけど。

それに、マチスさんの体の状態。完全に死にかけのボロ雑巾みたいなその姿に免じて今回は黙っておいてやろう。

「チツ、カラーの偉そうな顔には頭に来るが、今はこっちだ」

あらら、ばれてましたか。

そう毒づいてボロボロのマチスさんが取り出してきたのは、これまたボロボロの装備品。

「こちとらマルマインの“じばく”を目一杯受けて、その後水中戦をかましてきたところなんだ。是が非でも見てもらうぜ」

キャップとゴーグル、そしてブーツ。

大きさからみて10歳前後の子供のものだ。一人分なのか、二人分なのかはわからないけれど。

「で？マチス様、まさかこいつらをさっきの話で消しちゃったとか、そういう話ですか？」

だから証拠隠滅のためにこいつらの素性を知りたいとか、そんな
どーでもいいことで割り込んできたのかよ。最悪だぜ。

「てめえは、ちよっと黙ってる」

「はい」

「ケツ。俺だつて、引き揚げた荷物の中にコイツが入ってなきやさつ
さとカントーに帰ってたぜ」

やや自嘲気味に、そういうマチスさんはさらにもう一つ、いや、二
つのモノを取り出した。

赤く長方形のそれは、ジョウトにきてすぐに押し付けられそうに
なったそのブツと似てなくもない。

いや、完全に一致している。

「ポケモン凶鑑・・・」

「ああ、そうだ。こいつが湖の底で氷漬けにされていたのを俺が拾つ
た。今まで散々コイツを持ったガキどもが大人以上の力を発揮する
のを見てきたからな、簡単にお陀仏するとは思えねえ」

一瞬、クリスの顔がよぎって僕はすぐにそれを否定する。

目の前の二組の装備品は、どう見ても男物だ。クリスのそれではな
い。

つまり、クリス以外の、ポケモン凶鑑をオーキド博士から預けられ
た二人つてわけだ。

なるほどなるほど。

で、マチスさんはそれを知ってどうしようっていうのか。

「なあ、さつきから一体何の話をしてるんだ？」

当然、そんな話に一切縁がないマツバは痺れを切らして声をかけて
きた。

「こつちの話さ」

マチスさんがフツと笑いながら答え、そして話を戻す。

「ウチにも似たようなことをできる女がいるが、生憎今は療養中でね。
金ならある」

「ウワーオ」

ドサリと、ぱつと見ただけで大層な金額の札束が無造作に投げ捨て

られる。

思わず声が漏れちゃったぜ。大丈夫かな、僕の目、？のマークになってないかな。

「フム、汚い金ではないらしい」

「そんなことまでわかんのか！」

多少は疑っていたのだろうマチスさんは驚きで思わず声が漏れた。かくいう僕も、確信したのは今だったけど。

「そうさ！真面目にアクア号の船員として稼いだ」

いやー、マチスさんから真面目とかいう言葉が出てくるなんて。笑っちゃうほど似合わないなあ。

まあ、黙つてろつて言われたから黙ってますけどね！一応元部下なんで、僕。

「・・・そろそろこれを外してくれないか？でなければ、俺のムウマの“サイケこうせん”が飛ぶぞ」

「ハン！右を見な。先にライチュウの尻尾がお前を突き刺すぜ」

それに、と、マチスさんは言葉を付け加える。

「左のガキを見な、こう見えて容赦なんて言葉はそいつには通じねえからよ」

「これは・・・クロバットか。君のかい？」

あんまりにも僕を無視して話を進めていくもんで、ちよつと退屈してたんですよ。

結果としてマチスさんを助けるような恰好になっているのは甚だ遺憾ですがね。

「いえいえ、野生じゃあないですか？こう見えて僕子供なんですよ？首元に刃先を向けるなってお母さんに習ったんですから」

「フフ」

おお、流石はジムリーダー様といったところか。こんな修羅場は何度もくぐってきたとその笑みが言っている。

「さて、どうするよ？」

右を見ても左を見ても絶体絶命、こんな場面に陥らないように僕は気を付けよう。

「いいや、引き受けよう」

「へ？」

がつくりと、マツバの答えを聞いたマチスさんは肩の力が抜けたように拍子抜けする。

てつきりもう一波乱くらいは覚悟していたのだろう。それはマツバ同様、数々の修羅場をくぐってきた経験則だ。

「内容は少々変わっているが、それ以外は普段俺に探し物をする連中と変わらんからな」

だが、案外目の前の男は聞きわけがよかつたらしい。それとも、ご自慢の千里眼でここまで見えていたのかは知らないけど。

「少し離れていてくれ」

こうして、マチスさんの探し物の件は無事に解決を迎えたのだった。

「迎えてねえよ!!」

「あり？」

マツバとの一件の後、僕は今なぜだかアクア号に乗っている。

よりにもよってマチスさんと一緒に。

「なーんでこんなことしなくちやならないんですかねえ。ねえ、マチスさん」

「うるせえ。てめえが二人のガキの内、一人を知ってるっつーからだろうが」

そう、あの時。僕は不注意にもそのことを漏らしてしまったのだ。

あの装備品の一つ、黒いブーツから見つけた“SILVER”の文

字。

そして僕が持っている、オーキド博士の研究所に押し入った強盗からくすねていたハンカチ。

ここにも同じ綴りでシルバー、と名前が書かれている。

とはいえ、こんなにわざとらしく名前入りの持ち物を身につけているだなんて、あの手慣れた手付きとは相反してどうもその名前を僕は信用できなかったのだけれど。

ここにきて、その名前の信憑性は現実性を帯びた。

なーんてことを漏らしてしまったせいで、こうしてマチスさんに捕まり結局マツバには見てもらえなかったけれど。

(いや本当に手練れって感じの泥棒だったのに、変なところで真面目なのかな?)

だとしたら致命的だ。どちらにも染まり切れていない中途半端など、泥棒としてはやっていけないだろう。

まあ、人生の先輩からの忠告としてハンカチと共に渡してあげようかな。

「それにまあ、気になることはないこともないし」

「ああ?なんだカラー」

「ひとりごとです」

「少佐——指示した場所に着きましたー!!」

なんてことを話している間に、アクア号の船員の一人(この人しか見たことないけど)が目的地到着を告げる。

「おお。さて、外観、地形、全てがあのマツバの言った通りだな」

「っすねー」

うずしおがまるで島を守るように点在しているこの場所。

来るのにも一苦労って場所だけど、本当にいるのかねえ。

「そーいや、なんでマチスさんはその子供たちを探してるんです?」

「ああ、リベンジのためだ」

「リベンジ?」

そーいえば、あの時のマチスさんはやけにボロボロだった。マルマインの“じばく”を食らったとか言ってたっけ?

「らしくないですねえー、電気タイプのエキスパートが。電気タイプのポケモンにやられるなんて」

「・・・勘違いするな。〃じぼく〃は、自分で使ったのさ」
「はい?」

「仮面の男、通称〃マスク・オブ・アイス〃。俺らの知らねえ内にロケット団の残党をまとめ上げ、新首領を名乗ってるっつーふざけた野郎だ」

仮面の男?新首領?・・・知らなかった。そんなことになってたんだ、今。

「てめえも元ロケット団ならわかるだろ。それがどれほど俺たちにとっての屈辱か」

ロケット団のボスはサカキ様だけ。

そう思ってるからこそ、あの人がいない今。こうしてマチスさんたちはのんびり真面目にジムリーダーやってるわけだ。

「なるほど、それでアクア号の船長か」

「そうさ、ジョウトにいるっつー仮面の男の情報を得るために俺は船長になって何度もジョウトに足を運んだ。ここ数か月のジョウトの事件、〃ウツギ研究所のワニノコ盗難騒動〃から始まり最近だと〃エンジユの地盤沈下騒動〃」

その全てにロケット団が関わっていた。と。

マチスさんの顔は見るまでもなく怒りに沸いていた。握った拳が震えるほどには。

(エンジユの地盤沈下、そうか。あれは人の、ロケット団の仕業だったのか)

目的は、明確か。

ホウオウ。

(また、僕の仮説が裏付けされたな。これでホウオウが存在するのは確定だ)

ここまでの事件を起こしているんだ。そこにはなんらかの確信があるはず。

その仮面の男と呼ばれる男には。

ただ、確信がわかって目的はわかってても、その意味までは分からない。
い。

ホウオウで、一体何をしようってんだ？

(なんてことを思うのは、僕もロケット団に懐かしさでもあんのかね？)

実に黄昏たい気分だが、話はまだ終わっていないかった。

「そして“いかりの湖のギャラドス大量発生”さ」

「ああ、そーいや湖の底から拾い上げたって言ってましたもんね」

「おうよ、俺はそこに調査に行つて仮面の男を見つけた」

「けど、こつぴどくやられて帰ってきたと」

・・・あれ？拳の一つでも飛んでくるかと思つて身構えていたのに、帰つてきたのは静かに腸が煮えくり返つたマチスさんの顔だった。

「どーやらむこうさんは相当強かつたらしいね、ライチュウ」

「フーン！」

さつきからボールの外に出て風を浴びてるライチュウをからかうけど、こつちもただ鼻を鳴らすだけだった。

「あら、これはマジでヤバイ相手らしい」

「この装備品の持ち主たちも、戦つたはずだ。俺は今あの男のどんな情報でも欲しい」

それでここまで必死に探してるのか。

らしいというか、なんというか。

「てめえも、気を付けるこつたな」

船が丁度いい所で停泊し、マチスさんは島を双眼鏡で探している。

だからそんな忠告じみたことを言われるなんて思わなかつた僕の驚いた顔は見られずに済んだと思う。

「・・・!!いやがったー！」

おお、ものの数秒もしないうちにどうやら見つけたらしい。

こんなへんぴな場所に関係のない子供がいるわけなので、見つけたというのならその子達なのだろう。

「おい！カラー！てめえはどーする!？」

レアコイルが作り出すデルタ型の磁場に乗れ込んで、マチスさんは

僕に聞いた。

シルバーに聞きたいことはある、あのポケギアに登録されていた名前の一つについて。

それに、いつまでもハンカチを預かったままってのも悪いよね。

「そういうことでついてきますよ。仮面の男の情報は僕も欲しいし」

「・・・そうか、ヘッ。てめえにも会ったんだな。ロケット団の一員の自覚が」

ちよいちよいちよーい？別にそんなこと一言たりとも言っていないんですけどお？

なーんか勝手に自己完結しちゃってるマチスさんは放っておいて、僕はさっさとクロバットで島へと向かう。

ホウオウのこと、そして“もう一つの伝説”のこと。

それが事実だとすれば、僕は俄然今回の事件に前のめりにならざるを得なくなる。

ということ、僕は僕でまた別の理由で彼らの情報が欲しいのさ。

「ん？」

なーんて思ってた矢先。

ふと、真下の海面を見てしまった。

その小舟になんとなしに、なんだか少しの既視感を覚えて。

「・・・げ、クリスにイエロー？」

どうやら僕の波乱は一朝一夕で消えるものではないらしい。

そうやって、加速していく波にさらわれつつも、また、次のお話へ。

42話 「暴れん坊將軍」

「おいおいおい、なんだってこんなところにアイツらが?」

うずしおが巻いて荒れ狂うこの海。

その海に漂っている小舟によくよく目を凝らしてみれば見知った顔が二つ。

知り合いだったのか、それとも偶然かクリスとイエローという組み合わせに戸惑いつつも僕はその上空で表情が歪んでいるのを自覚する。

「あん?なんだ、知り合いか?・・・て、一人はワタルをぶっ倒した奴じゃねえか」

数コンマ遅れて、マチスさんも動揺に気付いた。

が、そんなものを気付いたところでやることは変わらない。

「先に行ってるぜ」

「いえいえ、僕も行きますよ」

彼女らがなぜこんなところにいるのかはわからんが、僕には関係ないことであることを願おう。

そう心中で呟いてから、僕とマチスさんはとつと二人の凶鑑所有者の元へ飛ばす。

「よう!おめえら!」

「な、なんだあ!?このおっさん、浮いてやがる!」

開幕一番に、マチスさんはまるで旧友に会ったかのごとくフランクさで声をかけた。

二人の子供、エイパムをつれた一人はまるで爆発したような前髪とぎらつく瞳が印象的で。

そしてもう一人は。

「こいつらはおめえらの持ち物だな!珍しい赤いギャラドスが入ったボールもあるぜ!」

無造作にマチスさんは荷物を放り投げる横で僕は確信する。

やはり、もう一人の子供はあの時オーキド博士の研究所で凶鑑を盗んでいった盗人に違いない。

あの時は暗くてあまり顔は見れなかったが、確かに雰囲気である。

あまり動かない表情筋に、グリーンのようなクールさを持ち合わせた子供らしくない子供だ。

「ああ！俺のリュックに帽子にクツ！」

前髪が爆発した子供が、目の前の幸運に飛びつく。

「ちよつと待った！手を付ける前に礼くらいしろよ」

底冷えしたその眼差しに前髪君（と名付けよう）はへこへこした態度で。

「えー、この度は拾って頂いたうえ、届けてもらったこのご恩は一生忘れま「NO！NO！俺が欲しいのはそんな上っ面の言葉じゃあねえ」と、感謝の意を表そうとするものの、それを両手でマチスさんは制止する。

「戦ったんだらう？あの仮面の男と、その情報が欲しい」

「戦術、テクニク、チーム、使ってくる技。その他諸々、おめえらが経験したその全てを黙ってこの俺によこしな」

あくどい笑顔はとても協力的とは思えないが、それでもマチスさんは己が望を通す。

そんな彼に水を差すのは無粋だろうと、今まで僕も黙っていたが。

「ねえねえ、マチスさん？」

「あん？なんだ、今いいとこなんだよ」

「そりゃあ知ってますけどね、後ろの方も確認しといた方がいいんじゃないありません？」

「後ろ？」

僕の忠告に割と素直に聞き入れて、マチスさんは後ろを振り返る。

「んな!?なんだこれは!?!」

マチスさんのその反応も致し方ないだろう。

なにせ、ここまで乗ってきた豪華客船、アクア号が空中に浮かんでいるのだから。

「「あ、あれは!?!」」

僕以外の三人が声をそろえて危険を認識する。

そのアクア号を空中に持ち上げているその張本人。
いや、人ではないな。人間のやることではない。

「あの鳥みてえなポケモンがやってるみたいっすね」

「どうやら目覚めて早々とんだ修羅場に出くわしちまったらしいな
！」

前髪君は荷物を装備しながら口走る。

白い肌、獰猛な目付き、鋭い牙。

まるで怪物のような出で立ちのポケモンにどうやら真っ向から勝負を申し込むらしい。

いやー、若いねえ。その若さが羨ましい、わけではないけれど。

「つていうか、おいおい、イエローたちまで捕まってるなあ」

小さかったんで見逃してたが、アクア号のすぐそばに小舟も同様に浮かんでいた。

「アクア号があんな風船みてえに！あのポケモンの念力でか!？」

マチスさんが驚くのも無理はない。アクア号の全体は数百メートルはくだらないレベルの客船だ。それをもちあげるポケモンなんて聞いたこともない。

「エスパーの力……！あれは、"ルギア"！」

シルバーがポケモンの名前を口にする。どうやら彼だけはあのポケモンが何者なのか知っていたらしい。

それをどこで知ったのかは、一つ、見当がつくけれど。

「あ、やべ、全員躲せよー」

僕の間延びした声とは裏腹に、ルギアは大きな口を目いっぱい開いたかと思うと。

僕らに向かってブレス攻撃を仕掛けてきた。

「どわっ」「くっ！」「いてえ！」

「だーから言ったのに」

「てめえカラー！言うならもうちよい危機感持って言いやがれ！」

「うわー、親切的な忠告者に向かってそんなこと言います?！」

なんて言ってる場合ではなさそうだ。

攻撃が外れたとみるや否や、ルギアは次の攻撃へと移る。

具体的には、持っていたアクア号をこちらにぶん投げるといふなんとも強引かつ単純な力技で。

「ヤミカラスー！」「あつ！てめえ一人だけ！」

シルバーはこのままは危険と判断したのだろう、前髪君の言葉を無視し一人、空中に避難した。

「・・・それで、なぜ貴様がここにいる？」

「おおつとご挨拶だね。覚えてるか？オーキド博士の研究所のここと」

「覚えているから言っている、なぜ貴様がここにいるのかと」

「それはほら、落とし物を届けに来たんだよ。〃シルバー〃」

ほれつと、戦いの最中に僕はハンカチを投げてよこす。

器用にルギアの光線を避けながら、シルバーは嫌そうな顔でハンカチを受け取った。

あ、舌打ちまでしたー。

「君には色々興味があるんだけど、そんなことで命を落とすのもばからしい」

とにかく今は目の前の危険を排除する方向で行かないかい？

そう提案すると、シルバーは。

「フン、いけすかない奴だ」

なんて言う割に視線はルギアに固定されているので、僕はそれを了承と受け取った。

「じゃあいつちよ、怪物退治と行きますか」

「それにしてもこの暴走の仕方、完全に我を失ってるねえ」

先ほどからの単調な攻撃といい、まったくもって知性を感じない。頭に血が上っているのは丸わかりである。

「つて、もういないし」

シルバーに向けて言ったつもりが、彼は既に横にはおらず見れば下降して小舟の乗員たちを助けようとしているらしい。

「存外いい所があるのかな？」

シルバーの行く先にはクリスのみ、どうやらいつの間にかルギアの攻撃を食らって破損していた小舟に一人横たわっている。

「おっと、すいませーん。僕、連れてこられただけなんで見逃してもらっていいですかー？」

などと一応、両手を合わせて言うてはみるものの。我を忘れたルギアには届かない。

残念だがイエローたちを探す余裕は僕にはなさそうだ。

「返答が光線って、どこの国の挨拶だよったく！」

親の顔が見てみたいね！

「なんて冗談を言ってる場合じゃねえなあこれ」

先ほどから連発しているこの攻撃、いくらこのデカブツが凄くたつてどこかでガス欠がくるはずだ。

「うわつとつと!!クロバット!もうちよい上昇!」

「キュウ！」

「くるはずなんだけど、一向に衰える気配なしだな」

これほどまでの攻撃を連発できるほどのエネルギーがあるとは考えにくい、というか考えたくない。

ということは、だ。

「コオオオオオ！」

「やっぱりなーさつきからどーにも違和感だったぜ！」

ルギアのこの攻撃にエネルギーを収束させているような感じは受けなかった。

つまり、これはただの。

「空気砲！」

信じられないがこれは息を吸って吐くという実に初歩的な動作で繰り返されている攻撃。

「名づけるなら、BULAST AERRO「息の空気弾」

「あ、マチスさん」

どうやらマチスさんも僕と同じ見解のようだ。

攻撃をかわしていくうちに、マチスさんと合流した僕は今後の展開を尋ねる。

「で、どうするんです？こいつ」

「あれの正体が空気砲だってんなら対処の仕方はある」

「海に引きずりこむんですか？あのデカブツを？」

言うは易く行うは難しって言葉知ってます？

下にいるクリスたちと合流したってそれを実行に移せるだけの戦力があるのかは甚だ疑問ですがね。

「いや、待て。あれを見る！」

「んん？」

僕ら在必死に攻撃を避けている間、どうやら下では流れ弾がガンガンにぶち当たっているらしい。

壊れた小舟に搭乗している三人だったが、よくよく見ればひとり足りない。

「前髪君がいねえな」

それに気付いた瞬間、海面から盛大な水飛沫が上がる。

「うおおおおお!!」

威勢のいい雄叫びと共に表れたのは前髪君。

「あれは、マンタイン？」

が、ただのマンタインではない。ビリヤードのキューのような棒に大量のテッポウオがくっついた特製のマンタイン。

どうやらそのテッポウオが口から発射する“みずてっぼう”で空を飛んでいるらしい。

「AMAZING!!あの野郎!とんでもねえことやりやがる！」

これには流石のマチスさんも驚いたようで、声を張り上げてテンションが上がっている。

「回れ右！全砲一斉発射!!」

前髪君のその掛け声でテツポウオたちはルギアに向かって攻撃を放つ。

「が、火力不足だ」

一瞬、その攻撃にひるんだルギアだったがすぐに目の色を変えて前髪君を叩き落した。

幸いにもすぐ傍の孤島に落ちたので無事ではあると思うが。

その発想と行動力には驚いたが、まだ足りない。

「……いや、ははっ。こいつは驚いた」

「……!?!」

ルギアの“エアロブラスト”は封じられた。海中に引きずり込むというのとはまた別の方法で。

「まさか、キューを使うとは」

そう、前髪君の持っていたキューをルギアの口に差し込んでいたのだ。

これでルギアは口を閉じることが出来ない。目いっぱい空気を吸い込むあの技は一度口を閉じないとせつかく集めた空気が四散する。

案外、細かいところに気がつくもんだ。

そう、感心したのも束の間。

ルギアは“エアロブラスト”が打てないと悟るや否や、前髪君の所に集まった三人めがけて“のしかかる”。

あの体重を最大限に使った攻撃。初歩的だが、だからこそその純粹な力の差を感じる。

「おい、てめえは行かなくてもいいのか」

「やだなあマチスさん。僕が行ったってなんにもできやしませんよ」

今、完全にルギアの標的はあの三人だ。

こつちには見向きもしていないこの状況で、わざわざ死に行くよ

うな真似はしませんよ。

「ふん、そうか」

「マチスさんは？」

「俺の用事は終わった。あのガキどもを助けてやる義理はない」

「ビュー。流石、悪の幹部」

僕の煽りにも付き合わずに本当にマチスさんは一足さきに戦線から離脱してしまう。

右に倣えと僕も言いたいところだが。

「・・・ま、知らない仲間でもないし」

横目で見えるクリスの顔が、ちらついてどーにもその場を去るのがためらわれる。

自分の目的のためならいくらでも手を汚す覚悟はあるが、だからといって根っからの外道というわけでもないらしい。

僕という人間は。

そんな自己分析をしている中、ルギアは三人が降り立った孤島を足で踏みつぶそうと力を入れている。

大変に危険だ。

「根っからの外道ではないけれど、根っからの善人でもないのが僕の僕たる所以だよな」

だからといって助けにはいかない。

なにせ、僕にはそれより興味があることを見つけてしまったから。「よつと」

ルギアが暴れている横をチョロチョロと素通りして。

僕は孤島の洞窟を覗き見た。

「・・・なあーるほどねえ」
ピンゴ。

僕の予想通り、その洞窟内には大型の足跡や尻尾のようなものが擦れた跡、さらには血痕など暴れた跡も数か所見える。

後ろを振り返ると凶暴なルギア。

その目は血走っており、見境なんてないようにも見えるが。僕は見逃さなかった。三人がこの孤島に近づいた時に何よりも早く反応し

たことに。

それこそ僕たちを放っておいて。

「つていうか、ルギアも消えたんですけど」

なんて分析をしている間に戦況は目まぐるしく変化していたみたいで、まばゆい光線の後にルギアは忽然と姿を消した。

こちら側からちらりとボールのようなものが見えたのでゲットしたのか、それとも寸での所で逃げられたのか。

それは定かではないが。

「……………」

「やあシルバー、君も気になるかい？」

「……………」

「わあ！清々しいほどに無視だね！」

そんなルギアとの戦闘の余韻もそこそこに、どうやら僕と同じ考えに至ったらしいシルバーは僕の横で洞窟内を観察している。

「か、カラー!? やっぱりカラーだったのね！」

「……ふむ、さつきやっぱり逃げときやよかった」

こんなに早く解決するとわかっていたなら。

あれだけの危険の後でそんな純粋な笑顔を向けなくておくれ。

「そんなことより見なよ。クリス、ここなんだと思う？」

「え? なに? ここ? ……」

僕は細かいお説教なんて聞きたくないんだ。

だから華麗に話を変える。

「恐らくだけど、ルギアの住処だろうさ」

「この跡、そして先ほどのルギアの反応から見てまず間違いない」

「お、シルバーも同意見だつて」

「聞いたことがある。ここ、うずまき列島は四つの島で出来ていてその地下がつながっているつて」

「おいおいおい! なあに三人でコソコソしてやがんだ!」

「コソコソなんてしてないよ、前髪君」

「ゴールドだ! ヘラヘラ野郎!」

ヘラヘラや r . . . ちよつと、それはお兄さん傷ついたなあ。

「つて、ちょっと待って。ポケモン図鑑を見て！」

「あん？つて、エラー!?故障か？」

「おーい、今度はそっちがわかんない話してるんですけどー」

「あ、ごめんね。このポケモン図鑑には一度出会ったポケモンを追尾できるシステムがあるんだけど」

「それが、エラーを吐き出したって？」

「う、うん。相変わらず、飲み込み早いね」

クリスの話によれば、三つ同時にしかも同じ機能が故障だなんてありえないという。

ま、僕も同意見だ。

で、その追尾システムを信用するとして。

ということとは、だ。

「もう誰かの手持ちになっている」

四人の内、誰かがそうポツリというと場に嫌な緊張感が走る。

「俺たち以外の誰かが、ルギアに向けてボールを放っていた」

「そしてそっちのほうが早かったわけだ」

シルバーに補足するように僕がそう言うと、シルバーは苦い顔になってヤミカラスで空を飛んだ。

今回のルギアのことといい、マチスさんが言っていたこのジョウトを襲っているロケット団のことといい。

ここで、今何かがうごめいているのは確かだ。

その何か、が僕の目的に通じるのか否か。

つてのがわからないんだけど。

考え事していると、なんか横でわちゃわちゃやってた三人が静かになっていた。

一つの見解を出したらしい。

「と、いうことで僕もそろそろお暇するよ」

「え!?え!?ま、また行っちゃうの!？」

「そんな泣きそうな顔すんなよクリス」

「泣きそうな顔なんてしてない！」

顔を真っ赤にして怒る彼女に笑いながら、僕も同じく空を飛ぶ。

「じゃ、またどこかで会うかもね。前髪君も」

「ゴールドだっつってんだろ！……ったく」

そんな捨て台詞を吐いて、僕は大空を滑空する。

「つと、忘れるところだった」

大海原に漂う、麦わら帽子がよく似合う“彼女”を見つけて。

そしてそれはまた、次のお話へと。

43話 「スイクンとすいとんってちよつと似てる」

「急ぎましょう。カスミ、タケシ」

「ああ、しかし実際に見ると凄まじい流れの速さだな。トージョウの滝」

カスミ、タケシ、そしてエリカの三人は故あって今はここ、ジョウトの地へと降り立っていた。

「さて、そろそろこの辺りに橋があるはずだが」

タケシの言葉を信じて、険しい崖を一步一步登っていく一行。

すぐそばに勢いよく流れていく滝は正に荘厳であり、どこか神秘的なものすら感じる。

トージョウの滝、ジョウトの観光名所の一つである。

とはいえ、三人がここにいるのは偶然であり観光名所を巡りに来たわけではない。

「……むう」

そんな場所で一行は立ち止った。

進行方向にあったであろうはずの橋。その橋が老朽化だろうか、崩れ落ちかけていたからだ。

「見ろ、お嬢」

「ええ、これでは渡れせんわね」

所々残っている箇所も見受けられるものの、人が渡るには不完全すぎる。

「遠回りになりますが、迂回するしかないようですね」

エリカが肩を落としながらそう告げると、それをタケシは否定する。

「いいや、地図によれば迂回できるような場所はないな。多少危険だが俺のこいつを使おう」

岩のように頑丈で大きいポケモン。イワークを取り出したタケシは、そのイワークを使って橋の補強を試みる。

「よし、行こう！」

イワークの補強は成功したようで、向こう岸までなんとか歩いてい

けるようだ。

強風と滝の勢いを横目に、慎重に進んでいく三人。

なぜ、ここまでして進もうとしているのか。

「お嬢、やっぱりアクア号の出航日を待ってジヨウト入りした方がよかつたんじゃないか!？」

大きな滝の落ちる音に負けまいと二人とも自然と声が大きくなる。

「それが出来るならしています!しかしアクア号は特定の曜日しか出航しないうえ、最近遅れも出ていると。今回のジムリーダー招集は、特別な意味があるという話!遅れるわけには
——
きや!」

「おっと!」

「ありがとう、タケシ」

「いや」

揺れる足場、吹く北風。不安定なこの状況に顔を歪めながらもなんとか橋の半分までは辿り着いた。

「ふう、現在開発中のリニアモーターカーが出来るまでの辛抱ってわけか。ところで、ポケモン協会が出した緊急招集だが、一体どんな理由があるんだ?」

そう、それこそがこの三人が危険を冒してまでこの橋を渡っている理由である。

協会からの緊急招集。

普通じゃないこの指令に、聞けばカントーとジヨウトの全ジムリーダーが参加しているという。

普段から集まっていれば話は別だろうが、こんなことは初めてである。

「なあ、カスミ」

ずっと、会話に参加していなかった彼女にもタケシはなんとなしに尋ねてみる。

「え……?あ、ごめん。聞いてなかった」

「カスミ?」

カスミは先ほどからずっと、浮かない顔をしている。

十中八九、レッドのことだろう。

いつだって少女を悩ませるのは恋の病だと相場が決まっている。

「……っ！野生ポケモン!?カブトプス!」

そんな彼女たちに自然はしかし、待つてはくれない。

ゴルバット達の群れが格好の標的となったタケシたちを襲っていた。

「ぐっ！タケシ!?アナタはイワークへ指示を！野生ポケモンは私たちで————きやああ!?!」

野生ポケモン襲来への動揺が、主人をつたってイワークにも伝染する。

当然、微妙なバランスで補われていた橋は崩落し、タケシ、エリカ、カスミは何の頼りもない空中へと放り出される。

「きやああああ!?!」

「カスミ!」

中でもカスミは、落ちた方向が悪かった。滝の流れる水底へと姿を消してしまった。

「う……うん?」

カスミは程なくして目を覚ました。

運良く滝の裏側へと抜け出すことが出来ていたらしい。体にもそれほど傷は見当たらない。

「あら?そっか、アナタを助けようとしてここに来てしまったのね」
側にいるのは一匹のクラブ、滝に溺れていたのを助けようとしていたことを、カスミは思い出した。

同時に、過去にレッドから交換したクラブと面影を重ねる。

「そう、あの時もちょうどこんな大きさだった……」

なんて、感慨にふけるのもそろそろ終わろうと一伸びしてカスミは立ち上がる。

そう、レッドは今もどこかで戦っているのだ。自身の痛みと。四天王との戦いの時に負った傷は未だに癒えていないと聞く。傷を治すために旅に出たことも。

そんなレッドが戦っているのだ。自分もしよげている場合ではない。いい。

例えレッドが知らない女の子と親し気に話していたからと言って。

「さて、エリカたちに無事を告げないとね」

顔に明るさが灯ったのも束の間。

「!?」

滝の中から、何かが来る。

「照らして！チーちゃん！」

チヨンチーのチーちゃんは飛び出るや否や、主人の命令を遂行する。

発光する触覚で照らされた敵。

「・・・水晶のように輝くその体。伝説のポケモン、アナタがスイクンね」

「——っ！」

「な!? スタちゃん！」

言うが早いのか、スイクンはスターミーに突然襲ってくる。我を失っているわけでも、こちらに何か落ち度があるわけでもない。

「そんな！スタちゃんが力負けするなんて！」

予想外の力と、感じられない悪意にカスミは戸惑うものの、それでもなんとか態勢を立て直して自身のポケモンに命令を送る。

「ならーランちゃん！」ハイドロポンプ！」

華麗にランターンにバトンタッチして、水技最強とも言っているハイドロポンプ”。流石はジムリーダーと言いたくなるほど、鮮やかな手際だった。

「向こうも”ハイドロポンプ”！」

しかし、それを読んでいたのかスイクンも同時に技を放つ。

互いの技はぶつかり合い拮抗していた。

「くっ・・・この力！」

ように見えていたのも最初の数秒だけで、徐々に、徐々にカスミは後退せざるを得ない。すぐ後ろには先ほど溺れかけていた勢いそのままの滝が背に迫っている。

明らかにランターンが押されていた。

「私が出会った中でも間違いない水タイプ最強のポケモン!!」

カスミのエキスパートは水タイプだ。そのカスミに最強と言われめられるポケモンなどそうはいないだろう。

「きゃああああー!」

やがて力負けしたランターンはカスミと共に滝に落ちる。

「.....」

スイクンは何かを見定めるように見つめていた。

カスミが落ちた滝に近づいて、覗き込んだ瞬間。

「たきのぼり!」

ランターンは力尽きていたわけではなかった。カスミの瞳と同様に。

落ちていたはずが勢いよく登ってくるカスミに、スイクンは思わず避ける。

スイクンが水タイプ最強のポケモンなら、カスミは水タイプのエキスパート。水タイプの技は極めつくしている。

「さあ、教えて! さっきから実力を試すような戦い方をするのはなぜ!?!」

カスミは一目見た時から、それがずっと引つかかっていた。

敵対心も、悪意も、誰かに操られているような様子もない。

目的が謎だった。

「.....」

「こんなところで戦いを続ける気!?!」

スイクンはその問いには答えない。代わりに態度で示す。
まだ戦いは終わっていないのだと。

「カスミーーーー！どこだー!?返事をしろーーーー！」

場所が変わってタケシの大声が響く。

橋をなんとか渡り切った向こう岸でタケシとエリカは滝の裏側に消えたカスミを捜索していた。

「無事だといいいんだが・・・」

そんなタケシの苦痛の声を和らげるかのように、間抜けな電子音が聞こえてきた。

「ポケモン協会からのメールですわ」

「お嬢、今はそんなこと後回しに・・・」

「いえ、タケシ。これを見てください」

カスミを一刻も早く見つけ出したいタケシに落ち着いてと促して、エリカはメールを見せた。

「・・・えー?何々?今回の緊急招集について君達の参加が遅れているようなので予め要点をお送りする」

そんなエリカの態度に、渋々タケシは従い声に出してメールを読む。

「実はポケモン協会はポケモンリーグによって・・・エキシビションマッチ対抗戦を開催することを決定した!?!」

驚いた表情のタケシは思わずエリカを振り返った。

「どうやら、そういうことらしいですね」

そして、とエリカは続けた。

「驚きの内容ですが、それよりも目の前を見て!」

「な!?!なんだ!?!あれは」

滝の中、詳しく姿は見えないものの何かと何かがぶつかり合っている。それも、滝よりも激しく。

「一方はカスミでしょう、しかし、もう一方は・・・？」

「ぐっ!!」

カスミとスイクンは滝の中を移動しながら戦いを続けていた。

が、カスミが勢い余って滝壺に落ちてしまう。

当然ながら息継ぎをする余裕などない。

(けど、まだ戦いは終わってないわ!!)

だというのにその瞳には未だに闘志が宿っている。スイクンが今まで戦ってきたジムリーダーの、もしかしたら誰よりも。

「お嬢、カスミを助けないと!」

「・・・待ってください。あれほどのスピード、それもこの滝の中でのスピードです。私とタケシの手持ちでは水の中をあれほど動ける者はいません」

ここは、カスミを信じましょう。

そう言うエリカの顔は固く、こういう時は頑固なのだ。タケシは知っている。

「まあ、お嬢の言うことも確かだ。ここは、信じて待とう」

「ええ・・・こういう時、カラーがいれば」

「何か言ったか？」

「・・・いいえ、戯言です」

そう言うエリカの表情もまた、固く引き締まっていたが。

(これは・・・!? 攻撃じゃない、スイクンの思念波!?)

一方、カスミたちの戦いは終焉を迎えていた。

スイクンの、決意によって。

(スタちゃん! 読み取って!)

スイクンの言いたいことを、スターミーの古代文字の星しるべで描く。

「きよ・・・だい・・・な」

巨大な悪が動きつつある、共に戦うパートナーが必要だ。

スイクンは確かにそう言っていた。

「一緒に戦って欲しい、水のエキスパートである君に。小さな命を守った君に」

スイクンはカスミのその言葉にこくりと頷く。不思議と水の中で声が出せたのはきつとスイクンの力なのだろう。気づけば呼吸も苦しくはない。

カスミはその時、レッドのことが頭に浮かんだ。戦闘バカで、正義感が強くて、行動力があるそんな男のことが。

きつとこのことを知れば、レッドはまた戦いの渦へと自分から巻き込まれていくのだろう。

それがとてつもなく悲しかった。嫌だった。もう、いつの間にか勝手に前へと進まれていくのは。

いつの間にか背中が見えなくなっていくのは。

「あなたと一緒に・・・戦います」

そうしてカスミは一つの決断をする。

やがてジヨウトを巻き込んでいく、いやもう巻き込まれているかもしれないその渦へと。

「カスミ!？」

「・・・ぶあつ」

タケシとエリカが待っていた水面からカスミは特に苦しむ様子もなく顔を出す。

「だ、大丈夫か!?!さつき戦ってた相手は!?!」

「ん?へへへへー」

「は、はあ!?!なんだその笑い?おい、お嬢。カスミが変だ・・・お嬢?」

「あ、あ、あ、あああああ」

滝壺からカスミを引き上げたタケシは、カスミの変な態度に混乱しエリカに助けを求める。

ものの、そのエリカもなにやら一点を見つめて動かない。

不自然に思ったタケシは、エリカが見つめている一点を振り返る。

「おいおいどうした?そんな亡霊を見るような反応して」

「カラー!？」

「やあ、久しぶり。エリカちゃん」
そして、お話は次へと動き出す。

44話 「時間にルーズな奴にドロップキック」

カラーとエリカたちが再会するその数日前――

「ぜえ……はあ……よっこいせ!つと」

ルギアとの戦闘を終えて僕は息も絶え絶えに陸上へと辿り着いていた。

「おーい。そろそろ起きてくれよ。イエローちゃん?」

――

肩に担いだイエローからの返事はない。

大海原に漂っていたイエローを運悪く見つけてしまった僕は、仕方なしにここまで運んでいた。

まあ、知り合いの危機を放置して死なれてしまっても目覚めが悪いしね。

「ただの屍にはなってくれるなよ」

せっかくここまで苦労して運んだんだ。まあ、一番疲れているのは人間二人担いでここまで飛んできたクロバットだろうけどね。

ちゃんと呼吸はしてるようだし、どつかで休んでいればその内意識も取り戻すだろう。

そう僕は結論付けて休憩もそこそこに歩きだす。

「一番近い町は……アサギシテイかな」

うん、まだまだ女神様は僕の味方のようだ。アサギシテイにはミカンちゃんがいるはずだからね。

いくらなんでももうエンジュの復興は終わっているはずだし。頼らせてもらうことにしましょう。

と、思っていたんだけど。

「いない?」

「ええ。当ジムリーダーは現在所用でおりません」

ジムの受付嬢は淡々と事実だけを述べる。

「結構急用なんだけど、なんとかかならない?」

「申し訳ございませんが」

随分丁寧に断られるものの、どうやらアクションを起こしてくれるほどではないらしい。

「どこにいったの？すぐ帰ってくる？」

「ポケモン協会からの緊急招集ですのでしばらくは」

まいったな。結構あてにしてたから、次の行動を決めてないぞ。

イエローを休ませるにしても一人でつてわけにもいくまい。

僕はこう見えて忙しいんだ。次の予定が詰まってるんだよね。

特に遅れると怒られそうな相手だし。

「……………ってポケモン協会？」

「はい」

受付嬢は相変わらず表情を変えずに頷く。

珍しいな、ポケモン協会からの緊急招集って意外と大事そうだぞ。

これはいくら粘っても意味ないと見た。

「…………あの、こう言つてはなんです、当ジムリーダーとは一体どういう関係で？」

これまで事務的な返答を徹底していた受付嬢だが、僕がイエローを担いでいることにいくらなんでも不審がつているのだろう。

目が犯罪者を見るようなそれになっちゃってるぜ。

困ったなあ。

「前にエンジユで二度ほど会っただけなんだけど、ミカンちゃん、カラーと呼び捨てにされるくらいの関係だね」

「ばちこーん！と、精一杯の良い笑顔を取り繕う。印象って大事だね

！

「急用と、おっしやいましたよね？」

「うん？ああ、見てわかる通りこの子を休ませることが出来る場所を探してるんだ」

「それでしたら、一つご紹介出来る場所がございます」

「お？なんだいなんだい？案外話がわかるじゃない」

相も変わらず表情は固まったままだが、カチャカチャと手元のパソ

コンを忙しなく操作しだす受付嬢に僕は表情が本当に明るくなる。

「このアサギシテイの近くに『育て屋』というお爺さんとお婆さんが二人でやっている場所があります。当ジムリーダーのミカン様も懇意にしておられる所ですので、力になってくれるかと」

育て屋？爺さんと婆さん？

なーんだか心当たりがあるようなないようなその名前に嫌な予感がしつつも、贅沢言っていられる立場ではないのは確かだ。

「わかった、その場所を教えておくれ」

「と、言うことで。イエローをよろしくお願いいたしますね。お爺さん、お婆さん」

「ぐぬぬぬ、またお主か！ミカンはおらんぞ！」

「話聞いてたのかな？この婆さんは。ボケるにはまだ早いぜ？」

「年寄扱いするな！かわいいお姫さまくらい言えんのか！」

「いやー、口が腐つても言えそうにありません」

騒々しい、実に騒々しいお婆さんはやっぱりエンジュで出会いミカンちゃんと一緒にいたお婆さんだった。

なるほど、育て屋をやっていたのか。縁側に座っている僕は育て屋が預かっているポケモンたちが庭で所狭しと遊んでいるのを見つめる。

まったく世界一どうでもいい情報だぜ。

「それで？この子は？」

お婆さんに比べてお爺さんは話しが分かるようだ。流石、片方がチャランポランだと片方がしつかりするってよく言うよね。

お布団にくるまれたイエローは、スースーとびっくりするほど寝つきがいい。

「イエローって言うんです。なんで意識を失ってるかってのは、割愛しますね」

めんどいんで。

「取り敢えず休めば目も覚ますでしょうし。しばらく置いてやってはくれませんか?」

「それはいいが、お主はどうするのじゃ?ワシはお主なんぞとひとつ屋根の下で寝たくはないぞ」

「こつちだつて金積まれたつてごめんですよ。僕は用事があるんで、ここには留まりません」

まったく、この婆さんの口を誰か塞いでおいてくれ。

「・・・チュウ」

「あれ?君、レッドのピカじゃないか。可愛らしいガールフレンドまで連れてき、なんだい?そんな心配そうな声を出して」

イエローが敷かれた布団に横たわっているのを、心配そうな瞳で見つめるピカと可愛いリボンがついたメスのピカチュウ。

心配で思わずボールから出てきてしまったのだろう。

ぐりぐりとその額を指で押して、僕は笑う。

「大丈夫さ、案外イエローは頑丈だ。しばらくすりや目も覚ますよ」

縁側から立ち上がって、僕は一つ伸びをし首を回す。

「あーあ、疲れた。この借りはでかいぜ?イエロー」

聞こえてはいないだろう。綺麗な寝顔で吐息を立てている。

「さて、僕は僕の用事を済ませますかね」

面倒だが、戻らなきゃいけない。

ブルーに会いに、カントーへ。

「遅い！」

開口一番に、ブルーは罵倒する。

「おいおい、これでも急いできたんだけど？」

カントーはふたご島、ブルーに呼び出された僕はなるはやで来たはずなのに。

目の前にいるブルーはぶんすか怒っていた。

「それで？結局ここまで目的は教えてもらえなかったわけだけど、そろそろ教えてくれたりするのかい？」

ルギアの戦いの後、僕がイエローをどんぶらどんぶらクロバットに揺られて運んでいると一つの電話がかかってきた。

当然、相手はブルーなわけだけどその用件が取り敢えずカントーに戻ってこい。その一言だったのだから呆れる。

じゃあなぜそんな頼み事に僕が頷いたかといえば。

「ええ、あなたにも関係のある話よ。聞いて損はさせないわ」

などとぬかしやがるもんだから、僕は来ざるを得なかったというわけだ。

「私の目的は、簡単に言ってしまうえばあるポケモンの捕獲」

なんとなく、その一言で察しがついてしまったこの僕の有能さを呪いたい。

ここ、ふたご島を集合場所にした時から引っかかってはいたんだ。

「サンダー、ファイヤー、フリーザー。その伝説の三匹を私には手に入れないといけないの」

いつになく真剣なその表情を僕は横目で観察しながら上空を見やる。

「なるほど、で？あれを呼んだのはブルーかい？ちよつとせつかちだと思っただけだ」

「・・・フリーザー」

ブルーの恐ろしい表情からもわかる通り、僕らの上空には今、紛れもなく本物のフリーザーがいた。

「信じてはくれないかもしれないけど、これはまったくの偶然よ。本当は・・・私の目的全部を話してから戦うつもりだった」

たたりと冷や汗を垂らしているブルーの顔は嘘をついているようには見えない。

気付いてる？君、嘘をつくの下手なんだぜ？僕みたいなのに判別されるくらいにはさ。

「まあ、どちらにせよフリーザーとは戦うんだろ？だったら、遅いか早いかの違いでしかない。ねえ、カラカラ」

戦闘態勢を取るべくカラカラを外に出して、僕はそう告げた。

まったく、ダブルバトルは経験がないんだけどな。しようがない、足を引っ張らない程度に頑張りますか。

と、思っていたんだけど。

「・・・ブルー？何してんのさ、早くしないと奴さんもう来るぜ？」

「わかってる！わかってるの・・・」

ブルーはただ、その場所で固まっていた。その瞳はフリーザーをとらえて離さないのに瞳の奥ではフリーザーを見ていないようだった。

そんな対応にフリーザーも困惑したのだろう。臨戦態勢で距離を取ったまま近づいてこない。

「ブルー、君。もしかして・・・」

僕はそんな彼女を見てある結論に至った。多分、ほぼ確実に正解しているだろう結論に。

「そうよ！私、鳥が怖い！トラウマなの！」

きつと恐怖を和らげるためだろうその大声で、彼女は自身のトラウマを宣告した。

僕が言うよりも、自分で言ったほうがマシだと判断したのだろう。

鳥が怖い、なるほど。それでさっきから動けなくなっているのか。

「なによ・・・笑いなさいよ。どうせ笑うんでしょ、人の弱みに付け込んで散々好き放題に弄り倒すんでしょ」

よっぽど屈辱だったのか、よっぽど僕には知られたくはなかったのか。涙目になりながらぶつぶつとブルーはいじけていた。

そんな彼女を見るのは初めてで。大抵いつも高慢に物事を頼んでくることしかなかったので確かに散々辱しめてやりたい気持ちがないこともないが。

「しないよ、そんなこと」

「・・・え？」

「大体ねえ、ブルーは僕のことをどんな人間だと思ってるわけ？この状況下でそんなことできる余裕ないっての」

僕としては、精一杯の慰めで。精一杯の励ましのつもりだったのだが。

気持ちがわからんでもない、僕としては。

「それってこんな状況下じゃなくて余裕があったらするってことじゃない！」

「ほおー、そう取りますかこのひねくれ者め」

「カラーに言われたくないわ」

まったくもって可愛くない女だな。

「ほら、来るよ。今度こそ、ちゃんと構えてよね」

「わかってるわ」

でもどうやら、恐怖は和らいだらしい。

そうさ、三年前のロケット団とやりあった時だってフリーザーたちに臆することはなかったじゃないか。

だったらやれない理由はないだろう。

「ギャアアアアス！」

待ちくたびれたのか、警戒して近づいてこなかったフリーザーは雄叫びと共に急降下してくる。

「行くわよ！カラー！」

「言われんでもね！」

あーあ、結局ダブルバトルか。コンビネーションを取るのは苦手だなあ。

「ブルー」こわいかお！」

「カラカラ！ ボーンラツシュ！」

二人同時、いや正確に言えばブルーの後の僕の攻撃にフリーザーも顔をしかめ上空へ退散する。

「ていうか、ブルー。自分と同じ名前のポケモンってそれどうなの？」

ちよつと恥ずかしくない？

「それ言うならアンタだってカラーと、カラカラ。似てるでしようが」
「おつとそれもそうだ」

「！」

なんて悠長に喋っている場合ではないらしい、フリーザーはどうやら次は本気で向かってくるようだ。そんな咆哮だった今のは。

「くっ！」

“れいとうビーム”。二人のポケモンが近距離用だと見抜いたフリーザーは空から遠距離攻撃をしかけてくる。

「なあ」

「なによ！」

「こんな状況で悪いんだけどさ、アレを捕まえるメリットを教えてくださいよ。どーにもモチベーションが上がらないんだ」

そんな攻撃を避けつつ、僕は話の続きを促した。

モチベーションは大事だと学校で習ったからね。

「・・・いいわ、あの三匹を捕まえる目的は大きく分けて二つつ!？」

流星は腐っても伝説のポケモン。おしゃべりをする余裕すら与えてはくれない。

一度ロケット団に良いように使われたのがよっぽどショックだったのだろう。もう自分たちは何物にも命令されないという強い意志を感じる。

「二つは私のトラウマを克服するため！そしてもう一つは・・・！」

僕らは遮蔽物のある林の中へ逃げ込みながら、それでも執念深く話を続ける。

「もう一つは？」

「ある男の野望を阻止するため！」

・・・おいおいおい、まさかここで繋がってくるなーんて言わない

よな？

「ある男？なんだよ、名前とか知らないわけ？」

努めて冷静に、努めて平静を装って僕は尋ねる。

「マスクオブアイズ
仮面の男」

「・・・勘弁してくれよ。ったく」

ロケット団の残党を集めて首領を名乗っている男の名前と、ゴールドたちを襲った敵の名前と。

完全に一致しちゃってますよ。こいつは。

「知ってたの？」

不思議そうにブルーは僕に尋ねてくる。そんなに顔に出てたかね。まあ、隠そうともしてないが。

「名前だけはね、なんでもジョウトで悪巧みしよーとしてるらしいじゃない」

「そう、彼の目的はジョウトにいるホウオウとルギア」

「・・・ルギア？」

ちよつとタンマ、心当たりある出来事がフラッシュバックしちまうんですが？まさかあの時ルギアは逃げたのではなくその仮面の男に捕獲されたんじゃないだろうね。

うーん、辻褄がぴったり合っちゃうのが怖いよね。

「で？なんで君はそんなことを知っている？」

「そう、ここからがあなたにも関係があると言った話なの」
「ほう」

走り回りすぎて息も絶え絶えになったころ、フリーザーが僕らを見失ったのをきっかけに木陰に身を隠す。

それもすぐに見つかるだろうが。

「私は、鳥ポケモンが怖い。それは幼い頃大きな鳥ポケモンに連れ去られた過去があるから」

「・・・」

僕にも関係がある。そう言われては茶化す気にもなれない。

「そのポケモンは各地のトレーナーの素質ある子供を攫っていた。仮面の男の指示で！」

「……それと、僕に何の関係が？悪いけど、僕にそんな過去はないぜ」

忘れているという可能性すらまったくのゼロだ。時期を聞く限り、なにせその頃僕は家族を失った真つ最中だったから。

あの時のことはよく覚えている。

「私はその素質あるトレーナーの中から、特に選ばれたトレーナーだった」

そんな僕の対応には目もくれずブルーは喋り続ける。

「けど、そんな生活に嫌気がさしてある日逃げだしたの。仮面の男の目的とそれに必要なアイテムを持ちだして」

「で？男の目的ってのは？」

随分と回りくどい言い方をするもんで、僕の興味は今いつフリーザーが襲ってくるかに移っていた。

が、ブルーの一言で嫌が応にも引き戻される。

「^{とき}時間の支配。ハウオウとルギアの羽を使って、伝説のポケモン“セレビィ”を捕まえ過去を改変するのが仮面の男の目的よ」

「……過去の、改変？だと、？」

その言葉を、その言葉の意味を正確に理解した時、僕は。

取り繕うことも、いつものようにカッコつけることすら出来ず。僕はただただ驚愕に瞳を染めていた。

「ね、アナタにも関係のある話でしょ？」

確かに、ようやく話が見えてきた。

どうやらマチスさんやゴールドよりもよっぽど僕の方が仮面の男に用があつたらしい。

「……ふふ、ふふふ。はは、はははは！あはははははは！」

過去の改変。本当にそんな力を持つポケモンがいるのかどうか定かではない。

が、そんなものはどーでもいい。今までだって、定かであったことなど何一つない。

この世の中には不確定要素で溢れている。絶対は存在せず、必然は意味を成さない。

「気が変わった。時間が惜しい、今すぐ三匹共相手してやる」

「ちよ！一人じゃ無理よ！」

隠れていた木陰から僕は一人目立つ。

当然、僕らを探していたフリーザーは一直線にここまで来た。

「悪いが逃がしはしない。君に構ってる時間は今無くなった。フリーザー」

そして僕のきつと、生涯で〃二度〃だけの本気のバトルが始まる。

それはまた、次のお話で。

45話 「真っ直ぐに」

「悪いが逃がしはしない、フリーザー。今君を、ここで捕まえる」
この人生、おちゃらけて、ふぎけて、茶化してごまかして生きてきたけれど。

どうやらここだけは僕が真剣になる数少ない場面なのだろう。
自分でもわかるくらいに、顔が引き締まっているのを感じる。

「ギヤアアアス!!」

そんな僕の感覚が伝わったのだろう。フリーザーも呼応するように雄叫びを上げた。

「だから、時間はかけないって言っただろう」

「ギヤ?」

「.....」みねうち」

上空を飛んでいるフリーザーには、ある種の油断があった。

それはリーチの問題、僕もブルーもフリーザーほど上空を素早く動く相手に攻撃を当てられるポケモンはいない。

なまじ一度警戒してしまっただからこそ、フリーザーは本気だった。「だからこそそこに付け入る隙がある。本気になった相手ほど、意表をつけるものはない」

カラカラは、最初の一撃の後フリーザーの背中にくつついていた。種明かしをするならただ、それだけのことだ。

「だけど気付かなかっただろう?」僕たちを追うのに本気だったから
“本気つてのは、他に集中を回せるほど余裕なんてないんだよ”

「ギユ、ウウウウウウ!」

それでも、僕の言葉を聞きながらフリーザーは上空で体制をなんとか立て直そうとする。

流星は伝説のポケモン、体力を限界まで削る技“みねうち”を食らってもなお意識を保っているその胆力には尊敬するよ。

「だけど僕の勝ちだ。＼みねうち＼が決まった時点だね」
そして、と、僕は付け加える。

「二度、同じ手が通用すると思うなよ。＼ファイヤー＼」

「グギャ!?」

僕たちがフリーザーに気を取られている間、ひっそりと背後に忍び寄っていたファイヤーはフリーザーがピンチに陥ったと見るや否や、僕に特攻紛いの“ドリルクちばし”をしかけてきた。

が、しかし。

「カメちゃん、＼カウンター＼」

僕の左手から放たれたブルーのカメックスの強烈なカウンターが決まる。右ストレートはファイヤーの頬に綺麗に吸い込まれていった。

一瞬でブルーの腰から拝借したのはご容赦いただきたい。

「なーい、いつの間に!」

「うるさいなあ、代わりに僕のウインディを一時的に交換してんだから文句言うな」

「ギャアアアア!」

「つとと、まだそんな元気があったのかい?フリーザー」

ファイヤーが目の前でやられて、激昂したフリーザーの雄叫びに僕はゆっくりと近づく。

既に空を飛ぶ力も尽きて、痛々しく地面に横たわる彼に、ゆっくりと。

僕は、モンスターボールを押し当てる。

ぎゅつと、柔らかい体の感覚があつて。その後にフリーザーはボールに吸い込まれていく。

「ちよ、ちよつとカラー!モンスターボールっていくらなんでも無謀・・・」

「大丈夫さ。こうすれば」

確かに、フリーザーほどのポケモンはハイパーボール以上のボール

が妥当なのだろう。

だけど生憎、そんな用意はしていない。

現に、僕の手元でモンスターボールはクルクルと回っており今にも飛び出してきそうではある。

「だからこうするのさ」

ギュっと、僕はボールが動かないように、開かないように握りしめる。

ただ、ただ。力づくで。

反抗して飛び出ようとするフリーザーの力と、それを押さえつける僕の力。

勝ったのは。

「・・・ほんと、無茶苦茶ね。アナタ」

「君が前もって教えてくれれば万全の準備で臨んだんだけどね」

ブルーの呆れたような声に僕は皮肉で返す。どうやらそんなことを言っているくらいに余裕はあったらしい。

手元のボールは大人しく僕の手元に収まっていた。

「しようがないでしょ、全部話したりしたら協力してくれたか怪しいし」

「ははは」

確かに、ブルーの為にわざわざカントーまで出向き尚且つ伝説のポケモンを捕まえるだなんて相当の金を積まれないとやってられない。

がしかし、こと一つの情報においては。

よっぽどその常識を覆してしまうのだ。

セレビイ。通称“ときわたりポケモン”。伝説の一匹。

僕もジョウトで調べものをしていた時にその名を耳にしたことぐらいはある。

が、そんな眉唾な話を本気になどしていなかったし、そも仮に本当だとして出現条件が極めて悪い。

ウメバの森のその奥にある祠。そこにある条件が満たされた時のみ光り輝いてセレビイは現れる。

その条件とやらが僕にはわからなかったし、悠長に待ってられる

ほど僕は気長でもない。

「さて、受けた仕事はちゃんとやるのがポリシーだ。ブルー、君のトラウマを克服する手伝いをしてあげよう」

手元に収まったフリーザーをポイとブルーに投げ渡して。

僕はスタスタと倒れたまま放っておかれたファイヤーの所へ向かう。

「ちよ、ちよっと待つてよ」

「僕はカウンセラーでもなければ、専門家でもないただの素人だ。だから、安全で完璧な治療方なんて知らない」

落ち着いてしまうと、まだ恐怖が思い出されるのだろう。ブルーのその表情は引き攣っている。

ファイヤーを二、三メートル目前にして僕は立ち止った。

「それでも、” 経験則からの” アドバイスぐらいなら出来る」

「・・・いいわ、今はとにかくスピードが大事なんだから」

状況、つまりは現状をブルーは理解しているのだろう。急がなくてはいけない、と。

それは、僕も同じだが。

仮面の男がルギアを手に入れている可能性がある以上、もうそれは“ルギアを手に入れた”と決め打ちしてこちら側は動かなければならない。

こういう、情報で一步遅れているのは僕は好きじゃないんだけど、そんなことを言ってもいられない。

「まあ、一言で言えば慣れた。トラウマを克服するつてのは要するにその状況に慣れるつてことなんだよ」

だからこそ手段は選んではいられない。ブルーには悪いがね。

なんだつて、初めてやることは怖い。失敗したらどうしよう、間違えてしまったらどうしよう。

不安に駆られて、どうでもいいことを考える。現実を見たくないから、思考に逃避して。本当にそうだったときのための予行演習に余念がない。

だけど、それを毎回やるやつはいないだろう。程度の差はあれど数

回同じことを繰り返せばそういつたことはしなくなる。

「だから繰り返し返していくことだ。当時の状況をなるべく冷静に、なるべく的確に思い出しながら」

ここで大事なのは、多分焦らないことだ。辛くなれば辞めていいし、したくなければしなくていい。

が、こと僕らの現実ではそれが出来ない。なにせ、一年も二年も時間をかけるわけにはいかないからだ。

求められるのはスピーディーさ。

ならば人権など知ったことか。

「……わかったわ。言う通りにする」

僕の予想外な真剣さに、ブルーも了承してくれたのか僕の隣に立つ。

「イメージしろ、瞳は閉じるな。目の前にいるのは当時のポケモンじゃあない。ただの、鳥ポケモンだ。他の奴らと変わらない。カメちゃんも、ニドちゃんも。何も変わらない」

暗示というのは厄介で、自分でかけてしまったそれを解くのは並大抵のことじゃない。

だから、少々強引にでもやらせてもらう。

「さあ、手を出して。大丈夫さ、目の前にいるのはただのポケモンだ」

「……うっ」

「怖くてもいい、恐れていてもいい。だけど、勇気だけは持って。差し出して掌を引っ込めないで」

震えるブルーの右手に、優しく僕の左手を添える。

ファイヤーに触れるために、勇気を出している女の子の手を。

「……あ、触れた」

恐る恐る、本当にビクビクと子犬のように震えながら。

それでも触れた。触れられた。

きつとこの事実は自信になって、今後のトラウマ克服に一役買うだろう。

ブルーのほつとしたような、和らいだ表情を見てそう思った。

「さて、じゃあ捕まえてくれ。僕は生憎モンスターボールを持ってな

い」

「え、ええ?!いきなり!」

ちよつとした緊張感が解けたからか、ブルーの声は一段と大きくなる。

「いきなりなことあるか、フリーザーは僕がやってあげただろう?」

「・・・なによ、上から目線ね」

「おいおい、実際年上だし?上から行って何が悪い?」

「あーあー!うるさいうるさい!やればいいんでしょ、やれば」

まったくもって口の減らない女だな。

それでもブルーはやや緊張した面持ちでハイパーボールを取り出す。

一度ちゃんと触れられたからだろうか、ブルーの顔には緊張があつても、恐怖はないように見える。

恐怖とはとどのつまり未知からくる。

人は知らないから怖いのだ。

知らない物が怖い、知らない人が怖い、知らない環境が怖い、知らない場所が怖い、知らない経験が怖い。

そして怖いから遠ざけようとする。その方法は千差万別、人それぞれだが。

だが、いつまでも怖いわけじゃあない。人間というのはよくできている、流石は神様が作っただけはあるようで。

「慣れというのは本当に便利だ。あれだけ不安で、今にも逃げ出しそうだった事柄からだって人は平気になって慣れてしまう」

それが良いことなのか、はたまた悪いことなのかは僕にはわからないけどね。

「さてブルー、僕がこうして長々と語っているんだ。さっさと気持ち固めてボール投げちゃえよ」

「う、うっさいわね!今やろうとしてたわよ!」

「どーだか」

僕の余計な一言にブルーはいーっと、顔を歪めてからファイヤーに向き直る。

(あーあ、せっかく緊張ほぐしてやったつのに)

ブルーは再度神妙な面持ちで、二、三深呼吸してから瞳を静かに開いた。

「ごめんね、自由に飛び待っていたのに。平和を脅かすような真似して。でも、今の私にはアナタたちの力が必要なの。お願い、力を貸して」

「……………フンツ」

地面に横たわっていたファイヤーは、不満げに鼻を鳴らす。が、どうやら抵抗しようという気はないらしい。

それをブルーも察したのだろう。クスリと、少しだけ笑って優しく彼女はファイヤーを両手に収めた。

流石に少し疲れたので多少の休憩の後。

「それで?これからどうするの?」

「決まってるだろ、帰るんだよ。ジョウトに」

仮面の男の目的は図らずも僕の目的にも被っている。

セレビイを捕まえて何をするのかは知らないが。

「殺してでも奪い取ってやるさ」

「……………」

酷い顔をしている。その自覚はあるさ。

だからそんなに引かないでくれよ、ブルー。

「アンタの目的とか別にどーでもいいんだけどさ。一つだけ聞いていい？てか、聞くわ」

ブルーは僕のを承もなしにペラペラと喋り続ける。

「経験則からのアドバイス」。カラー、アンタは私にそう言ったわよね。それ、どーゆう意味なの？」

「・・・言ったかい？そんなこと」

まったく、どうでもいいことが気になる子だな。めざといというか、なんというか。

「ええ、言ったわ」

彼女のその強く、まっすぐにこちらを見てくる瞳に、僕はため息をつく。

オーケーわかった。僕の負けだ。

今は、珍しく気分もいい。多少の自分語りには目を瞑ろう。

「・・・昔、家族が火事で焼かれてね。それからどーも、炎を見るのが苦手だった」

映像だろうが、現実だろうが。

偽物だろうが、本物だろうが。

小さかろうが、大きかろうが。

分け隔てなく、全て等しく炎というやつが苦手だった。

見るのも嫌だった。感じるのも嫌だった。それがこの世界にあることすら許せなかった。

「・・・どーやって克服したの？」

家族、その言葉にピクリと反応したブルーは真剣に尋ねてくる。

だから僕も珍しくまともに答えた。

「一緒さ、君と同じ。慣れようと頑張ったのさ。ありとあらゆる方法でね」

炎を見た。吐くまで見た。

炎に触れた。火傷するまで触れた。

そんなことを無茶苦茶に繰り返すうちに、僕は炎に何も感じなくなっていた。

それが良いことで、正しいことだったのかなんてどーでもよくて。ただ僕には、恐怖している暇などなかっただけだ。

「さて、僕はもう行くよ。ああ、ちなみに言うけれど。こんなことを言うのは最初で最後だぜ。まあ、情報をくれたちよつとしたお礼とでも思ってくれ」

クロバットをボールから出しながら、僕は最後に一言付け加える。

「サンダーは君一人で捕まえるんだ。きつとそれができりやあ本当に克服したんだろうよ」

「わかってる」

「そうかい、じゃあね」

そうして僕は旅立った。

このジョウトでの最後になる場所へと。

それではまた、次のお話へ。

46話 「いつだって不意打ちがいい」

「と、いうことでそんな僕はジョウトへと舞い戻ってきたわけさ」
「・・・そうだったのですね」

伝説のポケモンをブルーと一緒に捕獲したのが数日前。
そこからトンボ帰りで戻ってきた僕は、偶々見かけたエリカちゃんたちと共に目的地へと進んでいた。

そう、目的地だ。仮面の男よりも先にセレビイを捕まえるという目的のための場所。

いや、より正確に言うのならば仮面の男がセレビイを捕まえる瞬間を横取りするための場所。

と、いうことになる。

「まさか、そんな巨悪がこのジョウトに巣食っているなんて」

無論、そんな僕の胸の内を馬鹿正直に口にしたりなんてしない。

エリカちゃんにはロケット団の残党を束ねているボス気取りが気に食わない。そういう設定にしてある。

「そうそう、だからもし何かあっても僕の邪魔はしないでね」

簡単に信じてくれたのか、エリカちゃんは僕の言葉に対して真剣に考えている。

何よりも迷惑なのは、横取りする時に邪魔されることだ。

だからその可能性が少しでもある人達には牽制しておきたい。

普段ならスルーするエリカちゃんに声を掛けたのはそういう理由からだ。

「邪魔って・・・そんな言い方をされるほど何かした覚えはありませんが?」

「はっはっは、よく言うよ」

いつも小言ばかりで僕のゆく道をたしなめてくるじゃないか。

「て、いうかさ。君らはどこに行ってるの?」

冒頭で、共にという言い方はしたものの。僕は実はエリカちゃんたちの目的地は知らない。

別に興味もなかったんだけど、こうまで僕と道中が被っているのが

なんだから悪寒がしたので尋ねてみる。

「セキエイですよ。ポケモンリーグの、エキシビジョンマッチをするためにね」

エリカちゃんの答えに僕は一瞬、足が止まる。

「そーゆーアంతはどこに行ってるのよ」

などというカスミちゃんの問いも聞こえていない程に。

エキシビジョンマッチ？

なるほど、それでか。

「？」

カスミちゃんは質問に答えられない僕を不思議に思ったのか、「ねえ、聞いてんの？」と、顔をのぞき込んでくる。

「ああ、聞いている聞いている。ポケモンリーグ、ということは行き先はセキエイってことだ」

「え、ええ。そうですが」

なるほどな。道理で道が被るわけだ。

ここでエリカちゃんに会ったのも偶々ではなかったということ。

「僕の行き先もね、セキエイだよ」

「え、ええ？そーなのですか？」

「ああ、どうやら女神さまは僕の虜らしいね」

ブルーのくれた情報といい、ここ最近が良いことばかりだ。

これも、日頃の行いかねえ。

驚いた表情のエリカちゃんを尻目に、僕は一人ほくそ笑む。

勿論、エリカちゃんと一緒に行動するからなんてしようもない理由ではない。

「さて、ようやく道が開けてきた」

強い野生ポケモンと切り立った山道のせいで飛行ポケモンがろくに使えないこのエリアは、セキエイを通るトレーナー達にとっての難所だ。

だからこそ、僕らも面倒を押し切って歩いてきたわけだが。

「ここまで来たならそれも必要ないよね。それじゃ、また後で」

「待つてくださいカラー！本当に……信じていいのですよね？」

不安げで、だけれど芯の強い瞳が揺れる。

信じるか信じないかではなく、きつとエリカちゃんは信じていたのだ。僕という人間が本当は良い人なんだと。

そこに映った僕は笑顔でこう言った。

「もちろんさ」と。

ごめんねエリカちゃん。君にはわからないだろう。けれど、世の中にはいるんだ僕みたいな自分のことしか考えないような人間が。

それを自覚していてなお、僕は変わらない。

変わってはいけない。

だって、そんなこと僕には許されていないから。

なんて、そんなことは全てセレビイを手に入れてからでいい。

だから今回も僕は前だけを向いていこう。

「あー、腹減ったあー！」

それから少しだけ時間は過ぎて、場所は23番道路。

バクフーンことバクたろうに乗った少年と、メガニウムことメガぴよんに乗った少女はすごい勢いで道路を過ぎ去っていた。

ゴードルとキャップが印象的な少年、ゴードルは少々声を荒げパトナーに愚痴をこぼしている。

「そうだ！途中で買ってきたタンバ名物「ほかほか焼き芋」でも食うか！ほらよ！」

そう言っつて、ゴードルは焼き芋をひとつ乱雑に放り投げた。

「ちよ！急に危ないでしょ！それに食べ物をもっと丁寧扱ってよ！」

全身から真面目なオーラが噴出している少女、クリスはゴールドにいつものようにいつものごとく説教をしていた。

もはや、馬の耳に念仏だとも思うがクリスの性格上言わなければ気が済まないのだろう。

「しかもこれちゃんど焼けてないんじゃないの!?!」

流石クリス。焼き芋店にまで説教をし始めた。

「んだよ、そんなことかよ。バクたろう!」

ゴールドは一言、乗っていた相棒に声をかけるとバクたろうは反応して。

思いつきり背中ので焼き芋を燃やした。

クリスの手の中に納まっていた焼き芋は、最早原型を留めておらず完全に焼け焦げた何かになっていた。

焼け焦げた、何かになっていた。

「ははは!軽くあぶりなおしてやろうと思ってたけど、ま、よくあるこった気にすんな」

「・・・気にすんな、ですってえ?」

ワナワナと、手に持った黒焦げた何かを持ったクリスは大きな声で一言。

「火傷するかと思っただじゃないゴールド!!」

怒りのままに投げたそれはゴールドの頭上を掠めていった。

「わーったわーった!そんなキレンなって、それよりほら!見えてきたぜセキエイ高原、ポケモンリーグの会場が」

流石はポケモントレーナーたちの聖地、見渡す限り人で溢れているのが見て取れる。

誰も彼もが浮足立っており、最早それは祭りの一種と化していた。そんな中で、ゴールドたちだけは見つめる顔が険しい。

「つたく、一般入場受付だの選手入場口だのややこしいぜ」

よし、と一言呟くとゴールドはバクたろうをボールに収め、愛用しているキックボードに乗り換える。

「あ!ちよつと!ゴールド!」

「どけどけ一般人ども!」

入り口の狭い通路を荒々しい運転で、しかし器用に人込みを避け運転していくゴールドに一般人どもは驚きはた迷惑そうに顔を歪ませる。

「あー、君、今の子の知り合いかね？」

「わわわ、す、すいません」

その後方で警備員に怒られるクリスのことなど意にも介さずズンズンと進んでいく。

「きゃあああ!?!」

警備員にくどくどと注意を受けているクリスは、ひととき大きな悲鳴にまたもやこめかみをひくつかせる。

もしや、またアイツが何かをしでかしたのではないかと。

しかし、クリスの予想は幸いにも外れていた。

「赤ちゃん！私の赤ちゃんが！」

「どーした!?!」

騒ぎを聞きつけ、他の警備員たちも何事かとやってくる。

その内の一人、事態を見ていた警備員が声を大にして現状を報告した。

「登録手続きのために預かっていた出場者のポケモンが弾みで外に出ってしまったー！」

見ればヤンヤンマが数匹、通路で所狭しと暴走している。突然の事態で混乱しているのだろう。

そして一匹のヤンヤンマがどうやらお客の赤ちゃんを奪ってしまつたらしい。

「なるほどね、オレに任せな！」

そんな混乱の最中に一歩前に躍り出たのはゴールド。

自信満々のその面は何か考えがあるのだろう。

クリスはゴールドが悲鳴の正体ではないことに一瞬ほつとしたのもつかの間、目立つ行動をとる彼にハラハラせざるを得ない。

が、事が事である以上何もするとも言えず黙ってみているほかはない。

「そらー！」

そう思っていると、ゴールドは自身のモンスターボールを一個とりだし地面に置く。

持っていた自前のキューでそのボールを打ち出したと思うと、ボールは勢いよく飛んで行った。

「赤ん坊がいるのに攻撃するなんて君は……！」「攻撃じゃねえよ！黙ってみてな！」

そうゴールドが強ク言うので警備員も押し黙ってしまふ。

どの道もう放たれたボールは高速で動き回っており、警備員たちには事の成り行きを見守るしかない。

「な、なんだなんだ!？」

そんな事の成り行きを見守っていた警備員たちは口々に驚嘆の声を上げた。

なぜなら高速で動き回るボールは壁に跳躍しながら次第に円形状にまとまっていき、それを目で追っていたヤンヤンマたちは目を回し始めたからだ。

「ヤンヤンマっつーこのポケモンはでっかい眼で常に360度見てるポケモンだ、だからそいつを利用してやれば」

目を回したヤンヤンマは最早赤ん坊を連れまわす体力すらなくなり、ほろりと、赤ん坊を離した。

空中で。

「危ない！」

誰かが咄嗟にそう叫ぶものの、叫ぶだけで間に合うわけなどない。

しかし、そこにもゴールドに抜かりはなかった。

「大丈夫っすって。黙ってみてな」

赤ちゃんが落下する寸前。

高速で回転していたボールは床で一度開閉スイッチが押され、中にいたポケモン、ウソツキーが飛び出した。

あのボール、ポケモンが入っていたのか。赤ちゃんを寸でキヤツチした。

色々と驚嘆入り混じっているものの、会場中が歓喜の声でいっぱいになる。

「へっへっへ、まあまあ、このくらいどつてこと——
て、痛つてててて!!」

その盛り上がり方に機嫌をよくしたゴールドの鼻は伸び切っていたが、もう一人の相手であるクリスに耳を引っ張られる。

「ちよつとゴールド! 何しに來たか忘れたの!?!」

目立つ通路から引っ張られて、誰もいない小さな道に追いやられたゴールド、

そんな彼に小声で、しかししつかりと耳に残る声量でクリスは怒りを爆発させる。

「私たち、目立っちゃダメなのよ!?!」

「わーつてるよ」

なんて、会話を繰り返しているところからともなく拍手が聞こえてくる。

「ほ、ほら! ゴールドがやかましくしてるから!」

「ああ!? オレの所為かよ! じゃあ黙ってみてればよかつたのか!?!」

「そうはいつてないけど!」

「なんだいなんだい、喧嘩はおよしよ。二人ともこれから巨悪を倒そうつて時に仲良くしなきゃだぜ?」

「つて、え? アンタは」

「・・・か、カラー!?!」

「うん、カラーだよ」

セキエイ高原に一人、クリスたちからしてみれば予想外の人間の登場に面喰う。

がしかし、この続きは次のお話で。

47話 「探偵業は密かにやろう」

「いやはや本当に見事なお手際で、感心したよ僕は」

「てめえは・・・カラー」

「最初に会った時から口の聞き方には不満があるんだけど、前髪君？」

「ゴールドだ！」

セキエイ高原、ポケモントレーナーが一度は夢見るその場所の小さな通路。

そこで僕らはコソコソと対面していた。

「な、なんでカラーがここに？」

驚いたようにクリスが口を開く。それでも周りには気を遣っているように相変わらず小声だが。

まあでも、驚くのも無理はない。僕とセキエイなんてとんと繋がらないだろうしね。

「ま、純粹にポケモンリーグを楽しみに来たわけではないよ。君達とおんなじだね」

「ああ？なんで、そんなこと知ってるんだよ」

なーんで、君はそう僕に突つかかるんだろうか。親の教育がなっていないんじゃないのかい？

などと、小言を言う時間も実はあまりない。

なにせ、僕の目的には時間がないからだ。

「さて、ということ手で手っ取り早く行こう。僕の目的は君達と同じく仮面の男だ」

「!?な、なんで？」

クリスが再び驚き、ゴールドの顔はより一層険しくなる。

「この会場に、いや、より正確に言うならば、”この会場にエキシビジョンマッチをするために来ているジムリーダー”。その中にいることはわかっている」

「・・・なんでそんなこと知ってやがんだっつってんだよ」

ああ、そうか。

ゴールドのそのセリフを聞いてようやく合点がいった。
この子、僕を疑っているのだ。仮面の男の手先なのではないのか、と。

まあ、そりやそうだよな。こんな怪しい奴いたら誰だって疑う。僕だつてそーする。

うずまき島でだつて、あの中で唯一違う行動をしていた僕を、きつとゴールドはずつと懸念していたのだ。

ルギアを手に入れたのは、実は僕なんじゃないかって。だけど残念、的外れ。

ルギアなんて要らないし、興味もない。
ルギアそのものにはね。

「まあ、優秀な忍者がいるのさ。僕の手駒にはね」「はあ?」

「ま、待ってー!一緒に、戦つてくれるってこと?」
そんなゴールドとは裏腹にクリスはどこまでも純粹だ。

少し嬉しそうに質問してくる彼女に僕は笑いながら。

「さあね、どうだろう」

「どうだろうって・・・、カラーも仮面の男のことを知つて許せなくて来たんでしよう?」

おいおい、どこまでも僕を神格化してるなあこの子は。

でもまあ、今この時に限っては好都合だ。

遠慮なく利用させてもらおう。

「そんなとこさ、ただ、戦うとかはちよつとね。ほら、僕つてば争いを好まない平和主義者だからさ」

「へえ、とてもそうは見えねえけどな」

こんの、コイツ僕が温厚な性格じゃなかったら呼び出しかけてるぞまじで。

などとキレてる時間なんて僕にはない。

「イタイイタイイタイ!!てめっ!何しやがんだ!ツネんじゃねえよ!!」

いや、まじでね。

「んんっ！気を取り直して、情報交換と行こう。僕が仮面の男のことについて知っているのは、一、どこだかのジムリーダーであること。二、氷の使い手であること。けれどこれはマチスさんの証言からいくと必ずしもそうとは限らない。まあ、この二つだね」

そして三つ目、セレビイというポケモンを狙っていること。なぜかは知らないけど。

だが、勿論三つ目は僕の心の中だけに留めておく。

そこまで話して、ようやく僕の本気度が伝わったのか、ゴールドは真剣な表情で語りだす。

「まあ、オレたちもそんなもんだよ。そもそもオーキドの爺さんも同じ話をしてたしな」

オーキド博士？なに？あの人も関わってんのか、今回の件に。

「ポケモン協会との協力要請があつたんですって。それで、私たちが影から敵を見つける算段になってるの」

「なあるほど」

てことは、このエキシビジョンマッチ。ただの客寄せパンダじゃないってことだ。

ポケモン協会がグルになつていてという話が本当ならば。

いや、だとしたらこちらにも好き勝手動けるな。

「そうか、じゃあ僕の作戦を話そうか」
「作戦？」

怪訝そうなゴールド。それはきつと元々そういうのには慣れないのだろう。

猪突猛進で力任せっぱいもんな見るからに。

・・・そういえば、レッドは意外とそういうところ考えて動くタイプだったな。

なんて、どうして今あいつのことを思い出すのか。

頭を切り替えなければ。

「そう、作戦。君達、どうやって敵をあぶりだすつもりだったんだい？」

「そ、そりゃああれだよ。エキシビジョンマッチをやってる間にこう、

見て」

「見て？」

「と、とにかく！怪しいヤツがいなか見張るんだよ！」

分が悪いと思ったのか、一際大きくなるゴールドの声に必死に制止しようとするクリス。

やっぱり考えてなかったのか。

「クリス、君がいながらなんだいこの体たらく」

「だ、だって。どうすればいいのかなんてわからなかったし」

クリスは真面目だが、今一つ悪知恵には向かないか。

ならば好都合。僕の話に持つて行ける。

「じゃあ僕の作戦でいいよね？」

「はっ、一応聞いてやる」

「はっはっは、君はいつかシメる」

一つ、咳払いをして僕は話を続けた。

「今ならまだ間に合うと思うけど、エキシビジョンマッチをやる前にジムリーダーは今それぞれ楽屋にいるはずだろう？」

「え？あ、まあ、そうね」

「そこでちよいとお話を聞くのさ」

と、そこまで言ってから僕はくるりとゴールドの方へ頭を横に回す。

「ん？」

「と、いうことでここからは二手に分かれよう」

「はあ？」

「ゴールド、君は会場から隅々まで怪しい人、モノ、場所がないか調べてくれ」

「ちよ、おい！なんでオレだけそんなこと！」

「おいおい、女の子にそんなことさせる気？体動かすのは男の役目だろ？」

「んなのお前がやればいいだろ！」

「だから、僕にはやる必要があるんだって。それにはクリスがいるんだよ。わかったら、ほら！さっさといった！時間は限られてるんだか

ら！」

ほれほれ、と、僕はゴールドをせつつかせる。渋々といった感じだが、それでもゴールドは一応の納得はしたらしい。

会場へと一人足早に向かっていった。

「さて、と」

「か、カラー？」

その一部始終を当然見ていたクリスが嫌な予感がするとも言いたげに僕の顔を見る。

「探偵ごっこの時間だよ」

「で、どっから持ってきたの？そのベレー帽」

「いやほら、形から入るタイプだからさ。僕って」

取り敢えず付け合わせのようにベレー帽を被った僕に、やや呆れながらクリスは言及した。

「そろそろ教えてもらえる？その作戦ってやつ」

「ああ、当然」

ゴールドは渋々ながらもしかし、仮面の男のことを相当許せないのか僕の指示に素直に従ってくれているようだ。

そんなゴールドを傍目に、僕はクリスに作戦の概要を伝える。

「作戦を伝える前に、まずは行動しながら話そうか」

「え？いい、いいけど」

クリスが不安がるのも無理はない、そりゃ僕だって情報の伝達と意志の統一は大事だと思ってるけれど、なにせ今の僕らには時間がない。

この作戦は時間が一番の高い壁になっているんだから。

「すいません、僕らこういうものですが」

まずはポケモンリーグに挑戦する人たちしか入れない専用ゾーンに入るために、僕らは受付の人に話を通す。

「・・・？探偵事務所、カラー様、でございますか？」

「はい、そうです」

「ちよ、ちよちよちよ！」

「ん？どうしたんだい？助手のクリス君？」

僕が作戦の最初のハードルを超えようかという時に、クリスは慌てたように小声で僕に抗議する。

（どうしたもこうしたも！何、探偵って!?!何、助手って!?!）

両手は握られわなわなと震えている。よっぼど状況に混乱しているのだろう。

無理もない、真面目なクリスにこういうのは向いてないだろうしやったことだってないはずだ。

（ま、いいから黙ってみてな。もとより君にそれ以上は期待してないぜ）

（な!?!）

「あの・・・」

「ああ、ええ、すいません。それで？ポケモン協会理事からの通行許可証は正しく受理されましたでしょうか？」

「ええ、確かに。このハンコはポケモン協会から正式に発行されたもので間違いはありません。・・・だけど、こんなあったかなあ」

最後に小声で本音が漏れているくらいには、受付のお嬢さんも対応に困っているのだろうが、“嘘”がバレる前に押し切らせてもらお

う。

「それじゃあ、僕らはこれで。ほら、行くよ」

「え?え?えええええ?」

「ちよつと!カラー!さっきのは一体何なの!」

受付も最早見えなくなったころ、僕らは人気のない廊下を進む。クリスの猛烈な抗議を受けながら。

「さっきのつて?」

「とぼけないで!探偵とか、ポケモン協会の理事からとか!色々!」

おお、見るからにひどく怒っている。ここはいつちよ、今後のためにもご機嫌をとっておこう。

普段なら煙に巻く僕だが、今回ばかりは種明かし。

「そうだね、さっきのはまあわかつてると思うけど勿論、大嘘さ。通行許可証なんてものは現実にはない」

「・・・ないんだ」

まさかそこから嘘だとは思ってなかったのか、クリスの頬は引き攣っている。

だが、僕はそんなことを気にせず説明を続けた。

「優秀な忍者がいてね。彼女に頼んで複製してもらった。少々怪しまれたようだけど、ま、入ってしまったえばこっちのものだ」

通行許可証なんてものもそもそもない。そこからまず嘘だったわけだが、じゃあなぜあの受付嬢は僕らを通し、嘘を真と勘違いしたのか。

「ポケモン協会の理事には大体の権限があるわけだけど、その証明としてハンコがあるんだ。理事長しか持ちえない特殊なハンコがね」それをアンズちゃんに頼んでちよいと拝借しただけの話さ。

「それって・・・要するに悪いことだよね?」

「要すなよ。要しちやうと悪いことしたみたいじゃないか」

「みたいじゃなくて、したの」

「まあまあ、大は小を兼ねるって言うじゃない。大いなる悪事を倒すためなら多少の悪事は見逃してもらわないとね」

「そういう問題かなあ」

クリスは未だ納得はしてないらしくぶーたれているものの、そんなことで一々目くじらを立てられても困る。

これから、“ジムリーダー全員”をだましていかなければならないのだから。

「それで？そこまでして私たちは何をしようとしているの？」

「決まってる。探偵さ」

「はい？」

「推理していくのさ、ジムリーダー全員の挙動、言動、行動からね」

そのためのベレー帽、そのためのクリス、君だよ。

「アンズちゃん、つまり僕の手駒の忍者に頼んでカントー、ジョウトのジムリーダーを別々に集めてもらっている」

「・・・まさか、全員にアナタは仮面の男ですか。って聞いて回るつもり？」

「そんなに馬鹿正直には聞かないけれど、ま、やることはそういうことだね」

人を騙すのは得意だし、騙している人間を見破ることだって他人間よりは長けているんじゃないかな。多分。

「成功、するのそれ？」

「さあね、作戦の内の一つってとこだし。失敗した時の保険だってある」

「保険？」

「なんの為に君を連れてきたと思ってる？僕がジムリーダー達と喋ってる間に、君は空になった部屋を捜索してもらいたい」

勿論、バレずにね。

そう付け加えた僕の声が届いているのかいないのか、クリスの口は開いたまま塞がらない。

「わ、私にそんなマネしろって言うの!？」

「他に適任者がいないんだよ。ゴールドにできると思うかい？部屋を荒らさずにけれどしつかり隅々まで証拠がないか探すなんて細かい芸当がさ」

「そ、それは――」

少ししか喋ってない僕でもそこが疑問なんだ、僕よりゴールドと一緒にいるクリスがわからないはずはない。

「勿論、僕はジムリーダーと話をしなくちゃいけないし。君しかいないのさ」

「う、うぐ……」

「大丈夫、時間はできる限り伸ばすつもりだし。危なくなったらちやんとポケギアで知らせるよ」

「……そこまでしないと、いけない相手ってことだよね」

お、案外聞きわけがいい。僕の予想ではここから五分以上は説得しないといけないと思っていたけれど。

うんうん、聞きわけが良い子は好きだぜ。

さて、と。

「この部屋だな」

変わり映えのしない景色の廊下で、一際大きな扉が突然に現れる。

何の用途で使うのかは僕の知るところではないが、ここならジムリーダー総勢八人が収まって余りある。

「と、ゆーこって」

僕はちらりと、視線でクリスに促す。

「強制はしないさ。最後は自分の意志と、正義に従って決定してくれ」
「……ずるい人。そういうところ、変わってないね」

こう聞けばクリスは動くと言っている。

クリスもまた、僕がそう思っていることを知っている。

それでも、なお。

「何とでも言つてよ。僕は何が何でも見つけ出さなきゃいけないんだ」

後れを取っているこの状況をいつまでも許す僕じゃないぜ。

「わかってる。今はあなたの言う通りにしなきゃいけないことくらい」

「・・・そうかい、一応感謝はするよ」

さて、そろそろ指定した時間だ。

「お互い健闘を祈ろうぜ」

「仮面の男を見つけ出して、悪事を止めなきゃ」

ああ、そして。

伝説のポケモン、セレビィは僕のものだ。

続く。

48話 「疑いをかけるとき人は最も無防備になる」

「それじゃあ行くのか」

誰に言うでもなくただ一人、静謐な廊下に独り言が吸い込まれていく。

クリスはもう行った。作戦は既に敢行されている。

緊張しないわけではない。怖いと、思わないわけでもない。

だけどそれよりも余りあるほどに勝ってしまうのだ。

アイツに届くかもしれないという期待の念が。

ガチャリ、と重いドアを開く。実際にはそんなことはないはずだが、重く感じた。

「やあやあ皆さん、お集まりのようで。どうも、探偵のカラーです」

そんな心とは裏腹にいつもの軽快で軽妙なトークを繰り広げる。

爽やかな笑顔を忘れずにね。

「・・・なぜお前がここにいるんだ」

「そりゃ、僕がポケモン協会の理事から派遣された探偵だからさ、グリーン」

鋭い目つきをさらに鋭くさせて、グリーンは僕に疑問をぶつけた。

皆ここに探偵がくるというお触れだけで集まったはずだ。

そこに僕が登場したんじやあ面喰うのもしようがない。

「おい、どういうことだ。アンタに言われて俺らは集まったんだ。悪いが茶番に付き合ってる暇はない」

「タケシ殿、茶番などではござらんよ。正真正銘、ポケモン協会の理事からの推薦でござる」

タケシは納得がいてないようでアンズちゃんに突っかかる。ジムリーダーを実際に集めたアンズちゃんに。

「そーそー、わかったらとっとと座ってくれる？時間ないんだから」

「くっ・・・」

流石に色々と僕のイメージが悪いカントーの面々は僕に信用がないように。

特にエリカちゃんなんか眉間にしわ寄せて僕をずっと凝視してい

る。

まったく、やりにくいっいたらありやしないっての。

「ウオツホン！それじゃあ、初めてもいいかい？」

「……ええ、どうぞ。」探偵「さん」

……あーあ、可愛くない女。

僕がカントーのジムリーダーたちに直撃する少し前。

クリスがジムリーダーの部屋を物色しようとする前、僕はおもむろに口を開く。

「ああ！それと、一つ忠告だ」

「え、なに？」

「流石に全員をくまなく調べる時間はないからね。優先順位をつけて探すんだ」

「——あ、そうか。それもそうね。でも、何で判断する？」

「僕の見立てだとまず除外しているのはマチスさん」

「あの、ルギアと戦った時にいた人だよな？」

「ああ。マチスさんは仮面の男と戦ってるし、かつての部下達を取られてかなりイラついてる。仮面の男の容疑者からは外してもいいと思う」

無論、実は裏で繋がっていてその話自体が嘘という可能性もなくはないけど。ここは僕が話した印象というあやふやなものに頼るしかない。そんなあやふやなものに頼るしかないほど僕らは追い詰められているということもある。

「同じ理由でナツメちゃんも却下だ。ナツメちゃんは腕の治療もあつたし、時間的に不可能だと思う」

「うん、それに仮面の“男”だもんね。女性は外していいんじゃないかな？」

「・・・クリス、君はほんつとに真面目だなあ」

呆れ半分にため息をつく僕に、クリスは顔を真っ赤にして怒る。

「な！何よ！だってそうでしょ!?!」

「仮面の男の特徴は仮面に全身を黒いマントで覆ってたんだ。声なんて変えられるんだし、男か女かなんてわかんないよ」

誰が付けたか知らないけど、確たる証拠もないのに状況を確定させないでほしいよね。

「あのね、クリス。一つ言っとくけどそうやって決め打ちで動かないですよ？それじゃあ重大な何かを見逃しちゃうぜ？」

世の中、案外と決めつけと思ひ込みで回ってるもんだ。そこを疑って初めて真実が見えてくる。

「・・・ごめんなさい」

あーあ、そんなにしゅんとするなよ。変な罪悪感が芽生えるじゃないか。僕らしくない。

「続けるけど、後外していいのはグリーンくらいかな」

「グリーンさんって、確か前回のポケモンリーグを準優勝した人だよね？なんで？」

「だって・・・」

僕はそこで一つ区切る。

ぶぐくり、クリスの生唾を飲み込む音が聞こえた。

「お姉さんが美人だからね！」

ガツクンと膝から崩れ落ちる音が隣からするけど気にしない気にしない。

「まあ、半分冗談は置いておいて」

「半分なのね・・・」

「カントーで気を付けるのはこれくらいだ。僕も出来るだけ引き延ばすけど、時間は限られてる」

なにせエキシビジョンマッチが始まる前の数分間だけだ。それ以上だとポケモン協会に気取られる可能性があるし、いろいろと不都合

だ。

「取り敢えずまあ、頑張つてね――」

はい、回想終わり。

ということでもクリスは今現在必死に家宅搜索しているだろうから。僕も頑張らないとね。

「で、お前は何しに来たんだ？カラー」

「ナツメちゃん、久しぶりー」

満面の笑顔でふりふりと手を振る僕にナツメちゃんは。

「質問に答えろ。それとちゃん付けはヤメロと言ったはずだ」

「あはは、久しぶりの再会にアイアンクローはやめてよナツメちゃん」

「・・・フン」

あいててて、相変わらず容赦がなくて冗談が通じないなあ。

そこが可愛いところだけど

「質問に答える兼自己紹介をしようか、僕は探偵のカラーだ。ここには仮面の男を探りにきた」

「・・・」

皆、打ち合わせしたかのように同じ反応だ。

そりやそうだ、ここにいる連中は僕が探偵だと名乗っても素直に信じてはくれない。

仮面の男のことは今更説明するまでもないだろうけど。

「ええ、確かにそう伺いました。探偵というのは初耳ですが」

嫌に他人行儀なエリカちゃん。

「そうそう、実は副業で探偵もやっててね。ポケモン協会の理事からの仕事でさ。ほら、推薦状もこの通り」

先ほど受付嬢を騙し通したものをエリカちゃんにも見せる。

「エリカ、どうだ？」

「ええタケシ、確かにこのハンコは本物です」

「ジムリーダーの中に仮面の男は紛れている。そこまではわかったんだけどさ、そこからがさっぱりで。だからこうして直談判しにきたってわけ」

「なるほどね、でもいいの？そんな情報私たちに漏らして」

「いいんだよカスミちゃん。隠し事は好きじゃない。特にこれから手を組もうって相手にはね」

「H A H A H A！どの口が言いやがる」

どの口って、この口に決まってるじゃないですか。

「手を組む、その言い草だとまるで敵はあちらにいてと言っているように聞こえるが？」

「あれ？むしろこの中にいるとグリーンは思ってたのかい？そんな薄情なことはないよね、だってみんなこれから一緒に戦うっていう仲間なんだから」

「・・・仲間、か。俺はこいつらのことを完全に信用したわけじゃないぞ」

「タケシ・・・」

冷えた声色で皆の視線を集めるタケシにエリカは複雑そうに声を漏らす。

「フン、私たちとてお前らと仲間になったつもりはない。こちらはこちらで勝手にやらせてもらう」

「おっとっとー戻ってよナツメちゃん」

機嫌を悪くしたナツメちゃんが勢いで席を立つ。がしかし、今戻られるのはまずい。まだクリスが搜索している最中だ。一人だって抜けてもらうわけにはいかない。

それに一人抜けると最終的には皆、いなくなるのは目に見えてる。

「お前に指図されるいわれはないぞ」

「いいから座れよ。まだ話の途中だ」

交差する視線と、お互い普段よりも一段低い声。ピリついた雰囲気。で先にいつもの調子を取り戻したのは僕だった。

「退屈はさせないからさ？」

「………ファン」

「ありがとう！」

「洩々、と言った様子でナツメちゃんは席に戻る。

「皆、色々とあるのはわかるけど、ここは水に流して一緒に巨悪に立ち向かおうぜ？ほら、僕の顔を立てると思ってさ」

「カラーの顔を立てるというわけではありませんが」

「エリカちゃん、そこはいいじゃん認めてもさ」

「仲間内で争ってる場合でもなさそうです。僭越ながらこのカントーの主将を務める者としてカラーの話を聞きましょう」

「お！ようやく話を聞いてくれる気になった？いやー、やっぱりエリカちゃんが真面目でよかったよ」

「………いいから、早くしてくださいるかしら？探偵さん」

「うーん、なんでかずつと怒ってるエリカちゃんの藪蛇はつかないほうが懸命だ。」

「今だってツンケンしてそっぽを向いている。」

「ま、そんなエリカちゃんは放っておこう。」

「探偵らしくアリバイとか聞いて行きたいんだけど、ぶっちゃけどう？さっきも言ったけど僕は敵は向こうにいると思う」

「だからなぜそう言い切れる？元々ロケット団はカントーだろう。その二人が関わってないとも言い切れない」

「残念だけど、的外れだわ」

「おい！俺は実際に仮面の男と戦ってたんだ！わけわかんねえ罪擦り付けてんじゃねえよ」

「グリーンの言いたいことはわかりますが、私は二人は違うと思います。マチスの言葉に嘘があるとも思いませんし、ナツメは右腕の治療でそれどころじゃなかったでしょう」

「奇しくも僕と同じ意見を言い放つエリカちゃん。」

「俺が怪しいってんなら、そいつはどうなんだ？そいつも”元”ロケット団だろ？なあ、カツラ」

「ここでマチスさんがこの場で一言も発していないカツラさんに話を振る。」

「マチス、カツラさんは今体調不良で。この場にいるだけでも無理を言ってもらったんです」

「どうだかな、その体調不良ってのも仮面の男の活動で無理をしたからじゃないのか？」

「・・・疑いをかけられるのも無理はない。がしかし、私は違う」

今日初めてカツラさんの声を聞いた。

久方ぶりに聞く声は辛そうでエリカちゃんの言っていたことが嘘ではないことが分かる。

「訳は言えないがこの体調不良は自分自身の問題のせいだ」

「・・・そうかよ」

本気ではなかったのか、カツラさんの声を聞いたからなのか。それ以上マチスさんは追求はしなかった。

「さて、じゃあ他に三人に聞きたいことはあるかい？」

僕の問いかけには誰も反応しない。特にマチスさんとナツメちゃんは四天王との共闘、そしてその後の大人しく真面目にジムリーダー活動をやってたのを見てたからかな。

カントーのジムリーダーたちは一枚岩じゃない。エリカちゃんを筆頭に正義のジムリーダーとマチスさんナツメちゃんが対立しているから、まずはそこを取り除くフリをしないと。

実際に取り除きたいわけじゃない。こういう時にこそ人の真価つてのは発揮されるもんだ。

僕は誰一人として一挙手一投足を逃すまいと目を光らせとかなないとね、勿論バレずにさ。

そのためにも場の主導権と発言権は握っておかないといけない。

「じゃあそろそろ別の話題に移りたいんだけど、ジョウトのジムリーダー彼らはどうだい？」

人は皆、なぜだか自分が攻撃されるときは嫌に無防備になるもんだ。

自分が攻撃してる間は攻撃されないとどこかで高を括っている。そんなことどこにも誰にだって保証されてないのに。

だからこそ、僕は敵を作る。

「正直、ジヨウトはわかりませんわ。ここに全員の資料がありますが詳しいことは書かれてませんし」

「そっか、エリカちゃんでも知らないか」

「単純にさ、仮面の男は氷タイプの使い手だったんでしょ？」

と、カスミちゃんは口を開いた。

「うん、そうだって聞いている」

「なら、単純に行けばこのヤナギのおじいちゃんが怪しいよね？そんな風には見えないけど」

「ハッ！安直だな！」

「なによ！じゃあマチス、アンタには誰が一番怪しいって思うのよ」

カスミちゃんが言ってることはある意味正しい。

なにせ情報が少なすぎるんだ。その少ない情報で導くなら確かにヤナギだろう。

それが早計である可能性が高すぎるのが問題だけど。

「そんなもん知るかよ。おい、ナツメの超能力で何かわかんねえのか」
「便利屋扱いするなよ。私のは自分に起こることくらいしか予知できん」

「・・・つまり結局皆、何もわかんないってこと？」

僕の一言に悔しそうな顔をするもの、諦めてため息をつくもの、申し訳なさそうに俯くもの。

皆、程度の差はあれど一様に同意していた。

うん、ここいらが潮時だね。

会議が滞った時は早々に閉めるに限る。こんな停滞から生まれるものなんて何もない。

幸いにしてある程度、全員の反応は見られたことだし。

「そろそろ時間だね。しょうがない、今はここでお開きにしよう？」

「何かお力になりましたか？探偵さん？」

「ああ、すつごく良い意見をもらえて助かったよエリカちゃん」

「・・・それはよかったです」

まったく顔がそう思っていないなあ。本当に嘘をつくのが下手すぎるよエリカちゃんは。

ポケギアでクリスにこっそりと終了の合図をしてから、僕は部屋を後にする。

「最後にさ、エキシビジョンマッチ頑張ってね。応援してるよ」

「ええ、私たちも仮面の男が誰なのか注意深く観察してますわ」

「ああ、よろしく」

その言葉を最後に後ろ手に僕は扉を閉めた。

「どうでござったか？首尾は？」

「・・・今の一瞬でどうやって僕の背後を取ったのかは聞かないでおくよ」

終了の一番にアンズちゃんは尋ねてくる。

そんなに早くに来ちゃったら疑われるだろう、僕たちが繋がってるってさあ。

まあ、今この一瞬だけばれなきゃそれでいいんだけどさ。

「ああ、なんもわからん。正直全員を観察出来たのは出来たけど確たる証拠なんてないね」

まあそんなに簡単にボロを出すとは思ってないけどね。種を撒けただけよしとするよ。

「そろそろクリスが来る頃だ。君はもう試合に集中してな」

「・・・了解したでござる」

少しだけ名残惜しそうにアンズちゃんは一瞬で姿をけした。

まあ、忍者ってのは凄いな。

「——————カラー」

「やあクリス、成果はどうだった？ちなみにこっちはなしのつづて」

「そっちも？こっちも目ぼしいものは見つけられなかった。粗方探したんだけど」

悔しそうに目線を下げるクリスの頭をポンポンと叩きながら僕は一応励ます。

「ここで意気消沈したら今後なんてやっていけないからね。

「そうかい、じゃあ仕方ない。次に行こう」

「次って、もう？」

「言ったろ？時間がないんだ」

そう次はジョウトのジムリーダーだ。

また別の場所で待っている彼らに会うために歩を進める。

蛇が出るかそれとも。

それはまた次のお話で。

49話 「進まない停滞感」

「よし、次はジョウトのジムリーダーたちに話を聞こう」

カントーのジムリーダーたちとの話が終わり、クリスマスと共に次はジョウトのジムリーダーたちに話を聞く番だった。

カントーとジョウトの面々で情報に差があるとも思えないし、奴さんがそう簡単にぼろを出すとも思えないけれど。

やれることはやっておかなくっちゃあね。

「じゃあ私はまたコソ泥みたいなことをするんだね」

多少辟易としていたクリスマスだがやらないという選択肢は残念ながらない。

ほら、よく言うじゃん？人生好きなことだけやってればいいなんて甘いものじゃないってありがたーい先人からの嫉妬の言葉がき。

「だからまあ、頑張ってコソ泥みたいな真似をしてくれたまえよ」

「うん・・・頑張るね」

嫌なことをさせている自覚はある。けれどそれでも頑張ると言ってくれたクリスマスに対して僕もまあ、頑張るかなんて柄にもないことを思ったりもする。

さて、そんなことをしていると差し迫った具体的な締切、ならぬ時間があるのでそう悠長にもしてられない。

クリスマスを黙って見送って、僕はジョウト側の大部屋の扉の前に立つ。

正直、カントーはほとんど知り合いみたいなものだったから一種のやりやすさはあった。

端から除外できる人間がままたからね。

でも、このジョウトとなると話は別だ。

除外できる人物なんていない。唯一ミカンちゃんくらいは知り合と呼んでも差し支えはないけど。

それだって除外できるほどミカンちゃんの何かを知っているわけではない。

「本番はここからってわけだ」

前座は終了、余興はない。

ここがこの演目のクライマックス。

「ほーんと、やんなっちゃうよね」

そう呟きながらも僕は、重くのしかかってくる扉を全開に開いた。

「あ、え？か、カラー君？」

「やあ、久しぶりだねミカンちゃん」

カントーの時でも思ったけど、やっぱりジムリーダーが全員集まると荘厳だなあ。寒気がするよ。

ほとんど初対面だからだろうかやや冷やややかな目線で僕を迎えてくれる皆さんに、僕はいつものように貼り付けた笑顔で返す。

「どうしたの？」

ここには探偵がくる。とだけ伝えられて集まっているジムリーダーたちだ。ミカンちゃんはまさか僕がその探偵だとは思ってもしなかったのだろう。驚いた声でそう尋ねる。

「どうしたもこうしたも、僕がここにいる理由は一つだ」

「まさか、君がポケモン協会が派遣した探偵とでもいうのかい？」

「ええ、そのまさかですよマツバさん」

ジョウトの中でも比較的顔見知り程度には見知っている二人からの積極的なアプローチどうもありがとうございます。

多少あったアウエーの雰囲気はなくなったわけではないけれど、敵対心が下がったのは僥倖だ。

特に裏表のなさそうないかにも善人ですって感じのミカンちゃんが親しげに話してくれたのはでかいね。

「改めまして自己紹介を、探偵やってるカラーです。ここにきた理由は、大体知ってます?」

「今ジョウト全域にはびこっている悪の親玉を探し出すためだろうか?話は聞いている」

「なるほど、話が早くて助かりますよ。イブキさん」

「フスベの里のドラゴン使い。年上美人だったのでいち早く名前を覚えた。」

そのイブキさんは名前を知られていたのが不服だったのか、一瞥してから視線を外す。

その行為の意味を頭の片隅で考えながらも僕は話を進めた。

「さて、じゃあ早速ですけど皆さんはぶっちゃけ誰だと思えます?悪の親玉について」

こういう時はいつものように回りくどい言い方をしたってしょうがない。

悪いけどオールストレート勝負でいかせてもらおうぜ。

「・・・いきなりですね」

どこか元気がないのはヒワダジムジムリーダーのツクシ。可愛い見た目をしているが男の子だ。もう一度言おう男の子だ。

遺跡調査の연구원という話だったかな、確か。

記憶があやふやなのはしようがないだろう?なにせあの短い時間でジョウトカントー全員分の情報を頭に叩き込まなくちゃならなかったんだから。

「何か都合悪いかい?」

「いえ、まるで僕らの中にその・・・犯人がいるような言い方だったので」

「ああ、ごめんごめん。探偵の癖でね、つい」

ツクシとは反対にカラカラ笑う僕に彼はやや不審がついているようでそれ以上会話は続かなかった。

ま、しょうがない。いきなり探偵ですなんてやってきてこのエキビションマッチの直前に集められたんだ。ナーバスにもなるか。

それは自然な反応だと思う。仮面の男だからってわけじゃあなく

ても。

「そうやで、なんもせんと疑われてんのは気分悪いわ。なあミカン」
「あ、でも、カラー君はいい人だよ？エンジュの焼けた塔が火事になった時も消火するのに手伝ってくれたし」

「ふーん、つて、ああ、ミカンが言いよったのつてコイツのことか」
「ちよ、ちよつとアカネちゃん！」

なーにを関係ないところで盛り上がってるんでしょかこの二人は。

コガネシティジムリーダーのアカネちゃんはダイナマイトプリティギヤルと呼ばれてるらしいが、ミカンちゃんをからかっている今はただの大阪のおばちゃんにしか見えない。

ま！可愛いから許す！

「うおっほん！えーつと、話を戻すけど、僕は何も君達を疑ってるわけじゃない。むしろ敵はむしろ、カントー側にいるんじゃないかなって考えてる」

カントーのジムリーダーたちに言ったことと違う、というか真逆なのは百も承知だ。けど今は警戒心を解くことが最優先事項なのでそんな整合性なんぞは気にしない。

「なぜそう思う？」

短く、しかし重々しく聞いてきたのはタンバジムのジムリーダー、シジマ。

そこらのポケモンよりもムツキムキなその肉体には正直引くけど、今は質問に答えることが優先だ。

「だあって、ロケット団つて元々カントーのものでしょ？それが復活したんだ。カントーが関わってるって思ってもなんも不思議じゃないと思いますけどね」

切っ先の鋭い視線を向けられて真っ向から対峙する。

「なるほどな」

先に視線を外したのはシジマだった。本当に納得したのか、それともただ僕の力量を図りたかっただけなのかは定かではないけどその視線には純粹さを感じた。

ま、純粹におつかないってだけなんだけど。

「少しいいかな」

「どうぞ、ハヤトさん」

キキョウジム、ジムリーダーにはなったばかりのハヤトは正直そこまで情報はない。

「俺はジムリーダーであると同時に警察官だ。その巨悪、仮面の男のことについて警察だっただけ対応しているが、ジムリーダーにしていると決めるものは少ない」

・・・なるほど、これは少々厄介だ。

確かにハヤトが警察だという情報はあったけれど、割と下っ端の方だと勝手に思っていた。いかなね、決めつけてるのは自分の首を絞めるだけだ。

警察の情報と、一探偵、それも胡散臭いというマイナス的付加価値がくっついた者の意見なら圧倒的に前者のほうが信憑性がでてしまう。

早々にこの会議はお開きになって、クリスが見つかってしまう可能性がでてくるのは一番最悪なシナリオだ。

「むしろ、ジムリーダーが悪党のボスだという意見の方が少ない、というか聞いたことがない。だというのに君はなぜ、そこまで強くジムリーダーの中に犯人がいると決定づけることができるんだい？」

「さっすが現役の警察様、詰め方が取り調べのそれだわ。」

「ま、ここまで言われたら躲す方が不自然だな。」

「・・・別に隠してたわけじゃあないんですけどね。仮面の男がジムリーダーってのは確定した事実なんですよ」

「ゴールドたちの存在を仮面の男には知られたくはない。」

「だから少しだけ事実を捻じ曲げることにした。」

「カントーのジムリーダーにマチスさんってのがいるんですけどね。彼、一度実際に仮面の男に会って戦ってるんですよ」

「なんと・・・!」

「イブキさんはその大きな瞳を広げて驚嘆の声を上げる。」

「そのときに、ジムリーダーのバッジと同じ成分の粉末を手に入れて

たんです。それが僕がジムリーダーの中に犯人がいると決めつける理由です」

「・・・ジムリーダーのバッジには特殊な金属が使われている。その事実は確かにジムリーダーしか知らない。君みたいな一般人が付ける嘘ではないか」

ふむ、と自身で納得したのかハヤトは多少考えこむ様子を見せた後。

「うん、君の言葉を信じよう。加えて僕も同じジョウトのジムリーダーの中にそんな人がいるとは思いたくはないな」

と、僕に寄り添う形で発言する。

「そやそやーロケット団なんてわけわからんカントーのいざごぎを持ち込んでほしいわ。ま、いざとなったらこのアカネちゃんがキュートに撃退してやるさかい安心しい。な、おじいちゃん」

「いやはや、若い人は気概に満ちていていい。私なんかはもう怖くて」
「大丈夫やって、おじいちゃん相当強いんやから。このアカネちゃんの次くらいには」

今回のジョウトのジムリーダーの棟梁。チョウジジムのジムリーダーであるヤナギは車椅子に乗っているごく普通のおじいちゃんだ。

「わ、頼もしいなあ。流石はジムリーダー様だ」

「ふふん、そやろそやろ」

アカネちゃんは得意げに鼻を鳴らすと、だから、と言葉を続けた。

「うちらに話を聞いても無駄やで。時間が」

「とはいえ、形だけでも聞き取りしないと。不公平だって言われたらたまらないですよ」

「む、それもそうか」

「・・・正直、俺としてはスイクンの方が気になるがな」

なんとなく、緊張感は失われてしまった。もう仮面の男の話ではなくなってしまうほどには。

ここらが潮時かな。アカネちゃんの発言を一々取り締まるわけにもいかない。僕に対しての変な不信感はあるだけ抱かせたくない

からね。

あの流れを残念ながら今の僕じゃあ止められなかった。と、いうことだろう。

「ほう、スイクン」

シジマの発言にマツバも興味を示したようで先を促す。

「一度、我がジムにも訪れてな。コテンパンにしてやられたよ」

「ふふ、アナタのところにも行っていたのか。どうやらジムリーダーと対戦して回っているという噂は本当だったようだな」

「お前の元にも来たのか」

「ええ、結果はお察しの通りですけどね」

ほーらもう、スイクン談義に花咲かせちゃって。仮面の男談義に満開の花を咲かせてほしいんですけどねこっちは。

まあいいさ、カントーだって成果としてはどっこいどっこいだ。

「んんっ。皆さんどうやら集中力がなくなってきたらしい。そろそろエキビションマッチも始まる頃ですし。今回はこれで終了というところで」

僕の締めあいさつめいたものを皮切りにやっと終わったとばかりに各々会議室から退出していく。

「やあ、カラー君だったかな」

「ええ、なんです？マツバさん。この間の借りだってんなら後にしてください」

そんな中で声をかけてきたマツバは優男らしく爽やかな笑みと共に会話を続ける。

「ああ、まあそれもあるが」

あるんかい。

心の中で僕はそうつつこみマツバの言葉を待つ。

「いやなに、俺もこの会場に入った時から妙な違和感を感じている。君の話聞いてその正体がわかったよ」

俺も気を付けて周囲を探ろう。

ポンと、肩をたたいてそれだけ言うとマツバは他の皆と同様、部屋を後にしていった。

「へっ。キザな野郎だ」

なんとなく気に食わない。人を食ったようなその笑顔が。同族嫌悪ってやつかな？

「あ、あの。カラー君」

「ん？なんだ、ミカンちゃん。君もまだ残ってたのかい？エキビションマッチまでもう時間ないぜ？」

「うん、わかってるんだけど。あのね」

「？」

「無理、しないでね」
少しだけ悲しい笑顔でそう言ったミカンちゃんは小走りで僕の横を抜けてった。

「・・・なんじゃそりゃ」

わかったような口で、悟ったような事言わないでほしいなあ。

「・・・そろそろクリスと合流するか」

結局収穫はゼロに等しい。何かを見つけたわけでもない。

時間の無駄と言われればそれまでだが、それがわかるのは事件が終息した後だ。

後ろ手に誰もいなくなった会議室を閉め、僕は一つため息をつく。やれることはやった。後は「奴さんが動いてくれるかどうか」。

「で、君の方はどうだったんだい？クリス」

「うん。なんにも成果はなかった。結構探したんだけど」

「そうかい・・・」

いつの間にか僕の目の前にたっていたクリスと共に二人とも暗い表情になる。ここまで手応えがないとしようがないか。

「あ、一つだけ関係ないことだけど」

「いいよ、この際、面白話でもなんでもこの鬱屈とした気分を晴らしてくれんならね」

「面白いかどうかはわかんないけど、ヤナギ老人の部屋に二匹のラブラスと若い頃のヤナギ老人が映った写真があつて。ヤナギ老人がすっごい若かった」

「あー、すっごい。ほーんとにどーでもいい話だわ」

なにをのほほんとしたトークをしてるのかこの子は。肝が据わつてると言つてほしいのかな。

「もういいよ、クリス。君はゴールドと合流しな。後は自分たちで考えてやってね」

「か、カラーはどうするの?」

「僕は一人で自由気ままにやらせてもらうさ。どうせここまで後手に回っちゃやることも少ないだろうしね」

まったく気乗りしないっつらないぜ。いくらセレビイのためとはいえ、もうちよつと接戦になんないとやる気が出ないっつてもんだ。

じゃあ、時間もないことだしっつんでクリスとはここでお別れした。

バイバイと手を振って、僕は一人声を張る。

「で? さっきから何をこそこそしてるんだい?」ブルー

「・・・なーんだばれてたのか」

ぺろつと舌を出して悪びれた様子など一切ない彼女は、廊下の陰からすつと覗かせた。

ブルーがこれからの鍵になるともこの頃の僕は知らずに。

しかしそれはまた次のお話で。

50話 「身の内は黒焦げだ」

「まったく君ってやつは、一度くらい普通に登場できないのかい？」

「ふん、余計なお世話よ」

僕の真後ろを陣取っているブルーはそんなことに興味はないと言いたげにそっぽを向いている。

さて、一体何の用事でこの僕なんぞに話しかけてきたのか。

「お仕事は終わったのかしら」

「なーんで君がそんなこと知ってんのか」

「あら？ 忘れたの？ 私だってオーキド博士とはそれなりに親しくやってんのよ？」

「ははは、それは面白い冗談だ。笑えるよ」

どこの誰だったかな。博士の研究所から貴重な研究対称を盗み出したのは。

「それで？ 何の用？ 僕あんまり暇じゃないんだけど」

「セレビイのことよ」

その一言で僕の目の色はわかりやすく変わった。

なにせ、その情報を僕にもたらしてくれた張本人だ。情報の整合性など検討するまでもない。

「今日、セレビイの祠が光るわ」

「・・・なんだって？」

セレビイ。伝説のポケモン。その特異性は時を渡る能力と、ある条件下でしか出現しない希少性にある。

その条件と祠が光るタイミングで、ホウオウとルギア両ポケモンからとれる羽を持っているものだけがセレビイを手に行ける。

その最初の条件、祠が光るのがいつなのか。それがまったくわからないからセレビイは伝説のポケモンと呼ばれた。

それが、今日だって？

「なんでそんなこと知ってるんだい？」

「言ったでしょ？ 仮面の男から情報を奪ったって。それによれば今日、祠が光るわ」

ふむ、それは確かに信憑性がある。
でも、だとしたら。

「君もオーキド博士に僕の仕事を聞いたというのなら知っているだろう？ 仮面の男はジムリーダーの中にいる。つまりこの会場にきているんだ。どうやってセレビィを捕まえる気だ？」

「そこまではわからない。でも、今日祠が光ってそしてそれを見逃す男ではないことは確実よ」

ブルーの言葉は納得するには十分すぎるほど説得力がある。

「そこで、アンタにも祠に先回りしてほしい。戦力は多いほど安心だから」

おっと、僕も戦力に数えて頂けているとは有難迷惑だな。

僕の目的はあくまで横からセレビィを強奪すること。それには仮面の男を止めなければならぬ。

わけではなく、ただ一瞬、その瞬間だけ意表をつけなければいいけど。

それを果たして僕一人でできるのか、と疑問を持つくらいには僕は僕自身の実力をよくわかっている。

ゴールド、シルバーを余裕で撃退し、マチスさんを（おそらく）本気を出さずにあしらうほどの実力の持ち主。

そんな相手に、一瞬とはいえ隙を作らせることが。

「・・・君の提案に乗るのはやぶさかじゃあない」

「どこまでも素直に」はい」って言えない人ね。アナタは」

「性分でね。変えられないさ」

ブルーの提案には乗る。

けれどその前に一つだけ気になることがあった。

「そうまでしてどうして仮面の男はセレビィを捕まえたいんだらうね」

ロケット団の残党をまとめ上げ、度重なる事件を介しハウオウを刺激してルギアを捕らえ。

そうまでして何を成し遂げたいのか。

そこにはなぜか無視できない程の強い執念じみたものを感じてい

た。

「・・・確か、過去に亡くしたラプラスを取り戻す。そんな理由だった気がする」

「取り戻す？」

「ええ、昔聞いた気がする。昔過ぎて、記憶が曖昧だけど」

いや、待て。その前に。

「ラプラスって言ったかい？」

「え？ええ」

おいおい、それじゃあ一人しかいないじゃないか。

クリス。君、値千金の情報を持ってきてくれたらしい。

「そうか」

「なに？アナタも似たような望みでしょ？共感でもしちゃった？」

共感——、共感か。

「いや、逆だよ」

「え？」

「許せなくなった。僕には、その男がね」

いつの間にか対面していた僕たちは、先の、ブルーの一言で空気が

一変する。

「悪いね、ブルー。君と一緒にには行けなくなった」

「ちよ!?なにによ？さっきの返答は嘘だったわけ？」

「嘘じゃないさ。僕にしては珍しくね。さっきまでは本当に君と一緒に行くつもりだったよ」

だけど、知ってしまった。わかってしまった。

そうなってしまうたらもう、知らないかった前には戻れない。わか
らなかった前には戻れない。

「・・・・・・。気に入らねえ。何もかもが」

ブルーの横を素通りする。僕の眩き、誰に聞かせるわけでもなかったそれをブルーが聞いたからか、ブルーはそれ以上。何も言わなかった。

いや、多分。言えなかったが、正解かな。

コツコツと誰もいない廊下を歩く。廊下のその先、エキビションマツチが行われているであろう会場からは歓声が漏れ聞こえていた。きつともう始まっているんだろう。もしかしたらもう何試合かは終わったのかもしれない。

(ああ、そういえばアンズちゃんの試合を応援するの忘れてた)

ミカンちゃんやカスミちゃん、マチスさんやナツメちゃん。

まああとおまけでエリカちゃんも。

皆知らない仲じゃあないし、見てて楽しかったかもしれない。まあそんな感情はもうなくなってしまったけれど。

「トマレ」

「やあ、そろそろ来る頃だと思っていたぜ？」 仮面の男」
「・・・フン、やはり私をおびき出すためのエサだったか」

先ほどのジムリーダーを集めての搜索。

その本当の目的。

「何も、ボロを出すのを期待するほど僕は楽観的じゃあなくてね」

勿論、狙ってなかったわけじゃあないが。

「ああやってカマかけて、あからさまに探つてやれば危険分子を排除してきたアンタだ。この最後の大詰めでしくじりたくはないだろう。だからきつと僕のこと排除しにくると踏んだ」

予想は大当たり。

だけど展開は期待していたのとは違う。

本当はここで彼から羽を奪い取る気だった。

けれど、今はそんな気はもうない。

どころか、セレビイすらもはやどうでもいい。

「なあアンタ、自分のラプラスを取り戻すためにセレビイが欲しいんだって?」

「……どこでそれを」

「んなどうでもいいこと聞くなよ」

イラつく。

「アンタのその野望。悪いが泡沫の夢と消えてもらうぜ」

「フン、言ってる」

スチャット両手にボールを握る。

ああ、本当に男つてのはバカな生き物だ。

何よりも優先しなきゃいけないものがあるはずなのに。

何よりも寄り道してる暇なんかないってのに。

何よりもプライドが大事だってんだから。

「来いよ。家族想い。てめえの歪んだ愛情、僕が捻りつぶしてやる」

それは誰に言った言葉だったのか。

それは誰に向けた感情だったのか。

今となつてはもう、どうでもいいことだ。

「はあああああああ!!」

誰もいない廊下で、誰かの気迫のこもった声が轟く。

まさか自分からそんな声が出るなんて思ってもみなかったのですねんな他人事みたなことしか言えない。

「フン!!」

デリバードを取り出した仮面の男は僕のカラカラとウインディの攻撃をなんなくいなしている。

「時を超える能力を持つセレビィ。その力を使って、過去に亡くした自分のポケモンをもう一回取り戻そうって!? 小つちええなあ! 小せえよ!」

バトルの熱気からだろうか。僕の口からはただ素通りしていく言葉たちが熱を持って放たれていく。

普段だったらあり得ない。精査して検査して考査した言葉だけが出ていっていいはずだったのに。

今の僕ときたら、そこらにいるバカ共と何一つ変わらない。

「……デリバード」

その冷たい、底冷えするようなゾツとする一言でデリバードの顔色が変わる。

「ぐっ! 受け止めるカラカラ!」

“とっしん” してくるデリバードをカラカラは“ほねこんぼう” で受け止める。

が、勢いは殺せずにそのまま勢い余ってこちらに飛んできた。

「がはっ!!」

もろに、鳩尾に入って僕の肺は押しつぶされる。

「ぐ……う……ウイン、ディ」

「ガウ!!」

“かえんほうしゃ”。

そう言わなくても、僕のウインディは察して放つ。

僕の目の前にいるデリバードめがけて熱の放射が一直線に伸びてきた。

「まもれ”カラカラ!」

このままで僕たちだって黒焦げだ、がしかしこの至近距離ならデリバードだって直撃は免れないだろう。

だからこそその指示、そして“かえんほうしゃ” がぶち当たる寸前で僕らの前だけに現れる障壁は僕らを文字通りまもってくれる。

「はあ……はあ……はあ……」

高速で目まぐるしく変わる戦況。流石に少し一息ついた時。

「チツ。 “かげぶんしん” かよ」

「モウモウと立ち込める煙が晴れ、そこに現れたのは傷一つついてないデリバードと、隣りに立っている仮面の男。」

「・・・なぜ邪魔をする」

「なぜ、だあ?」

仮面の男は一言だけそう尋ねた。

「ブルーやシルバー、ゴールドたちとお前は違うだろう」

「確かに、な」

座り込んでいた両足に力を入れて、なんとか立ち上がる。

「僕にはアイツらほどの正義感も、義務感も、因縁すらないに等しい」
でも、それでも。

「アンタは許せねえのさ。僕のプライドにかけて、そして家族にかけて。アンタのようなやつが僕は一番許せない」

これは勝手なエゴだ。崇高でも誰かに感謝され、褒められるようなことでもない。

ただ、僕の気持ちが許せない。僕の誇りが許せない。

ここでコイツを見逃して、ただセレビィを横取りするだけじゃあ、決して。

「だから僕はアンタの前に立つよ。アンタのその歪んだ愛情ぶっ潰して僕は胸張って復讐する」

たった数分、たったそれだけだった。対峙した時間は。

それでもわかる。この目の前にいる敵は僕よりはるかに強いと。

(それがなんだったんだ)

「なにをわらっている?」

「へらへら」

悪いな。これが僕なんでね。

「……フン。無謀なヤツだ」

「ゼエ……ヒュー……ゼエ……ヒュー」

息がか細くなつていくのが自分でも感じられる。

肺が熱い。喉が焼ける。四肢は爛れ、視界は揺れた。

「結局、お前がしたことは少し時間を伸ばしただけにすぎん。まったくの無意味だ」

ゴホツゴホツ。

咳き込む度に血反吐が出た。

あーあ、ちくしょう。ここまで戦力差つてやつがあるとは。

我ながらにして少し悔しいと思った。

もうちよつといい勝負できると、思ってたから。

「……カラ、カラ」

凍傷と裂傷が激しいカラカラは僕の傍に横たわっている。

一番長く一緒にいた。きつと僕の気持ちが一番よくわかつているのはこいつだ。

だからこそ、この戦闘でも一番長く立っていてくれた。

「お前の頑張りなど虚しく、私は今からホウオウを手に入れそしてセレビイも手に入れる。お前は結局、”物語の主人公にはなれないんだよ”」

地面に伏している僕の横をなんでもないかのように通り過ぎようとしている仮面の男は、最後に「ああ」と付加えて。

「ブルーから聞いたんだろう？セレビイのことは、あの娘は私のところから”にじいろのはね”と”ぎんいろのはね”を盗んでいったからな」

「……」

僕はただ黙っていたがそれでも仮面の男は少し機嫌が良かったのかお喋りが止まらない。

「そうそう、今思い出した。優秀な子供を各地から攫っていた時、お前

も候補にいたんだったなあ。“カラー”」

「……!!」

最早、喋る体力すら残っていなかったが、それでもその事実を耳を疑うほどには十分で。

「まあ結局、お前にその能力はないと判断して止めたんだが」

「その判断は正解だったと、今証明されたよ」

ああ、そうか。

我ながらどこかで諦めがついた。

自分は実はもうちよつとやれるんじゃないか。

そういう思いが心にどこかにあつたから。

日頃のすかしたような態度も。

バトルであまり全力を出さないのも。

本当は、怖かつたんだ。

自分の実力が大したことないってわかってしまうのが。

本気を出したらわかかってしまうくらいの、その程度の実力しかなかったから。

なんとなく、なんてことはもうなくて。

どこか遠くに聞こえる足音を聞きながら、そんなことを思った。

「でも、それでもさあ」

どこか騒がしくなった廊下で、僕は一人呟く。

「この胸に焦がれるほどの衝動が、無くなるなんてことはないんだよ」
悲鳴と、硝煙の匂い。

壁は崩れ、人の波は押し寄せてくる。

何かがあったのは明白で、誰がしたのかも火を見るよりも明らか
だった。

「ぐ……うううー」

力の入らない両足に無理矢理活を入れて、立ち上がる。
仮面の男はもうとつくにいない。

通路を横目で見れば、人が団子状に所狭しと押し詰められていた。
幸い僕がいた廊下は出口とは繋がっておらず目の前の人混みに巻き込まれずにはすんでいたが。

「あーあ、ホント嫌になるぜ」

ここままでボロボロになってもまだ、消えてくれない。

もういいかと、何度も思った。

前を向くかと、何度も諦めようとした。

でも、できなかつたんだ。

どうしても。

どうしても。

それだけが、できなかつた。

他のすべてのことは諦められるのに。

それだけが。

「できなかつたんだ」

そして物語は続く。